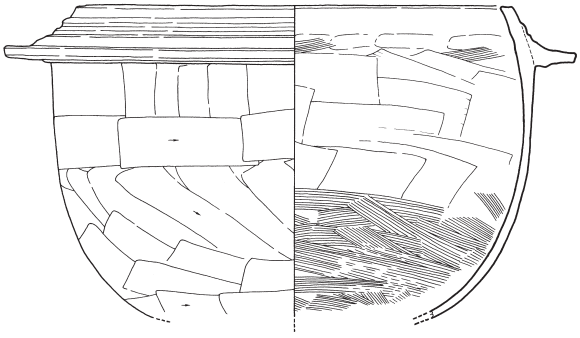
石川土城遺跡

―平成 28 年度発掘調査報告書―



2018

公益財団法人　元興寺文化財研究所

石川土城遺跡

―平成 28 年度発掘調査報告書―

2018

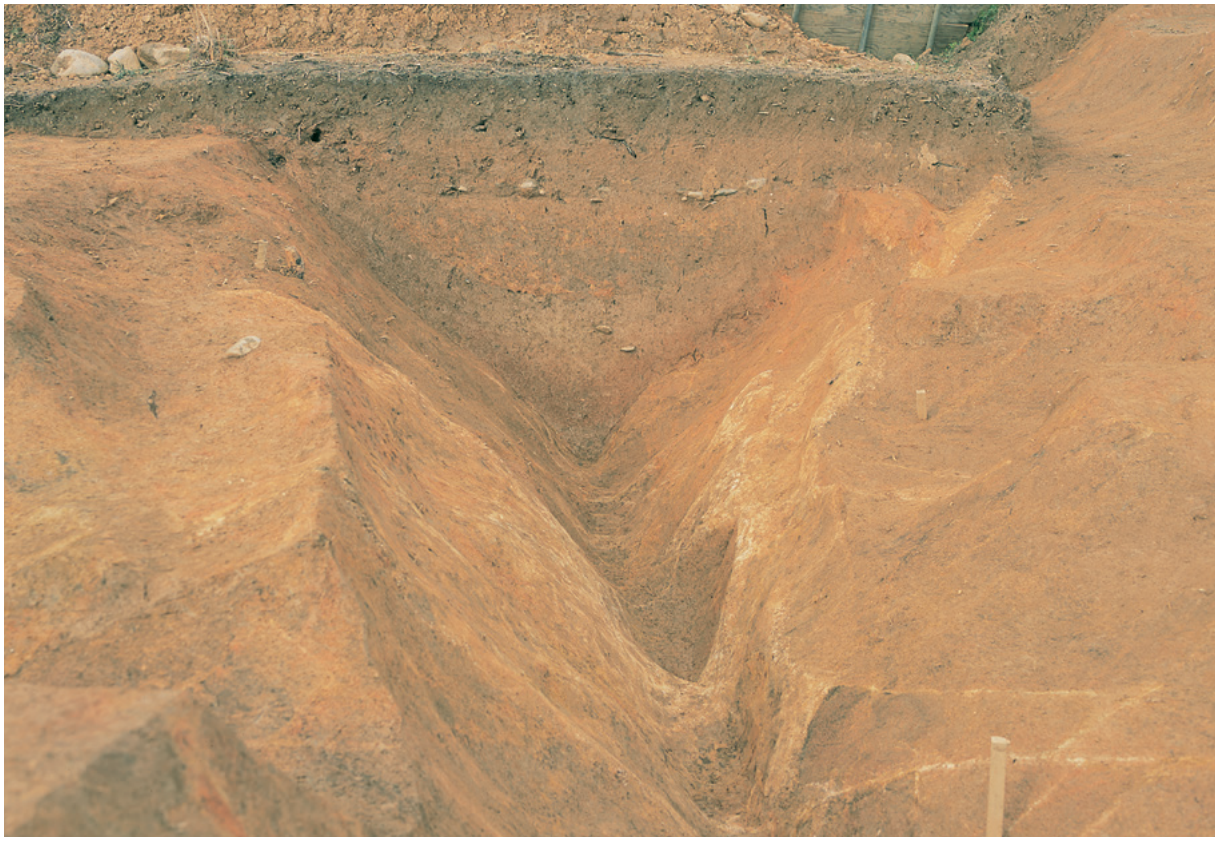
公益財団法人　元興寺文化財研究所

石川土城遺跡垂直写真（上が南）

調査区遠景（西から）

調査区遠景（南から）

SK020 完掘（北から）



SD240 土層断面（南から）

SE190 完堀（南から）

SK332 完掘（西から）

序

橿原の地は日本史にとって重要な土地です。記紀をはじめとする文献史料と、日々行われる遺跡発掘調査による考古資料に裏付けられた、歴史のロマンに満ちた土地と言えましょう。こうした歴史のロマンを求め、多くの人々がこの地を訪れます。しかし、歴史のロマンの背後には、地道な調査による事実の追求が行われていることを忘れてはなりません。

今回報告する石川土城遺跡は、橿原市石川町に所在する城館遺跡です。遺跡に隣接する本明寺には蘇我氏が建立した石川精舎の伝承もあり、古代に遡る遺跡の存在が予想されておりました。発掘調査の結果、古墳時代から室町時代までの多くの遺構が見つかり、石川地域の歴史の深さを目の当たりにさせてくれました。

今回の発掘調査では、古墳時代の溝、飛鳥時代の掘立柱建物、鎌倉時代末～室町時代後期の城館跡が見つかりました。伝承はさておき、当地に 7 世紀の何らかの施設が存在したことが明らかになったことが大きな成果として挙げられます。また、文献には見られない未知の城館がその姿を現したことは、知り尽くされた感のあった当地において、未だ多くの隠された歴史が埋もれていることを知らしめる成果であります。ただ、こうした成果をどう理解してゆくか、という点については、発掘調査の成果だけでは解決の難しい問題であり、今後の研究にゆだねられることとなります。7 世紀の遺構群はどういった施設であったのか、中世の城館の居住者は誰で、なぜ城館が作られたのか。疑問は多く残されたままでありますが、地道な調査を積み重ねてゆくことで一つ一つ問題を解決していき、やがてそれが郷土の歴史として結実してゆく、そうした目的意識を持ってこれからも調査を進めていきたいと考えております。

最後になりましたが、発掘調査および整理報告にご協力いただきました関係各位に深く御礼を申し上げ、本書の序を終えたいと思います。

平成 30 年 3 月 31 日

公益財団法人　元興寺文化財研究所
理事長　辻村泰善

例言

1. 本書は石川土城遺跡において、宅地造成に先立ち実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 調査地は奈良県橿原市石川町 536、540、543、544、545 に所在し、開発面積 4,563㎡のうち調査対象面積は 1,234㎡である。
3. 調査は株式会社やまぐちより委託を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所が行い、平成 28 年 10 月 12 日～同年 12 月 26 日を現地調査、同年 12 月 27 日～平成 30 年 3 月 31 日を整理期間とした。
4. 発掘調査は佐藤亜聖、村田裕介（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当し、武田浩子（公益財団法人元興寺文化財研究所）、狭川典麿、中原七菜子（奈良大学学生）が補佐した。
5. 調査地の座標および基準点測量は、公益財団法人元興寺文化財研究所が実施し、株式会社文化財サービスが分担した。
6. 発掘調査における土工等土木部門は株式会社吉田組が担当した。
7. 遺構写真撮影は佐藤、村田が、遺物写真撮影は大久保治（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当した。
8. 出土遺物の実測および浄書は仲井光代、武田浩子、芝 幹（公益財団法人元興寺文化財研究所）、岩元亮祐、上井佐紀（京都府立大学大学院生）、吉田芽依（天理大学学生）、川島行彦、安楽可奈子、税田修介（奈良大学学生）、中原 ほかが行った。
9. 本書に使用した土器の分類、編年、年代観については以下の文献を参照した。本文中で触れる分類名、年代表記はこれらに依拠している。

愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史　別編　窯業 3』

尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995「瓦器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社

小野正敏 1982「15 ～ 16 世紀の染付椀・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№.2　貿易陶磁研究会

川口宏海 1990「16 世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ　日本中世土器研究会

九州陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

佐藤亜聖 1996「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』Ⅺ　日本中世土器研究会

佐藤亜聖 2016「大和における瓦質土器擂鉢の編年」『元興寺文化財研究所研究報告 2015　水野正好所長追悼論文集』公益財団法人元興寺文化財研究所

重根弘和 2017「備前 - 編年と分布―-」『第 36 回中世土器研究会　国産陶器の系譜と暦年代　資料集』中世土器研究会

鋤柄俊夫 1989「大阪南部の瓦質土器生産（2)」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ　日本中世土器研究会

中世土器研究会事務局 2015「東播系須恵器鉢の分類と編年」『中近世土器の基礎研究』26

奈良市教育委員会 2014『南都出土中近世土器資料集－奈良町高天町遺跡（HJ 第 559 次調査）出土資料－』

長谷川真 1988「丹波系擂鉢について」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ　日本中世土器研究会

畑中英二 2003『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版

藤澤良祐 2005「施釉陶器生産技術の伝播」『中世窯業の諸相－生産技術の展開と編年－』発表要旨集　全国シンポジウム「中世窯業の諸相－生産技術の展開と編年－」実行委員会

藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

森島康雄 2000「織豊期の基準資料と暦年代の再検討 － 京都を中心に － 」『織豊城郭』第 7 号　織豊城郭研究会

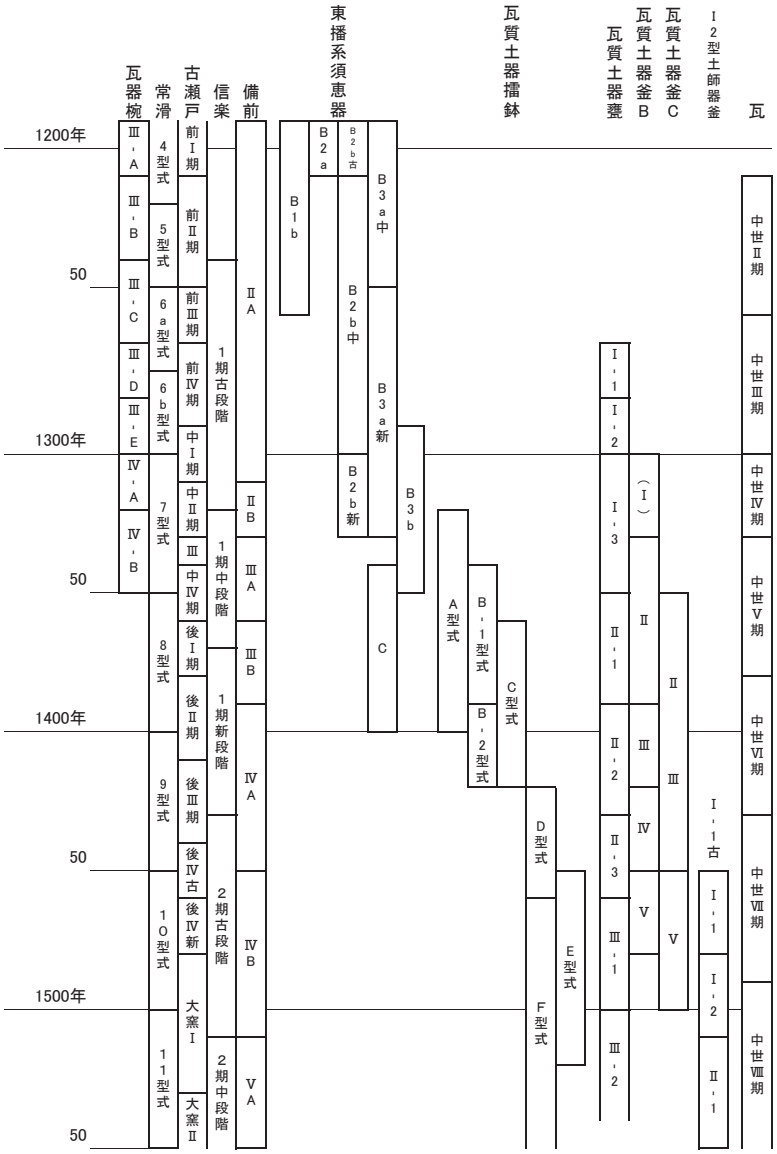
森田勉 1982「14-16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁器研究』№.2　貿易陶磁器研究会

山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所

10. 発掘調査及び整理報告書作成にかかる費用については、株式会社やまぐちが全額負担した。
11. 当該調査において出土した遺物、実測図、写真は橿原市教育委員会において保管している。
12. 本書の執筆は第 4 章第 1 節をパリノサーベイ株式会社、そのほかを佐藤が執筆した。本書の編集は佐藤が行い、芝が補佐した。
13. 発掘調査及び報告書作成に際しては、以下の方々からのご助言、ご協力を頂いた。記して感謝申し上げたい。

橿原市教育委員会、奈良県教育委員会、川上洋一、北山峰生、平岩欣太、井上主税、米川仁一、趙晟元

表 1　編年の並行関係一覧



目次

第１章　調査に至る経緯と調査体制 ･･････1
　第１節　調査に至る経緯･･････1
　第２節　調査の体制 ･･････1
　第３節　調査の経過 ･･････2
第２章　周辺における既往の調査と歴史的環境･･････4
第３章　調査の成果･･････8
　第１節　検出遺構と基本層序 ･･････8
　第２節　古代以前の遺構と遺物 ･･････8
　　第１項　検出遺構･･････8
　　第２項　出土遺物･･････17
　第３節　中世以降の遺構と遺物 ･･････23
　　第１項　検出遺構･･････23
　　第２項　出土遺物･･････43
第４章　SD240 埋土底部の微化石分析 ･･････72
第５章　自然科学分析へのコメント ･･････ 79
第６章　調査のまとめ･･････ 80
　第１節　遺構の変遷について ･･････80
　第２節　石川土城の構造について･･････84
　第３節　本明寺五輪塔と採集遺物･･････87
第７章　総括･･････90

図版目次

図１　今回の調査地と既往の調査地（S=1/5,000）･･････4
図２　既往の調査との関係位置図（S=1/1,000）･･････5
図３　周辺の遺跡（S=1/25,000）･･････6
図４　全体図（S=1/200）･･････9
図５　壁面土層断面図（1）（S=1/40）･･････11
図６　壁面土層断面図（2）（S=1/40）･･････13
図７　SB130 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）･･････15
図８　SD220 平面・土層断面図（S=1/40）･･････16
図９　SK020 平面・立面・土層断面図（S=1/20）･･････17
図 10　SK030 平面・土層断面図（S=1/40）･･････18
図 11　SX010・470 土層断面図（S=1/40・1/50）･･････18
図 12　SD220 出土遺物実測図（1）（S=1/3）･･････19
図 13　SD220 出土遺物実測図（2）（S=1/3）･･････20
図 14　SD220 出土遺物実測図（3）（S=1/3・2/3）･･････21

図 15　SK020・030 出土遺物実測図（S=1/3）・・22
図 16　SX010・470 出土遺物実測図（S=1/3）・・23
図 17　SA490 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
図 18　SB070 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
図 19　SB360 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
図 20　SB480 平面図（S=1/80）・・・26
図 21　SD050 平面・土層断面図（S=1/40）・・26
図 22　SD060 平面・土層断面図（平面 S=1/100・断面 S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
図 23　SD110 土層断面図（S=1/40）・・27
図 24　SD200 平面・土層断面図（平面 S=1/100・断面 S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
図 25　SD210 平面・土層断面図（平面 S=1/100・断面 S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
図 26　SD240・260 土層断面図（S=1/40）・・29
図 27　SD240・260 遺物出土状況図（S=1/40）・・30
図 28　SD270 平面・土層断面図（平面 S=1/100・断面 S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
図 29　SD280 平面・土層断面図（平面 S=1/100・断面 S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
図 30　SD290 平面・土層断面図（S=1/40）・・32
図 31　SD320・330 土層断面図（S=1/40）・・32
図 32　SD400 平面・土層断面図（平面 S=1/50・断面 S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
図 33　SD438 平面・土層断面図（S=1/40）・・33
図 34　SE190 平面・土層断面図（S=1/40）・・34
図 35　SK100 平面・土層断面図（S=1/40）・・35
図 36　SK120 平面・土層断面図（S=1/40）・・36
図 37　SK170 平面・土層断面図（S=1/40）・・36
図 38　SK186 土層断面図（S=1/40）・・37
図 39　SK222 平面・土層断面図（S=1/40）・・37
図 40　SK223 平面・土層断面図（S=1/40）・・38
図 41　SK227 平面・土層断面図（S=1/40）・・39
図 42　SK228 平面・土層断面図（S=1/40）・・39
図 43　SK254 平面図（S=1/40）・・40
図 44　SK331 平面・土層断面図（S=1/40）・・40
図 45　SK332 平面・立面・土層断面図（S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
図 46　SK397 平面・土層断面図（S=1/40）・・41
図 47　SK450 平面・土層断面図（S=1/40）・・42
図 48　SX380 土層断面図（S=1/40）・・42
図 49　SA490・SB360・480 出土遺物実測図（S=1/3・2/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
図 50　SD001 出土遺物実測図（S=1/3）・・・44
図 51　SD050・060 出土遺物実測図（S=1/3）・・45
図 52　SD110 出土遺物実測図（S=1/3・2/3）・・46
図 53　SD210 出土遺物実測図（S=1/3）・・・47

図 54　SD240 出土遺物実測図（1）（S=1/3）・・・48
図 55　SD240 出土遺物実測図（2）（S=1/3）・・・50
図 56　SD240 出土遺物実測図（3）（S=1/3・2/3）・・51
図 57　SD240 出土遺物実測図（4）（S=1/3）・・・52
図 58　SD240 出土遺物実測図（5）（S=1/3）・・・53
図 59　SD260 出土遺物実測図（1）（S=1/3）・・・54
図 60　SD260 出土遺物実測図（2）（S=1/3）・・・56
図 61　SD260 出土遺物実測図（3）（S=1/3）・・・57
図 62　SD260 出土遺物実測図（4）（S=1/3）・・・58
図 63　SD270・280 出土遺物実測図（S=1/3）・・59
図 64　SD290 出土遺物実測図（1）（S=1/3）・・・60
図 65　SD290 出土遺物実測図（2）（S=1/3）・・・61
図 66　SD320・330・400 出土遺物実測図（S=1/3）・・62
図 67　SD438 出土遺物実測図（S=1/3）・・63
図 68　SE005・190 出土遺物実測図（S=1/3・2/3）・・64
図 69　SK100 出土遺物実測図（S=1/3）・・65
図 70　SK120 出土遺物実測図（S=1/3・2/3）・・65
図 71　SK170・186 出土遺物実測図（S=1/3）・・67
図 72　SK222・223・227・254・331・332 出土遺物実測図（S=1/2・1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
図 73　SK450 出土遺物実測図（S=1/3）・・70
図 74　SX370・380 出土遺物実測図（S=1/3）・・70
図 75　表土出土遺物実測図（S=1/3）・・・71
図 76　分析試料採取位置と SD240 の堆積状況 ・・・72
図 77　珪藻化石・花粉プレパラート内の状況 ・・・74
図 78　珪藻化石群集・・・74
図 79　調査地周辺の地形学図・・・75
図 80　2 期の遺構（13 世紀末～ 15 世紀初頭）（S=1/400）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
図 81　3 期の遺構（15 世紀前半～半ば）（S=1/400）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
図 82　4 期の遺構（15 世紀後半）（S=1/400）・・・82
図 83　5 期以降の遺構（16 世紀以降）（S=1/400）・・83
図 84　石川集落と石川土城遺跡の関係概念図（S=1/5,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
図 85　磐余遺跡群の位置（S=1/5,000）・・・86
図 86　磐余遺跡群遺構図 ・・・86
図 87　本明寺五輪塔（S=1/10）・・88
図 88　本明寺出土遺物実測図（S=1/3）・・・89
図 89　遺構配置略図（S=1/200）・・93

表目次

表１　編年の並行関係一覧 ･･･ 例言
表２　珪藻分析結果･･･73
表３～13　報告遺物一覧（1）～（11）･････････････････････････････････････ 95～105
表14～22　検出遺構および出土遺物一覧（1）～（9）･････････････････････････ 106～114

写真図版目次

巻頭図版１
　石川土城遺跡垂直写真（上が南）

巻頭図版２
　調査区遠景（西から）
　調査区遠景（南から）
巻頭図版３
　SK020 完掘（北から）
　SD240 土層断面（南から）
巻頭図版４
　SE190 完堀（南から）
　SK332 完掘（西から）
図版１
　調査区全景１（南から）
　調査区全景２（南西から）
　調査区全景３（東から）
図版２
　調査区全景４（西から）
　SB130 全景（南から）
　SD220 遺物出土状況１（東から）
図版３
　SD220 遺物出土状況２（北から）
　SD220 遺物出土状況３（北から）
　SD220 遺物出土状況４（北から）
図版４
　SK020 土層断面（北西から）
　SK020 完掘（東から）
　SK030 完掘（南から）
図版５
　SD001 完掘（南西から）
　SD060・110 土層断面（西から）
　SD110 遺物出土状況（北から）
図版６
　SD240 全景（北から）
　SD240 土層断面（西から）
　SD260 土層断面（西から）
図版７
　SD260 土師器釜出土状況（北から）
　SD280 土層断面（西から）
　SD280 完掘（東から）
図版８
　SD290 土層断面（南から）
　調査区南半整地土上面遺構（北から）
　SD320・330 土層断面（南から）
図版９
　SD400 土層断面（東から）
　SE005 土層断面（北から）
　SE190 土層断面（南から）
図版10
　SK100 遺物出土状況（南から）
　SK120 土層断面（西から）
　SK170 土層断面（東から）
図版11
　SK186 土層断面（北から）
　SK186 遺物出土状況（北から）
　SK186 完掘（北から）

図版 12
SK223 土層断面（西から）
SK227 土層断面（南から）
SK227 焼土出土状況（東から）
図版 13
SK228 土層断面（東から）
SK332 土層断面（西から）
SK332 完掘（西から）
図版 14
SK332 内部（北から）
SK450 土層断面（西から）
SX370 断割（東から）
図版 15
SD220 出土遺物
図版 16
SD220 出土遺物
図版 17
SD220、SK030・020 出土遺物
図版 18
SK030、SX010、SA490d、SB480a 出土遺物
図版 19
SD001・050・060・110 出土遺物
図版 20
SD110・210・240 出土遺物
図版 21
SD240 出土遺物
図版 22
SD240 出土遺物
図版 23
SD240 出土遺物
図版 24
SD260 出土遺物
図版 25
SD260・270・280 出土遺物
図版 26
SD280、SE190、SD400 出土遺物
図版 27
SK120・186・227 出土遺物
図版 28
SK227・331・332、SX370・380、
SK254 出土遺物

第 1 章　調査に至る経緯と調査体制

第 1 節　調査に至る経緯

平成 28 年 2 月 8 日、株式会社やまぐちより、当該地において「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。申請を受けた橿原市教育委員会は、当該地が周知の遺跡「石川土城遺跡」の範囲内であることから開発予定範囲の遺構の有無、深度等の情報を得るため、平成 28 年 3 月 28 ～ 31 日に試掘調査を行ったところ、中世の遺構が良好に残存していることを確認した。

その後、詳細設計が完成したため、平成 28 年 8 月 29 日に「埋蔵文化財発掘届出書の内容一部変更願い」が提出され、試掘調査の結果を受けた奈良県教育委員会は、平成 28 年 9 月 16 日付教文第 2975 号で発掘調査の実施を指示した。橿原市教育委員会では平成 28 年度内での発掘調査が困難であったため、奈良県教育委員会から、平成 28 年 9 月 23 日付教文第 328-2 号により公益財団法人元興寺文化財研究所へ発掘調査の依頼がなされた。これを受けて、平成 28 年 9 月 26 日、株式会社やまぐちと公益財団法人元興寺文化財研究所が発掘調査委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

第 2 節　調査の体制

発掘調査並びに整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

調査指導：橿原市教育委員会文化財課

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理事長　辻村泰善

所　長　辻村泰善（兼務）

副所長　狭川真一

事務局長　江島和哉

総合文化財センター長　塚本敏夫

文化財調査修復研究グループ

リーダー　金山正子

主　　務　角南聡一郎

主任研究員　佐藤亜聖（現地調査・整理報告担当）

研 究 員　村田裕介

坂本俊（平成 29 年 4 月から）

現地作業員：株式会社吉田組

測　　量：公益財団法人元興寺文化財研究所・株式会社文化財サービス

第３節　調査の経過（調査日誌抄）

平成 28 年

10 月 12 日（水）　調査区の設定、フェンスとノッチタンクの設置を行う。午後から重機掘削を開始する。

10 月 13 日（木）　重機掘削中、東北部段差付近で完形の須恵器杯がまとまって出土したため、急遽作業を中止し精査を行う。その結果、斜面に完形の須恵器を含む溝埋土が露出していることを確認した。

10 月 18 日（火）　遺構検出作業、一部遺構の掘削作業を開始する。

10 月 19 日（水）　重機掘削作業、遺構検出作業を継続。奈良県教育委員会文化財保存課北山峰生氏来訪。

10 月 20 日（木）　重機掘削作業、遺構検出作業を継続。略図の作成を開始する。橿原市教育委員会平岩欣太氏来訪。

10 月 21 日（金）　東北部段上のピット群を掘削開始する。埋土に全く締まりなく、底部レベルや形状が一定しない。柱穴ではなく根株の可能性を考える。グリッド杭の設置を開始する。事業者（株式会社やまぐち）来訪。

10 月 25 日（火）　調査区南端の大溝について、土量確認のためのピットを掘削したところ、深さが 90 ～ 110cm 以上あることが判明、対応を協議した。
中学生職場体験学習の受け入れを行う。

10 月 26 日（水）　重機掘削終了、グリッド杭設置終了。

10 月 31 日（月）　排土をブルーシートで養生する。午後から雨天のため図面整理を行う。

11 月 1 日（火）　建物関連遺構全景の写真撮影を行う。SK100 の掘削を行う。多数の石が出土したため、池の可能性を考えるが埋土からは肯定できない。

11 月 4 日（金）　先週から建物復元に苦心する。南半部分に大型の総柱建物を想定するが、柱間の検討等から肯定できない。

11 月 7 日（月）　南端部分の精査を開始する。斜面部分に大規模な整地を確認した。

11 月 8 日（火）　午後から雨天のため図面整理を行う。

11 月 9 日（水）　SD110 を南端まで検出し、掘削開始する。橿原考古学研究所米川仁一氏来訪。

11 月 10 日（木）　SK180 の掘削を開始する。断面形態がフラスコ状を呈し、いわゆる袋状土坑になる。土採り穴かと思われる。東北部段差斜面の溝を掘削開始する。大量の遺物が出土した。橿原市教育委員会平岩氏来訪。

11 月 11 日（金）　SE190 の掘削を開始する。石組井戸であることが確定したが、掘方が異様に大きく、再度検証を行う。

11 月 16 日（水）　SE190 の掘方を確定する。やはりかなり大きい。井戸枠内を掘削する。調査区南端は重機掘削が浅く、鋤取りを行う。

11 月 18 日（金）　橿原考古学研究所の現地巡検来訪。助言をいただく。

11 月 21 日（月）　SE190 の土層断面写真撮影を行う。周辺整地土の掘削を開始する。

11 月 24 日（木）　SD240 の掘削を開始する。上層から 15 世紀の土器が出土、最下層から 14 世紀前半の瓦器椀が出土した。

11 月 28 日（月）　東半のピット掘削を開始するが、ほとんどが深さ 3cm 未満の浅いもので、まともなピットにならない。

11 月 30 日（水）　橿原市教育委員会、奈良県教育委員会、事業者が集まり現地で掘削深度に関する打ち合わせを行い、南端大型堀と SE190 については掘削を中止する。

12 月 5 日（月）　SD320 の掘削を開始する。埋土内に大量の焼土が存在し、サンプルの採取を行う。

12 月 7 日（水）　調査区南半整地土上面遺構の全景写真撮影を行う。平面図の作成を行う。

12 月 8 日（木）　調査区南半整地土の除去作業を開始する。

12 月 13 日（月）　雨天のため現地作業を中止する。

12 月 15 日（木）　空中写真撮影および足場写真撮影を行う。

12 月 16 日（金）　段下げピットの掘削を開始する。SD240 の土層断面写真撮影、土層断面図作成を行う。

12 月 20 日（火）　作業完了、撤収作業。

12 月 26 日（月）　埋め戻し作業完了、現地調査終了。

第２章　周辺における既往の調査と歴史的環境

調査地は橿原市石川町 536、540、543、544、545 に位置する。藤原京の南西部に隣接し、条里呼称においては、高市郡路東二十九条一里にあたり、坪名は復元されていない。調査地のすぐ北には古代の山田道を踏襲した県道 124 号線が東西に走る。近傍には、北に石川廃寺、西に軽寺跡および軽寺瓦窯、南に軽池北遺跡がそれぞれ隣接し、古代における遺跡密度の濃い地域である。

中世の当地は大乗院領軽庄に属すると考えられる（改訂橿原市史編纂委員会 1987）。軽庄については、建久２年（1191）西大寺所領荘園注文（鎌倉遺文 1-534）には「高市郡加留庄」が見られ、本来西大寺領であったと考えられるが、『三箇院家抄』には大乗院領として「軽庄」が見られ、西大寺領退転ののちは興福寺大乗院の荘園となっていたようである。この軽庄の居住者としては、『大乗院寺社雑事記』明応２年（1493）に「越智一族賀留分　軽庄一円代官」と記されることから、散在党の盟主越智の一族である賀留氏（軽氏）が浮かび上がる。賀留氏については専論がなく実態が不明なこともあり、今回の調査成果との関係性が注目される。

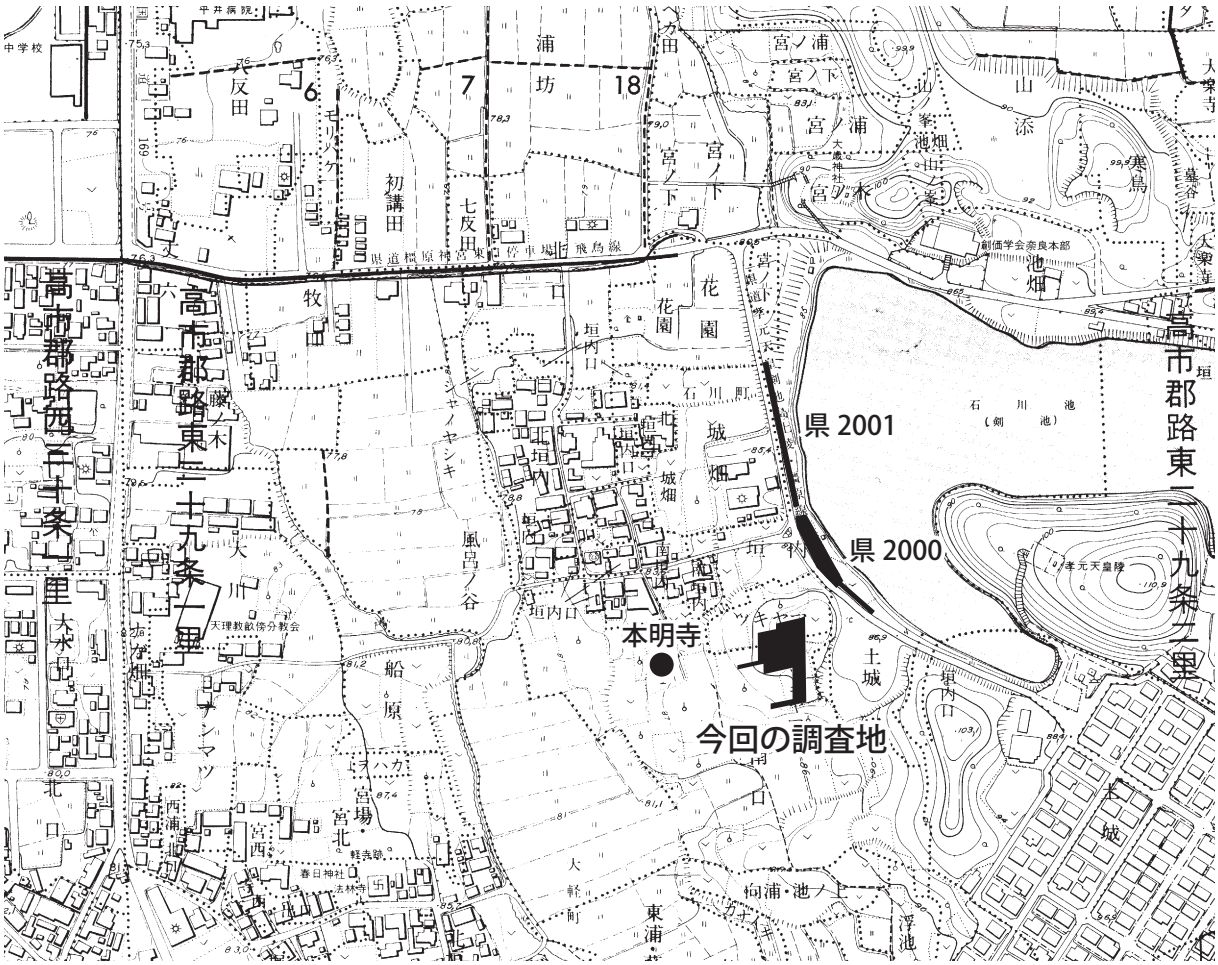


図１　今回の調査地と既往の調査地（S=1/5,000）

図２　既往の調査との関係位置図（S=1/1,000）

1．石川土城遺跡
2．石川廃寺
3．四条遺跡
4．縄手遺跡
5．四分環濠
6．四分遺跡
7．高殿環濠
8．香久山北麓遺跡
9．中嶋遺跡
10．三堂山瓦窯
11．戒外山城跡
12．興善寺跡
13．赤山遺跡
14．日向寺跡
15．大官大寺跡北方遺跡
16．大官大寺跡
17．木之本環濠
18．木之本遺跡
19．紀寺跡
20．紀寺南遺跡
21．日高山瓦窯跡
22．日高山横穴群・日高山古墳群
23．城殿遺跡
24．瀬田遺跡
25．本薬師寺跡
26．田中廃寺
27．田中環濠
28．田中宮跡
29．大久保環濠
30．大窪寺跡
31．大窪遺跡
32．御坊遺跡
33．橿原遺跡
34．イトクノモリ古墳
35．久米寺跡
36．久米寺瓦窯跡
37．丈六北遺跡
38．丈六南遺跡
39．久米ジカミ子遺跡
40．益田池跡
41．善導寺山遺跡
42．見瀬城跡
43．沼山古墳
44．岩船横穴群
45．軽寺瓦窯跡
46．軽寺跡
47．丸山古墳
48．軽池北遺跡
49．五条野植山北古墳
50．植山古墳
51．五条野内垣遺跡
52．五条野内垣内古墳
53．五条野城跡
54．五条野向イ遺跡
55．五条野山城跡
56．五条野城脇古墳
57．五条野宮ヶ原１・２号墳
58．サカ中遺跡
59．菖蒲池古墳
60．和田廃寺
61．小墾田宮推定地
62．雷丘北方遺跡
63．豊浦寺跡
64．雷丘東方遺跡
65．三堂山瓦窯跡
66．奥山久米寺跡
67．山田寺跡
68．石神遺跡
69．飛鳥水落遺跡
70．飛鳥寺西方遺跡
71．飛鳥寺跡
72．飛鳥寺瓦窯跡
73．岡立石
74．岡寺跡
75．石舞台古墳
76．飛鳥京跡苑池
77．飛鳥板蓋宮伝承地
78．川原寺裏山遺跡
79．川原寺跡
80．橘寺
81．橘寺瓦窯
82．定林寺跡
83．文武・持統天皇陵
84．鬼の雪隠
85．経塚古墳
86．欽明天皇陵
87．猿石
88．牽牛子塚古墳

図３　周辺の遺跡（S=1/25,000）

さて、調査地には城畑、土城、垣内口などの小字名が残されており、かねてより城館の存在が予想されていた。2000・2001 年、県道山陵石川線の拡幅工事が計画され、石川池（剣池）西岸を奈良県立橿原考古学研究所が 2 次にわたり発掘調査を行った（奈良県立橿原考古学研究所 2001・2002）。その結果、13 世紀半ば～ 14 世紀にかけての薬研堀によって区画された屋敷地が検出され、当地に当該期の大規模な施設の存在が想定されることとなった。検出された堀はいずれも幅 4m 前後、深さ最大 2m 前後と巨大なもので、いずれも現在の剣池西岸に相当する切岸に連結しており、地山ブロックを含む人為的な埋土によって埋められている。調査区の北端は現在の石川集落から東に延びる道路付近で遺構が希薄となり、概ね屋敷群の北端を推定することができる。

検出された屋敷群は、薬研堀の堀によって区画された一見すると非常に城館的なものであるが、明確な防御性や区画の階層性などを見出すことができず、城館としての構造把握にはなお課題を残している。今回の発掘調査では、こうした既往の調査成果を踏まえ、丘陵部における遺構の確認、城館構造の復元、西、南における遺構範囲の確認、遺構継続期間の確認、居住者の推定などを課題として設定した。

《参考文献》

改訂橿原市史編纂委員会 1987『橿原市史　本編』上
奈良県立橿原考古学研究所 2001「石川土城遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』2000 年度（第 3 分冊）
奈良県立橿原考古学研究所 2002「藤原京右京十二条大路・石川土城遺跡」『奈良県遺跡調査概報』2001 年度（第 2 分冊）

第３章　調査の成果

第１節　検出遺構と基本層序（図４～６）

調査前の調査区は果樹園であり、標高 90m ～ 90.5m のなだらかな傾斜地であった。調査区北東部には比高差 2m 前後を持つ台地上の地形があり、当初から城館構造の一部ではないかと予想されていた。調査の結果、古墳時代の遺構は段差上面にのみ存在し、7 世紀と考えられる SB130 が段差によって破壊されることから、この段差は 7 世紀以降に形成されたもので、状況から 13 世紀末～ 14 世紀初頭の城館形成によって造成された可能性が高いことが判明した。

基本層序は層厚 40 ～ 80cm の現代耕土および近世以降の耕作土を除去した花崗岩風化土壌（地山）直上を遺構面とする。13 世紀末～ 14 世紀初頭の城館形成時には傾斜面をそのままにして、傾斜変換部分に大溝や切土段差（SD001・SX370）を設置し、城館を形成していたが、その後南端切土段差（SX370）を埋め、整地土（A：東壁 5・6・17・18・19）を入れて利用空間を広げている。

遺構検出は整地土上面および地山上面で行った。

第２節　古代以前の遺構と遺物

第１項　検出遺構

建物

SB130（図 7）

調査区北東部台地上西端で検出した掘立柱建物である。南北一間、東西一間分が残存する。柱掘方は一辺 70 ～ 85cm で隅丸方形を呈し、深さ 40cm 程度が残存する。柱間は 212 ～ 240cm、主軸方位は N-15° 49′-W 前後を測る。埋土から復元できる柱直径は 12cm 前後と、掘方径に比して著しく細い。

出土遺物は少ないが、柱穴埋土よりわずかに古代の須恵器、土師器が出土していることから 7 世紀の遺構と考えられる。

溝

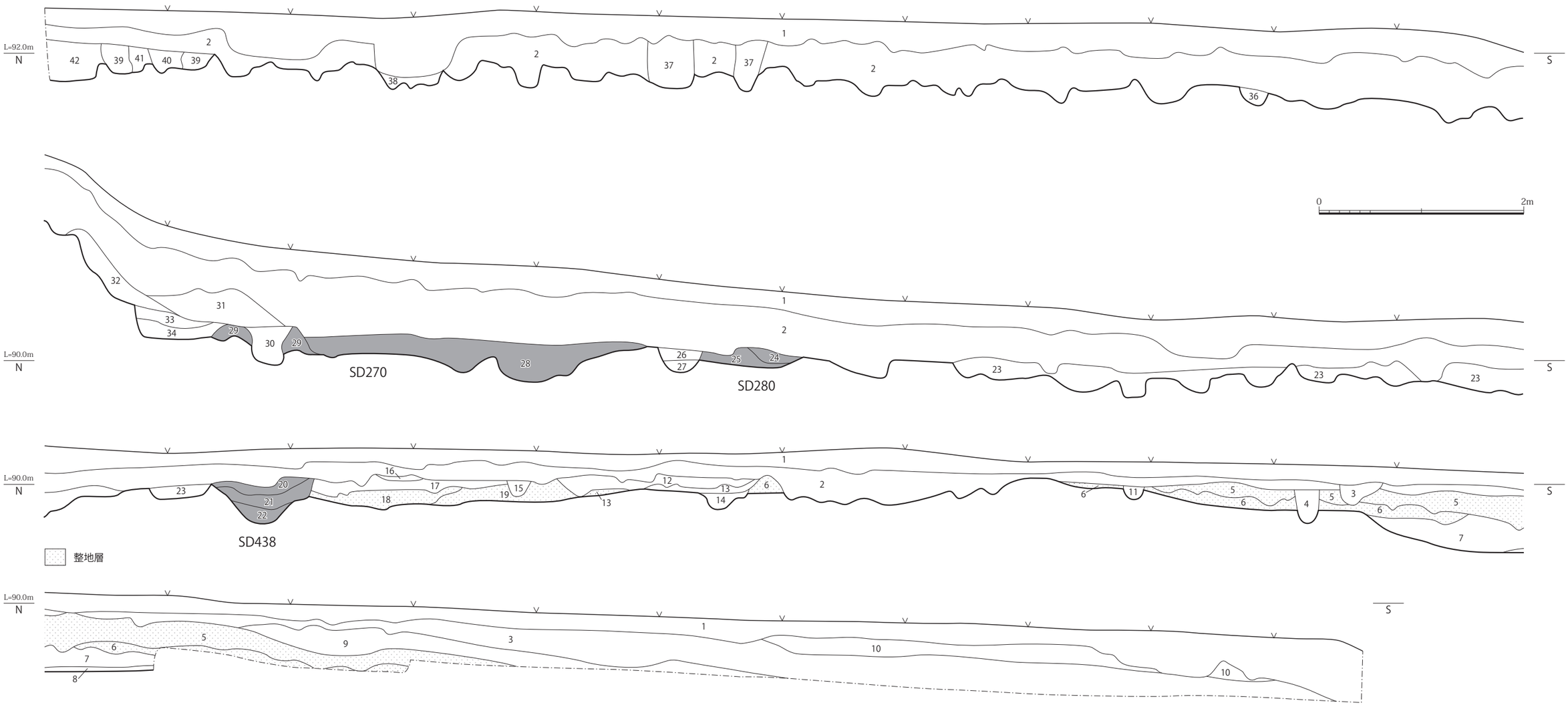
SD220（図 8、図版 3）

調査区北東部台地上で検出した溝である。幅 200cm、深さ 60cm 前後で東西方向に走るが、台地上中央付近で深さを減じて正方位方向に屈曲する。断面形態浅い「U」字形を呈し、底部レベルは東西方向比高差 5cm 前後で西へ傾斜する。埋土はいずれもブロック土を含む人為的埋土である。溝下層から大量の古墳時代中期の土師器・須恵器が出土した。また、土器類に混入して滑石製臼玉が 1 点出土している。遺物の出土状況に規則性は見られないが、西端付近の須恵器は正位置のものが多い。

SK030
SD220
SD050
SB070
SD060
SK120
SD127
SA490
焼土
SD270
SD240・260
SB360
SK170
SD110
SK332
SK186
SD290
SD280
SK222
SK331
SK223
SD200
SK227
焼土
SB480
SD210
SK397
SK450
SD438
SD001
SE005
SD400
SE190
SD320
SX370
0
10m
X=-168,490
X=-168,500
X=-168,510
X=-168,520
X=-168,530
X=-168,540
X=-168,550
Y=-18,320
Y=-18,310
Y=-18,300
Y=-18,290
Y=-18,280

図４　全体図（S=1/200）

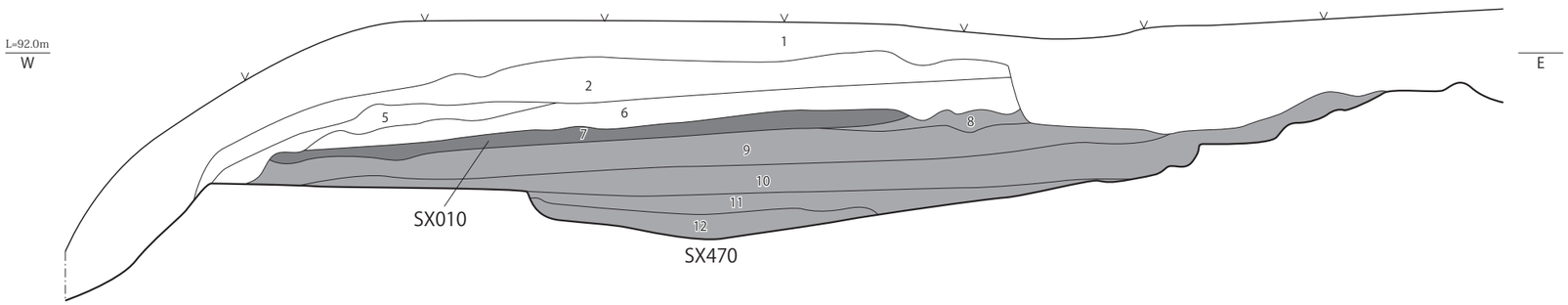
A: 東壁



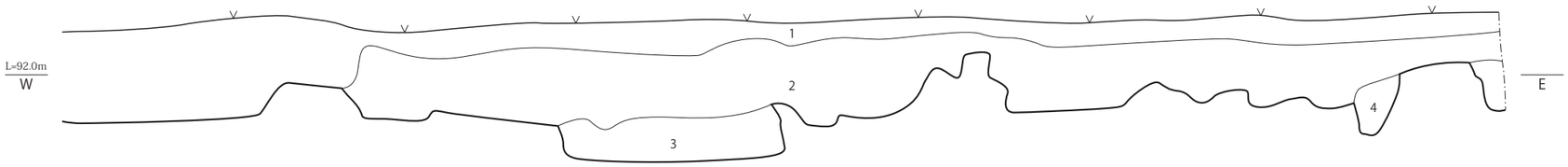
1. 灰黄褐 10YR5/2 中砂（炭化物を少量含む）（現代耕土）
2. 褐 10YR4/6 中砂（炭化物・焼土を含む）（近世～近代耕土）
3. 褐 7.5YR4/4 粗砂混中砂（混入物少ない）
4. 褐 7.5YR4/4 中砂（径 3cm 程度の亜角礫状地山ブロック・炭化物・焼土を少量含む）
5. 褐 10YR4/4 粗砂混中砂（径 3cm 前後の亜角礫状地山ブロックを多く含む）（整地層）
6. 明褐 7.5YR5/6 細砂混中砂（地山ブロックを主とする）（整地層）
7. にぶい黄褐 10YR4/3 粗砂混中砂（ラミナ形成）
8. 黄褐 10YR4/6 中砂（ラミナ形成）
9. 褐 10YR4/4 粗砂混中砂（擾乱著しい）
10. 褐 7.5YR4/6 粗砂混中砂（径 3cm 前後の亜角礫状地山ブロックを含み、炭化物・焼土を少量含む）
11. 褐 10YR4/6 粗砂混中砂（径 3cm の亜角礫状地山ブロックを少量含む）
12. 暗褐 10YR3/3 粗砂混中砂（焼土を多量に含む）（S-300）
13. 黒褐 10YR3/2 中砂（炭化物を多量に含む、ラミナ形成）（S-300）
14. 褐 7.5YR4/4 粗砂混中砂（径 1cm の亜角礫状地山ブロックを多量に含む）
15. 暗褐 7.5YR3/4 粗砂混中砂（炭化物・焼土を多く含む）
16. 暗褐 7.5YR3/3 粗砂混中砂（焼土を多量に含む）
17. 褐 7.5Y4/6 粗砂混中砂（径 3cm 程度の亜角礫状地山ブロックを少量含む）
18. 明赤褐 5YR5/8 中砂（地山ブロックを主とする）（整地層）
19. 褐 7.5YR4/6 粗砂混中砂（径 3 ～ 5cm の亜角礫状地山ブロックを多量に含む）（整地層）
20. 褐 7.5YR4/4 中砂（炭化物・焼土を少量含む）（SD438）
21. 褐 7.5YR4/4 粗砂混中砂（ラミナ形成）（SD438）
22. 褐 7.5YR4/4 細砂混中砂（ラミナ形成）（SD438）
23. 褐 10YR4/4 粗砂混中砂（しまり非常に悪い）（耕作土）
24. 褐 10YR4/4 粗砂混中砂（ラミナ形成）（SD280）
25. 褐 10YR4/6 中砂混細砂（ラミナ形成）（SD280）
26. 褐 10YR4/4 粗砂混中砂（炭化物・焼土を少量含む）（S-401）
27. 褐 7.5YR4/4（径 1cm 前後の亜角礫状地山ブロックを少量含む）（S-401）
28. 褐 10YR4/4 粗砂混中砂（擾乱著しい）（SD270）
29. 褐 7.5YR4/4 粗砂混中砂（擾乱著しい）（SD270）
30. 褐 7.5YR4/3 粗砂混中砂（径 0.5cm 程度の塊状構造を持つ）
31. 褐 10YR4/6 粗砂混中砂（ラミナ形成）
32. 明褐 7.5YR5/6 粗砂混中砂（薄層あり）
33. にぶい黄褐 10YR5/4 中砂（ラミナ形成）
34. にぶい黄褐 10YR5/4 粗砂混中砂（ラミナ形成）
35. にぶい黄褐 10YR5/4 中砂（地山ブロックを主とする）
36. 褐 10YR4/6 粗砂混中砂（径 1cm 前後の亜角礫状地山ブロックを少量含む）
37. 暗褐 7.5YR3/3 粗砂混中砂（しまり非常に悪い）
38. 褐 10YR4/4 粗砂混中砂（しまり非常に悪い）
39. 褐 7.5YR4/4 粗砂混中砂（径 5cm 前後の亜角礫状地山ブロックを多量に含む）
40. 褐 7.5YR4/4 粗砂混中砂（しまり悪い）
41. 褐 7.5YR4/4 粗砂混中砂（しまり悪い、径 3cm 前後の亜角礫状地山ブロックを少量含む）
42. 褐 7.5YR4/4 粗砂混中砂（しまり悪い、径 3cm 前後の亜角礫状地山ブロックを下部に少量含む）

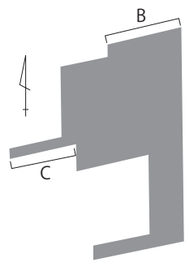
図 5　壁面土層断面図（1）（S=1/40）

B: 北壁



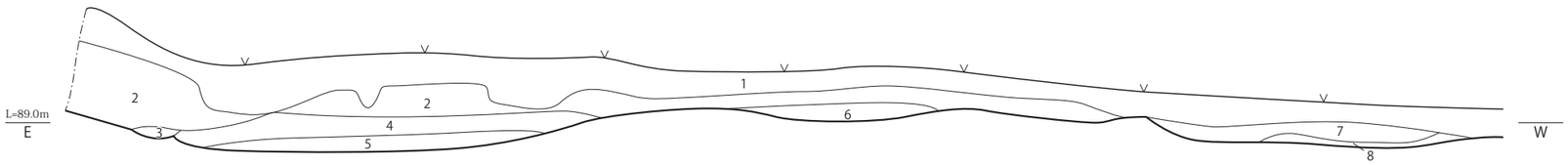
1. 灰黄褐 10YR5/2 中砂（現代耕土）
2. 褐 7.5YR4/4 粗砂混中砂（近世～近代耕土）
3. 褐 7.5YR4/4 中砂混粗砂（径 1 ～ 3cm の亜角礫状地山ブロックを多く含む）
4. 褐 7.5YR4/4 中砂混粗砂（しまり悪い、炭化物を少量含む）
5. 褐 7.5YR4/4 粗砂混中砂（炭化物・焼土を少量含む）（S-9）
6. 褐 7.5YR4/6 中砂（炭化物を少量含む、擾乱著しい）
7. にぶい褐 7.5YR5/4 中砂（炭化物・焼土を大量に含む）（SX010）
8. 赤褐 5YR4/6 中砂混粗砂（地山に起因するバイラン土を主とする）（SX470）
9. 明褐 7.5YR5/6 中砂混粗砂（擾乱著しい）（SX470）
10. 明褐 7.5YR5/6 中砂（地山ブロックを主とする）（SX470）
11. 褐 7.5YR4/6 中砂（地山ブロックを主とする）（SX470）
12. 赤褐 5YR4/6 中砂（炭化物を少量含む、ラミナ形成）（SX470）

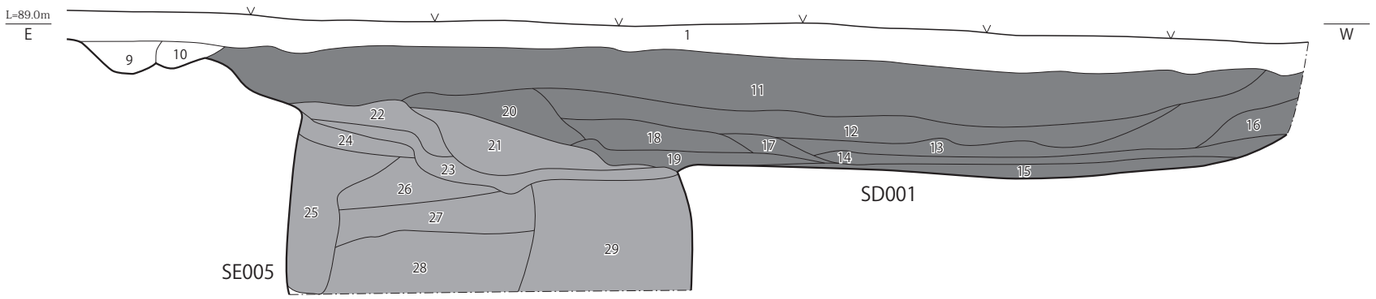




0　　2m

C: 南壁





1. 灰黄褐 10YR5/2 中砂（炭化物を少量含む）（現代耕土）
2. 褐 10YR4/6 中砂（炭化物・焼土を含む）（近世～近代耕土）
3. 褐 10YR4/4 中砂（炭化物を含む、ラミナ形成）（S-160）
4. にぶい黄褐 10YR5/3 中砂（径 5 ～ 7cm の亜角礫状地山ブロックを多量に含む）（S-226）
5. 褐 10YR4/4 細砂混中砂（炭化物を多量に含む）（S-226）
6. 褐 10YR4/4 細砂（炭化物を含み、亜角礫状地山ブロックを多く含む）（S-6）
7. にぶい黄褐 10YR4/3 粗砂混中砂（径 1 ～ 5cm の亜角礫状地山ブロックを多く含む）（S-3）
8. にぶい黄褐 10YR4/3 粗砂混中砂（炭化物・焼土を少量含む）（S-3）
9. 褐 10YR4/4 細砂混中砂（炭化物・焼土を少量含む）（S-2）
10. 褐 10YR4/4 細砂混中砂（径 5 ～ 7cm の亜角礫状地山ブロックを多く含む）（S-2）
11. 褐 10YR4/6 粗砂混中砂（炭化物・焼土を少量含む、擾乱著しい）（SD001）
12. にぶい黄褐 10YR4/3 粗砂混中砂（径 3 ～ 5cm の亜角礫状地山ブロックを少量含む）（SD001）
13. 褐 10YR4/4 中砂混粗砂（径 1 ～ 5cm の亜角礫状地山ブロックを多く含む）（SD001）
14. 褐 10YR4/6 粗砂（ラミナ形成）（SD001）
15. 暗褐 10YR3/3 粗砂混中砂（ラミナ形成）（SD001）
16. 暗褐 10YR3/3 粗砂混中砂（炭化物を多く含む、ラミナ形成）（SD001）
17. にぶい黄褐 10YR4/3 中砂（ラミナ形成）（SD001）
18. 暗褐 10YR3/3 中砂（炭化物・焼土を多く含む、ラミナ形成）（SD001）
19. にぶい黄褐 10YR5/4 細砂混中砂（ラミナ形成）（SD001）
20. 褐 10YR4/6 中砂（径 3cm 程度の亜角礫状地山ブロックを多く含む）（SD001）
21. 暗褐 10YR3/4 粗砂混中砂（炭化物・焼土を多く含む）（SE005）
22. 褐 10YR4/4 粗砂混中砂（径 2 ～ 3cm の亜角礫状地山ブロックを少量含む）（SE005）
23. にぶい黄褐 10YR5/3 中砂（炭化物を比較的多く含む）（SE005）
24. 褐 10YR4/4 中砂（炭化物・径 2 ～ 5cm の亜角礫状地山ブロックを多量に含む）（SE005 抜取）
25. にぶい黄褐 10YR4/3 粗砂混中砂（径 3 ～ 5cm の亜角礫状地山ブロックを多く含む）（SE005 抜取）
26. 暗褐 10YR3/3 中砂（径 3 ～ 5cm の亜角礫状地山ブロックを大量に含む）（SE005 抜取）
27. 黄灰 2.5Y4/1 粗砂混中砂（炭化物・焼土を多く含む）（SE005 抜取）
28. 灰黄褐 10YR4/2 粗砂混中砂（径 1 ～ 10cm の亜角礫状地山ブロックを大量に含む）（SE005 抜取）
29. にぶい黄褐 10YR4/3 中砂（地山ブロックを主とする）（SE005 掘方）

図 6　壁面土層断面図（2）（S=1/40）

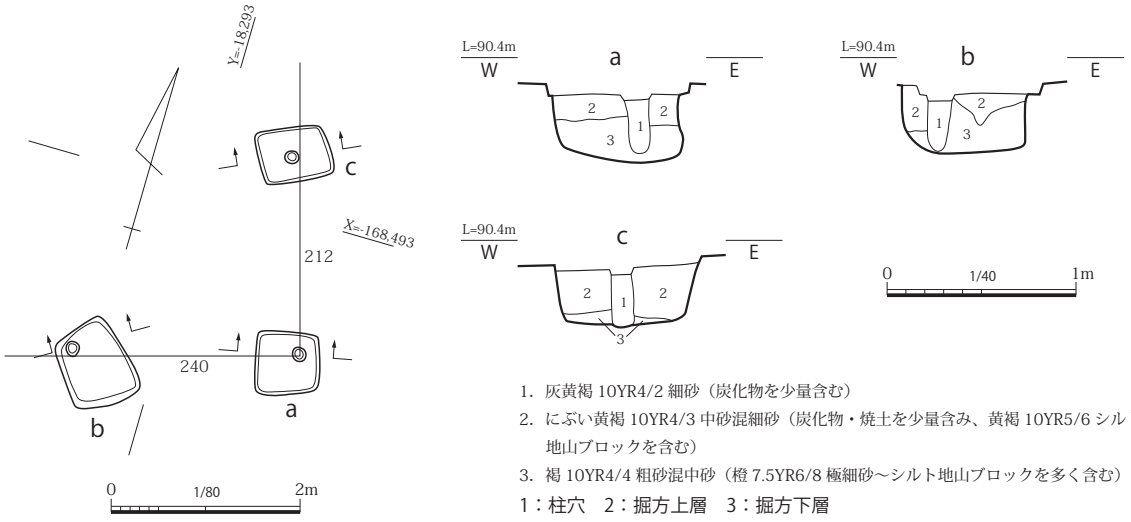


図 7　SB130 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

出土遺物は TK47 ～ MT15 まで若干の年代差が見られるが、埋土の状況や遺物の出土状況から想定すると一括投棄の可能性が高い。周辺に存在した古墳などから出された土器類が一括して投棄された可能性などを考えるべきである。

土坑

SK020（図 9、巻頭図版 3、図版 4）

調査区北東部台地上で検出した土坑である。長軸 113cm、短軸 71cm、深さ 28cm 前後を測り、断面形態逆台形を呈する。壁面は四周が著しく被熱し、被熱度合いは東側がやや甘い。埋土は最下層（5 層）が炭化物を主体とし、その上に混入物の少ない中砂（4 層）が、さらに上には炭化物と焼土を多量に含む細砂（2 層）が堆積し、最上層はブロック土を多く含む人為的埋土である。埋土内からは古墳時代の土器が出土している。瓦器椀が 1 点出土しているが、最上層からの出土であり、混入と考えられる。鍛造剥片等鍛冶関連遺物や、手工業生産に関連する遺物はないが、東に隣接する SK030 と何らかの関係を有していた可能性もある。

出土遺物から 7 世紀の遺構と考えられる。

SK030（図 10、図版 4）

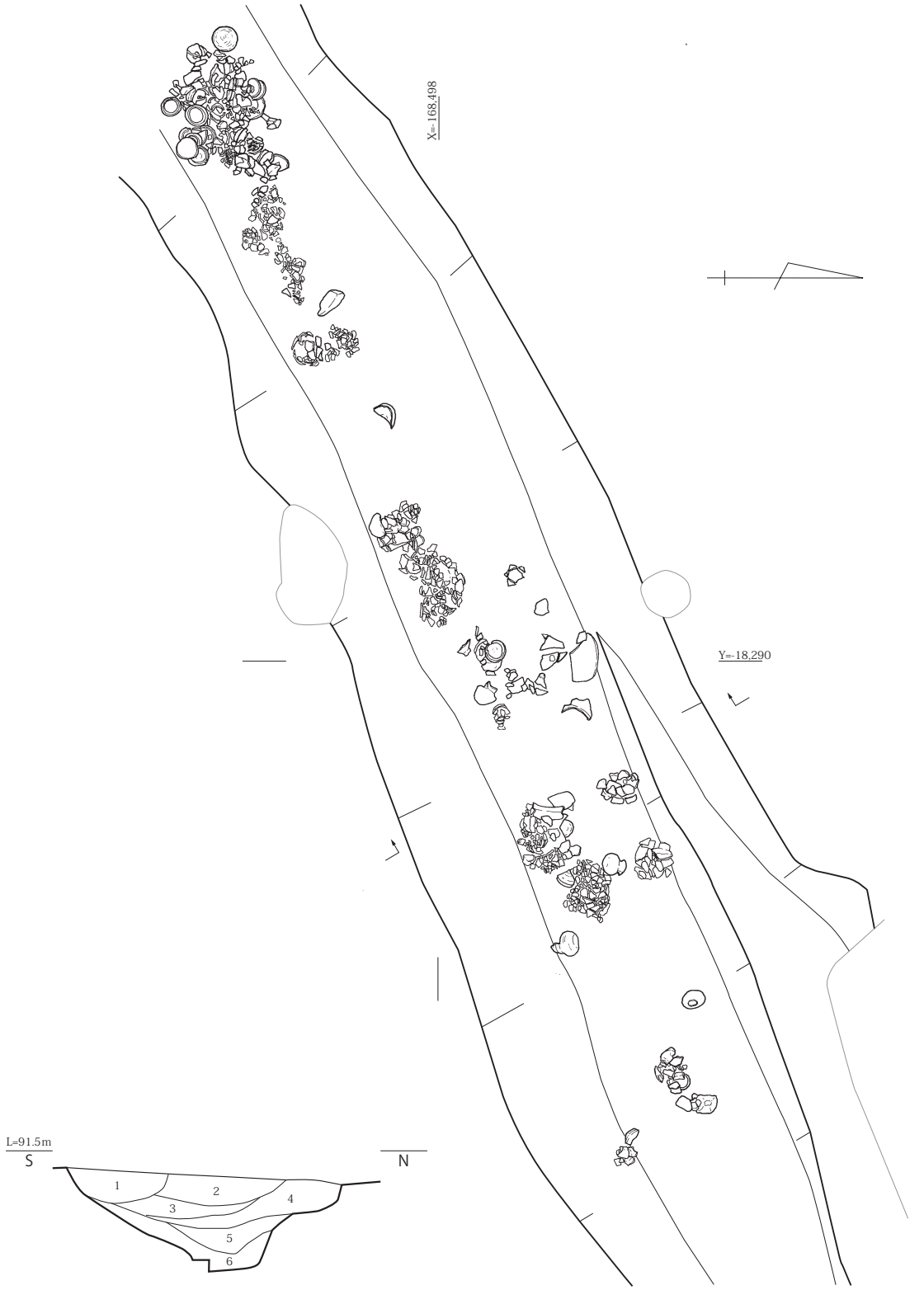
調査区北東部台地上で検出した土坑である。東西 640cm、南北 340cm、深さ 52cm を測り、正方形を呈する。底部は起伏が少なく、わずかに西側へ傾斜し、壁面の立ち上がりは急である。埋土はブロック土をほとんど含まず、炭化物を多く含む上層（1・3 層）と、ブロック土を多量に含む人為的埋土（4・9 層）に分かれる。底部に径 12 ～ 30cm 程度の川原石を配置する。

出土遺物は少ないが、古代の土器類、角閃石安山岩製板材のほかに桶巻造りの平瓦が出土していることから 7 世紀の遺構と考えられる。

落込み

SX010（図 11）

調査区北東部台地上で検出した浅い落ち込みである。前後関係から SB130、SK010・020 に後出するものと考えられる。焼土・炭化物を含む層厚 10 ～ 30cm 程度の細砂が広がっており、ブロック土の



1. にぶい黄橙 10YR6/4 中砂混細砂（炭化物を含み、褐色シルトブロックを多く含む）
2. 褐 10YR4/6 中砂混細砂（炭化物・焼土・褐色シルトブロックを少量含む）
3. にぶい黄橙 10YR6/3 細砂混極細砂（炭化物を少量含み、灰褐色シルトブロックを多く含む）
4. 褐 10YR4/6 中砂混細砂（炭化物を極少量含み、褐色シルトブロックを少量含む）
5. 明褐 7.5YR5/8 中砂混細砂（黄褐色シルトブロックを含む）
6. 明褐 7.5YR5/8 細砂混中砂（炭化物・地山ブロック・灰褐色シルトブロックを少量含む）

0　2m

図 8　SD220 平面・土層断面図（S=1/40）

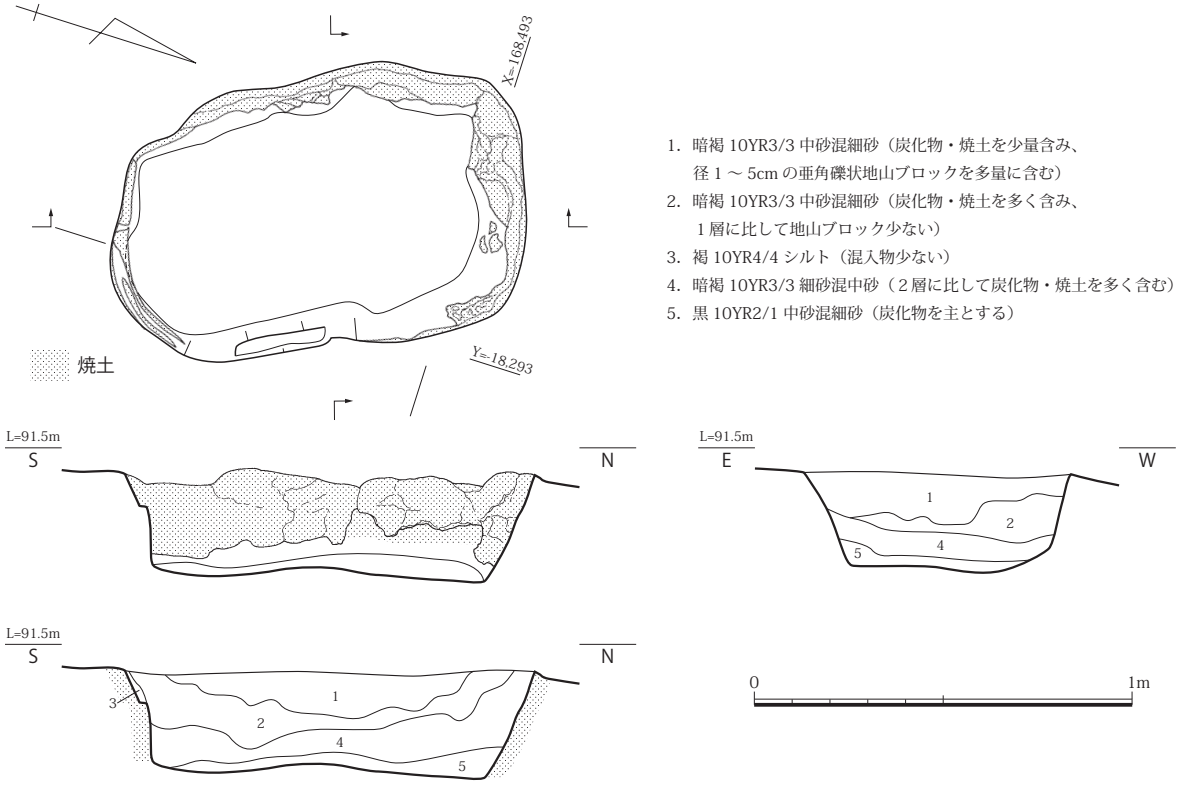


図 9　SK020 平面・立面・土層断面図（S=1/20）

混じる層は一部であることなどから、自然地形と考えられる。焼土・炭化物は SK020 に起因するものと考えられる。

出土遺物が少なく年代決定の根拠は薄弱だが、中世の遺物を含まず、平瓦が出土している事や出土土器類から 7 世紀後半を前後する時期の遺構と考えられる。

SX470（図 11）

調査区北東部台地上で検出した浅い落ち込みである。前後関係から SB130、SD220、SK010・020 に先行すると考えられる。深さ 12 ～ 70cm 前後を測る不整形な形状を呈し、台地上を南北に横断する。埋土は最下層にラミナを形成する自然堆積層、中・上層はブロック土を含む人為的埋土である。形状や堆積状況から人為的に埋められた自然地形と考えられる。

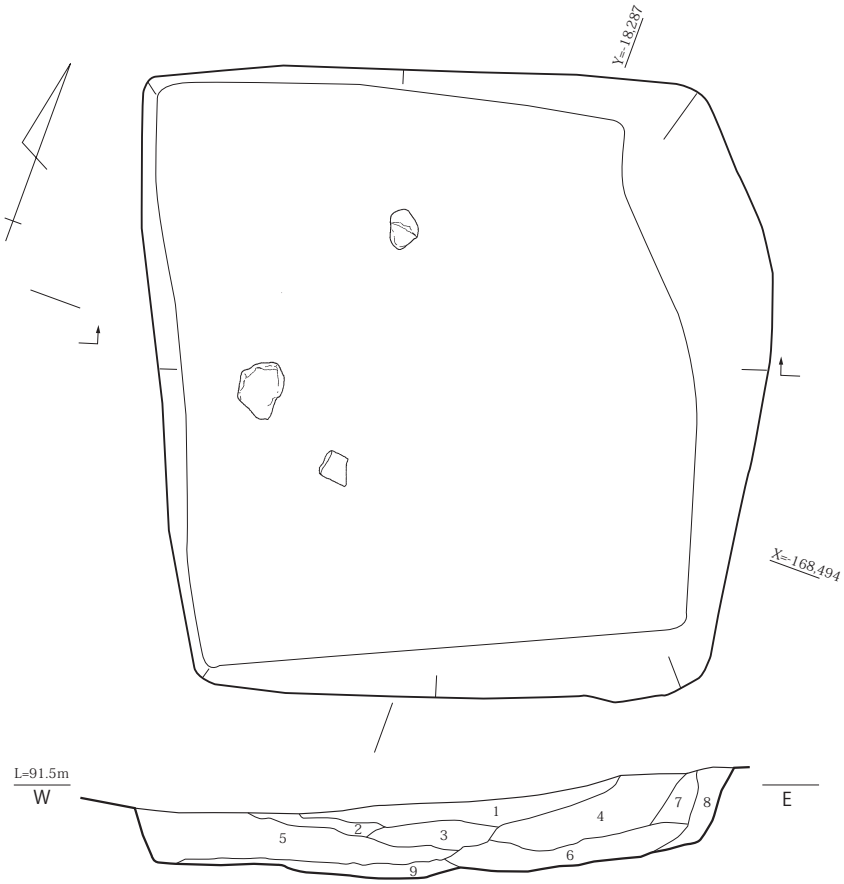
出土遺物から 5 世紀後半～ 6 世紀前半の遺構と考えられる。

第 2 項　出土遺物

SD220 出土遺物（図 12 ～ 14、図版 15 ～ 17）

土師器高杯（1 ～ 4）　1 は内外面ナデ調整を行い、脚部はシボリ成形する。芯棒の痕跡は見られない。脚部には正面に一つだけ円形透かしを穿つ。脚部外面にはヘラ状工具によるナデのため、軽く面ができる。2 は外面丁寧なハケ調整の後、全面をナデ調整する。脚部はシボリ成形を行い、3 方向から円形透かしを穿つ。3 は外面丁寧なハケ調整の後、全面をナデ調整する。表面劣化のため詳細は不明である。4 は内外面ナデ調整で仕上げる。内面のシボリ痕は明確でない。透かし穴は見られない。

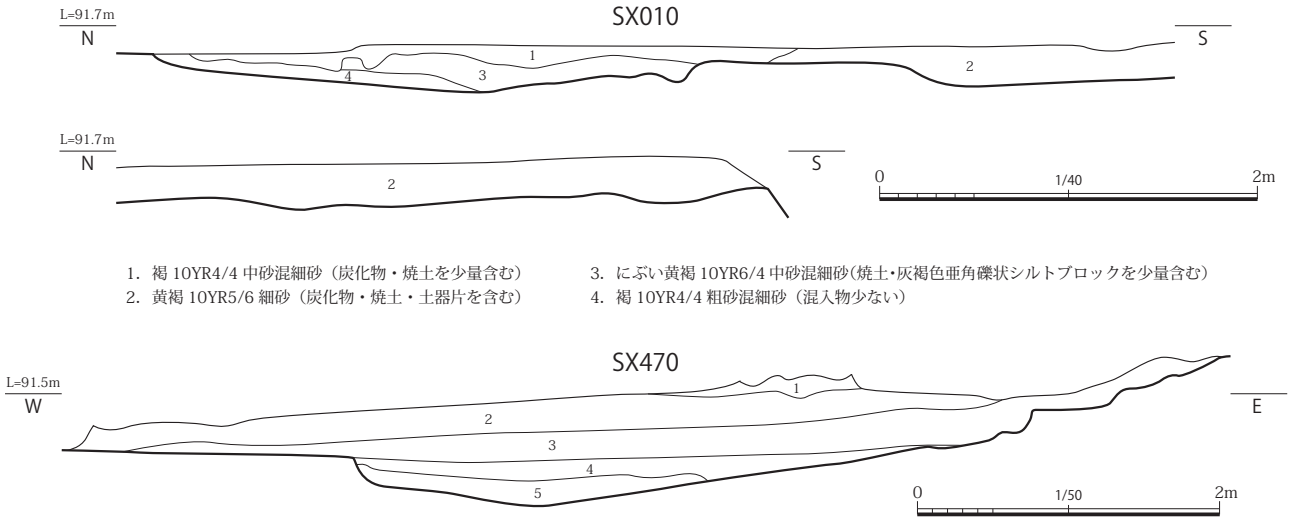
土師器壷（5 ～ 8）　5 は全体的に縦方向に圧縮されており、底部形状もいびつである。内外面劣化の



1. にぶい黄褐 10YR6/4 細砂（炭化物・土器片を少量含む）
2. 黄褐 10YR5/6 粗砂混細砂（炭化物を多く含む）
3. 明褐 7.5YR5/6 粗砂混細砂（炭化物を少量含む）
4. 褐 10YR4/6 粗砂混細砂（炭化物・焼土を少量含み、亜角礫状シルトブロックを含む）
5. 褐 10YR4/6 粗砂混極細砂（炭化物を少量含み、径 5 ～ 10cm 程度のシルトブロックをまばらに含む）
6. 黄褐 10YR5/6 粗砂混極細砂（炭化物・焼土を極少量含み、亜角礫状シルトブロックを含む）
7. 明褐 7.5YR5/6 粗砂（炭化物・焼土を含む）
8. 褐 7.5YR5/6 粗砂混細砂（シルトブロックを多く含む）
9. にぶい黄褐 10YR5/4 細砂混極細砂（シルトブロックを主とする）

0　2m

図 10　SK030 平面・土層断面図（S=1/40）



1. 褐 10YR4/4 中砂混細砂（炭化物・焼土を少量含む）
2. 黄褐 10YR5/6 細砂（炭化物・焼土・土器片を含む）
3. にぶい黄褐 10YR6/4 中砂混細砂(焼土･灰褐色亜角礫状シルトブロックを少量含む)
4. 褐 10YR4/4 粗砂混細砂（混入物少ない）

1. 赤褐 5YR4/6 中砂混粗砂（地山に起因するバイラン土を主とする）
2. 明褐 7.5YR5/6 中砂混粗砂（擾乱著しい）
3. 明褐 7.5YR5/6 中砂（地山ブロックを主とする）
4. 褐 7.5YR4/6 中砂（地山ブロックを主とする）
5. 赤褐 5YR4/6 中砂（炭化物を少量含む、ラミナ形成）

図 11　SX010・470 土層断面図（S=1/40・1/50）

図 12　SD220 出土遺物実測図 (1)（S=1/3）

ため調整等は不明で、外面の一部に大きな黒斑を有する。6 は外面丁寧なハケ調整の後、ナデ調整で仕上げる。内面には連続する強いユビオサエが残る。7 は外面丁寧なハケ調整の後、ナデ調整を行い、口縁内面には強いナデによって凹線状のくぼみを有する。8 は内外面ユビオサエ痕が残るが、表面劣化のため調整は不明である。

土師器甕（9 ～ 11）　9 は肩部外面に横方向のハケ調整が残るほかは表面劣化のため調整等不明である。10・11 はともに表面劣化のため調整等は不明である。

須恵器蓋（12 ～ 26）　器高が高く、独立した突帯を持ち、天井部外面にカキメを施すもの（12・15・19・22）と、それ以外の天井部が丸みを持ち、体部が少し開き気味になるものがあり、二型式程度に分かれると考えられる。轆轤の回転方向は 12 ～ 14・16・17・19 ～ 23 が左回転、15・18・24 ～ 26 が右回転である。

須恵器杯（27 ～ 41）　口縁部が外反気味に長く伸び、端部に段を持つもの（27 ～ 30・32 ～ 35、37 ～ 40）と、口縁部が直線的に短く伸び、端部に段を持たないもの（31・36・41）に分かれる。轆轤の回転方向は 36・37・40・41 以外左回転である。31 は外底面に十字のヘラ記号を刻む。

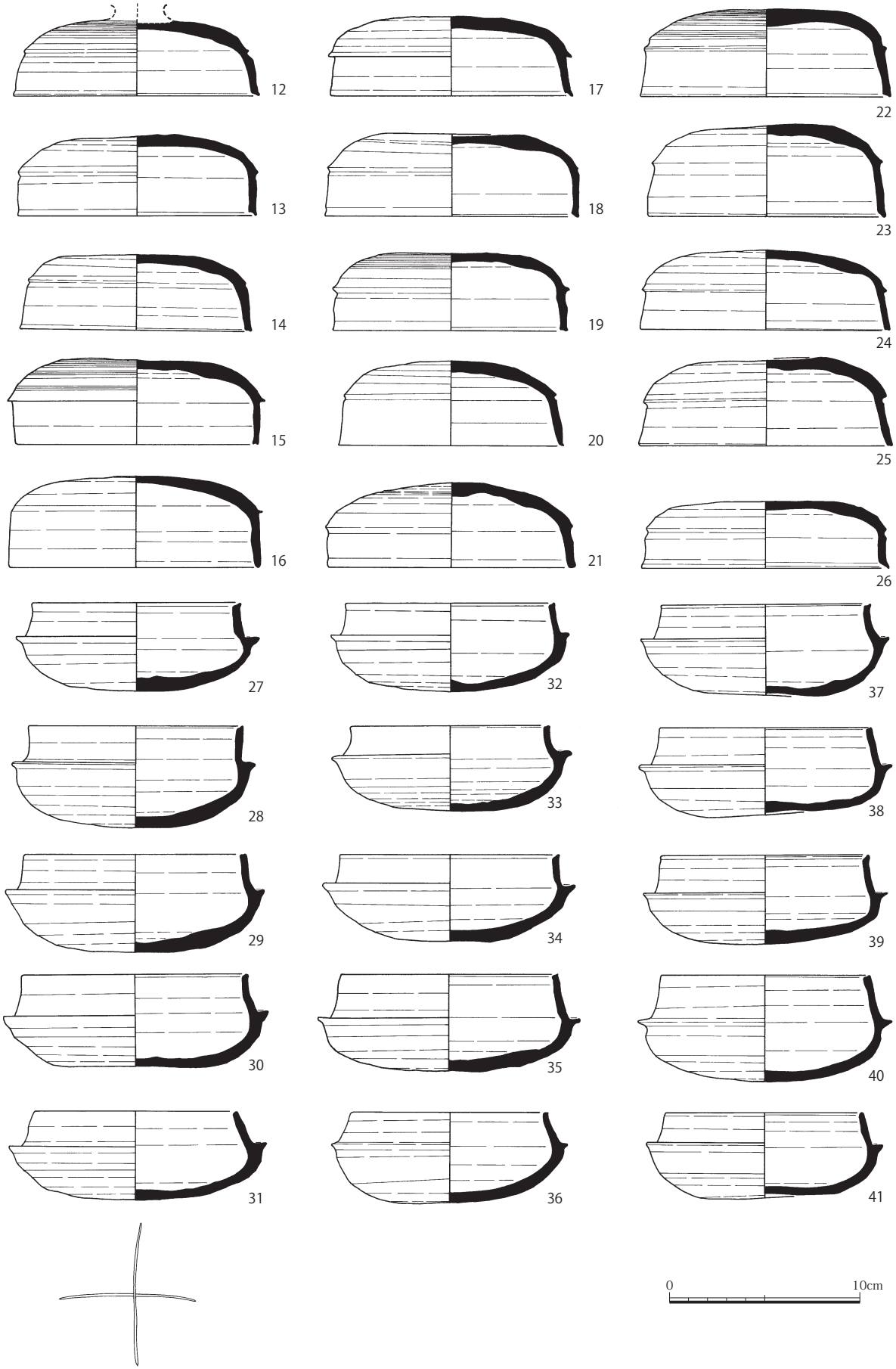


図 13　SD220 出土遺物実測図 (2)（S=1/3）

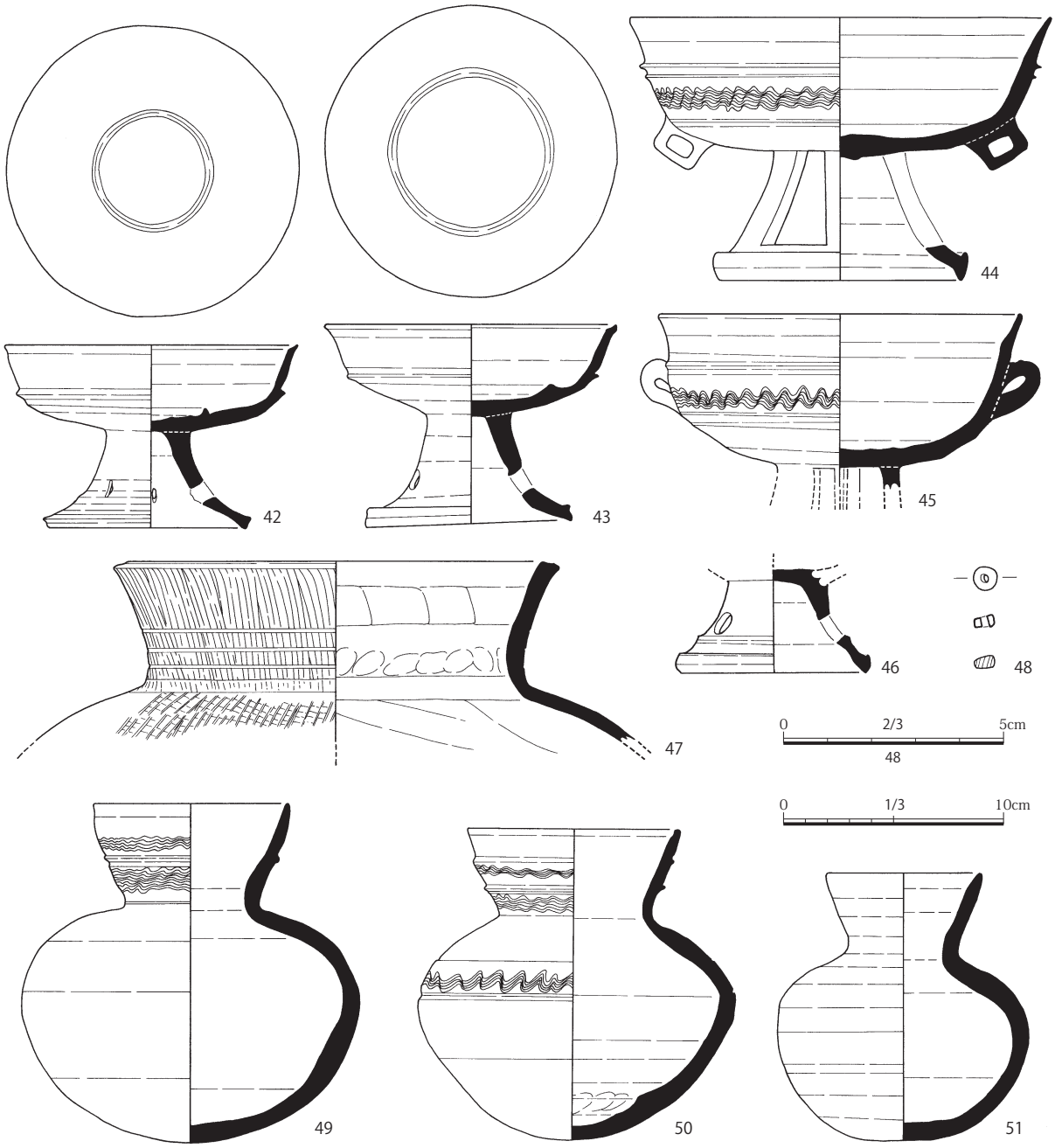


図 14　SD220 出土遺物実測図 (3)（S=1/3・2/3）

須恵器高杯（42 ～ 46）　42 は杯部内底面に突帯を持つものである。内外面回転ナデ調整を行い、脚部の透かしは長楕円形のものを 3 方向から穿つ。焼成は不良でやや瓦質焼成となる。轆轤の回転は左方向である。43 も杯部内底面に突帯を持つものである。内外面回転ナデ調整を行う。突帯の形状は 42 に比してシャープさを欠く。脚部に 3 方向から円形透かし穴を穿つが、均等に配されず、4 方向のうち 1 方向を欠く配置となる。轆轤の回転は左方向である。特殊な形状のものだが、同様のものが桜井市栗原カタソバ遺跡で出土している。（奈良県立橿原考古学研究所 2003）。透かし穴の形状、脚部の接合方法に加耶地域との共通性が見られるとのことである [(1)]。44 は低脚で杯部には波状文と環状把手を有する。杯部内外面回転ナデ調整の後、外底面を回転ヘラケズリして、最後に脚を貼り付ける。脚部には 3 方向から方形透かし穴を穿つ。45 も波状文と環状把手を持つ。把手の位置は 44 に比して高い。内外面回転ナデ調整の後、外底面を回転ヘラケズリし、脚を貼り付ける。その後脚部 4 方向から方形透か

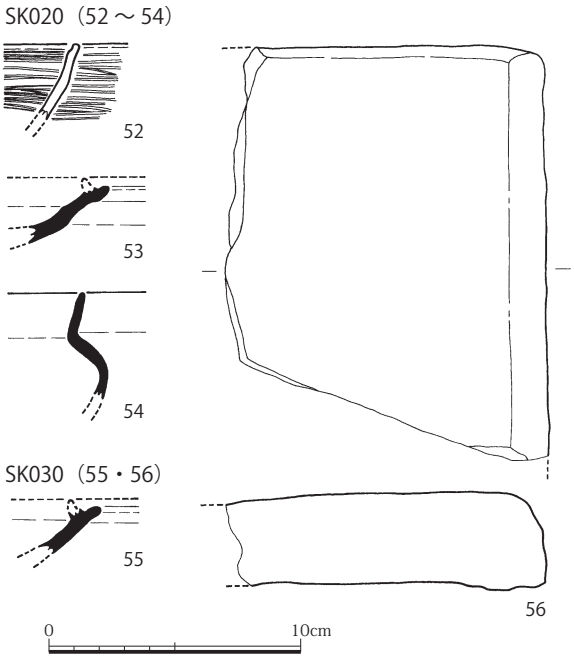


図 15　SK020・030 出土遺物実測図（S=1/3）

しを穿つ。焼成は良好だが内底部には窯体片が付着する。B 体は脚部のみ残存する。内外面回転ナデ調整を行い、2 方向から円形透かしを穿つ。透かしは対向位置に配置されず、3 方向のうち 1 方向を欠いた配置となる。

須恵器甕　47 は著しく焼成不良で、土師質を呈する。内面丁寧なナデ調整、外面タタキの後、口縁部をナデ調整する。外面のタタキ痕は口縁端部に及ぶ。

須恵器壷（49～51）　いずれも短頸壷である。49 は内外面回転ナデ調整の後、口縁部外面に二段に分けて波状文を刻む。肩部以上は降灰を被る。50 は内外面回転ナデ調整の後、頸部には二条突帯、肩部には二条沈線を施し、それぞれの内側に波状文を刻む。肩部以上には降灰を被る。51 は素文のものである。内外面回転ナデ調整を行い、やや厚手で焼成もやや不良である。

石製玉（48）　滑石製臼玉である。ややいびつな形状を持ち、穿孔は片側から行われる。

これらの遺物は須恵器杯の形状を参考とすると概ね TK47 ないし MT15 に相当する。若干の時期差が存在するが、一括性は高く、二つの型式属性を持つ土器群が混在した状態で投棄されたものであろうか。

SK020 出土遺物（図 15、図版 17）

瓦器椀　52 は内外面ナデ調整の後、内外面を密にヘラミガキする。Ⅰ段階のものと考えられる。当遺構にはほかに中世の遺物が見られず、混入資料と考えられる。

須恵器杯　53 は内外面回転ナデ調整を施す。口縁部を欠損するが、立ち上がりは短いものと考えられる。7 世紀のものと考えられる。

須恵器壷　54 は小型壷である。内外面回転ナデ調整を行い、内外面に褐色の降灰の付着が見られる。

SK030 出土遺物（図 15、図版 17・18）

須恵器杯　55 は内外面回転ナデ調整を行う。口縁部と受け部を欠損する。7 世紀前半のものである。

石材片　56 は角閃石安山岩の破片である。磚状に成形しており、全面被熱する。表面劣化のため加工の詳細は不明である。

SX010 出土遺物（図 16、 図版 18）

須恵器蓋　57 は内面にかえりを持つ蓋である。内外面回転ナデ調整の後、外面上半を回転ヘラケズリする。轆轤の回転方向は不明である。

須恵器杯　58 は内外面回転ナデ調整の後、外底面を回転ヘラケズリする。轆轤の回転方向は右回転である。内底面にはあて具の痕跡が見られる。

須恵器甕（59・60）　59 は内外面回転ナデ調整の後、外底面をオサエ調整し、頸部と体部に波状文を施す。60 は外底面をナデ調整の後、軽く手持ちヘラケズリし、体部に列点文を施す。いずれも穴周辺に使用による摩滅などは見られない。

平瓦　61 は凸面板状工具によるナデを施し、凹面布目を持つ。布目には綴じ紐の痕跡が残る。桶巻成形のものである。

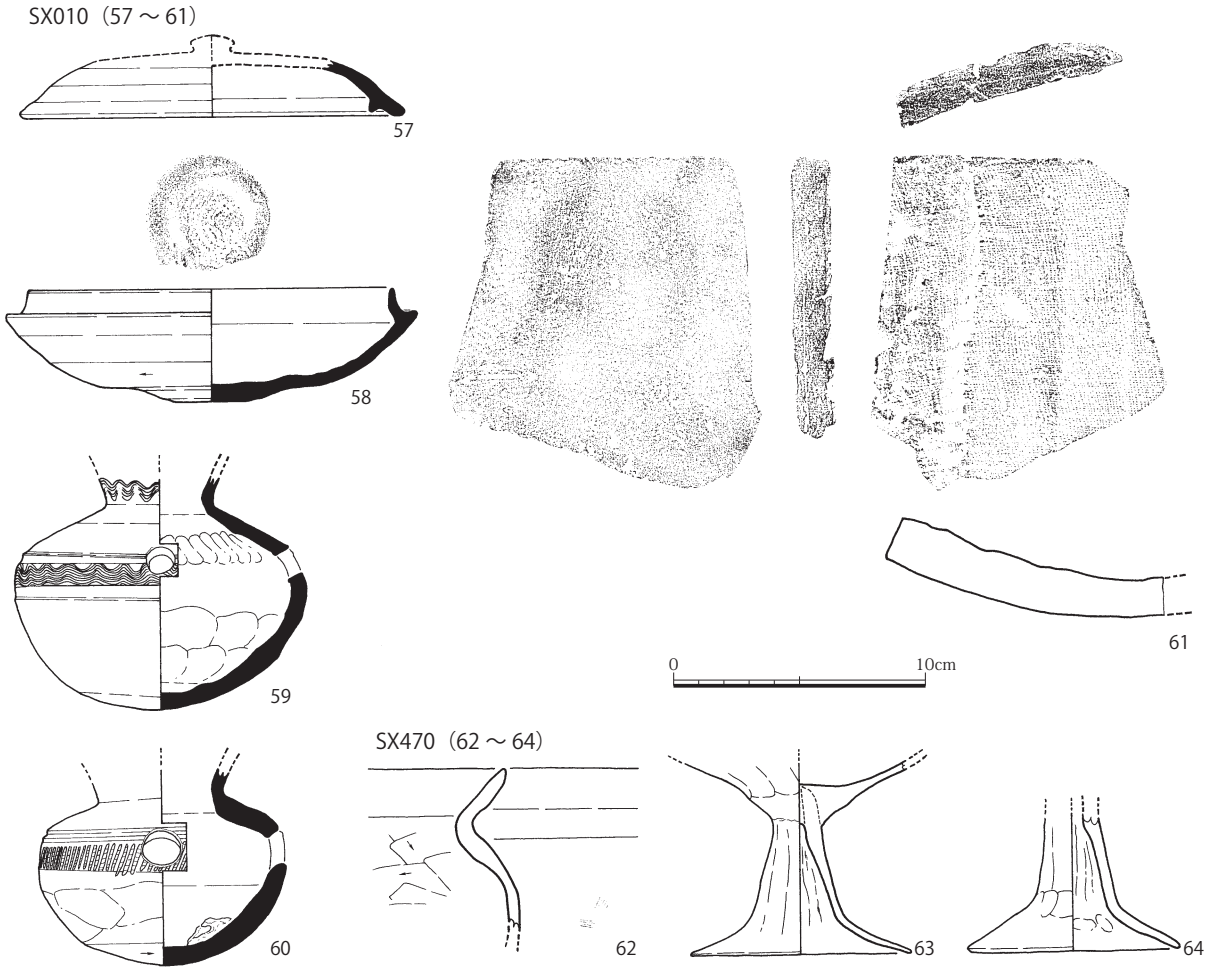


図 16　SX010・470 出土遺物実測図（S=1/3）

SX470 出土遺物（図 16）

土師器甕　62 は内面ヘラケズリ、外面ハケ調整の後ナデ調整する。体部には黒斑が見られる。

土師器高杯（63・64）　いずれも脚部内面にシボリ痕を持ち、63 の杯部内底面には芯棒の痕跡が確認できる。いずれも表面劣化のため外面調整は不明である。

第 3 節　中世以降の遺構と遺物

第 1 項　検出遺構

柱列

SA490（図 17）

調査区北西部で検出した掘立柱列である。重複関係から SD110 に先行する遺構と考えられる。東西四間分、総延長 752cm 分が残存する。柱掘方は直径 25 ～ 40cm の円形を呈し、深さ 30cm 程度が残存する。柱間は 176 ～ 196cm とややばらつきがあり、主軸方位は W-5° 33′-S 前後を測る。埋土から復元できる柱直径は 12cm 前後である。SB360 北辺と方位を合わせており、関連する遺構と考えられる。

出土遺物は少ないが、柱穴埋土よりわずかに出土した遺物から 14 世紀前半の遺構と考えられる。

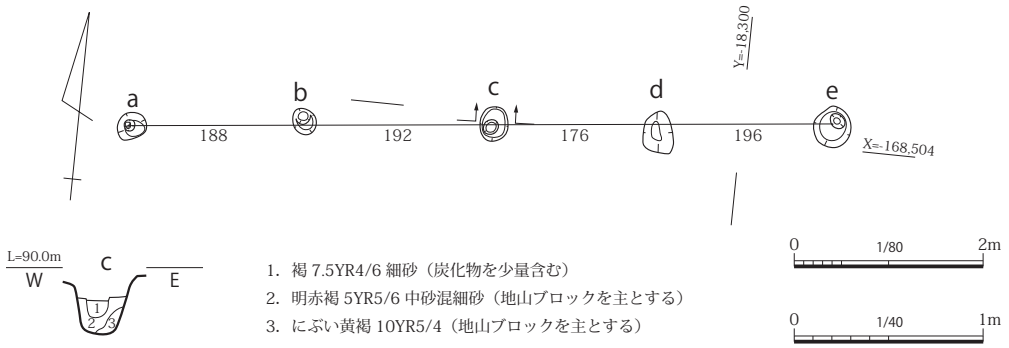


図 17　SA490 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

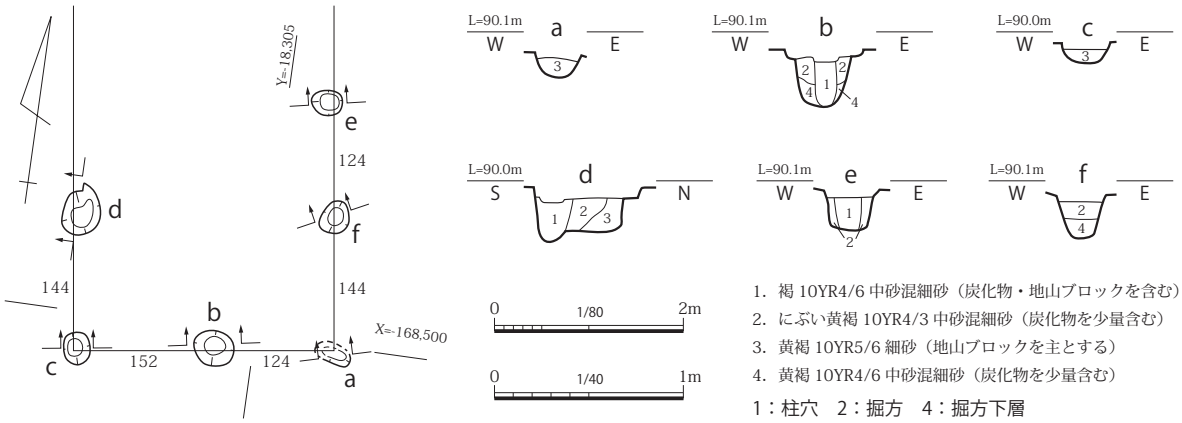


図 18　SB070 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

建物

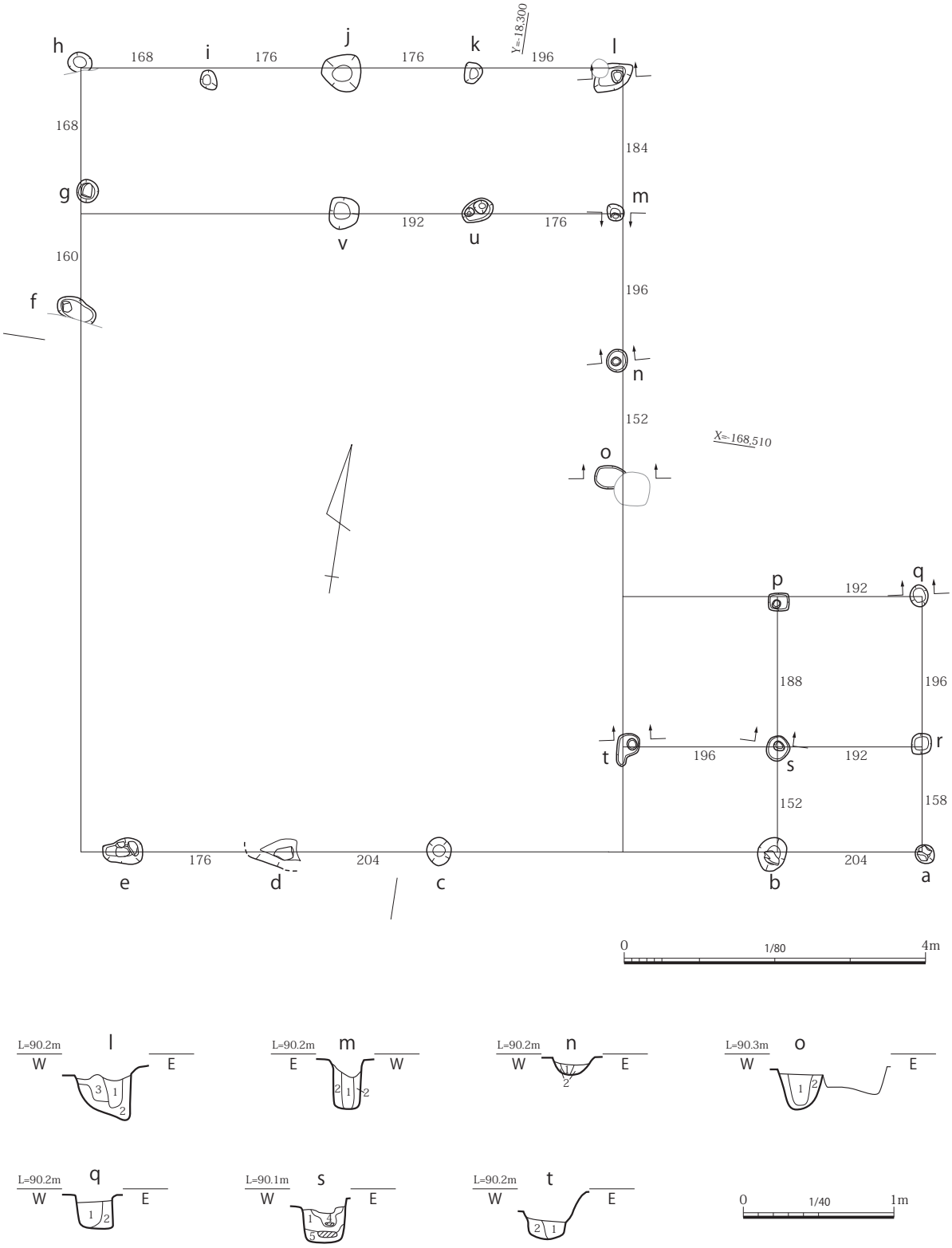
SB070（図 18）

調査区北西端で検出した掘立柱建物である。東西二間分、南北二間分が残存する。柱掘方は直径 28 ～ 45cm 程度の円形を呈し、深さ 14 ～ 32cm 程度が残存する。柱間は 124 ～ 152cm とややばらつきがあり、主軸方位は N-7° 41′-E 前後を測る。埋土から復元できる柱直径は 20cm 前後である。　出土遺物も少なく、年代決定は困難である。

SB360（図 19）

調査区中央部西寄りで検出した掘立柱建物である。重複関係から SD110 に先行する遺構と考えられる。多数の柱穴が集中する中で、柱の規模、埋土、底部根石の有無などにより柱穴をグルーピングして建物復元を行った。したがって、南端柱列の柱間距離が南北柱間、北辺柱間と合わないなど矛盾する点も見られ、正確な建物復元であるか、検証を重ねる必要はあるが、現状での復元案として提示しておく。身舎は東西四間、南北五間で、北面に庇ないし縁が取りつき、南東部には床張りの張り出しが取りつく。柱穴を特定できなかったため復元していないが、身舎も床張りの可能性が高い。柱掘方は直径 23 ～ 49cm 程度の円形を呈し、深さ 12 ～ 32cm 程度が残存する。埋土から復元できる柱直径は 18cm 前後である。身舎部分は桁行 844cm、梁行 720cm 柱間は桁行平均 168cm、梁行平均 180cm、主軸方位は N-8° 23′-W 前後を測る。

出土遺物は少ないが、柱穴埋土より出土した遺物から 14 世紀代の遺構と考えられる。



1. 褐 7.5YR4/6 細砂（炭化物を少量含む）
2. 明赤褐 5YR5/6 中砂混細砂（地山ブロックを主とする）
3. 橙 7.5YR6/8 細砂（地山ブロックを主とする）
4. 褐 7.5Y4/4 中砂（炭化物を多く含む）
5. にぶい黄褐 10YR4/3 中砂（炭化物を多く含む）

図 19　SB360 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

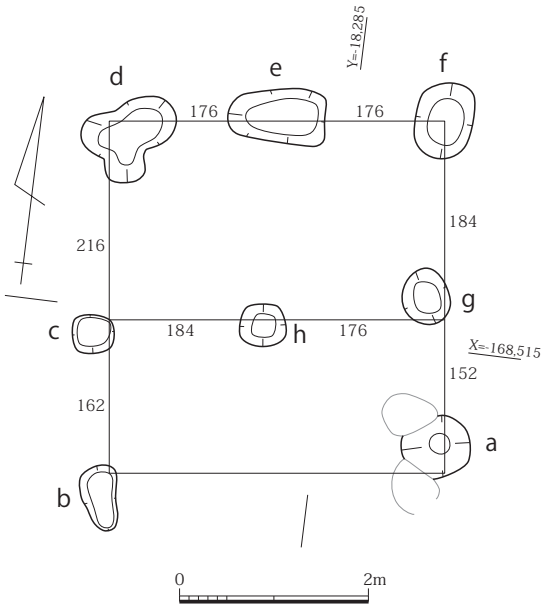


図 20　SB480 平面図（S=1/80）

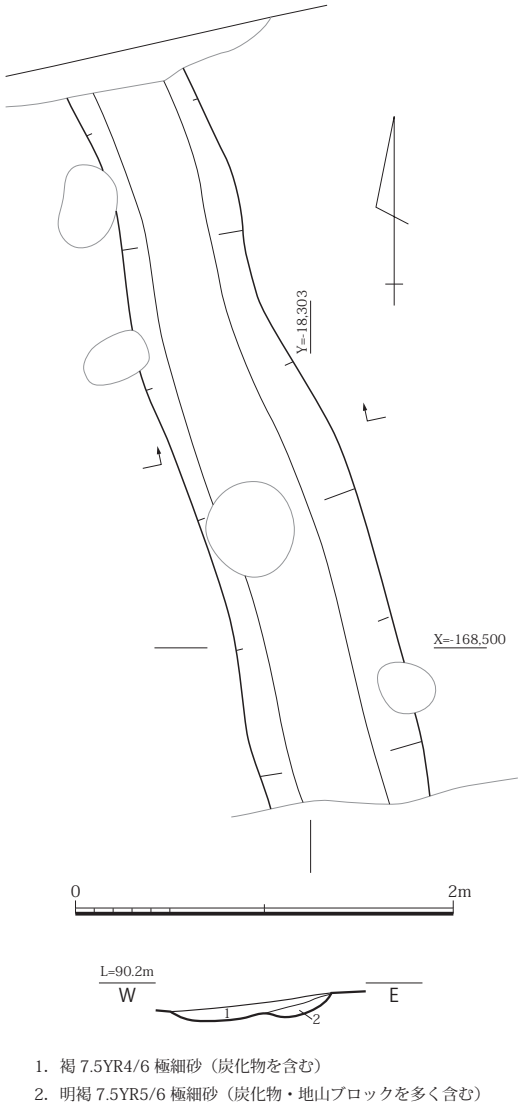


図 21　SD050 平面・土層断面図（S=1/40）

SB480（図 20）

調査区中央東寄りで検出した掘立柱建物である。東西二間分、南北二間分が残存する。柱掘方は直径 45cm 程度の円形を基調とし、柱抜き取りにより不整形を呈する。柱間は 152 ～ 216cm とややばらつきがあり、主軸方位は N-6° 55′-W 前後を測る。

出土遺物は少ないが、柱穴埋土よりわずかに出土した遺物から 14 世紀後半～ 15 世紀前半の遺構と考えられる。

溝

SD001（図版 5）

調査区西端で検出した落ち込み状の溝である。幅 620cm 以上、最深部深さ 72cm を測る。埋土は下部にラミナを形成する自然堆積層、上部(C：南壁 11 ～ 13 層)はブロック土を含む人為的堆積層である。検出範囲が狭く、流水の経路や溝底部の傾斜等は詳らかでない。中間にブロック土の流入（C ： 南壁 20 層）が確認できるが、土塁等の積極的な根拠とするには少量である。重複関係から SE005 に後出すると考えられる。

出土遺物から 15 世紀半ば～後半に埋没する遺構と考えられる。

SD050（図 21）

調査区北端を南北に走る溝である。重複関係から SD060 に先行するものと考えられる。幅 62 ～ 84cm、深さ 10cm 前後を測る。断面形態浅い皿形を呈し、埋土内にラミナ等は確認できない。底部レベルは緩やかに南へ傾斜するが、流水の存在は想定できない。

出土遺物から 14 世紀後半に埋没する遺構と考えられる。

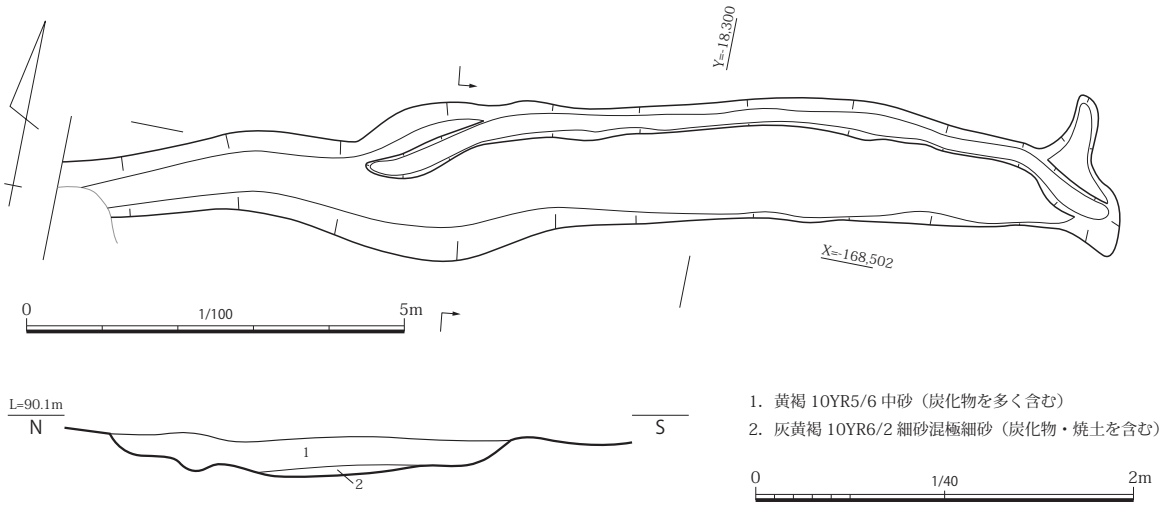


図 22　SD060 平面・土層断面図（平面 S=1/100・断面 S=1/40）

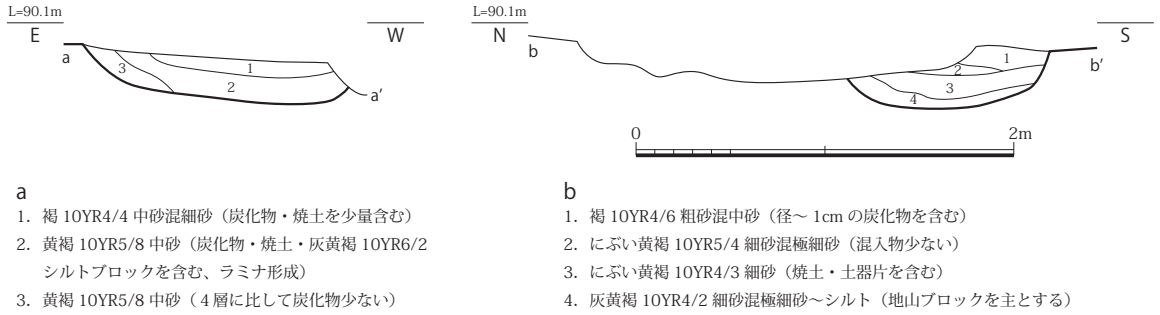


図 23　SD110 土層断面図（S=1/40）

SD060（図 22、図版 5）

調査区北側を東西に走る溝である。SD250 と同一の溝と考えられる。方位は W-12° 14′-S 前後を測る。調査区西端の傾斜変換点付近で南に折れ曲がっていた可能性があるが、近世の溝に破壊され詳らかでない。重複関係から SD240・110、SK120 に後出すると考えられる。幅 150cm 前後、深さ 20cm 前後を測り、断面形態浅い皿形を呈する。埋土は大きく上下層に分かれるが、埋土内に焼土･炭化物を含み、流水の痕跡は見られない。

出土遺物から近世の遺構と考えられる。

SD110（図 23、図版 5）

調査区北側を東西に走る溝である。方位は N-21° 21′-W 前後を測る。調査区西側で南に直角に折れ曲がり､調査区外へ続く。東端は深度を浅くして途切れる。重複関係から SB360､SD210･240 に先行し、SD060 に後出すると考えられる。幅 110 ～ 150cm 前後、深さ 20 ～ 30cm 前後を測り、断面形態浅い｢U｣字形を呈する。底部レベルは東西方向比高差 10cm 前後で西へ傾斜するが､南北方向はほぼフラットである。埋土は焼土と炭化物を少量含むが、一部にラミナの形成が確認でき、恒常的ではないが水流が存在する時期もあったと見られる。

出土遺物から 16 世紀前半の遺構と考えられる。

SD127

調査区北側に屈曲して存在する溝である。重複関係から SK170 に後出すると考えられる。幅 20cm

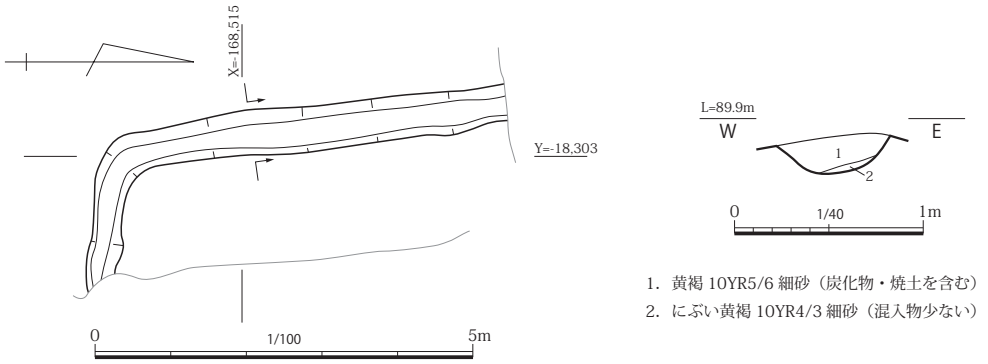


図 24　SD200 平面・土層断面図（平面 S=1/100・断面 S=1/40）

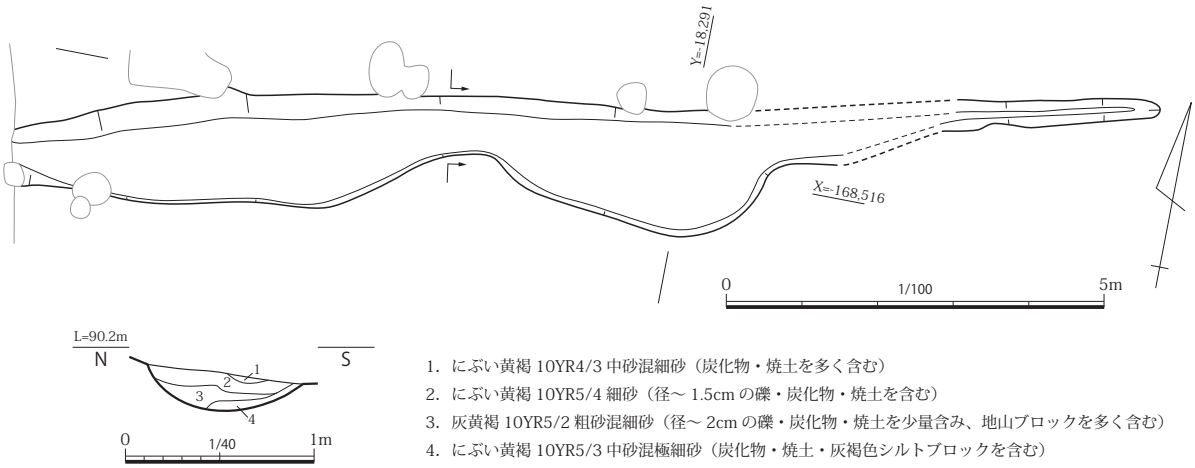


図 25　SD210 平面・土層断面図（平面 S=1/100・断面 S=1/40）

前後、深さ 5cm 前後を測り、断面形態浅い「U」字形を呈する。埋土は焼土と炭化物を多く含み、ラミナ等は見られない。

SD200（図 24）

調査区西側を南北に走り、南端で東へ屈曲する溝である。重複関係から SD110 に先行し、SK227 に後出すると考えられる。幅 50cm 前後、深さ 20cm 前後を測り、断面形態浅い「U」字形を呈する。底部レベルは南北方向比高差 10cm 前後で北へ傾斜する。埋土は焼土と炭化物を含み、地山ブロックを含まない自然堆積土である。

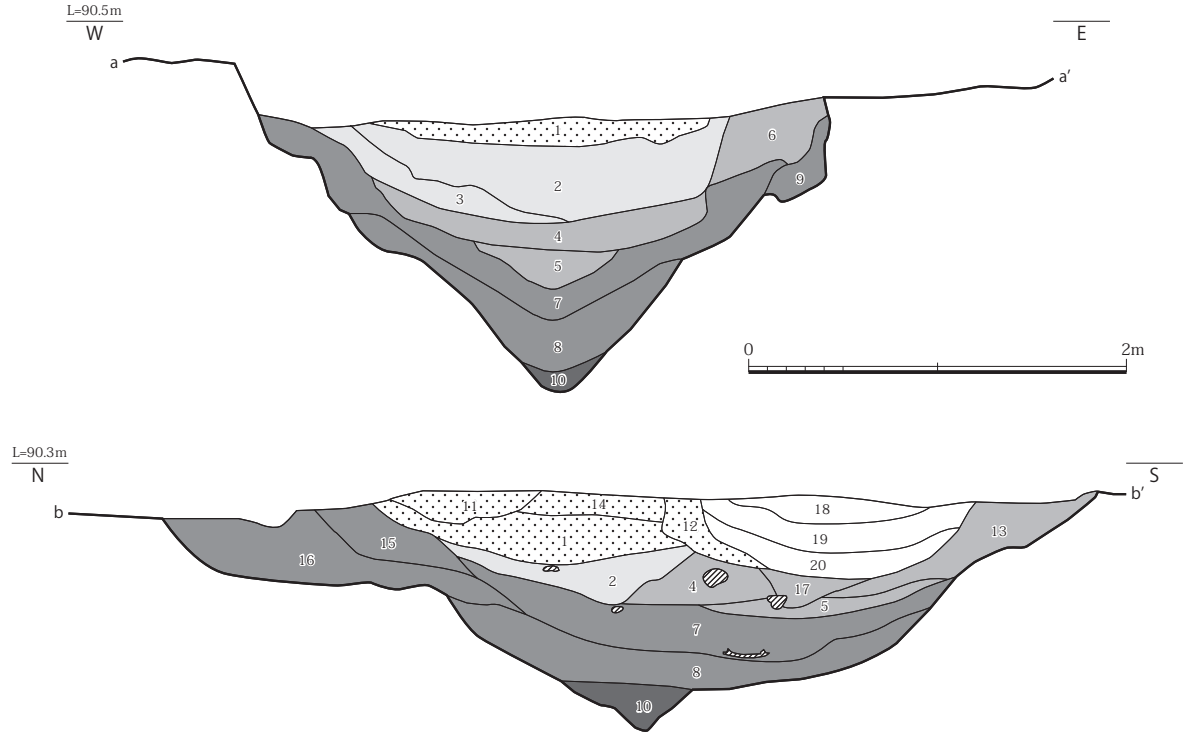
SD210（図 25）

調査区南側を東西に走る溝である。方位は W-8° 43′-S 前後を測る。調査区東側で深さが浅くなり、幅も狭小となり消滅する。SB360 に方位を同じくして隣接することから、南端を区画する溝であった可能性もある。重複関係から SD110 に先行し、SE190 掘方に後出すると考えられる。幅 20 ～ 170cm 前後、深さ 20cm 前後を測り、断面形態浅い「U」字形を呈する。底部レベルは東西方向比高差 40cm 前後で西へ傾斜する。下層（3・4 層）に地山ブロックを含む人為的埋土が、上層（1・2 層）に焼土と炭化物を含む埋土が堆積する。

出土遺物から 15 世紀後半の遺構と考えられる。

SD240・260（図 26・27、図版 6・7）

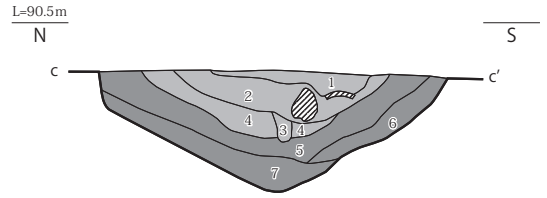
調査区北東部台地際に、台地を取り囲むように存在する大溝である。西辺を SD240、南辺を SD260 として別の溝と扱って調査したが、調査の結果同一の溝の掘り直しと判明したため、SD240 と SD260



a-a′・b-b′

1. 褐 7.5YR4/6 粗砂混中砂（径 3cm 前後の亜角礫状地山ブロックを少量含む）
2. 褐 10YR4/4 粗砂混中砂(径３～ 7cm の亜角礫状地山ブロックを多量に含む）
3. 赤褐 5YR4/6 粗砂混中砂（地山ブロックを主とする）
4. にぶい褐 7.5YR5/4 細砂（ラミナ形成）
5. 黄褐 10YR5/6 細砂（ラミナ形成）
6. 褐 7.5YR4/4 粗砂混中砂（炭化物を少量含む）
7. 明褐 7.5YR5/6 細砂（ラミナ形成）
8. 褐 7.5YR4/6 粗砂（ラミナ形成）
9. 赤褐 5YR4/6 粗砂混中砂（地山ブロックを主とする）
10. 褐 7.5YR4/6 中砂混粗砂（ラミナ形成）
11. 明褐 7.5YR5/8 中砂混細砂（土器片・灰褐色シルトブロックを少量含む）
12. 褐 10YR4/6 中砂混細砂（炭化物・焼土土器片を含む）
13. 黄褐 10YR5/6 細砂～極細砂（炭化物・焼土・地山ブロックを含む）
14. にぶい黄褐 10YR5/4 中砂混細砂（灰褐色シルトブロックを少量含む）
15. 黄褐 10YR5/6 中砂混細砂（炭化物・焼土・土器片を少量含む）
16. にぶい褐 7.5YR5/4 細砂（土器片を少量含む）
17. 褐 7.5YR4/6 細砂（炭化物・焼土を少量含み、灰褐色シルトブロックを含む）
18. 明褐 7.5YR5/8 中砂（混入物少ない）
19. にぶい褐 7.5YR5/4 極細砂～シルト（褐色土粗砂混細砂を多く含む）
20. にぶい黄褐 10YR5/4 極細砂混シルト（炭化物・焼土を極少量含む）

1・11・12・14：暗褐土　2・3：灰褐土　4～6・13・17：暗灰土
7～9・15・16：赤褐土　10：褐砂　18～20：SD260



c-c′

1. 褐 7.5YR4/6 中砂混細砂（炭化物・地山ブロックを含む）
2. 灰黄褐 10YR5/2 細砂混極細砂（径～ 15cm の礫・炭化物・焼土・瓦を含む）
3. 褐 10YR4/6 中砂混細砂（混入物少ない）
4. にぶい黄褐 10YR5/3 細砂混極細砂～シルト（炭化物・焼土を含む）
5. 褐 7.5YR4/6 細砂混中砂（炭化物・焼土・土器片を少量含み、灰褐色シルトブロックを含む）
6. 明褐 7.5YR5/8 中砂（土器片・地山ブロックを少量含む）
7. にぶい黄褐 10YR5/4 粗砂混中砂（炭化物を極少量含む）

1～4：暗褐砂　5～7：褐粘

図 26　SD240・260 土層断面図（S=1/40）

をまとめて報告する。

西辺と南辺で規模、断面形状が大きく異なり、西辺は幅 320cm、深さ 170cm の薬研形を呈する。南辺は南西隅部分で幅 500cm、深さ 120cm を測り、東端に向けて深さと幅を減じ、調査区東端付近で消滅する。西辺東肩部分には不整形な土坑状の起伏が多数存在したが、いずれも意図的な形状を呈さず、また出土遺物も見られない。何らかの防御施設の可能性もあるが、詳細は不明である。埋土は大きく 4 層に分かれる。上層（a1 ～ 3 層：暗褐土）はブロックを含む人為的埋土、中層（同 4 ～ 6 層：灰褐土）、下層（同 7 ～ 9 層 : 暗灰土）、最下層（同 10 層：赤褐土）はいずれも地山に起因するバイラ

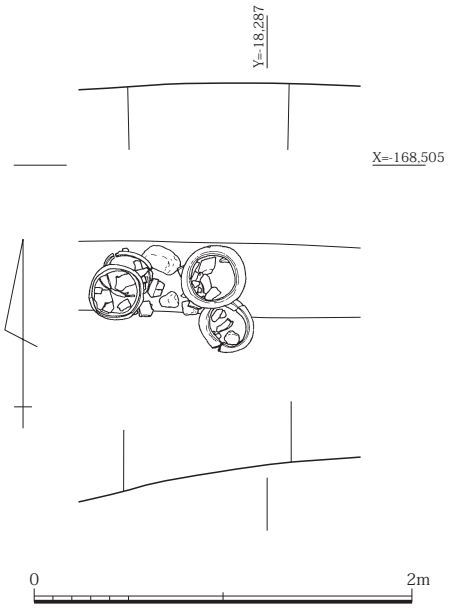


図 27　SD240・260 遺物出土状況図（S=1/40）

ン土を母材とした砂である。中～最下層はいずれも埋土内に部分的にラミナが確認できることから、開口状態であったことが推定できる。ただし滞水や流水の痕跡は確認できず、空堀の状況であったと考えられる。堆積状況を観察すると、台地上からブロック土が流入した状況は特に観察できず、土塁等が伴っていたと判断できない。また a4 ～ 6 層下端はその形状から掘り直しが行われたと考えられ、比較的埋没速度が速かったことがうかがえる。

遺物は中層、下層から土師器皿、釜を中心に大量の土器が出土した。また、最下層（10 層）からⅣ段階 A 型式の瓦器椀が出土しており、14 世紀前半には機能が開始していたと考えられる。中層出土遺物から掘り直しの時期は 14 世紀半ば～ 15 世紀前半、上層出土遺物から最終埋没は 15 世紀後半と考えられる。南端部分は再度掘り直しが行われたと考えられ、SD260 下層（c5 ～ 7 層：褐粘）は 15 世紀半ば～後半、上層（c1 ～ 4 層：暗褐砂）は 15 世紀後半以降の堆積である。

本遺構を取り巻く環境については自然科学分析とそれについてのコメントを通して再度詳述したい。

SD270（図 28）

調査区東側を東西に走る溝である。方位は W-6° 28′-N 前後を測る。東端は不整形に広がり、調査区外へ続く。重複関係から SD250 に先行し、SD260 に後出すると考えられる。幅 100 ～ 470cm 前後、深さ 20cm 前後を測り、断面形態浅い皿形を呈する。底部レベルは東西方向比高差 10cm 前後で西へ傾斜するが、東端は 10cm 前後深くなり土坑状を呈する。埋土は下層に焼土と炭化物を少量含み、上層はラミナの形成が確認できる。

出土遺物から 15 世紀半ば～後半の遺構と考えられる。

SD280（図 29、図版 7）

調査区東側を東西に走る溝である。直線性が強く、方位は W-10° 4′-S 前後を測る。幅 130cm 前後、深さ 60cm 前後を測り、断面形逆台形を呈する。底部レベルは東西方向比高差 20cm 前後で西へ傾斜するが、西端は 260cm 程度の範囲が深さ 30cm ほど土坑状に落ち込む。埋土は最上層（2 層）がブロック土を含むほかはブロック土を含まず、わずかに焼土と炭化物を含む自然堆積層である。ただしラミナ等は確認できず、水流の存在については否定的である。

出土遺物から 15 世紀後半の遺構と考えられる。

SD290（図 30、図版 8）

調査区北側で検出した SD240・260 に取りつく溝である。「U」字状に屈曲する。SD240・260 最上層堆積時には埋没しているが、上層は SD290 埋土と一体化しており、SD240・260 と有機的な関係にあったと考えられる。合流部付近には河原石・瓦・土器が乱雑に投棄されていた。幅 35 ～ 100cm 前後、深さ 10 ～ 20cm 前後を測り、断面形態浅い「U」字形を呈する。底部レベルは南北方向比高差 10cm 前後で北へ傾斜する。埋土は焼土と炭化物を少量含むが、流水の痕跡等は確認できない。

出土遺物から 15 世紀前半の遺構と考えられる。

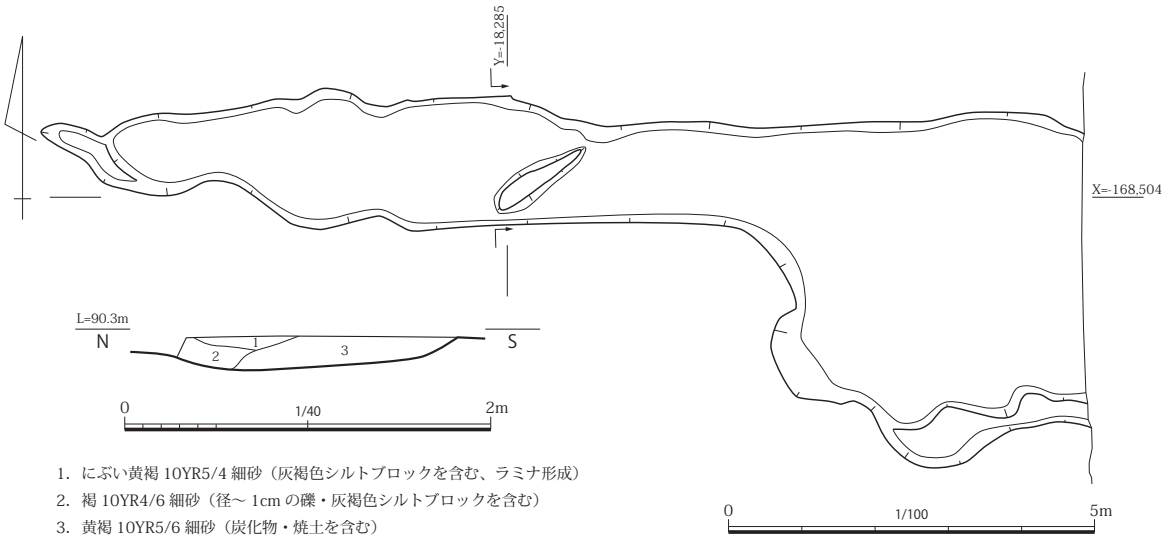


図 28　SD270 平面・土層断面図（平面 S=1/100・断面 S=1/40）

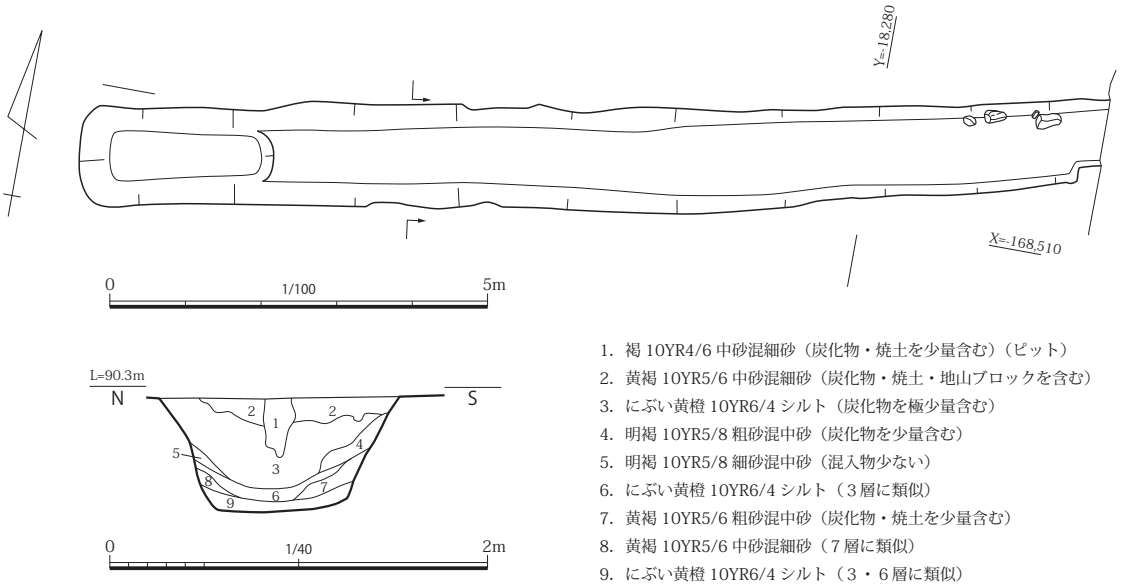


図 29　SD280 平面・土層断面図（平面 S=1/100・断面 S=1/40）

SD320（図 31、図版 8）

調査区南東部を南北に走る溝である。方位は N-14° 42′-W 前後を測る。南端は西へ直角に屈曲するが、攪乱により破壊される。重複関係から SD330 に先行し、落ち込み SX370 に後出すると考えられる。幅 43 ～ 85cm 前後、深さ 20 ～ 30cm 前後を測り、断面形態浅い「U」字形もしくは逆台形を呈する。底部レベルは南北方向比高差 40cm 前後で南へ傾斜する。埋土は焼土と炭化物、ブロック土を大量に含む人為的埋土である。

出土遺物は 14 世紀末～ 15 世紀初頭のものが中心であるが、整地土との関係から 15 世紀後半以降の遺構と考えられる。

SD330（図 31、図版 8）

調査区南東部を南北に走る溝である。方位は N-10° 37′-W 前後を測る。西肩を攪乱により破壊されるため規模等は不明確である。重複関係から SX370、SD320 に後出すると考えられる。底部レベルは

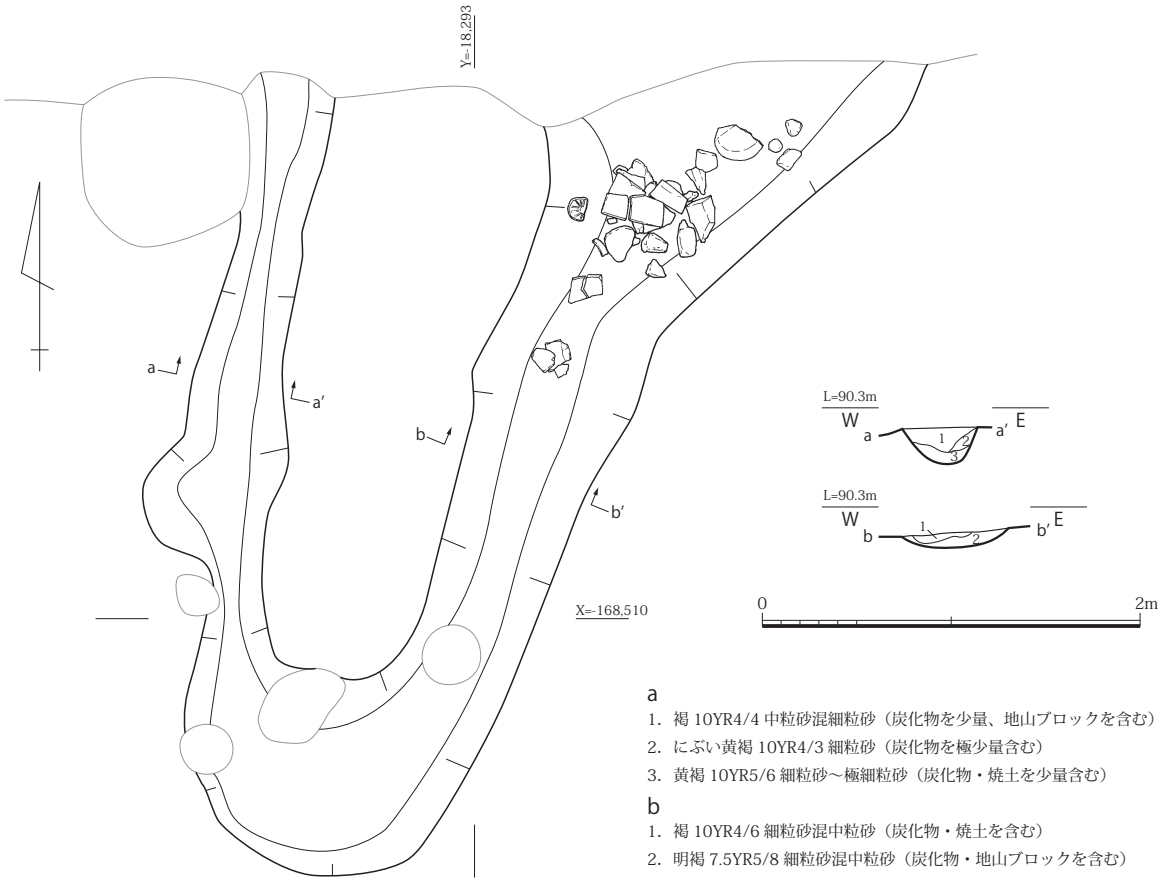
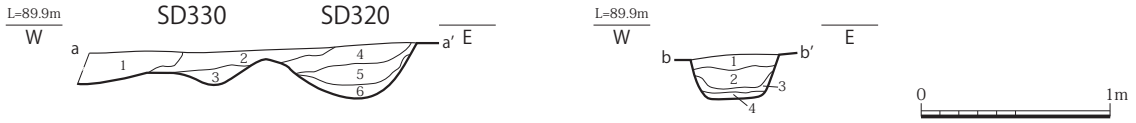


図 30　SD290 平面・土層断面図（S=1/40）



a
1. 黄褐 10YR5/6 細粒砂（炭化物・焼土・地山ブロックを含む）
2. にぶい黄褐 10YR5/4 中粒砂混細粒砂（炭化物・地山ブロックを含む）
3. 黄褐 10YR5/6 中粒砂混細粒砂（灰褐色シルトブロックを少量含む）
4. にぶい黄褐 10YR4/3 細砂（地山ブロックを多く含む）
5. 明褐 7.5YR5/8 中砂混細砂（地山ブロックを主とする）
6. 灰黄褐 10YR4/2 極細砂（炭化物を多量に含み、径～ 10cm の地山ブロックを含む）

b
1. にぶい黄褐 10YR4/3 細砂（地山ブロックを多く含む）
2. 明褐 7.5YR5/8 中砂混細砂（地山ブロックを主とする）
3. 灰黄褐 10YR4/2 極細砂（炭化物を多く含む）
4. にぶい黄褐 10YR5/4 細砂～極細砂（炭化物・地山ブロックを含む）

図 31　SD320・330 土層断面図（S=1/40）

地形傾斜に即して 30cm 程度の比高差を持って南へ傾斜する。

出土遺物から 15 世紀後半に埋没する遺構と考えられる。

SD400（図 32、図版 9）

調査区中央南端を東西に走る溝である。SE190 の手前で南へ屈曲し、調査区外へと続く。方位は W-10° 26′-S 前後を測る。整地層直下で検出しており、整地土上に掘られ、SE190 に先行すると考えられる。幅 130cm 前後、深さ 20cm 前後を測り、断面形態浅い「U」字形を呈する。底部レベルは東西方向比高差 5cm 前後で東へ傾斜する。埋土は最下層（3 層）が混入物の少ない自然堆積層、それ以外はブロック土を含む人為的埋土である。

出土遺物から 15 世紀前半に埋没する遺構と考えられる。

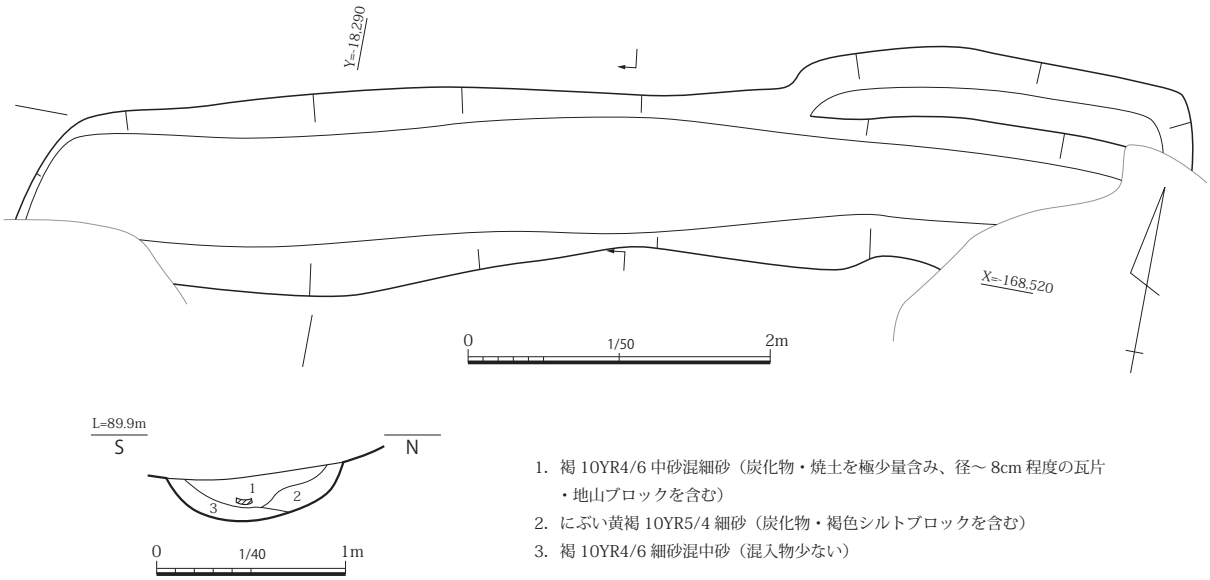


図 32　SD400 平面・土層断面図（平面 S=1/50・断面 S=1/40）

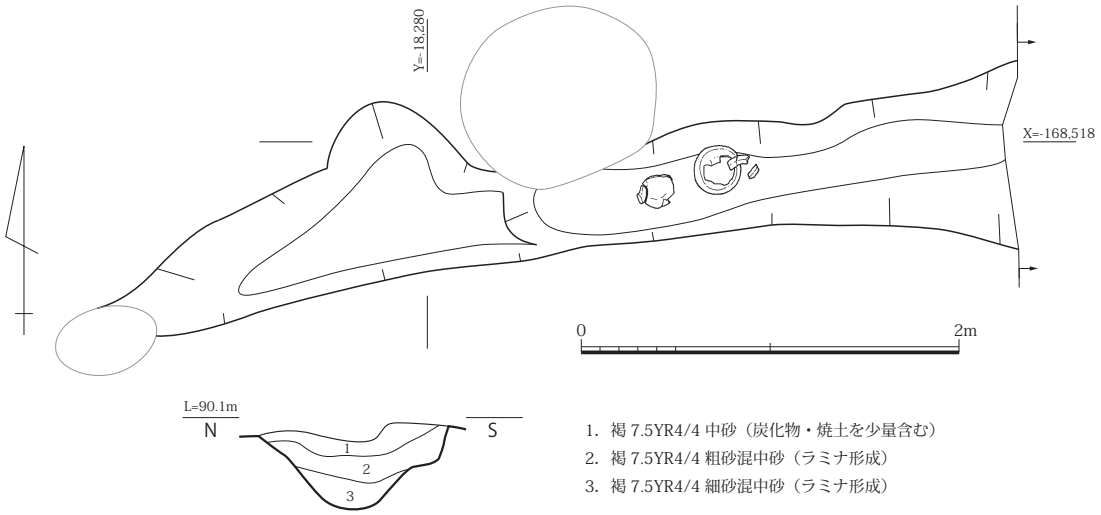


図 33　SD438 平面・土層断面図（S=1/40）

SD438（図 33）

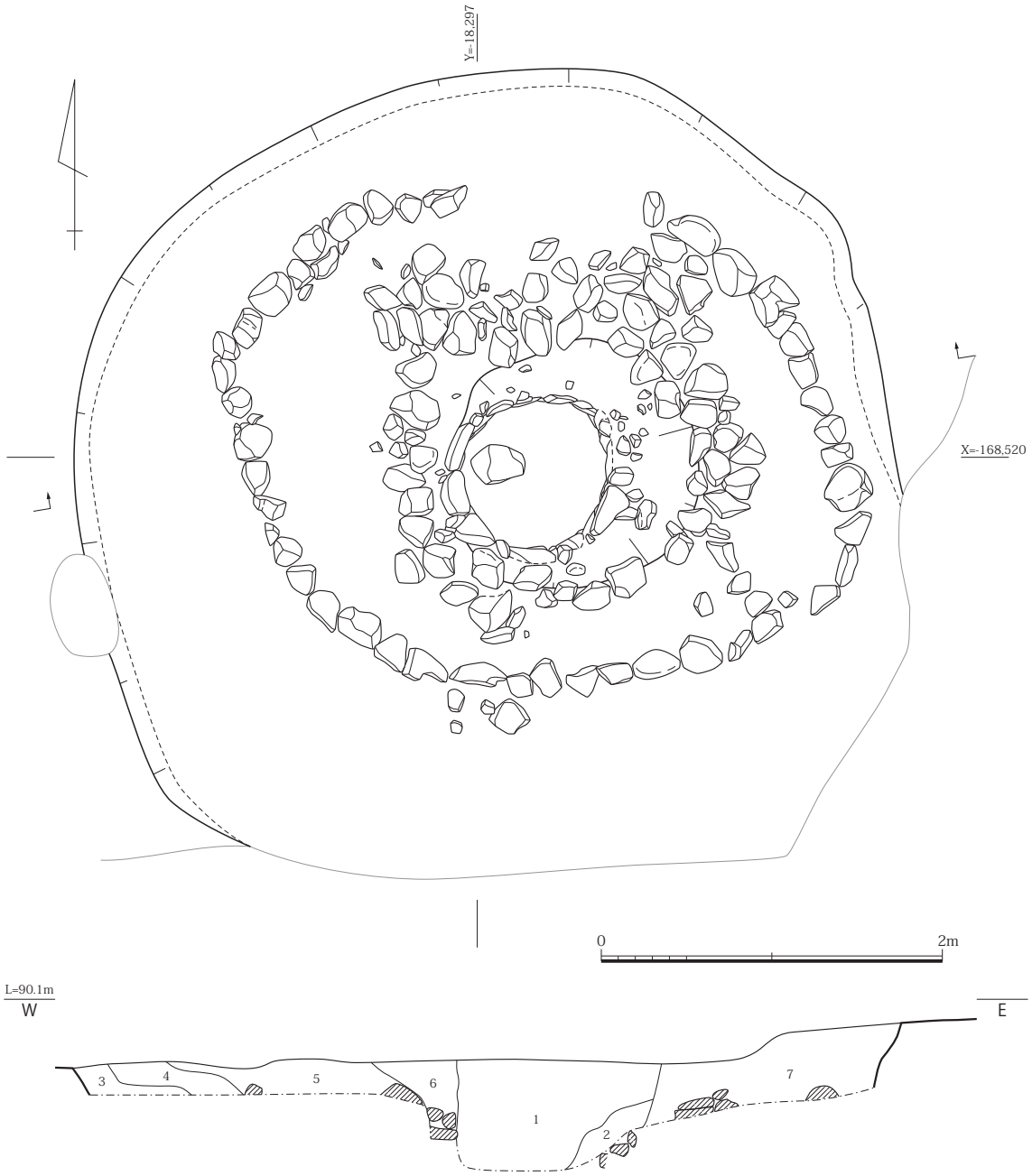
調査区中央東端を南北に走る溝である。西端は SK450 付近で途切れる。重複関係から SD330 に先行すると考えられる。幅 50 ～ 100cm 前後、深さ 20 ～ 40cm 前後を測り、断面形態浅い「U」字形を呈する。底部レベルは起伏が多く、一定でない。埋土は最上層を除きラミナが見られる自然堆積層である。

C- Ⅲ類のほぼ完形の瓦質土器釜が出土していることから、14 世紀後半～ 15 世紀前半の遺構と考えられる。

井戸

SE005（図版 9）

調査区西端 SD001 完掘後に検出した井戸である。直径 260cm、深さ 120cm 以上を測り円形を呈するが、南半は調査区外である。断面観察から井戸枠が存在したと思われるが、残存しない。枠内堆積土の中層（C：南壁 27 層）、廃絶後の埋土（同 21 ～ 23 層）はいずれも焼土と炭化物を含み、火災など



1. 褐 10YR4/6 細砂（炭化物・焼土を含む）
2. 黄褐 10YR5/6 中砂混細砂（炭化物・焼土を含み、地山ブロックを少量含む）
3. にぶい黄褐 10YR5/3 中砂混細砂（炭化物・地山ブロックを含む）
4. 明褐 7.5YR5/8 粗砂混中砂（地山ブロックを含み、赤褐色細砂ブロックを多く含む）
5. にぶい黄褐 10YR5/4 中砂混細砂（炭化物・焼土を含む）
6. 褐 10YR4/4 中砂（径～ 10cm の礫・炭化物を含む）
7. 黄褐 10YR5/8 中砂混細砂（炭化物を極少量含み、地山ブロックを含む）

1～2：枠内　3～7：掘方

図 34　SE190 平面・土層断面図（S=1/40）

に伴い廃絶したことを推定させる。

掘方および抜取出土遺物から 14 世紀半ば～後半の短期間に掘削され埋没した遺構と考えられる。

SE190（図 34、巻頭図版 4、図版 9）

調査区中央南端、整地土上で検出した石組井戸である。重複関係から SD110・210 に先行すると考えられる。井戸枠内径は 80cm と一般的だが、掘方直径は 500cm 程度と異様に巨大である。掘方内に直径 10 ～ 30cm 程度の川原石を二重に取り巻く。内側の石列は内法径 150cm 前後、外側は 300cm 前後をそれぞれ測る。これらはそれぞれ地山ブロックを主体とする人為的埋土で埋められ、井戸枠内埋

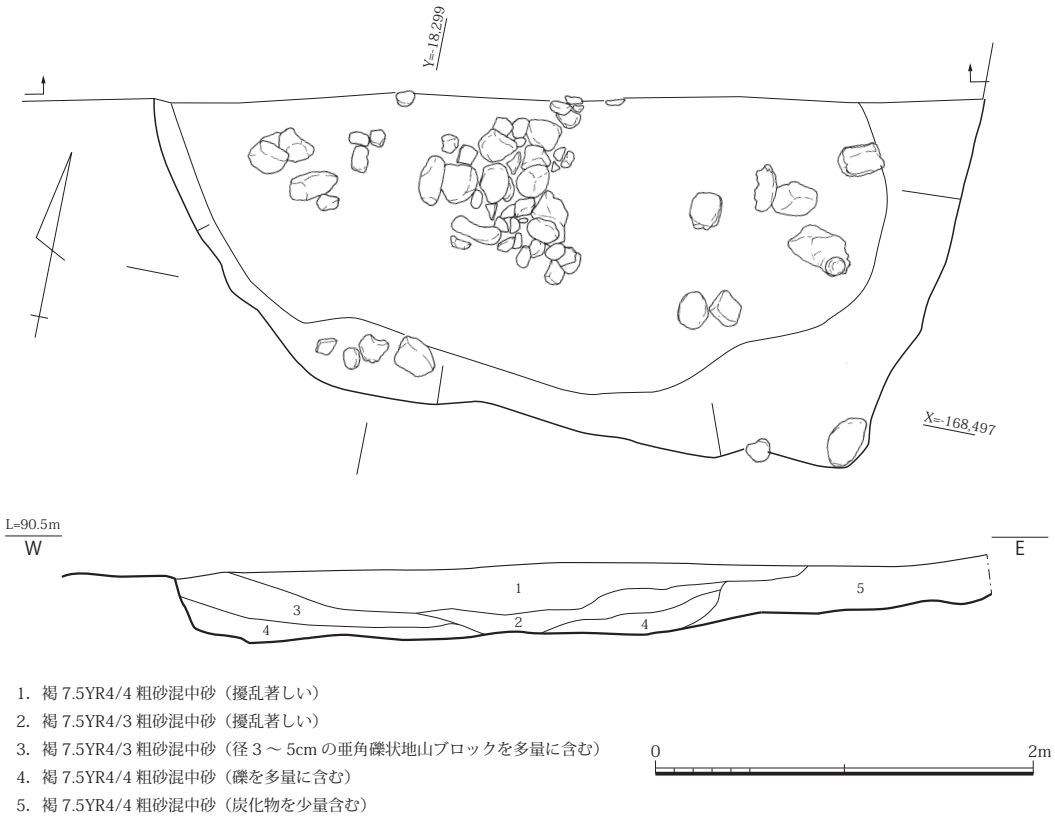


図 35　SK100 平面・土層断面図（S=1/40）

土はこのブロック土を切ることから、掘方の石列は機能時には埋められていたと考えられる。

なお、当遺構は事業者との協議の結果、検出面から 20cm までの掘削に留めたため、現状での判断には限界があることを付記しておく。

掘方および枠内出土遺物から 15 世紀後半の短期間に掘削され埋没したものと考えられる。

土坑

SK100（図 35、図版 10）

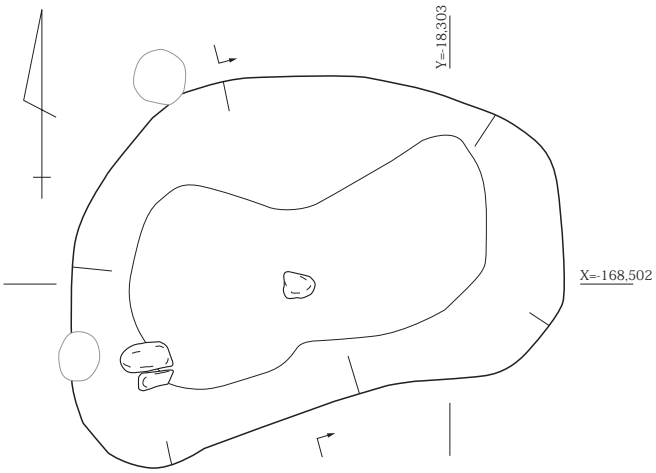
調査区北端で検出した土坑である。重複関係から SD240 に後出すると考えられ、大半が調査区外のため詳細は不明である。検出最大幅 440cm、深さ 40cm 前後を測り、断面形態浅い逆台形を呈し、底部は若干の起伏を持ち西へ傾斜する。埋土は擾乱が著しく初生の堆積構造を確認できないが、下層に多量の礫、中層にブロック土が集中して分布する。埋土下半に径 30cm 程度の礫と土器類が多量に投棄されていたが、これらの配置に規則性は見られない。

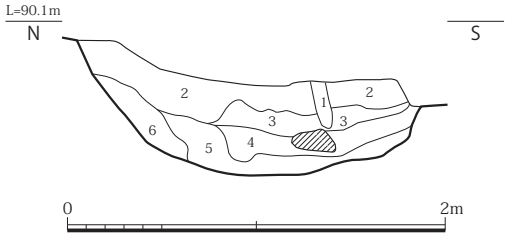
出土遺物から 15 世紀末頃の遺構と考えられる。

SK120（図 36、図版 10）

調査区西部で検出した土坑である。重複関係から SD060・110 に先行すると考えられる。長軸 260cm、短軸 180cm、深さ 70cm 前後を測り、楕円形を呈する。断面形態浅い「U」字形を呈し、埋土は下部（4、5 層）にラミナを形成する自然堆積層、上部にブロック土を含む人為的埋土である。底部中央と西端にそれぞれ径 20 ～ 30cm の円礫が配置されていたが、その機能等は不明である。

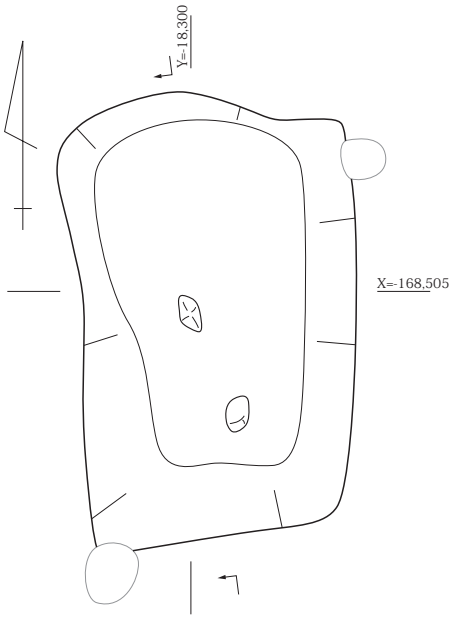
出土遺物から 14 世紀前半の遺構と考えられる。

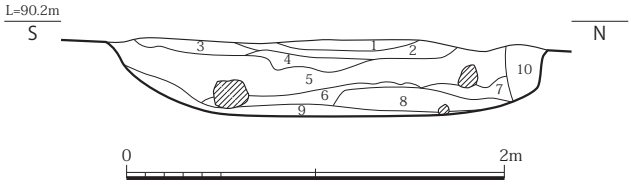




1. にぶい黄褐 10YR5/3 シルト（混入物少ない）（自然堆積）
2. 褐 10YR4/4 中砂（炭化物・焼土・地山ブロックを含む）
3. 黄褐 2.5YR5/2 中砂（炭化物を含み、地山ブロックを主とする）
4. 灰黄褐 10YR4/2 中砂（地山ブロックを含む、ラミナ形成）（自然堆積）
5. にぶい黄褐 10YR5/3 シルト（炭化物・地山ブロックを少量含む、ラミナ形成）（自然堆積）
6. にぶい黄褐 10YR4/3 細砂（不定形の地山ブロックを多く含む）

図 36　SK120 平面・土層断面図（S=1/40）





1. 褐 10YR4/6 中砂混細砂（焼土を含み、炭化物を少量含む）
2. 灰黄褐 10YR6/2 シルト（炭化物を多く含み、細砂ブロックを含む）
3. 黄褐 10YR5/6 中砂混細砂（炭化物・焼土・土器片を含み、地山ブロックを主とする）
4. にぶい黄褐 10YR5/3 中砂混極細砂（3 層に比して混入物やや少ない）
5. 褐 10YR4/4 中砂混細砂（径 10 ～ 15cm の礫・炭化物・焼土・土器片・径～ 2cm の亜角礫状シルトブロックを含む）
6. 灰黄褐 10YR6/2 シルト（混入物少ない）
7. 灰黄褐 10YR5/2 細砂混シルト（シルトブロックを主とする）
8. にぶい黄褐 10YR5/3 細砂（径 10cm 程度の礫・炭化物・焼土・灰褐色シルトブロックを含む）
9. 灰黄褐 10YR6/2 シルト（6 層に比して焼土を含む）
10. にぶい黄褐 10YR5/3 中砂混細砂（地山ブロックを多く含む）

図 37　SK170 平面・土層断面図（S=1/40）

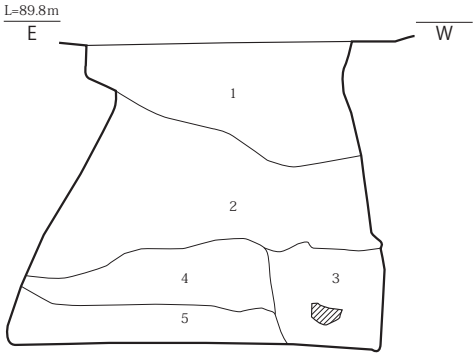
SK170（図 37、図版 10）

調査区北西部で検出した土坑である。重複関係から SD127 に先行すると考えられる。長軸 230cm、短軸 145cm、深さ 40cm 前後を測り、隅丸方形を呈する。断面形態浅い「U」字形を呈し、北側が強く立ち上がる。埋土はいずれも焼土と炭化物、ブロック土を多く含む人為的埋土であり、北端は地山に起因するブロック土を貼り付けたように見える。埋土内に多くの礫が存在したが、意図的に配置したものではなく、含まれる層位も一定でない。底部にピット等は見られない。

出土遺物から 14 世紀初頭ごろの遺構と考えられる。

SK186（図 38、図版 11）

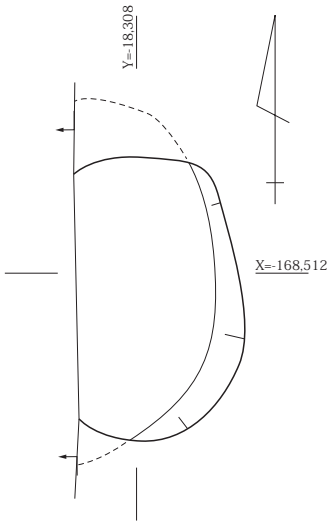
調査区西寄りで検出した土坑である。重複関係から SD110 に先行すると考えられる。深さ 160cm 前後を測り、断面形態は極端に底部で開くフラスコ状を呈する。埋土は地山に起因する亜角礫状ブロック土で充填される。完掘した段階で壁面の崩壊が予測されたため、遺物の出土状況等については写真のみで記録した。底部は平坦だが南半に段差があり、著しく被熱する。また床面には円形浅鉢破片や青磁

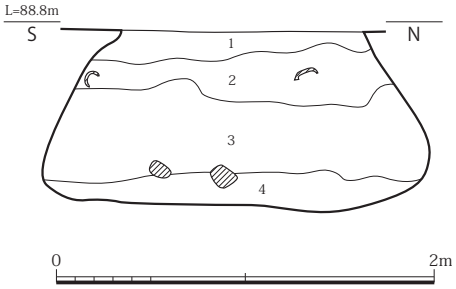


1. 褐 10YR4/4 中砂混細砂（炭化物・焼土・土器片・地山ブロックを含む）
2. 黒褐 10YR3/2 中砂混細砂（炭化物・焼土を少量含み、地山ブロックを多く含む）
3. にぶい黄褐 10YR5/3 細砂（径 15cm 程度の礫・炭化物・焼土・地山ブロック・灰褐色亜角礫状シルトブロックを含む）
4. 黄褐 10YR5/8 中砂混細砂（炭化物・灰褐色シルトブロックを少量含み、地山ブロックを主とする）
5. 黄褐 10YR5/6 中砂混細砂（灰褐色シルトブロックを含み、地山ブロックを主とする）

0　2m

図 38　SK186 土層断面図（S=1/40）





1. 黄褐 10YR5/6 中砂混細砂（焼土・地山ブロックを少量含む）
2. 褐 10YR4/6 細砂（炭化物・焼土・土器片を含み、地山ブロックを多く含む）
3. にぶい黄褐 10YR5/4 細砂～極細砂（炭化物・焼土・土器片を少量含み、径 10cm 程度の礫・地山ブロックを含む）
4. 黄褐 10YR5/8 中砂混細砂（径 10cm 程度の礫・炭化物・地山ブロックを主とする）

図 39　SK222 平面・土層断面図（S=1/40）

椀片、被熱礫などが存在した。遺物の配置に意図的なものは見られないが、被熱礫は床の被熱痕と対応した位置にあり、火所として使用された可能性がある。土採り穴とも考えられるが、被熱痕の説明がつかない。周辺にも類似する土坑が多数あり、中には屋根構造の存在をうかがわせるものもあり、軍事的な施設もしくは工房などの機能が考えられる。

出土遺物から 14 世紀前半の遺構と考えられる。

SK222（図 39）

調査区西端で検出した土坑である。重複関係から SK223 に先行すると考えられる。検出面長軸 148cm、底部長軸 202cm、深さ 92cm 前後を測り、断面形態はフラスコ状で、底部はほぼ平坦である。埋土はいずれも地山ブロックを多量に含む人為的埋土であるが、下半には炭化物や焼土の混入が確認できる。壁面や底部に段差や柱穴は確認できない。

出土遺物から 14 世紀前半の遺構と考えられる。

SK223（図 40、図版 12）

調査区西端で検出した土坑である。重複関係から SK222・228 に後出すると考えられる。長軸 290cm 短軸 120cm、深さ 23cm 前後を測る。断面形態皿形であるが、一部強く立ち上がり、底部は北東部を一段掘り下げる。埋土はいずれも地山ブロックを多量に含む人為的埋土で、炭化物や焼土の混入が確認できる。壁面や底部に柱穴は確認できない。

出土遺物から 15 世紀末ごろの遺構と考えられる。

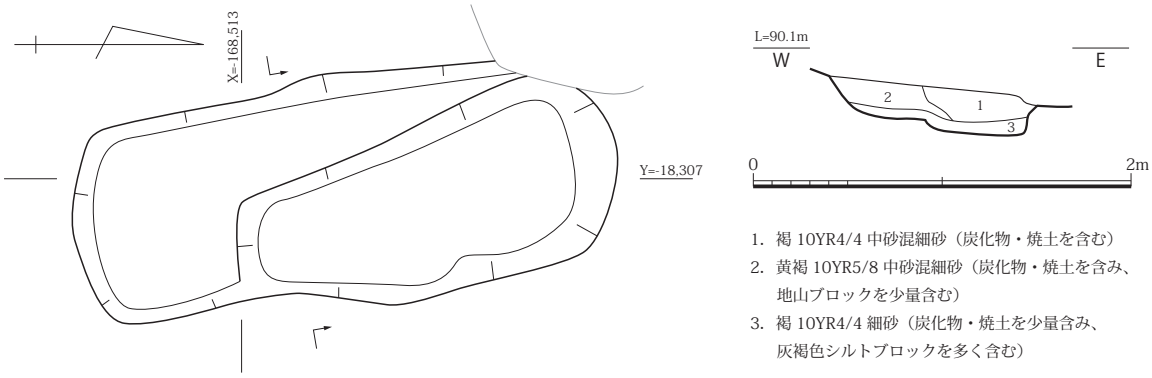


図 40　SK223 平面・土層断面図（S=1/40）

SK227（図 41、図版 12）

調査区西部で検出した土坑である。重複関係から SD110・200 に先行すると考えられる。長軸 420cm 以上、短軸 400cm 前後を測り、方形を呈し、西端は近世の溝に破壊される。断面形態浅い箱形を呈し、底部はほぼ平坦であるが、東端に少し段を持つ。埋土はいずれも地山ブロックを含む人為的埋土であるが、炭化物や焼土の混入が確認できる。壁面や底部に柱穴は確認できない。

出土遺物から 14 世紀前半の遺構と考えられる。

SK228（図 42、図版 13）

調査区西端で検出した土坑である。重複関係から SK223 に先行すると考えられる。直径 118cm 前後、深さ 60cm 前後を測り、円形を呈する。断面形態はややフラスコ状で、底部はほぼ平坦である。埋土はいずれも地山ブロックを多量に含む人為的埋土であるが、炭化物や焼土の混入が確認できる。壁面や底部に段差や柱穴は確認できない。

SK254（図 43）

調査区中央西寄りで検出した土坑である。重複関係から SK228 に後出すると考えられる。長軸 60cm、短軸 48cm、深さ 13cm 前後を測る。断面形態浅い「U」字形を呈し、埋土はいずれも地山ブロックを含む人為的埋土である。埋土内より瓦器椀が重ねた状態で出土した。

出土遺物から 13 世紀末の遺構と考えられる。

SK331（図 44）

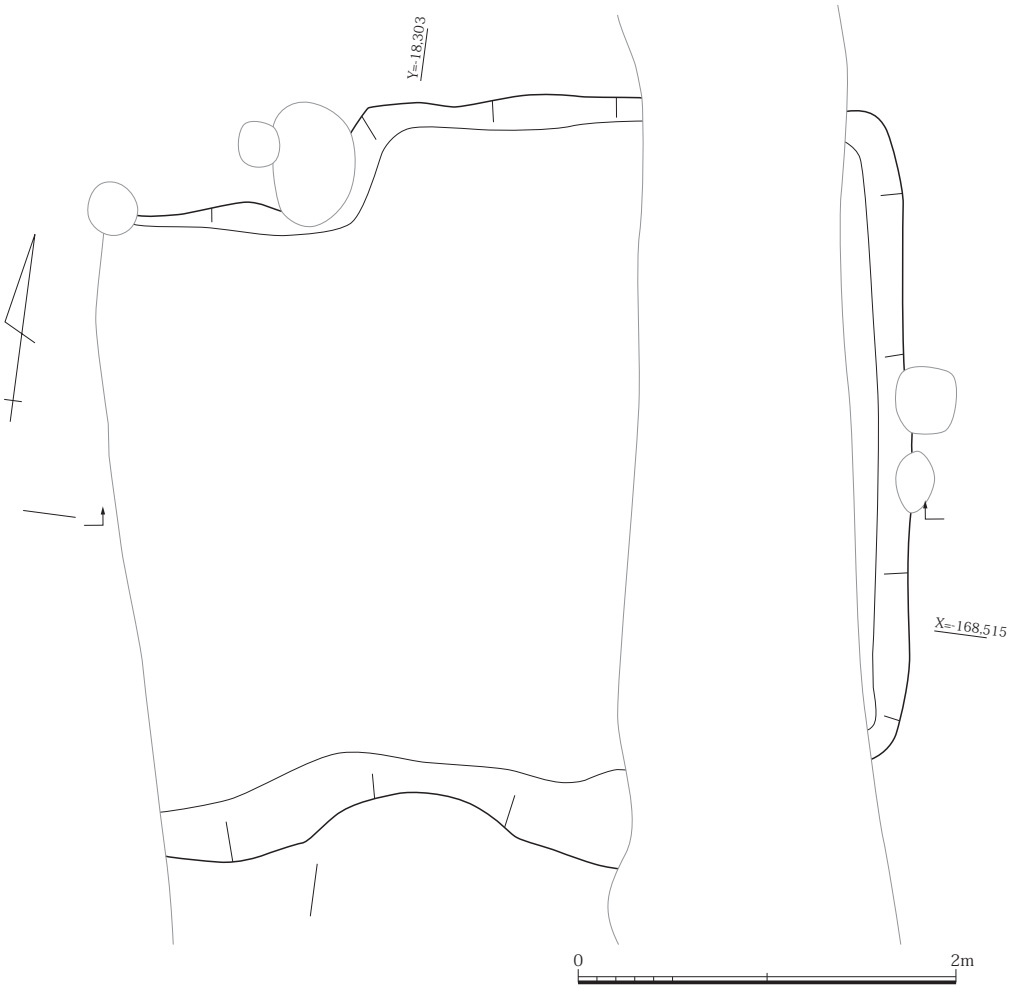
調査区西端で検出した土坑である。重複関係から SK223 に先行すると考えられる。検出面長軸 170cm 前後を測り、円形を呈すると考えられるが、他遺構による破壊のため詳細は不明である。断面形態はフラスコ状で、底部はほぼ平坦である。埋土はいずれも地山ブロックを多量に含む人為的埋土であるが、炭化物や焼土の混入が確認できる。壁面や底部に段差や柱穴は確認できない。

出土遺物から 14 世紀前半の遺構と考えられる。

SK332（図 45、巻頭図版 4、図版 13・14）

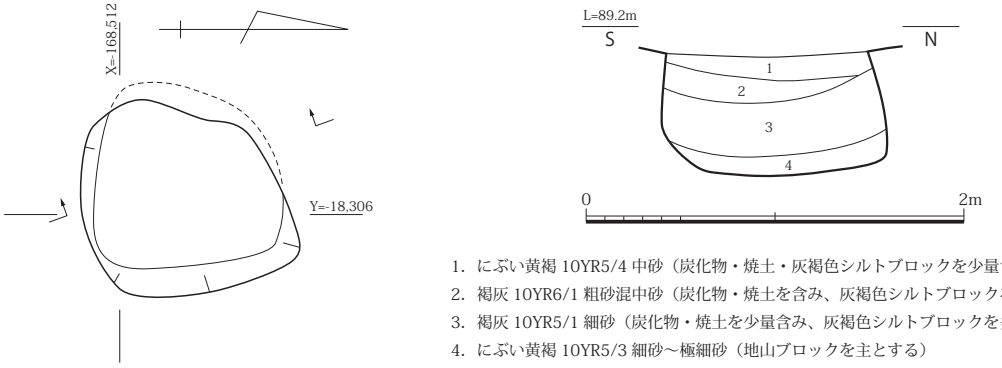
調査区西端で検出した土坑である。検出面長軸 240cm、短軸 185cm、底部長軸 275cm、深さ 154cm 前後を測る。断面形態はフラスコ状で、底部には一段の段差を作り出すほか、方形掘方を持つ柱穴、円形柱穴がそれぞれ一つずつ存在する。壁面には底部から 60cm 程度の位置に、約 70cm 間隔で直径 5cm ほどの杭が打ち込まれた痕跡が確認できる。杭は斜めに打ち込まれており、屋根などの存在が想定できる。埋土はいずれも地山ブロックを多量に含む人為的埋土であるが、炭化物や焼土の混入が確認できる。形状からは一見土採り穴に見えるが、壁面の杭跡を含め検討が必要である。

出土遺物から 14 世紀前半の遺構と考えられる。



1. 黄褐 10YR5/6 中砂（地山ブロックを少量含む）
2. 褐 10YR4/4 細砂（炭化物・地山ブロックを多く含む）
3. 褐 10YR4/4 極細砂（炭化物・地山ブロックを含む）
4. 褐 10YR4/6 細砂（混入物少ない）
5. 褐 10YR4/4 細砂（炭化物・地山ブロックを少量含む）
6. 褐 10YR4/4 細砂（地山ブロックを含む）
7. 黄褐 10YR5/6 中砂（炭化物・地山ブロックを含む）
8. 褐 7.5YR4/4 中砂（地山ブロックを主とする）
9. 褐 7.5YR4/4 中砂（地山ブロックを含む）
10. 褐 10YR4/4 細砂（炭化物を少量含む）

図 41　SK227 平面・土層断面図（S=1/40）



1. にぶい黄褐 10YR5/4 中砂（炭化物・焼土・灰褐色シルトブロックを少量含む）
2. 褐灰 10YR6/1 粗砂混中砂（炭化物・焼土を含み、灰褐色シルトブロックを少量含む）
3. 褐灰 10YR5/1 細砂（炭化物・焼土を少量含み、灰褐色シルトブロックを多く含む）
4. にぶい黄褐 10YR5/3 細砂～極細砂（地山ブロックを主とする）

図 42　SK228 平面・土層断面図（S=1/40）

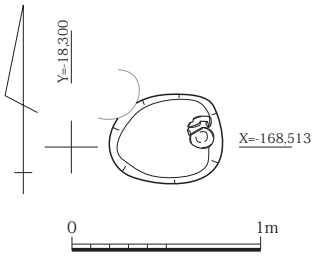
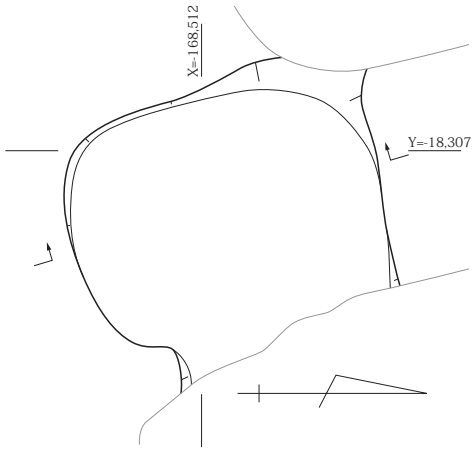
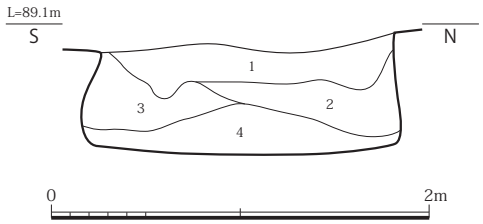


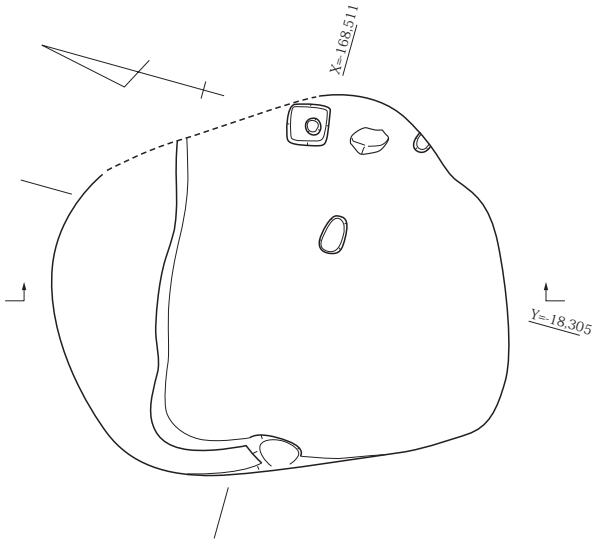
図 43　SK254 平面図（S=1/40）

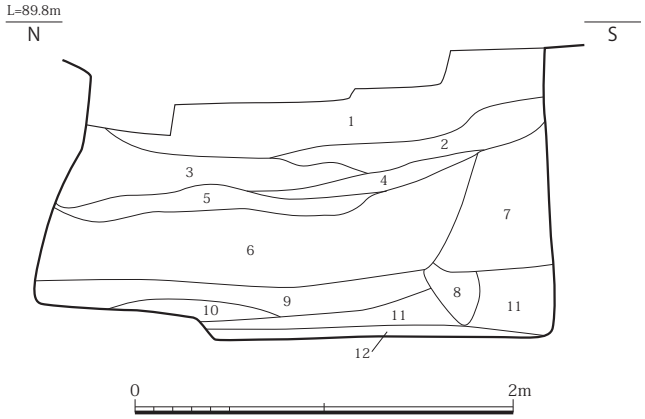


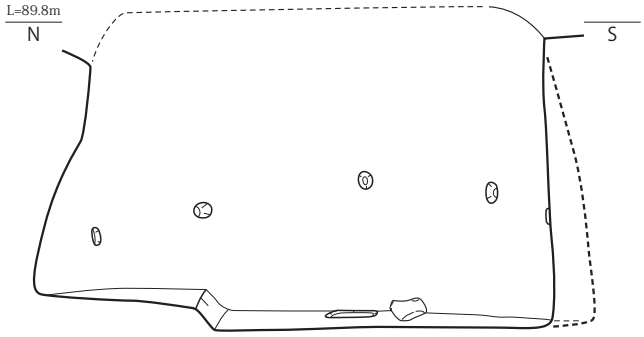


1. 褐 10YR4/4 中砂混細砂（炭化物・土器片を少量含み、地山ブロックを多量に含む）
2. にぶい黄褐 10YR5/4 細砂～極細砂（炭化物・焼土・地山ブロックを少量含む）
3. にぶい黄褐 10YR4/3 細砂混中砂（明赤褐細砂ブロックを多く含む）
4. 褐 10YR4/4 中砂混細砂（焼土塊・炭化物を多く含み、地山ブロック・明赤褐細砂ブロックを含む）

図 44　SK331 平面・土層断面図（S=1/40）







1. 褐 10YR4/4 中砂混細砂（炭化物・焼土を極少量含み、赤褐色細砂ブロックを多く含む）
2. 褐 10YR4/6 細砂（炭化物を少量含み、地山ブロックを含む）
3. 黄褐 10YR5/8 中砂混細砂（炭化物・焼土・土器片・地山ブロックを少量含む）
4. 灰黄褐 10YR4/2 中砂混細砂（灰褐色シルトブロックを少量含む）
5. 黄褐 10YR5/8 細砂（炭化物を少量含み、地山ブロックを多く含む）
6. 褐灰 10YR5/1 細砂（炭化物・焼土・土器片・地山ブロックを含み、灰褐色シルトブロックを多く含む）
7. にぶい黄褐 10YR5/3 中砂混細砂（炭化物・焼土を含み、地山ブロックを多量に含む）
8. にぶい黄褐 10YR5/4 細砂混極細砂（灰褐色シルトブロックを多く含む）
9. 灰黄褐 10YR4/2 細砂～極細砂（炭化物・地山ブロック・赤褐色シルトブロックを含む）
10. 黒褐 10YR3/1 細砂（炭化物を多く含む）
11. 明黄褐 10YR6/8 細砂混極細砂～シルト（地山ブロックを主とする）
12. にぶい黄褐 10YR4/3 細砂（炭化物を含み、褐色シルトブロックを多く含む）

図 45　SK332 平面・立面・土層断面図（S=1/40）

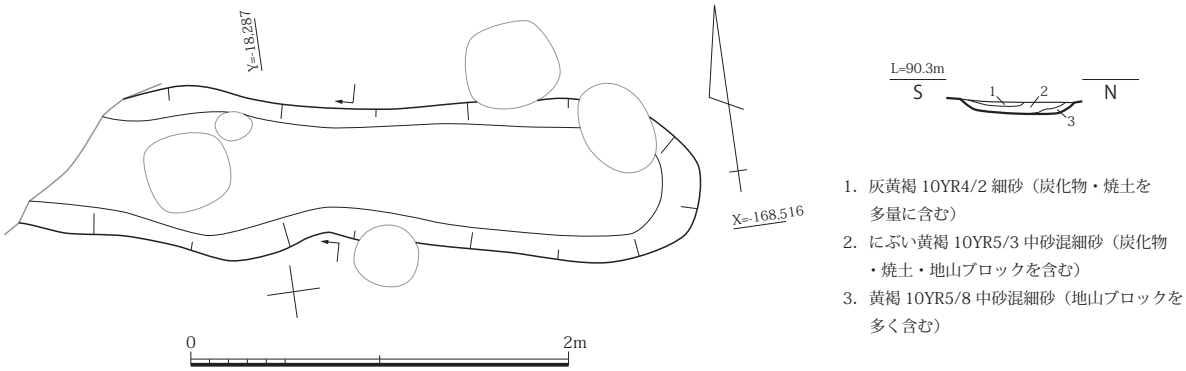


図 46　SK397 平面・土層断面図（S=1/40）

SK397（図 46）

調査区中央東寄りで検出した土坑である。重複関係から SD210 に先行すると考えられる。長軸 350cm 以上、短軸 70cm、深さ 5cm 前後を測る。断面形態浅い皿形を呈し、埋土は焼土と炭化物を大量に含む人為的埋土である。

SK450（図 47、図版 14）

調査区中央南寄り整地土直下で検出した土坑である。重複関係から SD400 に先行すると考えられる。長軸 340cm 前後、短軸 270cm 前後、深さ 100cm 前後を測り、楕円形を呈し、断面形態「U」字形を呈する。埋土は最下層（9、10）にわずかに混入物の少ない自然堆積層が確認できるが、それ以外はいずれも地山ブロックを含む人為的埋土である。掘削後短期間開口していた後、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物から 15 世紀前半の遺構と考えられる。

そのほかの遺構

SX370（図版 14）

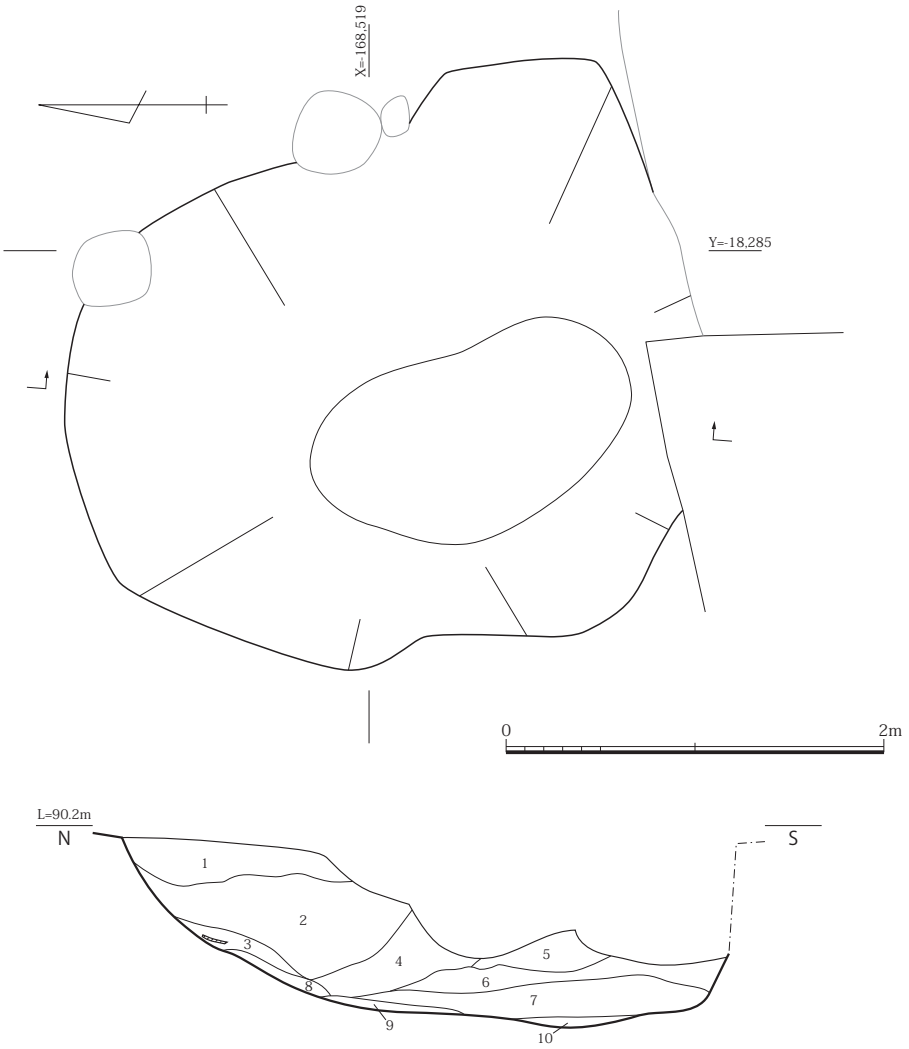
調査区南端に存在した落ち込みもしくは堀である。南端の整地土上から掘削されている。大半が調査区外であるが、検出幅 11.4 mを測る。事業者との協議により掘削することができなかったため、緩斜面を埋め立てて平場を造り出した痕跡か、大溝が埋め立てられた後に南半が削られたのか判断はできない。上記の理由から正確な深さについても不明であるが、部分的に断ち割りを入れたところ、深さ 90cm 前後であることが確認できた。

最上層からは 14 世紀前半の遺物が出土している。SX370 に後出する SD320 の年代が 14 世紀末～15 世紀初頭であることなどから、14 世紀代のうちに完全埋没すると考えられる。最上層以下の層からは 13 世紀後半ごろの遺物が出土しており、遺構の形成年代は 13 世紀代に遡る可能性が高い。

SX380（図 48）

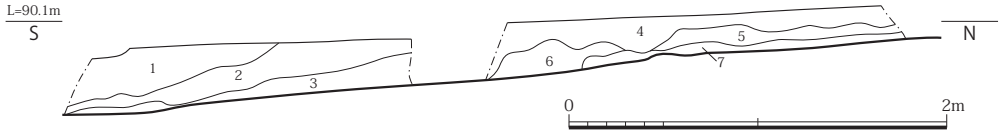
調査区南半に敷かれる整地土である。厚さ平均 30cm 前後を測り、ベースである黄灰色シルトと花崗岩風化土を混合したもので構成される。SD210、SE190 に先行し、SD400、SK450 に後出する。SD210 以南を平坦化する目的で、SD210、SE190 と同時に敷設された可能性が高い。

出土遺物から、15 世紀後半頃の整地層と考えられる。



1. 黄褐 10YR5/6 細砂（炭化物・焼土を少量、地山ブロックを多く含み、径～ 7cm の礫・灰褐色シルトブロックを含む）
2. 褐 10YR4/4 細砂（径～ 7cm の礫を含み、地山ブロックを主とする）
3. 褐 7.5YR4/6 中砂混細砂（炭化物・土器片・灰褐色シルトブロックを含む）
4. 黄褐 10YR5/6 細砂（炭化物を含み、地山ブロックを多く含む）
5. にぶい黄褐 10YR5/4 細砂（炭化物・地山ブロックを含み、灰褐色シルトブロックを多く含む）
6. 明褐 7.5YR5/8 細砂混極細砂（灰褐色シルトブロックを含み、地山ブロックを主とする）
7. 黄褐 10YR5/6 中砂混細砂～極細砂（径～ 3cm の礫・炭化物・地山ブロックを含む）
8. にぶい黄褐 10YR5/4 中砂混細砂（炭化物・地山ブロックを少量含み、灰褐色シルトブロックを含む）
9. 明黄褐 10YR6/6 極細砂混シルト（混入物少ない）
10. にぶい黄橙 10YR6/4 極細砂（混入物少ない）

図 47　SK450 平面・土層断面図（S=1/40）



1. 黄褐 10YR5/6 中砂混細砂(炭化物･土器片を少量含み､地山ブロックを含む)
2. 褐 10YR4/6 細砂（炭化物を少量含み、地山ブロックを多く含む）
3. 褐 10YR4/4 中砂混細砂（地山ブロック・灰褐色シルトブロックを含む）
4. 黄褐 10YR5/6 細砂（炭化物・焼土・地山ブロックを含む）
5. にぶい黄褐 10YR5/4 中砂混細砂（炭化物・地山ブロック・灰褐色シルトブロックを少量含む）
6. にぶい黄褐 10YR5/3 中砂混細砂（炭化物を少量含み、地山ブロックを多く含む）
7. 黄褐 10YR5/8 細砂混中砂（灰褐色シルトブロックを多く含む）

図 48　SX380 土層断面図（S=1/40）

第２項　出土遺物

SA490 出土遺物（図 49、図版 18）

土師器皿　**65** は橙褐色の胎土を持ち、ユビオサエの後、口縁部をナデ調整する。内面の広い範囲に煤が付着する。

瓦器椀　**66** は無高台で口縁端部に沈線を有する。外面オサエ調整の後、内面および口縁部をナデ調整する。内面には 9 回転以上の圏線ミガキを施す。Ⅳ段階 B 型式のものである。

　これらの遺物はいずれも SA490d から出土したものである。

SB360 出土遺物（図 49）

土師器皿（67・68）　**67** は橙褐色のもので、へそ皿の形状が想定できる。表面劣化のため内外面調整は不明である。**68** は淡褐色のもので、ユビオサエの後内面および口縁部外面をナデ調整する。口縁端部は小さく上方へ引き出し、面を持つ。

土師器鍋　**69** は外面ナデ調整、内面下半をユビオサエ、上半を工具によるオサエ調整の後、一部を板状工具によってナデ調整する。内面上半にはこの際の工具を連続して上方へ引き上げた痕跡が残る。

土師器釜　**70** は強く外反する口縁を持ち、口縁端部を強く折り返す。外面縦方向のハケ調整の後、ナデ調整、内面工具によるオサエ調整を施す。

　これらの遺物はいずれも SB360j から出土したものである。

SB480 出土遺物（図 49、図版 18）

土師器皿　**71** は白土器系の皿である。ユビオサエの後、外面下半までナデ調整する。

瓦質土器擂鉢　**72** は口縁部内面に緩やかな面を持つ。二次焼成のため調整等は不明である。C 型式のものである。

火打石　**73** はサヌカイト製の火打石である。自然面を持つ剥片素材を使用し、使用痕は下端の一部のみに残る。重量は 14.5 g である。

SD001 出土遺物（図 50、図版 19）

【褐色砂出土遺物】

土師器釜　**74** は I_2 型Ⅰ -2 型式のものである。口縁部はナデにより面を持つ。小片のため詳細は不明である。

【にぶい黄褐砂出土遺物】

土師器釜　**75** は I_2 型Ⅰ -2 型式のものである。内外面ナデ調整を行い、口縁部は直立気味に成形する。

瓦質土器擂鉢　**76** は外面掌圧痕を持ち、内面および口縁部外面をナデ調整する。二次焼成を受ける。C 型式のものである。

【灰黄褐砂出土遺物】

瓦質土器擂鉢　**78** は外面縦方向のハケ調整の後、内面および口縁部外面をナデ調整する。口縁端部はナデによりわずかに外反させる。D 型式のものである。

輸入磁器青磁皿　**77** は口縁部を外反させる肉厚の皿である。灰色の胎土を持ち、釉には貫入が見られる。龍泉窯産のものと考えられる。

【赤褐砂出土遺物】

瓦質土器擂鉢（79・80）　**79** は外面ナデ調整を施すが、内面表面劣化のため調整不明である。口縁部を比較的強く外反させる。E 型式のものである。**80** は小型擂鉢である。外面ユビオサエ、内面ナデ調

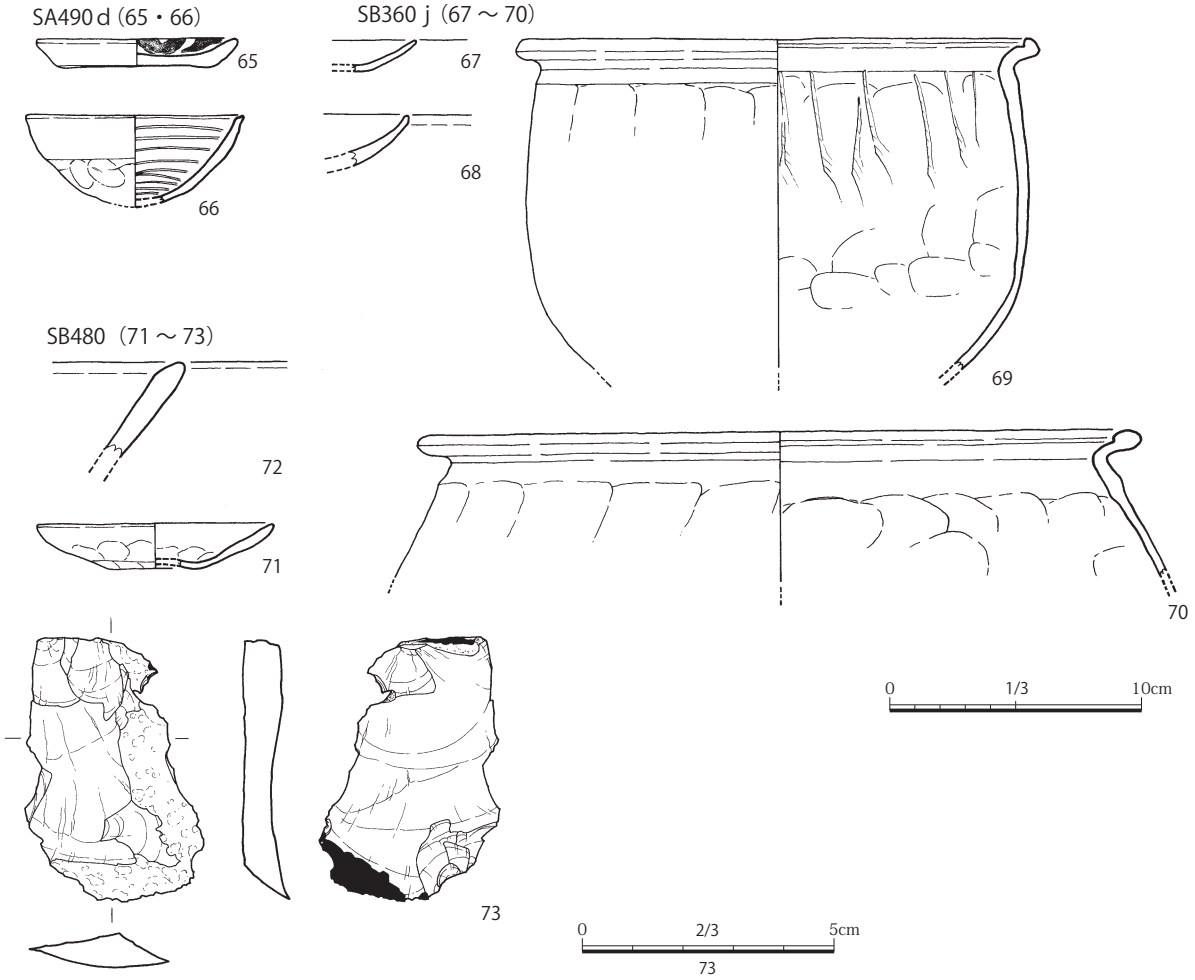


図 49　SA490・SB360・480 出土遺物実測図（S=1/3・2/3）

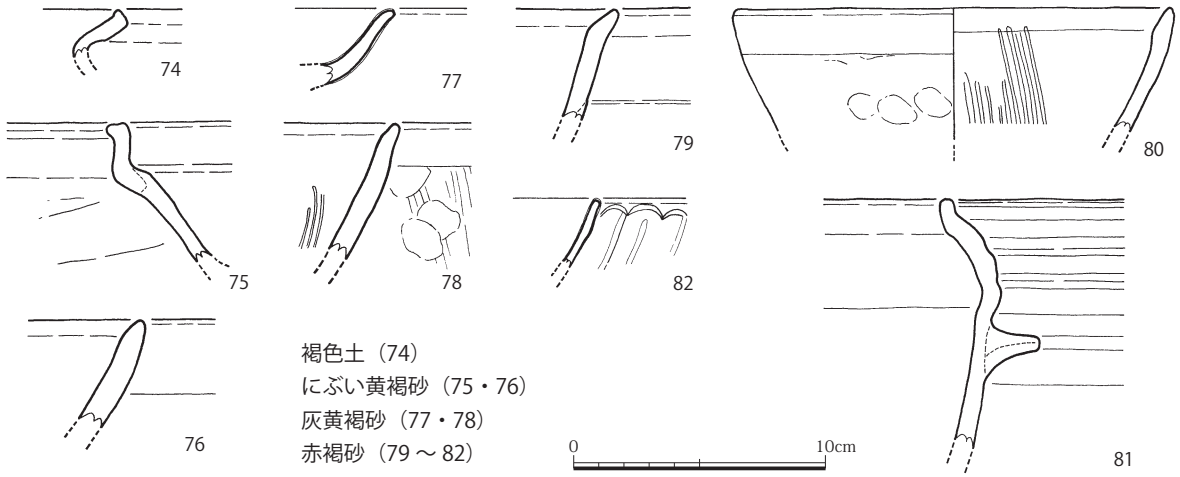


図 50　SD001 出土遺物実測図（S=1/3）

整を施し、擂目は 6 条一単位のものを口縁部付近まで施す。

瓦質土器釜　81 は内外面ナデ調整の後、口縁部外面に 3 条の太い凹線を引く。

輸入磁器青磁椀　82 は龍泉窯である。外面に細蓮弁をヘラ描きする。弁端の表現は縦線と独立して描かれるが、粗く弧状線を連続させるため、弁幅と対応していない。内面に傷が多数見られるが、使用痕かどうかは断定できない。

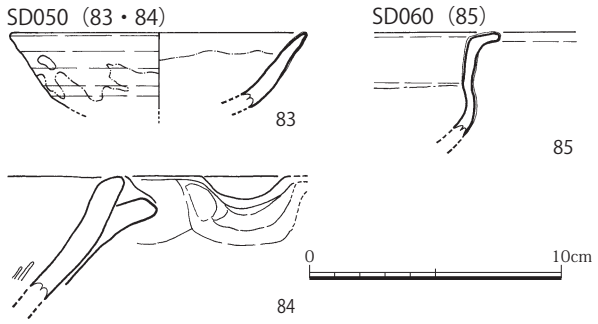


図 51　SD050・060 出土遺物実測図（S=1/3）

SD050 出土遺物（図 51、図版 19）

国産施釉陶器小鉢　83 は古瀬戸である。内外面回転ナデ調整の後、口縁部に釉薬を漬け掛けする。古瀬戸後Ⅰ期のものである。

瓦質土器擂鉢　84 は片口部分の破片である。内外面ナデ調整を施す。B 型式のものである。

SD060 出土遺物（図 51、図版 19）

国産磁器白磁香炉　85 は袴腰の香炉である。釉は透明感があり精良である。近世初頭の肥前産と考えられる。

SD110 出土遺物（図 52、図版 19・20）

土師器皿　86 は淡褐色の胎土を有し、底体部境界の屈曲が強い。内外面劣化のため調整等は不明である。

土師器釜（87 ～ 89）　87 は大和Ｈ型のものである。内面板状工具によるナデ調整、外面ナデ調整を施す。88・89 は大和 I_2 型Ⅱ -1 型式のものである。口縁端部はいずれも小さく折り返し、面を形成する。88 は淡橙褐色の胎土を有し、内面オサエの後ナデ調整、外面ナデ調整を施す。89 は表面淡褐色、断面内部黒色を呈する。表面劣化のため調整等は不明である。

瓦質土器釜　90 は内外面ナデ調整を施す。全体的に二次焼成を受けるため、イブシや焼成については詳らかでない。

瓦質土器擂鉢（91・92）　91 は内面ナデ調整、外面縦方向のハケ調整の後、口縁部外面を横方向にハケ調整、その後口縁部をナデ調整する。擂目は 6 条一単位が確認できる。E 型式のものである。92 は表面劣化のため調整等は不明瞭だが、外面には掌圧痕が多数残る。擂目は 8 条一単位が確認できる。F 型式のものである。

国産焼締陶器甕　93 は信楽焼である。胎土内に長石を多く含み、暗赤褐色に焼き上がる。2 期古～中段階のものである。

輸入磁器染付椀　94 は灰色の胎土を持ち、高台接地部は無釉である。外面下半には芭蕉文を手描きする。C 群のものである。

平瓦　95 は凸面格子タタキ、凹面布目ナデ消し痕を有する。端面はヘラケズリ後ナデ調整する。凸面には炭化物が付着する。

軒丸瓦　96 は巴文軒丸瓦である。中心には浮文を持ち、巴がネガとなる。胎土内に大量の長石を含む。平安時代のものである。

火打石　97 はサヌカイト製で、一部に自然面を有する。側面全周に敲打痕を有する。重量は 50.8 g を測る。

SD210 出土遺物（図 53、図版 20）

土師器皿（98・99）　98 は雲母を多く含む暗褐色の胎土を有し、ユビオサエの後内面および口縁部外面のみナデ調整を施す。99 は橙褐色の胎土を有し、内面および口縁部外面上端のみナデ調整を施す。

瓦質土器擂鉢　100 は内面横方向のハケ調整、外面縦方向のハケ調整をナデ消す。D 型式のものである。

輸入磁器青磁椀　101 は灰色の胎土を持ち、外面にヘラ描き細蓮弁、内面花文を描く。破断面には漆の付着が確認できることから、漆継ぎを行っていたものと考えられる。内底面にはドーナツ状に使用痕と考えられる擦痕が観察できる。

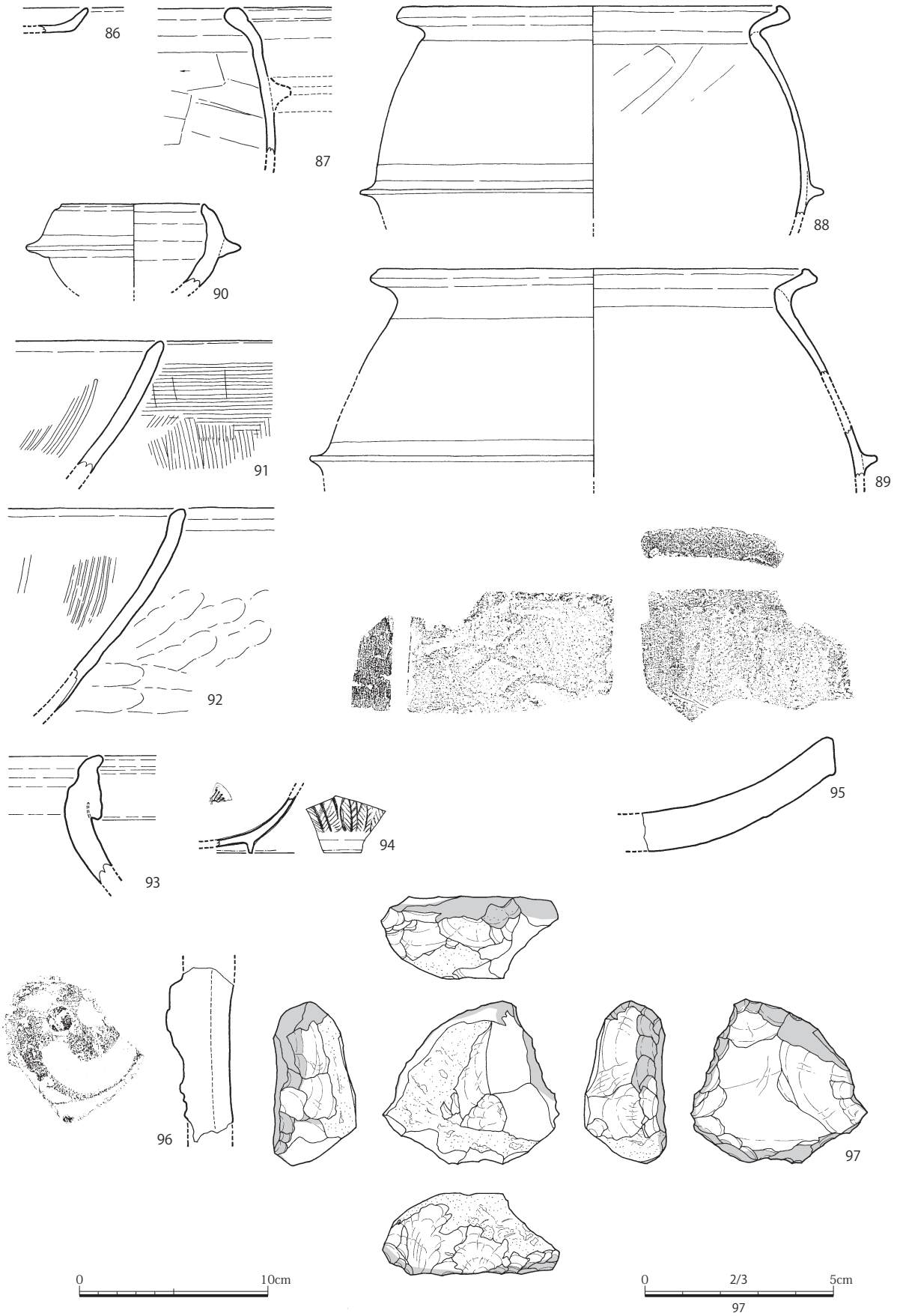


図 52　SD110 出土遺物実測図（S=1/3・2/3）

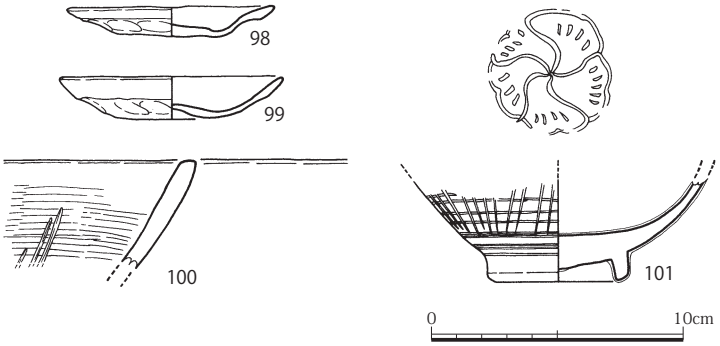


図 53　SD210 出土遺物実測図（S=1/3）

SD240 出土遺物

（図 54 ～ 58、図版 20 ～ 23）

【暗褐土出土遺物】

古式土師器甕　**103** はいわゆる「S」字状口縁甕である。このタイプの甕は通常外面ハケ調整を行うが、本資料はタタキ調整と思われる。

土師器釜　**102** は大和Ｈ型のものである。鍔は広い。内面オサエの後ナデ調整、外面ナデ調整を施す。

瓦質土器擂鉢（104・105）　**104** は内面および口縁部外面ナデ調整を施し、外面には掌圧痕が確認できる。擂目は７条一単位である。E 型式のものである。**105** は内面ナデ調整、外面横方向のハケ調整の後、口縁部外面をナデ消す。F 期のものである。

【灰褐土出土遺物】

瓦器椀（106・111）　**106** は半球形の体部を持ち、ヘラミガキ、口縁端部沈線、高台を持たない。Ⅳ段階 C 型式のものである。**111** は異形瓦器である。緩やかに外反する体部を持ち、ヘラミガキ、口縁端部沈線、高台を持たない。内外面ユビオサエの後、口縁部にナデ調整を施す。イブシ、焼成ともに良好である。

土師器皿（107 ～ 110、112 ～ 116）　口径 7cm 代の小皿（**109・110、112 ～ 116**）と、口径９～ 10cm 代の中皿（**107・108**）がある。いずれもユビオサエ成形の後、口縁部のみナデ調整する。**108** が雲母を多く含む暗褐色の胎土、**107・113** が大粒の長石を多量に含む橙褐色の胎土、それ以外は混入物の少ない橙褐色の胎土を有する。

土師器鍋　**117** は水平に外反する口縁を有し、内外面オサエ調整の後ナデ調整で仕上げる。胎土は土師器釜との類似が強い。

土師器釜（118 ～ 121・124）　**118** は大和 I_2 型のものである。口縁部「く」字状に強く開き、端部を内側へ折り返す。表面淡褐色、断面内部黒色を呈する。Ⅰ -1 形式のものである。**119 ～ 121・124** は大和Ｈ型のものである。内面オサエ調整、外面ナデ調整を施す。**119** は外面に煤が大量に付着する。**121** は口縁端部は内傾した後、口縁部を短く外に折り返す。

土師器鉢（122・123）　**122** は内面ナデ調整、外面ナデ調整の後、下半を手持ちヘラケズリする。内面の一部に被熱痕が見られ、香炉としての使用が考えられる。**123** はいわゆる手焙形土器の形状を有する。内外面ナデ調整を施し、口縁部の一部に被熱痕が見られる。

瓦質土器甕（125・126）　いずれも短く折り返して、端部を丸く収める口縁部を有する。内面ナデ調整、外面細いタタキ成形を行う。胎土は灰褐色でイブシは比較的良好である。Ⅱ -2 類のものである。

瓦質土器釜　**127** は内面ハケ調整の後、板状工具によるナデ調整、外面上半を短いピッチの横方向ヘラケズリの後、下半を縦方向にヘラケズリする。C Ⅲ類のものである。

瓦質土器擂鉢（128・130）　**128** は内面横方向のハケ調整の後ナデ調整、外面ハケ調整の後、縦方向のヘラケズリを行う。擂目は 12 条一単位である。A Ⅰ -2 類のものである。**130** は外面ハケ調整の後、掌でオサエ調整を施す。擂目は７条一単位のものを口縁部付近まで施す。B 型式のものである。

瓦質土器鍋　**129** は内面ナデ調整の後、横方向のヘラミガキ、外面ユビオサエ調整の後、外底面を手

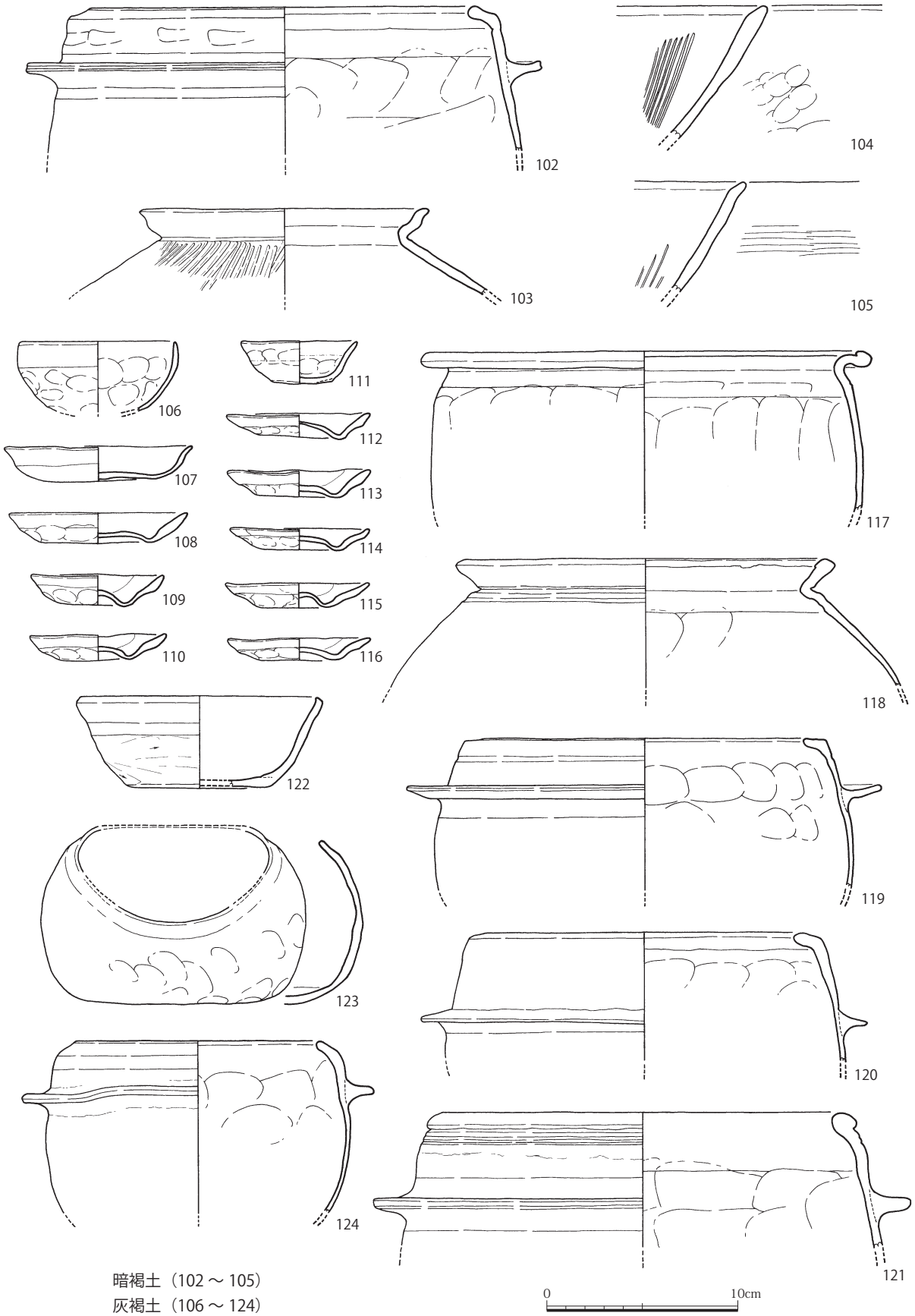


図 54　SD240 出土遺物実測図（1）（S=1/3）

持ちヘラケズリする。イブシは良好で、外面には煤が付着する。

瓦質土器燈火器　**131** はヘルメット状の体部に半円形の火窓を切り、上部に散蓮華状の透かしを穿つ。天井部外面にはツマミが外れた痕跡が見られるが、中央には吊紐を通す穴が確認できる。内面ナデ調整、外面丁寧なヘラミガキを施す。

輸入磁器青磁椀（132・133）　**132** は玉縁状口縁を持つ印花椀である。印花文はそれほど明瞭でない。**133** は高台内および高台接地面のみ無釉である。見込みには使用痕と考えられる擦痕が見られる。

国産施釉陶器皿　**134** は古瀬戸卸皿である。底部イトキリで体部外面下半を回転ヘラケズリする。古瀬戸後Ⅱ期のものである。

国産焼締陶器擂鉢　**135** は備前焼である。暗褐色を呈し、口縁部外面は灰色に焼き上がる。Ⅳ A 期もしくはⅣ B 期のものである。

鬼瓦　**136** は鬼瓦の側縁部分である。わずかに側縁とスタンプによって形成される朱文が残存する。胎土は黒色粒子と長石粒を大量に含み粗い。また、側面は非常に平滑に磨かれており、砥石代わりに転用されていたと考えられる。

軒平瓦　**137** は大型の瓦である。凸面には離れ砂が残り、凹面には布目厚痕が見られる。瓦当貼り付け成形を行い、瓦当裏面はヨコナデを施す。

砥石　**138** は白色の凝灰岩製砥石である。側面を含めた折損面を除く全面を使用する。

火打石　**139** はサヌカイト製である。打撃部はあまり潰れず、十分使用可能な状況である。重量 30.7 ｇを測る。

これらの遺物はいずれも 14 世紀後半～ 15 世紀前半のものである。なお **118** の土師器釜は I_2 型Ⅰ -1 型式としているが、これについては従来古市城出土文明 5 年（1473）墨書銘資料を元に、15 世紀中葉から後半の年代が与えられてきた（川口 1990）。しかし、**118** については口縁部を丸く内側に折り返す点や胎土に大和 B 型の要素を色濃く持つなど、大和 B 型と I_2 型の中間的な形状を有する。こういった形状のものを I_2 型に組み込み、Ⅰ -1 型式古段階として 15 世紀前半に位置づけることを提唱したい。

【暗灰土出土遺物】

土師器皿（140 ～ 147）　口径 7cm 代の小皿（**140** ～ **146**）と、口径 9cm 代の中皿（**147**）がある。小皿はいずれも橙褐色の胎土を有し、ユビオサエの後口縁部上端をナデ調整するが、**141** はナデの範囲が広い。また、**140** はナデの後ハケ状工具による調整を施す。小皿はいずれも赤色粒子と長石を多く含む橙褐色の胎土を持つ。**147** は白色の胎土を持ついわゆる白土器系である。広く開く体部と、丸みを持つ底部を有する。二次焼成のため調整等は不明である。

土師器釜（148 ～ 150）　いずれも大和 H 型である。**148** は内面オサエの後板状工具によるナデ調整を施し、外面はナデ調整を施す。**149** は内面オサエ調整の後、ハケ調整を施し、外面はナデ調整を行う。**150** は口縁端部を外側に折り返す。内面オサエ調整の後外面をナデ調整する。

土師器鍋　**151** は内面オサエ調整の後板状工具によるナデ調整を施し、外面は肩部に板状工具によるナデ痕跡が残る。

瓦器椀（152・153）　**152** は下半に重心を持ち、底部には断面半円形の貼り付け高台を有する。内面にはわずかにヘラミガキの痕跡が確認できる。紀伊のものと考えられる。**153** は底部をやや押し上げる器形を持ち、口縁部内面の沈線や底部外面の高台は見られない。内底面には独立した暗文を有する。Ⅳ段階 C 型式のものである。

東播系須恵器鉢　**155** は厚い「Ｔ」字口縁を有し、縁帯部には自然釉がかかる。内面には使用痕が確

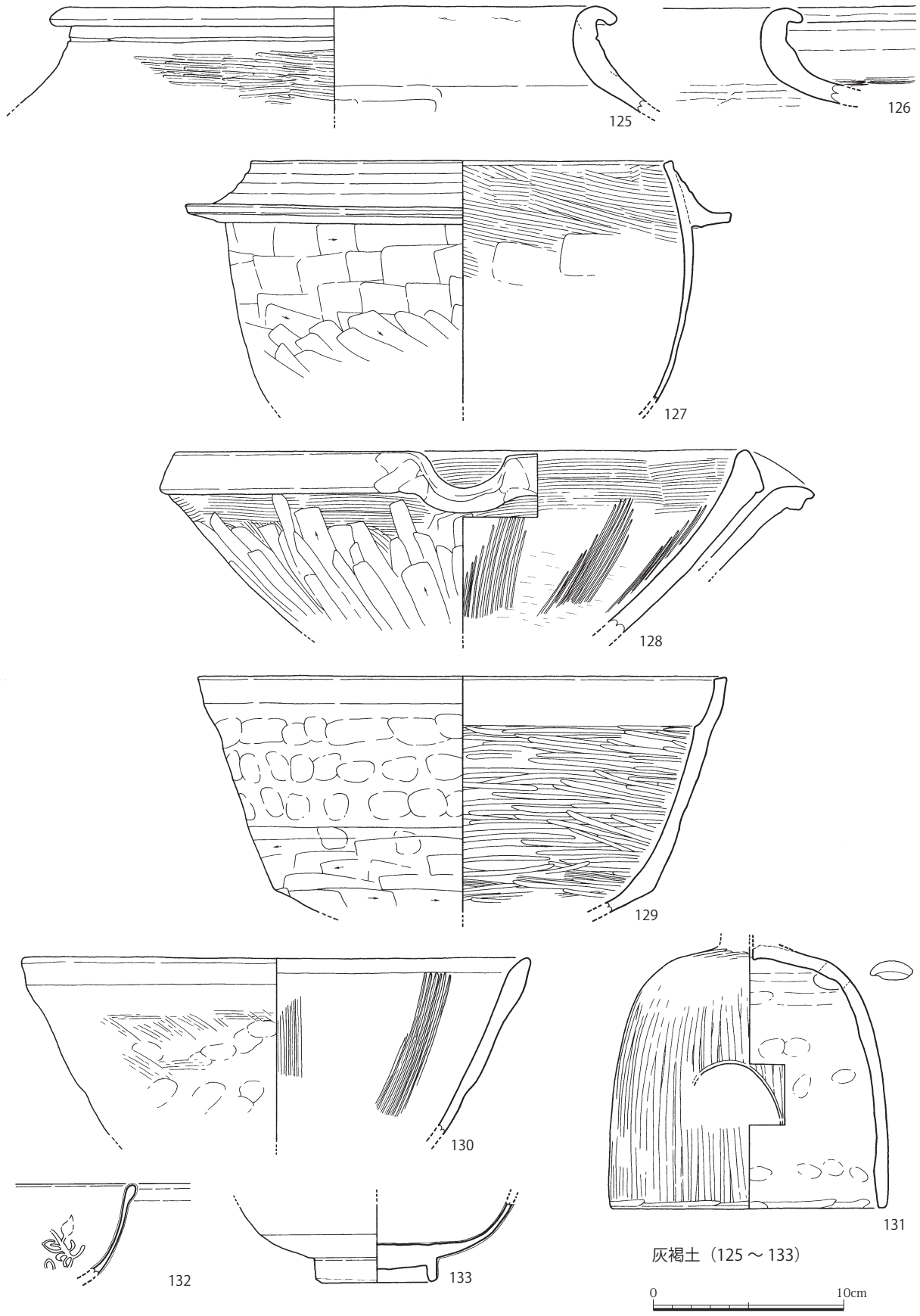


図 55　SD240 出土遺物実測図（2）（S=1/3）

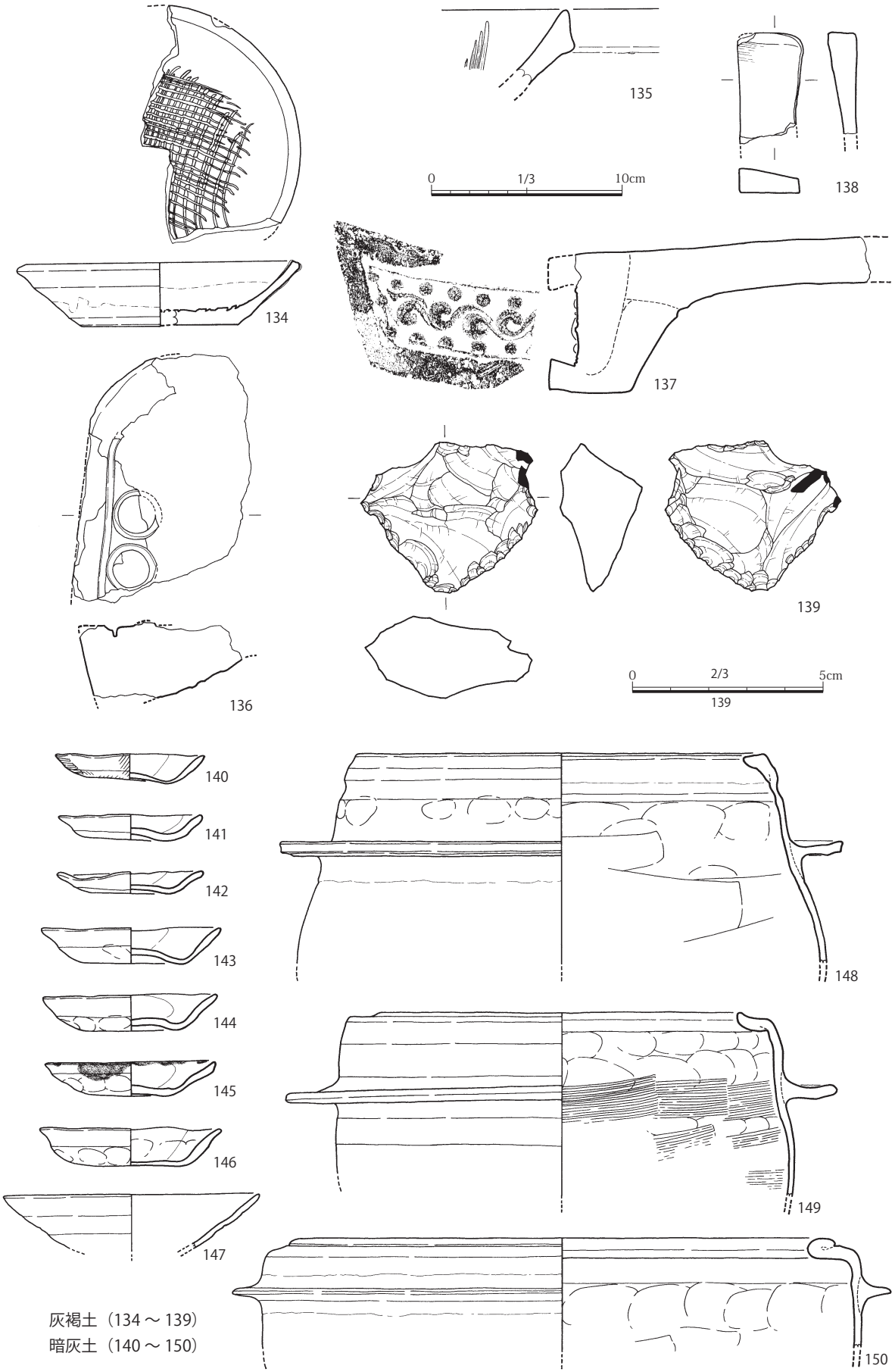


図 56　SD240 出土遺物実測図（3）（S=1/3・2/3）

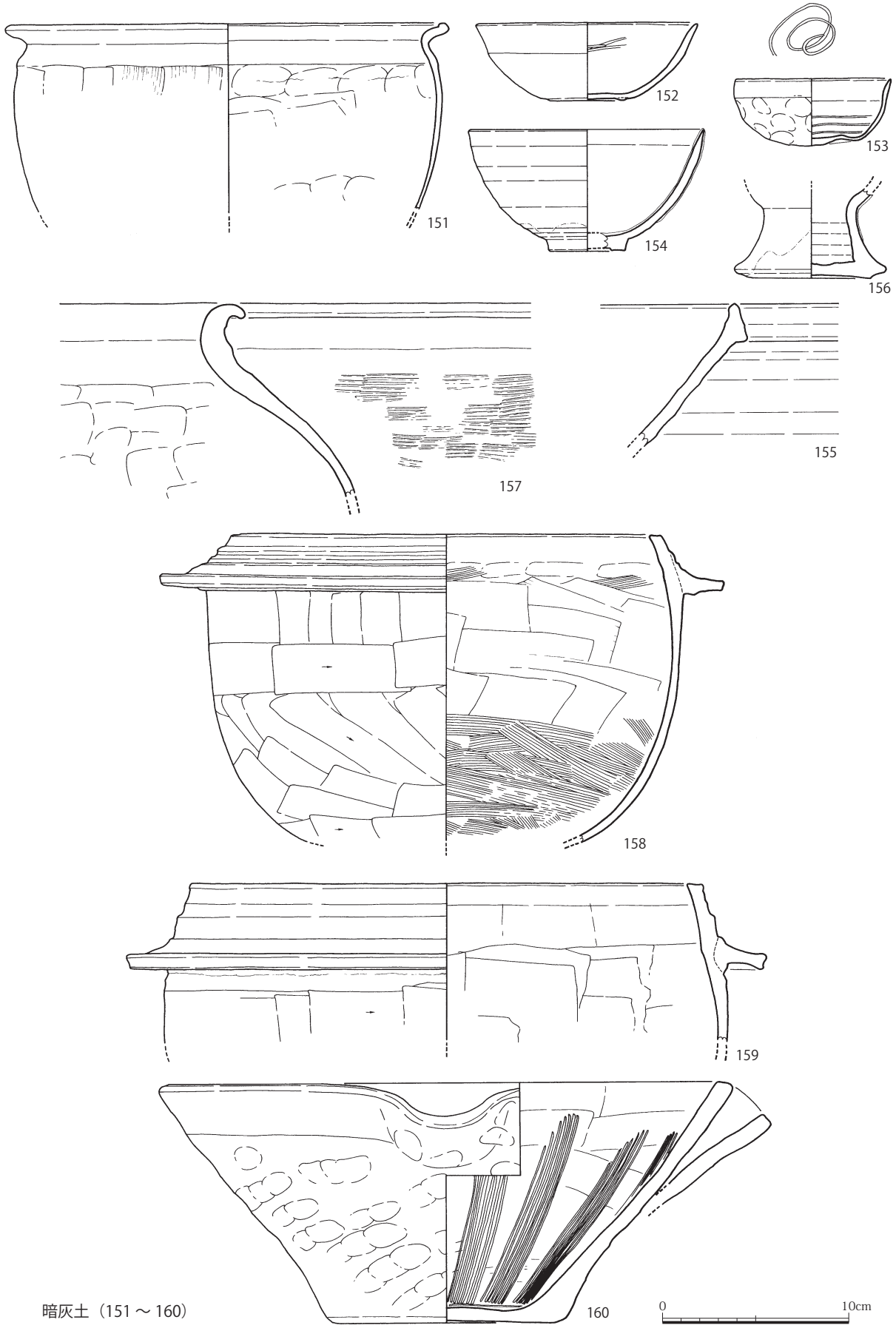


図 57　SD240 出土遺物実測図（4）（S=1/3）

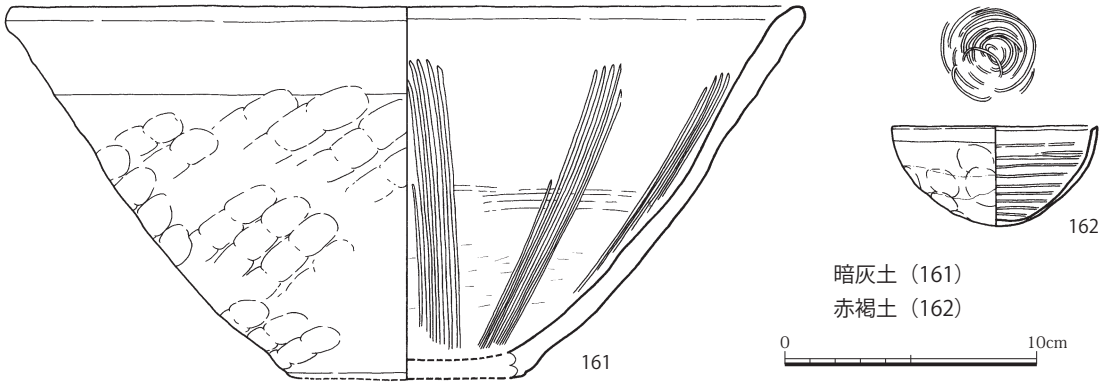


図 58　SD240 出土遺物実測図（5）（S=1/3）

認できる。B3a 類である。

国産施釉陶器椀　154 は古瀬戸天目椀である。口縁部の外反は弱い。右回りの轆轤回転で成形し、高台は削り出しである。内外面に鉄釉を施し、高台付近は露胎である。古瀬戸後Ⅰ期のものである。

国産施釉陶器花瓶　156 は古瀬戸である。底部イトキリで、灰釉がかかる。古瀬戸後期様式のものであるが、小期を限定できない。

瓦質土器甕　157 は内面オサエの後ナデ調整、外面細いタタキ成形を行う。内外面二次焼成を受ける。Ⅱ -2 類のものである。

瓦質土器釜（158・159）　158 は内面下半をハケ調整の後、上半を板状工具によりナデ調整し、口縁部をナデ調整する。外面上半をピッチの短いケズリ調整した後、下半を不定方向にヘラケズリする。外面全面に著しく煤が付着する。C Ⅲ類のものである。159 は内面板状工具によるナデ調整の後、口縁部をナデ調整、外面横方向のピッチの短いヘラケズリを施す。

瓦質土器擂鉢（160・161）　160 は内面板状工具によるナデ調整を施し、外面には全面に掌圧痕が残る。擂目は 7 条一単位で刻む。A 型式のものである。161 は内面ナデ調整を施し、外面には掌圧痕が多数残る。擂目は 6 条一単位で刻む。

【赤褐土出土遺物】

瓦器椀　162 は半球形の形態を有し、口縁端部に 1 条の沈線が巡る。内面には 10 条以上の圏線ミガキを持ち、外底面には高台を持たない。Ⅳ段階 B 型式のものである。

SD260 出土遺物（図 59 ～ 62、図版 24・25）

【暗褐砂出土遺物】

土師器皿（163 ～ 166）　163 は口径 9cm 程度の中皿である。橙褐色の胎土を持ち、ユビオサエの後口縁部を強くナデ調整する。164 ～ 165 は口径復元ができないが、残存する口縁と器厚から大皿と判断できる。164 は口縁部がナデ調整により緩やかに屈曲し、橙褐色の胎土を有する。165・166 はいずれも白土器系の胎土を有する。163 はⅡ -3 期、164 ～ 166 はⅡ -4 期のものと考えられる。

土師器釜（167 ～ 169）　167 は大和 H 型のものである。内面ハケ調整の後オサエ調整、外面ナデ調整を施す。168 は大和 B 型のものと考えられる。内面板状工具によるナデ調整、外面オサエ調整を行う。169 は大和 I_2 型Ⅰ -1 型式古段階のものである。内面オサエ調整、外面ナデ調整を施す。口縁端部は内側に小さく折り返して丸く収める。

瓦質土器擂鉢　170 は内面板状工具によるナデ調整の後ナデ調整を施し、外面には掌状圧痕を多数残す。

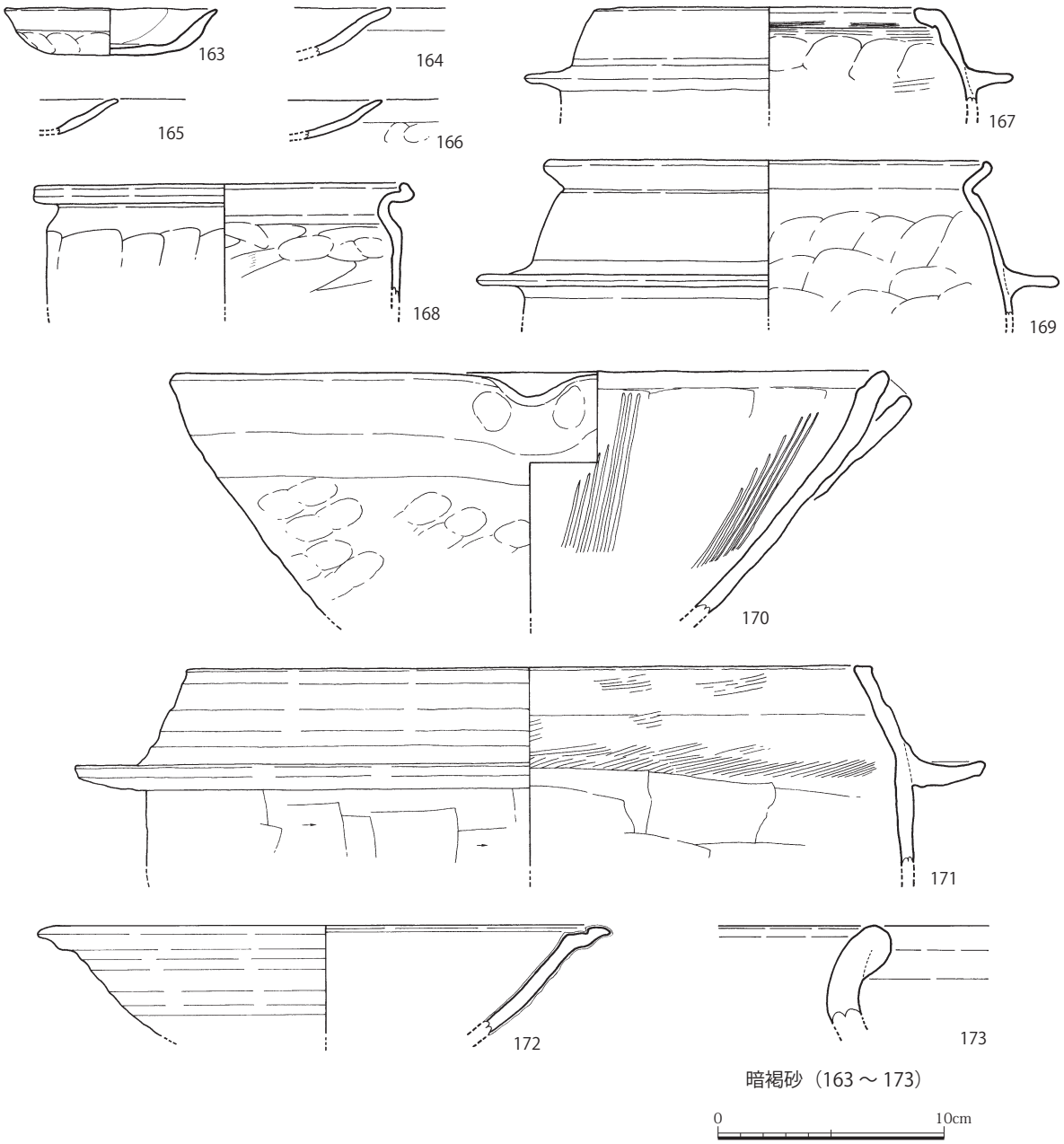


図 59　SD260 出土遺物実測図（1）（S=1/3）

擂目は 7 条一単位である。F 型式のものであるが、外面のハケ調整が発達していないなど古い要素も見られる。F 型式の中でも古段階のものとして位置付けたい。

瓦質土器釜　171 は内面ハケ調整の後板状工具によるナデ調整、外面横方向のヘラケズリを施す。C Ⅳ類のものである。

国産施釉陶器鉢　172 は古瀬戸折縁鉢である。外反させた後、口縁端部を短く折り返す。古瀬戸後 I 期のものである。

国産焼締陶器壷　173 は備前焼である。肩部には黄褐色のいわゆるごま塩状の自然釉がかかる。Ⅲ B 期のものである。

これらの遺物は備前焼壷（173）が 14 世紀前半、古瀬戸折縁鉢（172）が 14 世紀後半、土師器皿（164 ～ 166）、土師器釜（169）が 15 世紀前半、瓦質土器擂鉢（170）が 15 世紀後半と、ばらつきがある。

SD260 は SD240 の掘り直しと考えられるため、SD240 からの混入が相当量あるものと考えられ、少なくとも暗灰砂の堆積年代は瓦質土器擂鉢の示す 15 世紀後半以降と考えたい。

【褐粘出土遺物】

土師器皿（174・175） いずれも口径 9cm 代の中皿である。ユビオサエの後、内面及び外面口縁部上端をナデ調整する。

土師器釜（176 ～ 179） **176** は大和 I_2 型Ⅰ -1 型式のものである。内面オサエ調整、外面オサエ調整の後ナデ調整を施す。**177・179** は大和 H 型のものである。内面オサエ調整の後ナデ調整、外面ナデ調整を施す。**179** は口縁部には粘土紐接合痕が比較的明瞭に残る。**178** は大和 H 型のものである。内面ハケ調整の後オサエ調整、外面ナデ調整を施す。

瓦質土器釜（180 ～ 187） いずれも内面ハケ調整の後板状工具によるナデ調整、外面上半をピッチの短い横方向のケズリ調整の後、下半を不定方向にケズリ調整する。いずれも焼成は良好で灰白色に焼き上がり、イブシも良好である。**180** ～ **184** が C Ⅲ類、**185** ～ **187** が C Ⅳ類である。

瓦質土器鍋　**188** は外面横方向のケズリ調整を施し、内面はハケ調整の痕跡が残るが表面劣化のため調整等は不明である。

須恵器円面硯　**189** は圏足円面硯である。胎土は褐灰色を呈し、黒色及び赤色粒子を少量含む。使用痕は明瞭でない。7 世紀末～ 8 世紀のものである。

国産施釉陶器鉢　**190** は古瀬戸である。内外底面は露胎で、外底面は回転イトキリである。轆轤の回転方向は右回りである。

国産焼締陶器壷　**191** は備前焼である。肩部には黄褐色のいわゆるごま塩状の自然釉がかかる。Ⅲ B 期のものである。

輸入磁器青磁椀　**192** は端反椀である。内面に 1 条の界線を有する。

平瓦　**193** は凹面布目痕を丁寧にナデ消し、凸面は斜格子に花文を配置するタタキ痕を有する。端面は丁寧にケズリ調整する。

SD270 出土遺物（図 63、図版 25）

瓦質土器擂鉢　**194** は内面板状工具によるナデ調整を施し、外面には掌圧痕が明瞭に残る。擂目は 8 条一単位である。D 型式のものである。

国産施釉陶器鉢　**195** は古瀬戸である。外底面を除き全面施釉で、底部には小ぶりの三足を貼り付ける。後期様式のものである。

石製品　**196** は滑石製石鍋再加工品である。外面著しく被熱し、側面に鋸挽痕を残す。

SD280 出土遺物（図 63、図版 25・26）

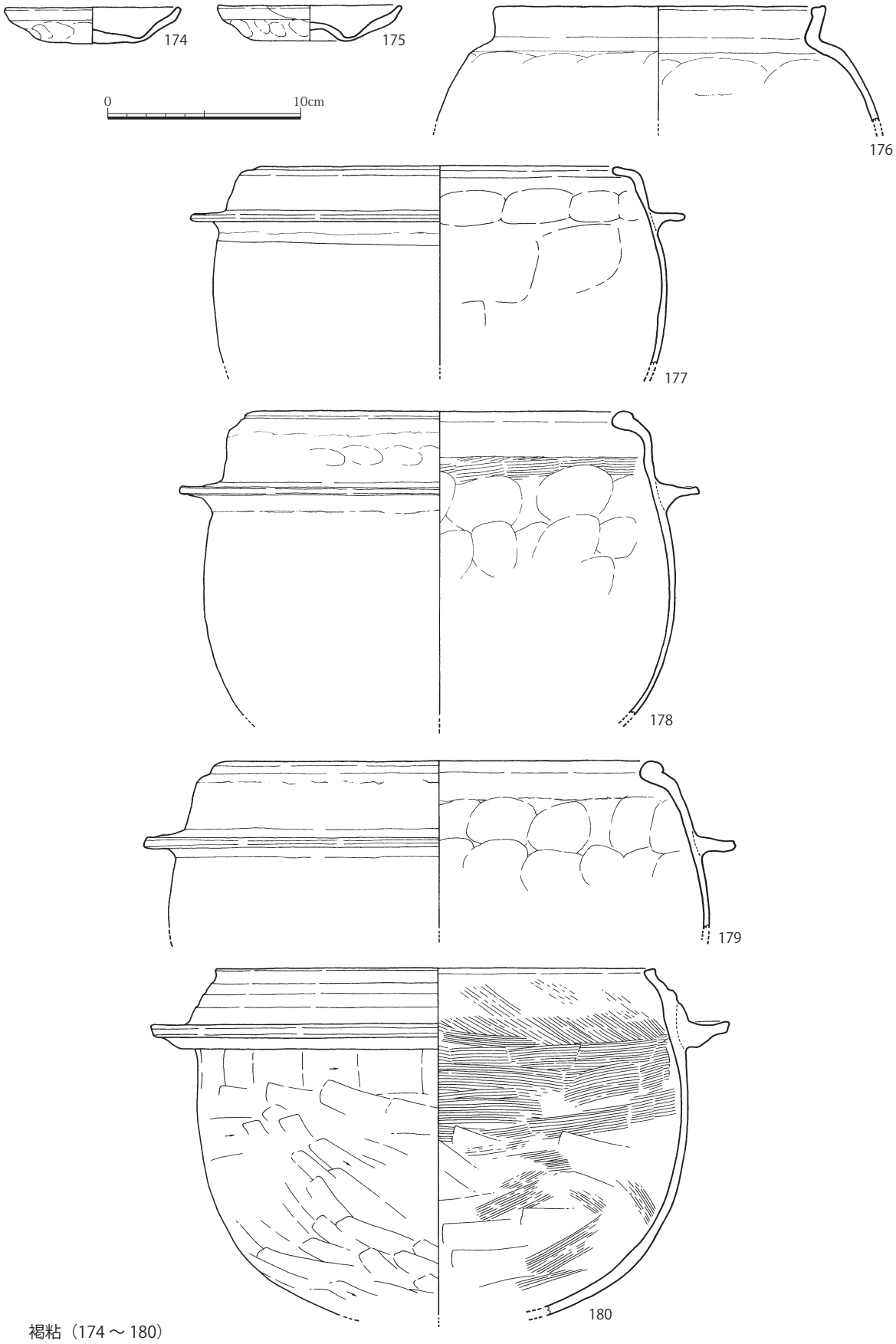
土師器釜　**197** は大和 I_2 型Ⅰ -2 型式のものである。表面淡褐色、断面内部黒色を呈する。内面ハケ調整の後オサエ調整、外面オサエ調整の後ナデ調整を施す。

瓦質土器釜　**198** は内面ハケ調整、外面やや幅の広い横方向のケズリ調整を施す。C Ⅳ類のものである。

瓦質土器擂鉢　**199** は内面板状工具によるナデ調整を施し、外面には掌圧痕が多数残存する。擂目は 5 条一単位である。二次焼成のため劣化が著しい。E 型式のものである。

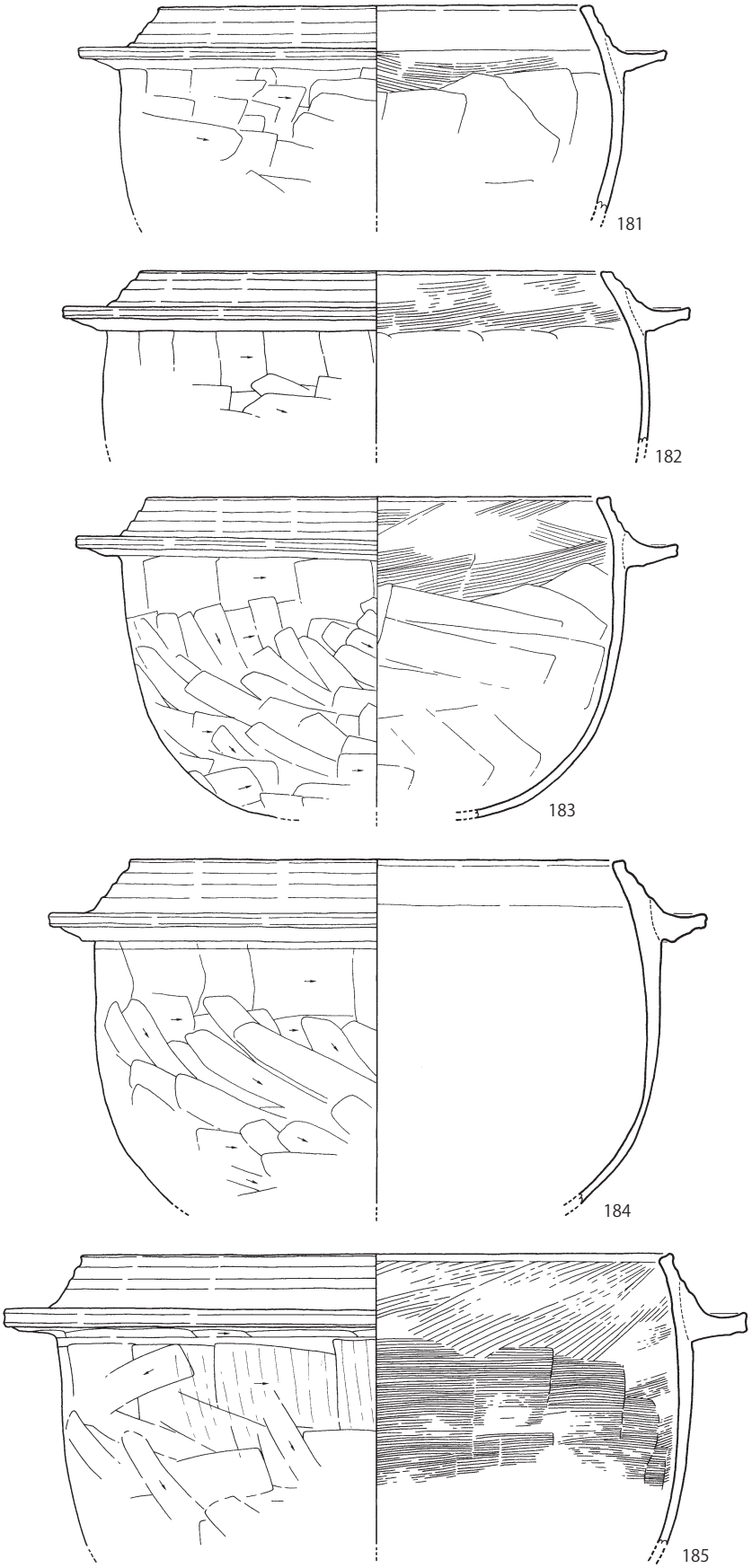
輸入磁器青磁椀　**200** は龍泉窯系である。淡褐色の胎土を有し、高台内面以外を全面施釉する。内面には使用痕と考えられる擦痕が全面に残り、高台接地部は摩滅する。

輸入磁器青磁皿　**201** は白色の胎土を有し、外面下半を露胎で仕上げる。見込みは蛇の目釉剥ぎする。轆轤の回転方向は左回転である。産地は不明である。



褐粘（174 ～ 180）

図 60　SD260 出土遺物実測図（2）（S=1/3）



褐粘（181 ～ 185）

0　10cm

図 61　SD260 出土遺物実測図（3）（S=1/3）

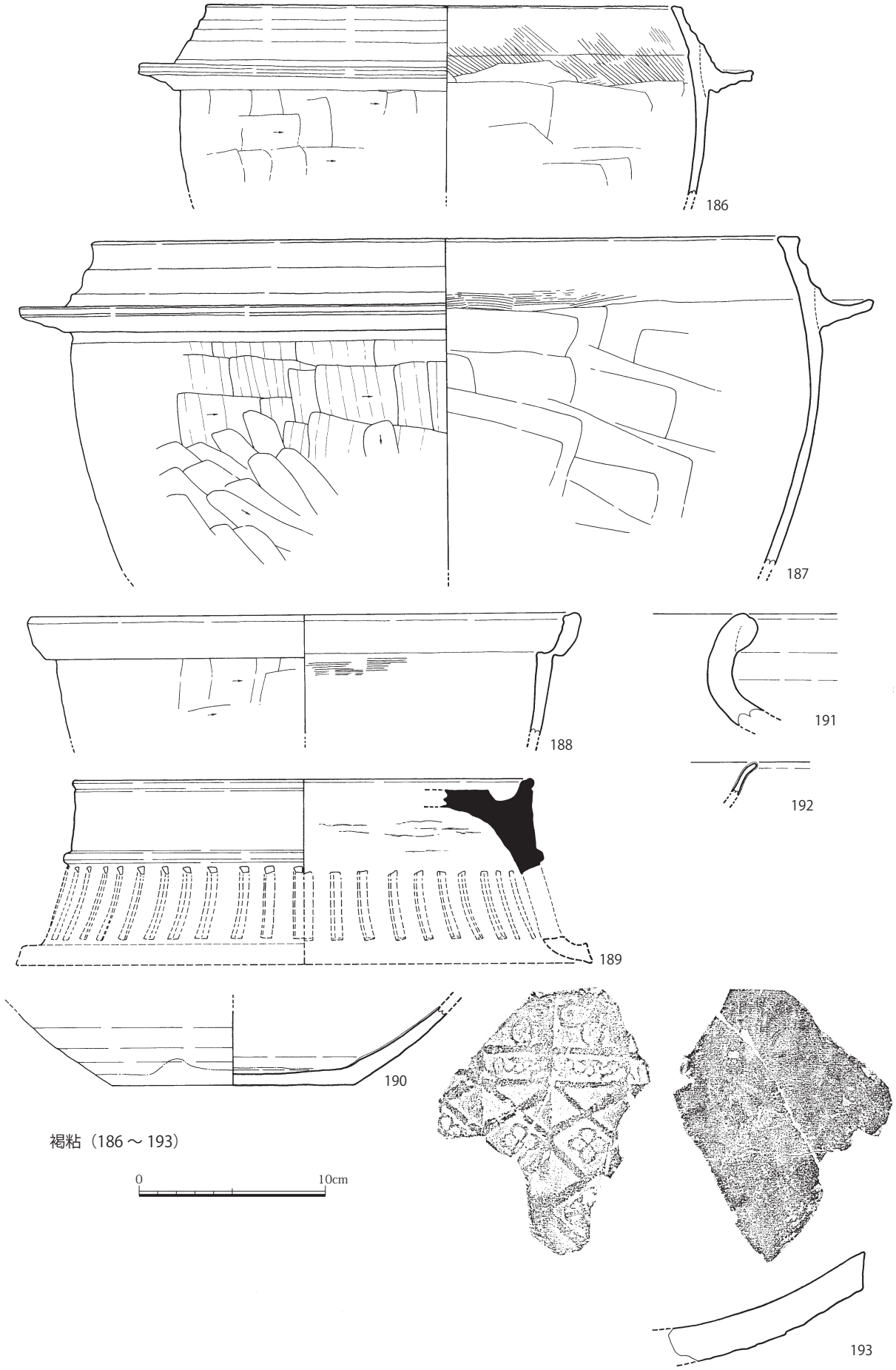


図 62　SD260 出土遺物実測図 (4)（S=1/3）

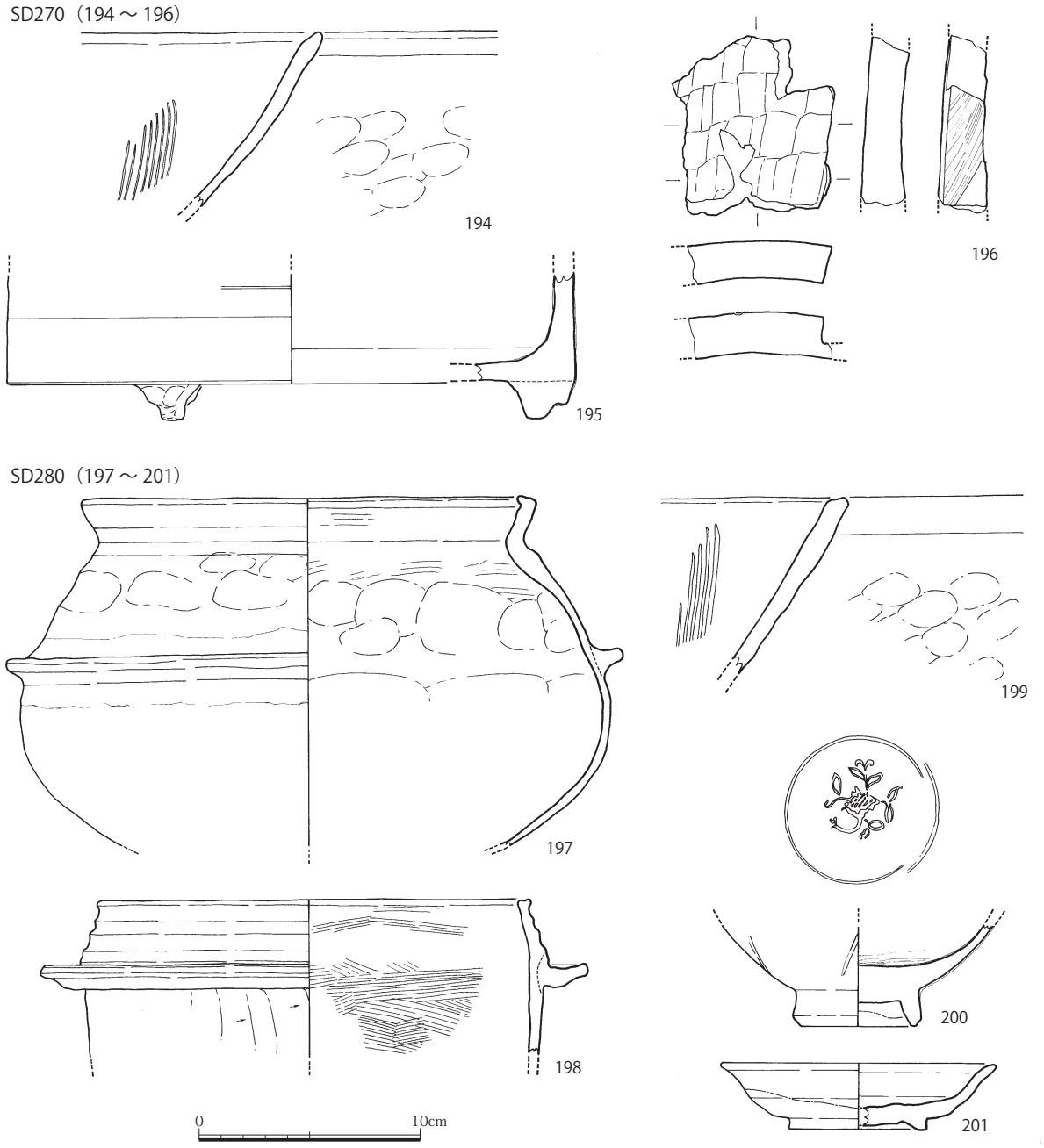


図 63　SD270・280 出土遺物実測図（S=1/3）

SD290 出土遺物（図 64・65）

土師器皿（202・203）　いずれも胎土は橙褐色で長石粒を多量に含む。ユビオサエの後、口縁部をナデ調整する。

土師器釜（204・205）　204 は大和 I_2 型Ⅰ-1 型式古段階のものである。内面オサエ調整、外面オサエの後ナデ調整する。二次焼成を受ける。205 は大和 H 型のものである。内面オサエ調整、外面ナデ調整を施す。

瓦質土器擂鉢　206 は内面板状工具によるナデ調整、外面ナデ調整を施す。A 型式のものである。

瓦質土器釜（207・208）　いずれも内面ハケ調整の後板状工具によるナデ調整、外面横方向のケズリ調整を施す。C Ⅲ類のものである。

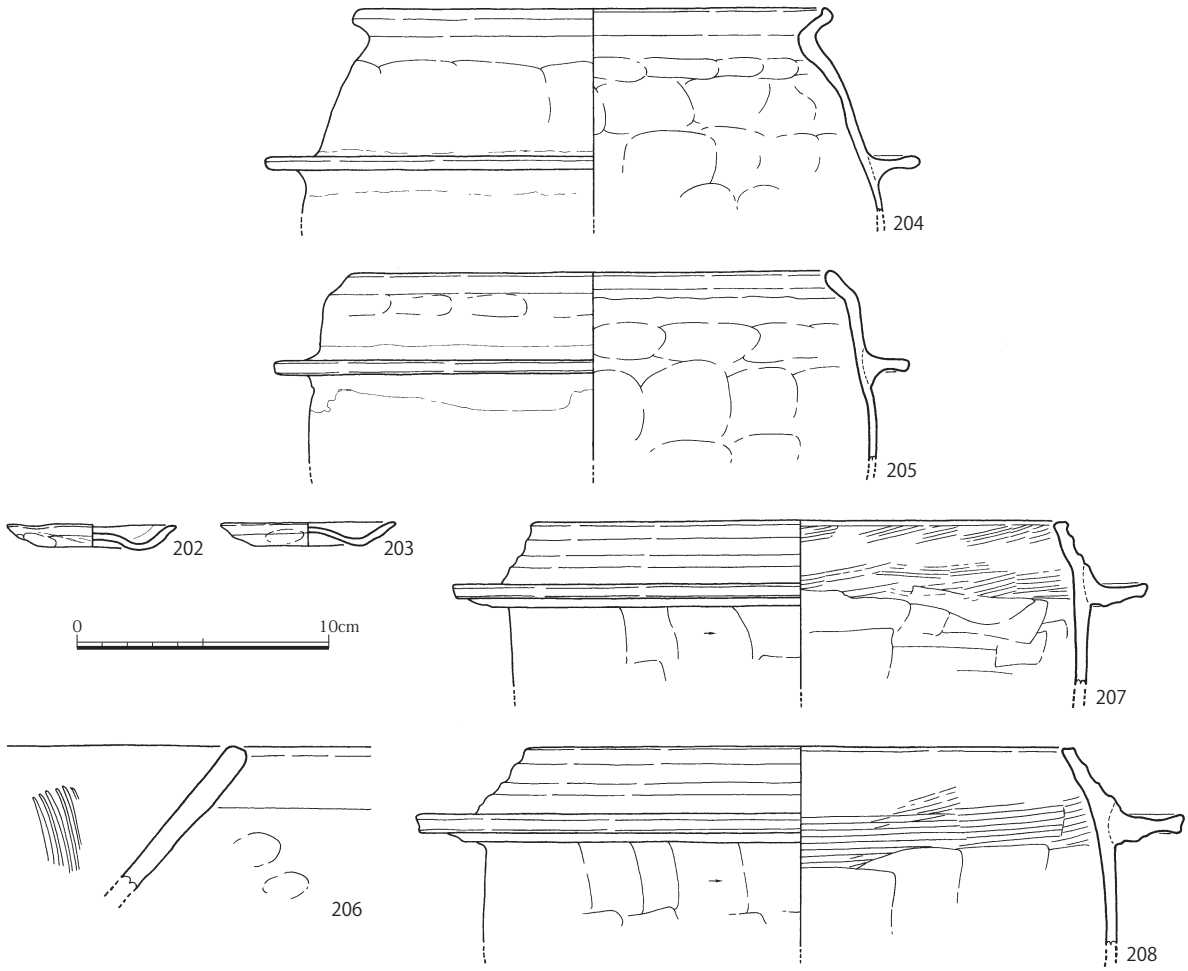


図 64　SD290 出土遺物実測図 (1)（S=1/3）

平瓦　209 は凹面布目ナデ消し、凸面イトキリ後斜格子タタキを行い、最後にこれらをナデ消しする。狭端面にはヘラ状工具による数条の切れ込みが確認できるが、意図的なものと断定できない。

SD320 出土遺物（図 66）

瓦質土器風炉　210 は内面ナデ調整、外面ナデ調整の後研磨を施し、外底面には離れ砂の痕跡が見られる。脚部貼り付けの前にはカキヤブリが切られる。二次焼成のため橙色に変色する。

瓦質土器擂鉢　211 は内外面ナデ調整を施す。擂目を体部上半付近まで施す。C-2 型式のものである。

SD330 出土遺物（図 66）

瓦質土器擂鉢　212 は内面および口縁部外面をナデ調整し、体部外面には掌圧痕が多く残る。E 型式のものである。

瓦質土器釜　213 は内面ハケ調整の後、板状工具によるナデ調整、外面上半に横方向のケズリ調整、下半に不定方向のケズリ調整を施す。C Ⅳ類のものである。

丸瓦　214 は玉縁丸瓦である。凹面布目圧痕が残り、凸面縄目タタキを擦り消す。吊紐はほぼ水平につながる。鎌倉期のものと考えられる。

SD400 出土遺物（図 66、図版 26）

瓦質土器擂鉢　215 は内面板状工具によるナデ調整を施し、外面には掌圧痕が多数残る。擂目は残存状況が悪く条数を明確にできない。

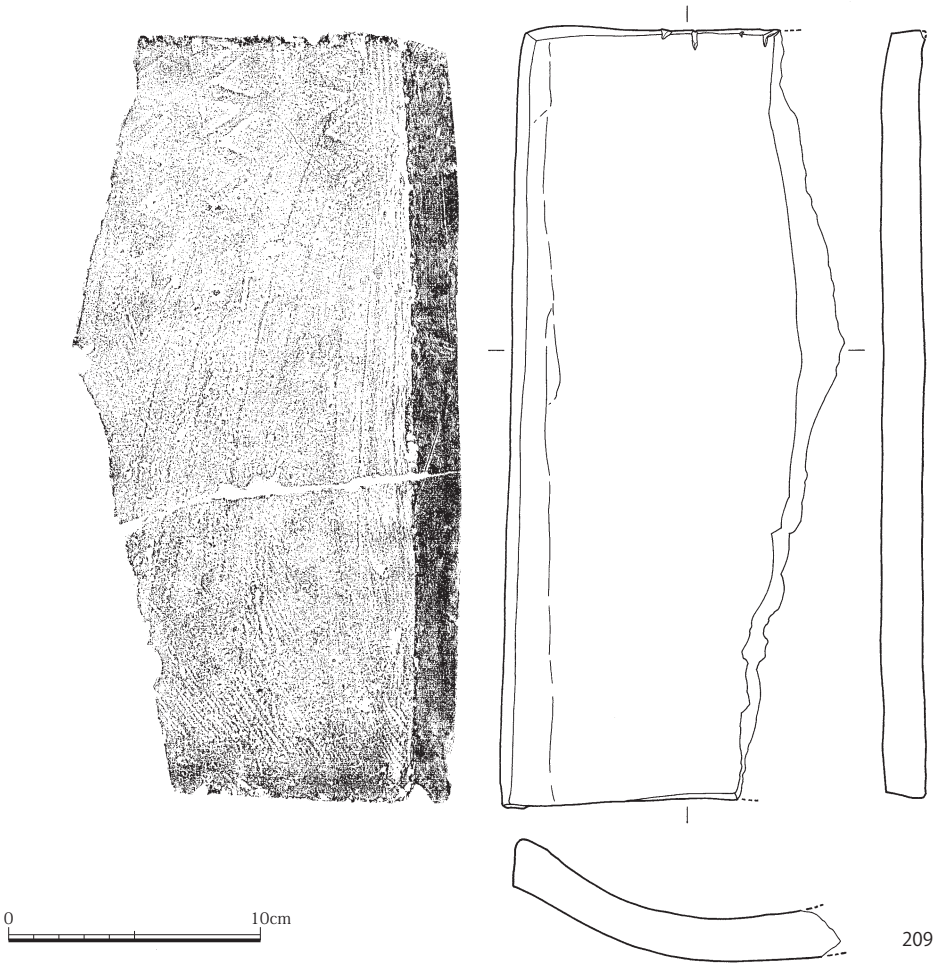


図 65　SD290 出土遺物実測図 (2)（S=1/3）

国産焼締陶器擂鉢　216 は備前焼である。「T」字状に上下に突出する口縁を持ち、内面には淡褐色の自然釉がかかる。擂目は残存状況が悪く条数は不明である。Ⅳ A 期のものである。

輸入磁器白磁椀　217 は端反椀である。外面回転ヘラケズリを行い、釉薬はやや青みを帯びる。内面には使用痕と考えられる擦痕を有する。

瓦質土器不明品　218 は内外面ユビオサエの後、内面に粗いケズリ調整を行う。平面いびつな楕円形を呈し、器壁の厚さも不均一である。

SD438 出土遺物（図 67）

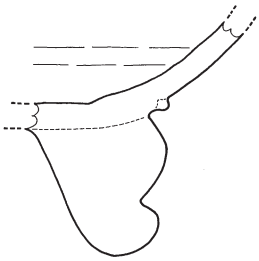
瓦質土器釜　219 は内面オサエ調整の後、板状工具によるナデ調整、外面上半ピッチの短い横方向のヘラケズリの後、下半を不定方向にケズリ調整する。口縁部には対向して 2 個一対の穿孔を有する。焼成は土師質焼成を呈する。C Ⅲ類のものである。

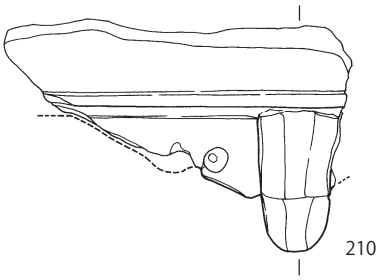
SE005 出土遺物（図 68）

【井戸枠抜取出土遺物】

土師器皿（220 ～ 224）　口径 7 ～ 8cm 代の小皿（220 ～ 222）と口径 10cm 代の中皿（223・224）がある。小皿は暗赤褐色のもの（220・222）と、橙褐色のもの（221）があり、中皿はいずれも橙褐色のもので、口縁部のナデはやや強い。いずれもユビオサエの後、内面および口縁部外面をナデ調整する。

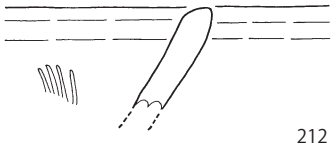
SD320（210・211）



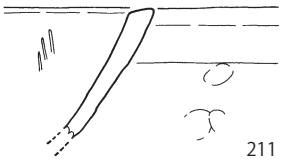


210

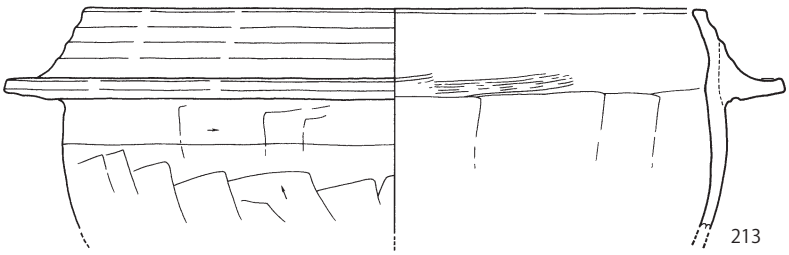
SD330（212～214）



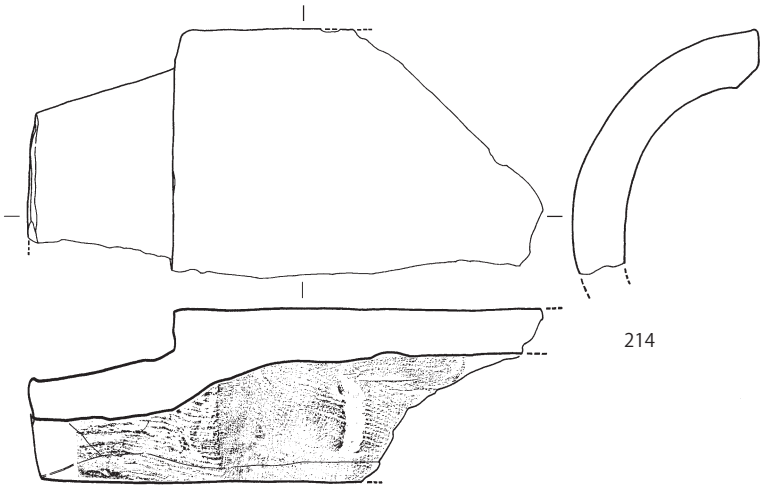
212



211

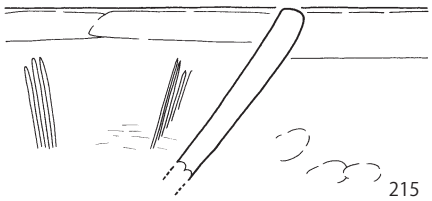


213

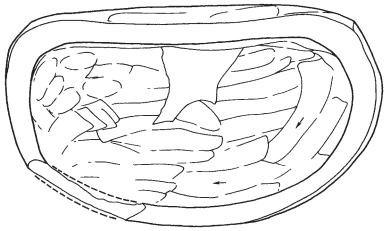


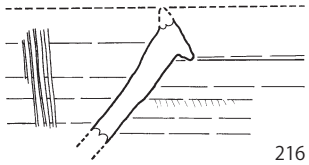
214

SD400（215～218）

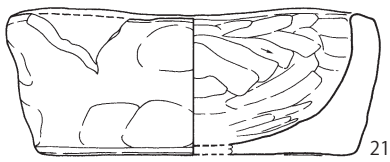


215

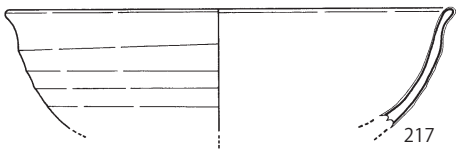




216



218



217

0　10cm

図 66　SD320・330・400 出土遺物実測図（S=1/3）

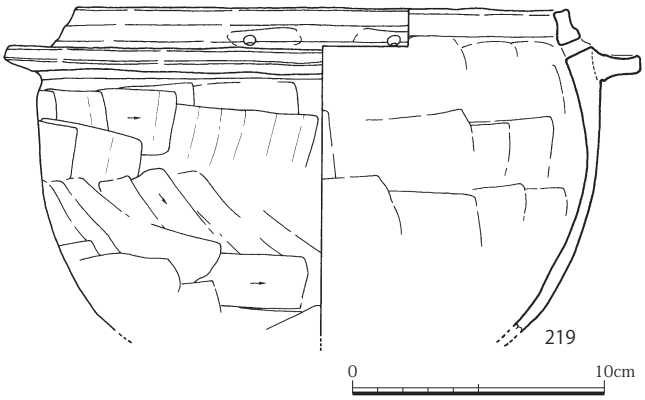


図 67　SD438 出土遺物実測図（S=1/3）

【掘方出土遺物】

瓦器椀　225 は口縁部に沈線を持ち、内面に 5 条以上の圏線ミガキを施す。Ⅳ段階 B 型式のものである。

SE190 出土遺物（図 68、図版 26）

【枠内出土遺物】

土師器皿　226 は褐色の胎土を有し、全体的に層状に剥離する。ユビオサエの後、口縁部をナデ調整する。口縁部には広い範囲に煤が付着する。近世遺構からの混入の可能性を排除できない。

土師器釜（227 ～ 229）　227 は I_2 型Ⅰ -2 型式のものである。表面褐色、断面内部黒色を呈する。内外面ナデ調整を施すが、頸部外面には工具の当り痕が見られる。228・229 はいずれも大和 H 型のものである。内外面オサエ調整の後、口縁部をナデ調整する。

瓦質土器擂鉢（230 ～ 232）　230 は内面ナデ調整、外面横方向のハケ調整を掌圧痕が消す。E 型式のものである。231・232 はいずれも内面板状工具によるナデ調整を施し、外面には掌圧痕が多数残る。いずれも二次焼成を受ける。ともに D 型式のものである。

瓦質土器風炉　233 は直行口縁の風炉である。肩部に透かしを持つ。内面ナデ調整、外面ヘラミガキ調整の後研磨を行う。胎土は橙褐色を呈する。

瓦質土器方形浅鉢　234 は内面ナデ調整、外面ヘラミガキ調整の後研磨を行う。二次焼成のためイブシの状況は不明である。

国産焼締陶器擂鉢　235 は備前焼である。灰褐色を呈し、胎土内に長石を多く含む。細片のため擂目の状況は不明である。Ⅳ A 期のものである。

国産施釉陶器皿　236 は古瀬戸である。高台接地部を含む内外面全面に灰釉を施釉する。

火打石　237 はサヌカイト製である。自然面を持つ剥片を素材としており、一側縁のみを使用する。重量は 9.7g を測る。

【掘方出土遺物】

土師器釜　238 は I_2 型Ⅰ -1 型式のものである。内外面オサエ痕が残るが、二次焼成のため調整等は不明である。

瓦質土器擂鉢　239 は二次焼成のため赤褐色を呈し、調整等は不明である。F 型式のものである。

SK100 出土遺物（図 69）

土師器皿　240 は淡褐色の胎土を有し、いわゆる白土器系のものである。ユビオサエの後、体部外面下半までナデ調整する。

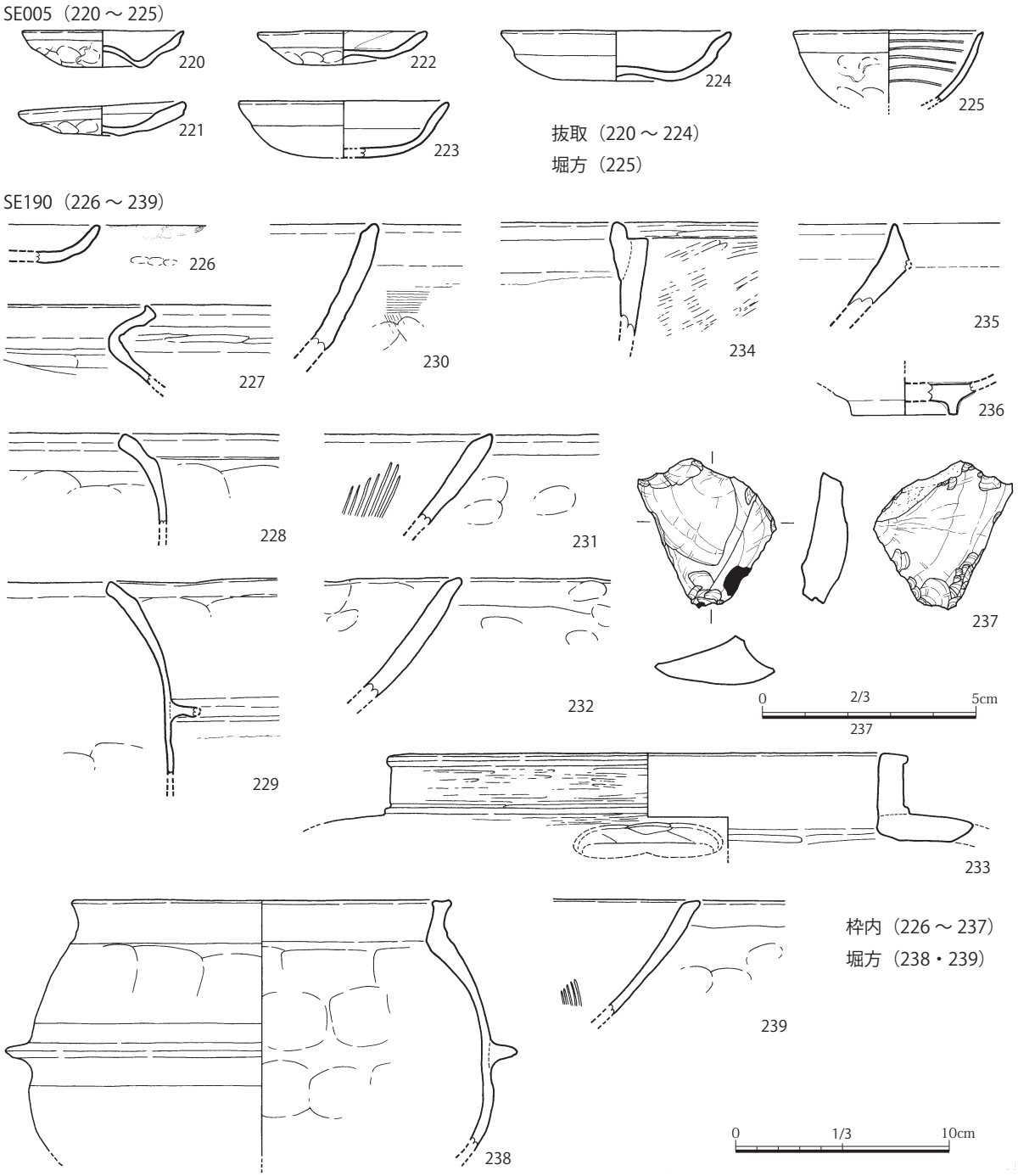


図 68　SE005・190 出土遺物実測図（S=1/3・2/3）

瓦質土器擂鉢（241・242）　いずれも二次焼成のため表面の劣化が著しく、調整等は不明である。小片のため擂目等についても詳らかでない。241 は D 型式、242 は F 型式のものである。

瓦質土器釜（243・244）　243 は内面板状工具によるナデ調整、外面横方向のケズリ調整を施す。被熱のため土師質を呈するが、本来の焼成は不明である。B V類のものと思われる。244 は内面ハケ調整の後板状工具によるナデ調整、外面横方向のケズリ調整を施す。焼成は土師質を呈し、内外面全面にイブシが施される。B V類もしくは D I 類のものである。

軒平瓦　245 は唐草文軒平瓦である。側縁には水切突起を持つ。瓦当貼り付けで成形し、瓦当面には

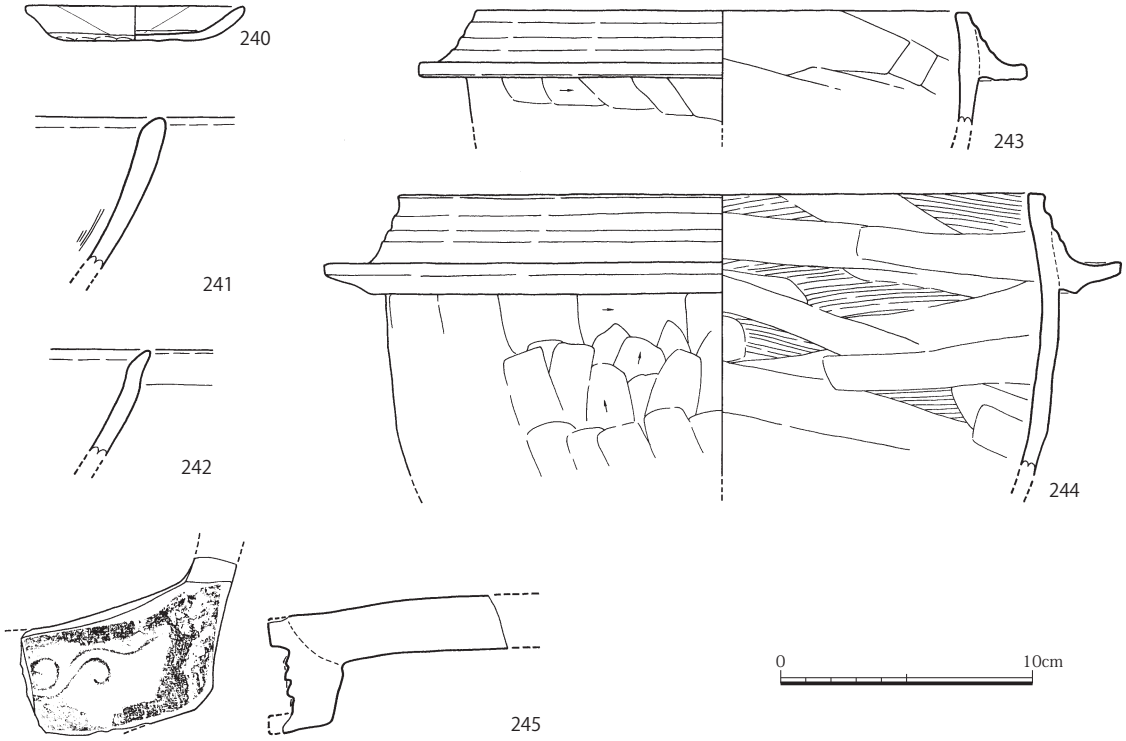


図 69　SK100 出土遺物実測図（S=1/3）

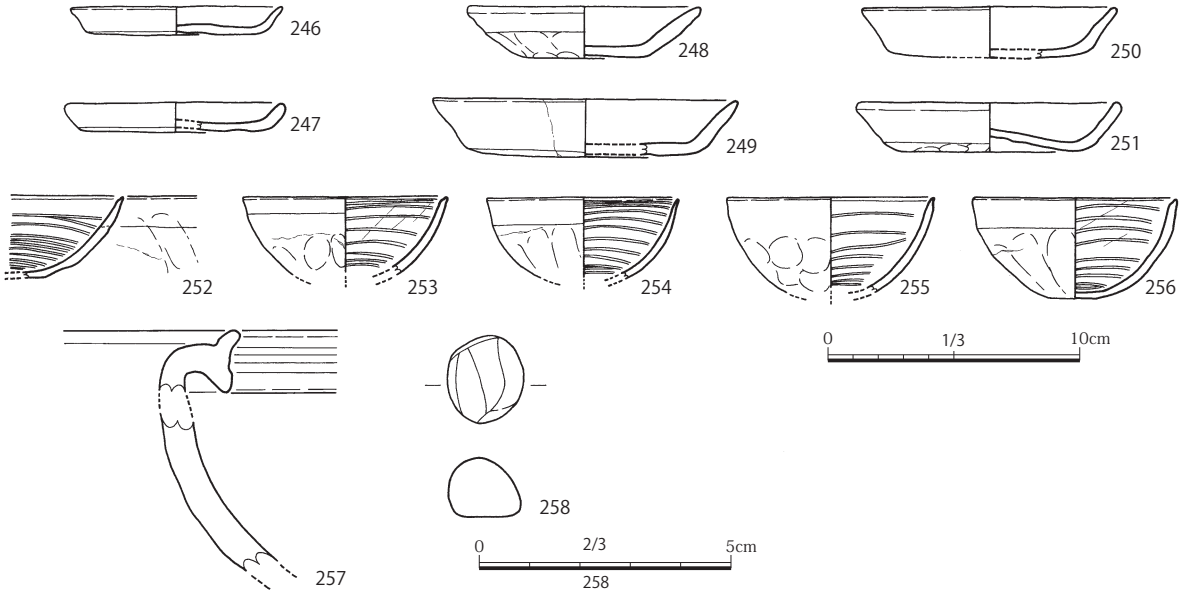


図 70　SK120 出土遺物実測図（S=1/3・2/3）

離れ砂が付着する。瓦当裏面は縦方向の板状工具によるナデ調整で仕上げる。宝珠文軒平瓦と考えられ、中世Ⅶ期のものである。

SK120 出土遺物（図 70、図版 27）

土師器皿（246 ～ 251）　246 は淡褐色の胎土を持つ、いわゆる白土器系のものである。ユビオサエの後､体部外面を下半までナデ調整する。247 は褐色のものである。表面劣化のため調整等は不明である。248 は褐色系のものである。ユビオサエの後、口縁部外面上半をナデ調整する。249 は褐色の胎土を有するが、体部外面下半まで広くナデ調整を行う。250 は長石を多く含む赤褐色のものである。表面

劣化のため調整等は不明である。251 は褐色のものである。ユビオサエの後、体部中位までをナデ調整する。

瓦器椀（252 ～ 256） いずれも半球形の体部を持ち、口縁部に沈線を持つ。内面にやや密な圏線ミガキを施す。256 は内底面のミガキは壁面の圏線ミガキと連続する。いずれもⅣ段階 B 型式のものである。

国産焼締陶器甕 257 は常滑焼である。内外面全面をナデ調整し、表面には斑状に自然釉がかかる。6b 型式のものである。

碁石 258 は石英製である。全面研磨を行うが、正円を作り出すほど丁寧な研磨には至らない。

SK170 出土遺物（図 71）

土師器皿（259 ～ 268） 口径 7 ～ 8cm 代の小皿（259 ～ 264）と、口径 10 ～ 11cm 代の中皿（265 ～ 268）がある。いずれもやや赤みの強い褐色の胎土を有し、ユビオサエの後、体部外面下半までをナデ調整する。小皿は口縁部のゆがみが著しいものが多い。

土師器釜 269 は大和 H 型のものである。内面オサエ調整、外面ナデ調整を施し、鍔は著しく短い。

瓦器椀（270 ～ 273） いずれも口縁部に沈線を有し、271・273 は退化した貼り付け高台を有する。270・273 がⅣ段階 A 型式、271・272 がⅣ段階 B 型式である。

SK186 出土遺物（図 71、図版 27）

土師器皿（274 ～ 281） 口径 7 ～ 8cm の小皿（274・275）と、口径 9 ～ 11cm 代の中皿（276 ～ 281）がある。胎土には淡褐色（274・281）、褐色（275・276・279）、赤褐色（277・278・280）がそれぞれ存在する。淡褐色のうち 281 はいわゆる白土器系のものと考えられ、外面下半までナデ調整する。277 は口縁部のナデが強く、一部屈曲する。

瓦器椀（282 ～ 286） 282 は口縁部に沈線を持ち、高台を持たない。内底面のミガキは壁面の圏線ミガキと連続する。283・285 は口縁部に沈線を持ち、内面の圏線ミガキはややまばらである。284・286 は広く開く体部を有し、284 の外底面には退化した貼り付け高台を有する。内面には圏線ミガキを施す。286 はミガキの下にハケメが確認できる。282・283・285 がⅣ段階 B 型式、284 がⅣ段階 A 型式、286 がⅢ段階 E 型式のものである。

瓦質土器浅鉢 287 は円形浅鉢である。内外面ナデ調整と縦方向のヘラミガキの後、口縁部を横方向のヘラミガキで仕上げる。肩部には 3 個一単位の菊花状大型単体スタンプを押す。スタンプはヘラミガキを行う前に押印され、ヘラミガキはスタンプを避けて施される。胎土は灰白色で、イブシは良好である。

国産焼締陶器甕 288 は渥美焼である。肩部に直線と連孤を組み合わせた線刻を持ち。下半には「こかめ」と仮名文字が刻まれる。文字は焼成前に線刻されている。「こ」より上位にも文字が存在した可能性が高いが、「め」より下部は文字が存在しないと思われる。

東播系須恵器鉢 289 は「T」字状の縁帯を有する口縁部を持ち、体部はやや外反する。内外面回転ナデで成形する。B3- Ⅱ類である。

輸入磁器青磁椀 290 は龍泉窯系である。高台接地部から外底面は露胎で、内面には使用痕と思われる微細な傷が多数確認できる。高台にはキザミを有する。

SK222 出土遺物（図 72）

土師器皿 291 は褐色の胎土を有するものである。ユビオサエの後、口縁部外面上半をナデ調整する。

瓦器椀 292 は半球形の体部を持ち、口縁部には沈線を有するが、高台を持たない。内面の圏線ミガキは内底面まで及ぶ。Ⅳ段階 B 型式のものである。

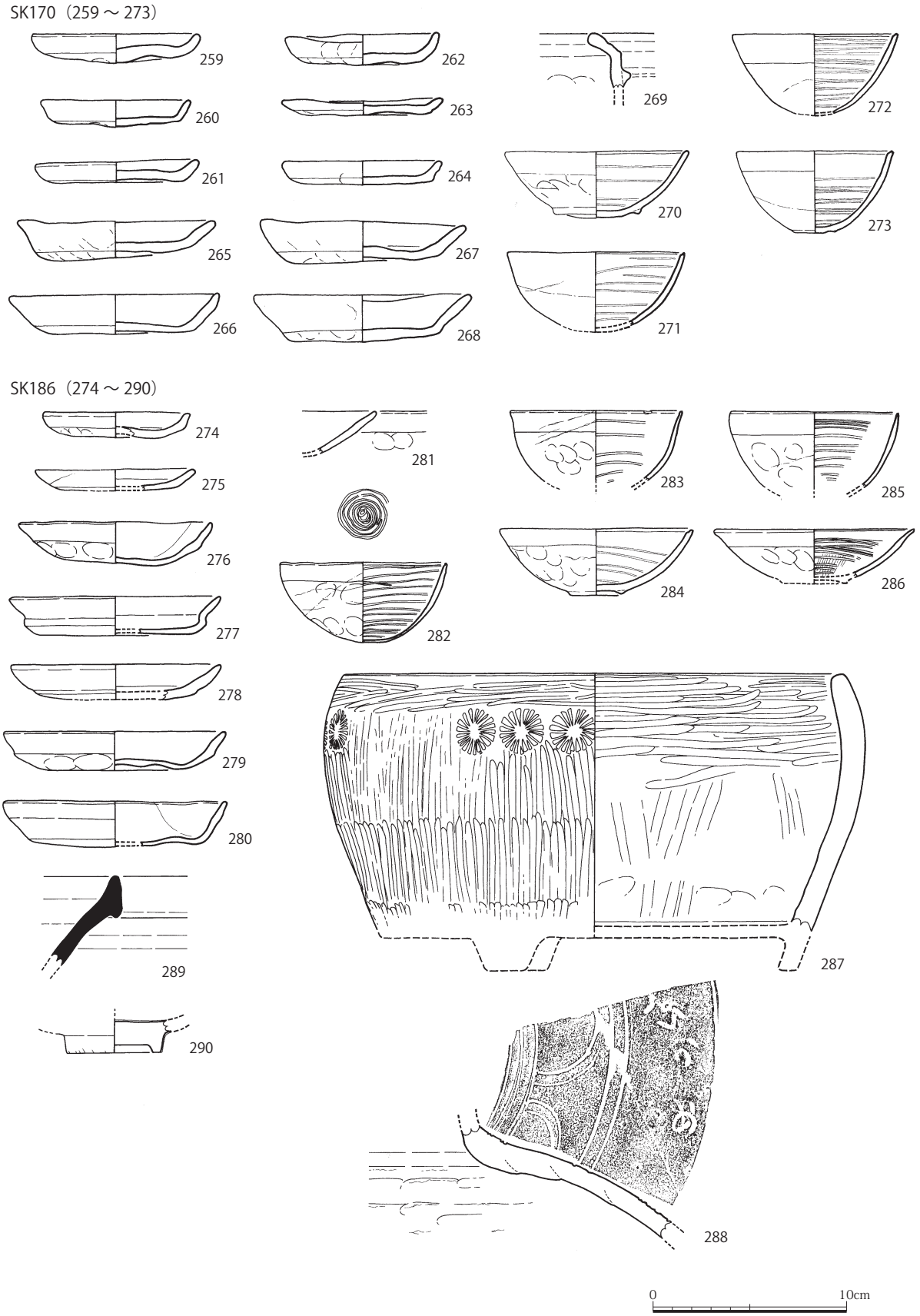


図 71　SK170・186 出土遺物実測図（S=1/3）

SK223 出土遺物（図 72）

土師器釜（293・294）　ともに大和 I_2 型Ⅰ -2 型式のものである。293 は胎土内に砂粒を多く含み、表面淡褐色、断面内部黒色を呈する。294 は内面オサエ調整、外面ナデ調整を施す。器壁は薄く、表面淡褐色、断面内部黒色を呈する。

銭貨（295・296）　295 は皇宋通寳（初鋳 1039 年）である。錆化のため残存状況は良好でない。296 は熙寧元寳（初鋳 1068 年）である。背面には「ノ」字状の浮文（月）を持つ。

SK227 出土遺物（図 72、図版 27・28）

土師器皿（297 ～ 301）　口径 7cm 代の小皿（297 ～ 299）と、口径 10 ～ 11cm 代の中皿（300・301）がある。小皿は全て褐色の胎土を持ち、中皿は 300 が淡褐色、301 が橙褐色のものである。300 は口縁部のナデが体部下半に及ぶもので、いわゆる白土器系に相当するものである。

瓦器椀（302・303）　302 は小型瓦器椀である。いずれも半球形の体部を持ち、口縁部には沈線、外底面には退化した貼り付け高台を有する。303 はⅣ段階 A 型式のものである。

国産施釉陶器椀　304 は古瀬戸である。回転ナデ調整の後、全面に灰釉を施釉する。平椀もしくは末広椀と考えられるが、小片のため特定できない。

SK254 出土遺物（図 72、図版 28）

土師器皿（305・306）　305 は淡褐色の胎土を持ち、ユビオサエの後、体部外面下半までナデ調整する。306 は褐色の胎土を持ち、ユビオサエの後、体部外面下半までナデ調整する。

瓦器椀（307 ～ 309）　いずれも口径 10cm 前後を測り、広く開く体部と、口縁部には沈線、外底面には退化した貼り付け高台を有する。体部の圏線ミガキは内底面に及ぶ。Ⅲ段階 E 型式のものである。

SK331 出土遺物（図 72、図版 28）

瓦質土器擂鉢　310 は四角く収まる口縁部を持ち、端部には 1 条の凹線を刻む。擂目は 6 条以上を一単位とするものを口縁部付近まで施す。A 型式のものである。

SK332 出土遺物（図 72、図版 28）

土師器皿（311 ～ 314）　311 は褐色の胎土を持ち、ユビオサエの後、外面体部中位までをナデ調整する。312 は橙褐色の胎土を有し、口縁部のナデは体部下半に及ぶ。313 は褐色の胎土を有し、口縁部のナデは体部下半に及ぶ。314 は中皿である。橙褐色の胎土を有し、底部はへそ皿状に盛り上がる。口縁部のナデは体部中位に及ぶ。

土師器釜　315 は大和 H 型のものである。胎土は淡褐色で焼成は良好である。内面オサエ調整、外面ナデ調整を施す。

土師器てづくね土器　316 は褐色系の胎土を持ち、底部には黒斑を有する。器壁は厚く、全体的に粗雑である。

瓦質土器円形浅鉢　317 はスタンプ等は確認できない。表面劣化のため調整等も不明である。胎土は灰白色で精良、イブシも良好である。

瓦器椀（318・319）　318 は口縁端部に沈線を持ち、高台を持たない。内面にはハケ調整の痕跡が確認できる。Ⅳ段階 B 型式のものである。319 は口縁端部に沈線を持ち、外底面に退化した貼り付け高台を有する。Ⅳ段階 A 型式のものである。

東播系須恵器鉢　320 は黒色粒子を含む胎土を有し、内外面回転ナデ調整を行う。口縁部は重ね焼きにより暗灰色を呈する。

瓦質土器甕　321 は内外面ナデ調整を施し、体部外面にはタタキ痕が確認できる。頸部外面にはタタ

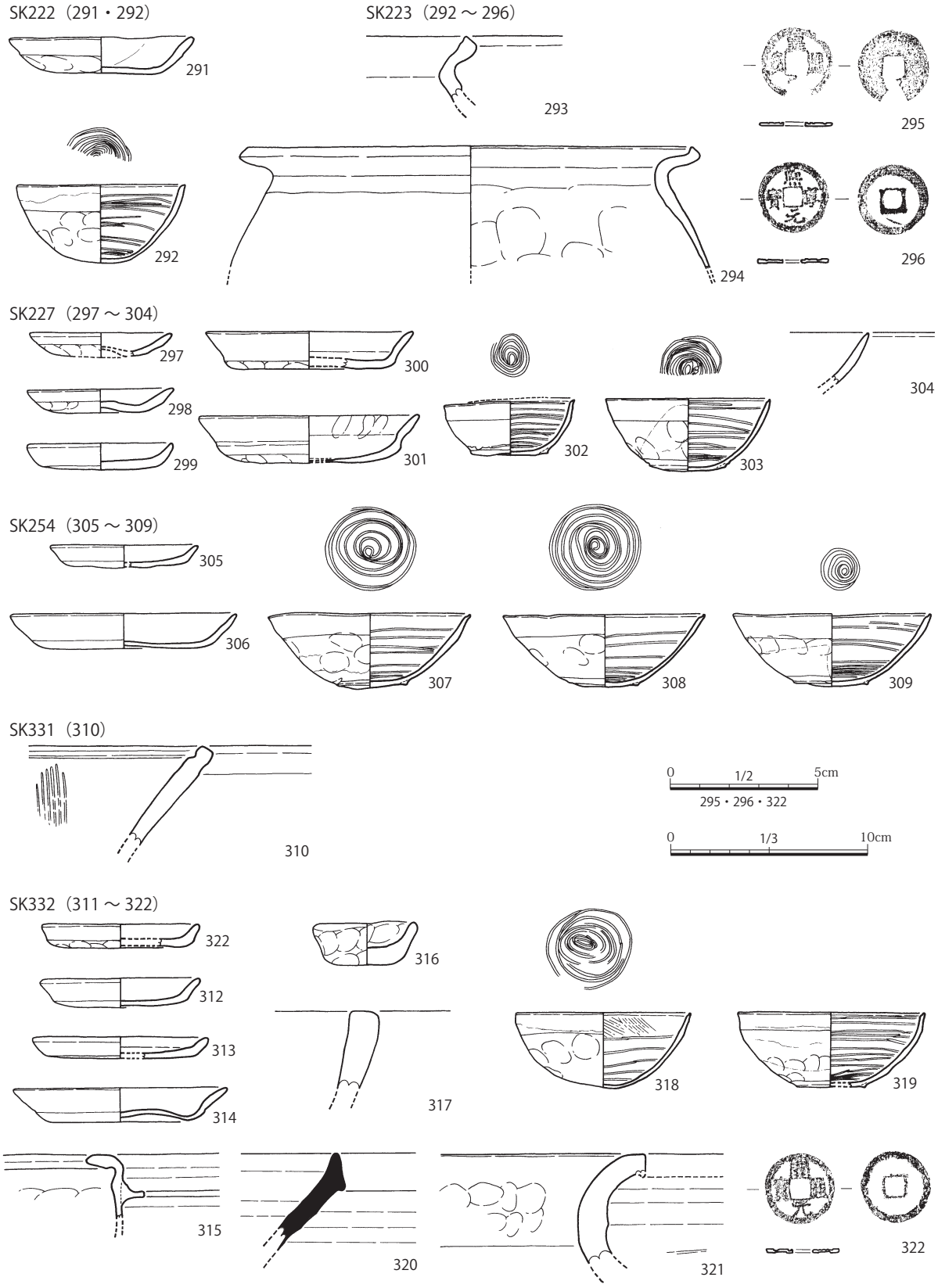


図 72　SK222・223・227・254・331・332 出土遺物実測図（S=1/2・1/3）

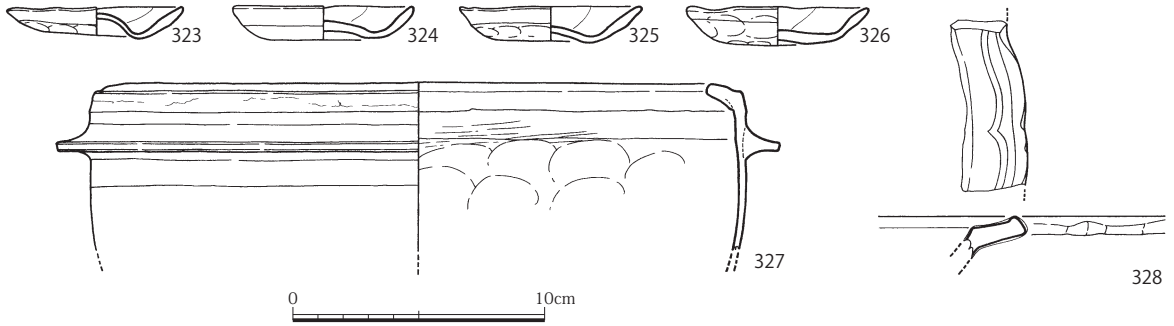


図 73　SK450 出土遺物実測図（S=1/3）

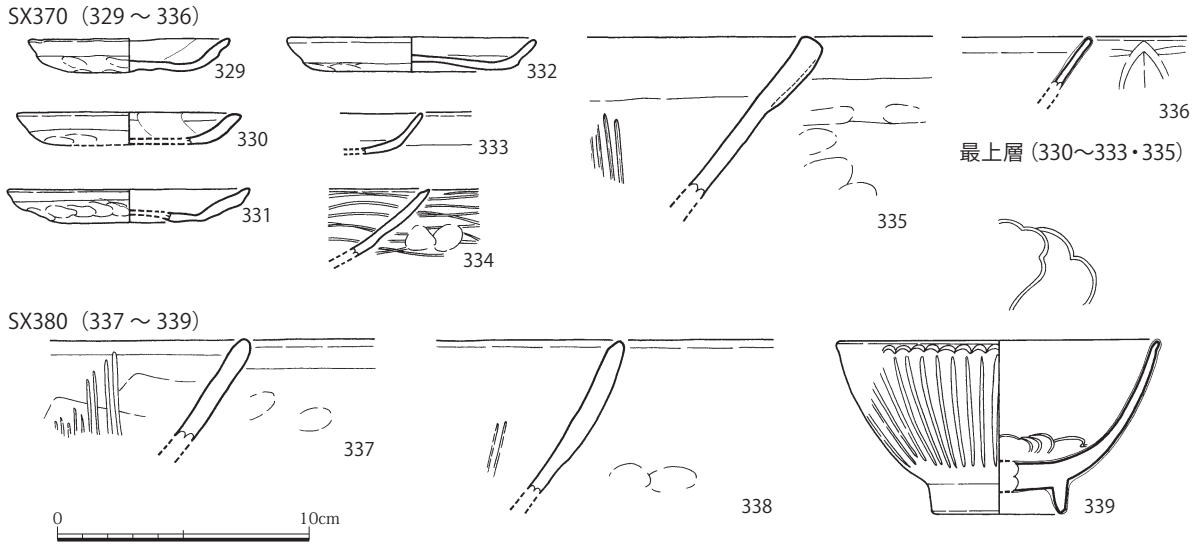


図 74　SX370・380 出土遺物実測図（S=1/3）

キの痕跡は見られない。口縁端部は小さく縁帯を形成する。Ⅰ-2 類のものである。

銭貨　322 は開元通寶（初鋳 621 年）である。径が小さく薄い。背面は無紋である。

SK450 出土遺物（図 73）

土師器皿（323 ～ 326）　いずれも口径 7cm 代の小皿である。橙褐色の胎土を有し、赤色粒と微細な金雲母を多く含む。ユビオサエの後、外面口縁部上半をナデ調整する。器形のゆがみが著しい。

土師器釜　327 は大和 H 型のものである。内面オサエ調整、外面ナデ調整を施す。

輸入磁器青磁皿　328 は龍泉窯系大皿である。口縁部を水平に開いて輪花に仕上げる。釉薬は暗色に発色する。

SX370 出土遺物（図 74、図版 28）

【最上層出土遺物】

土師器皿（330 ～ 333）　330 は褐色の胎土を有する。ユビオサエの後、体部外面中位までナデ調整する。331 は橙褐色の胎土を有する。外反気味の体部を有し、口縁部上端のみナデ調整を行う。332 は橙褐色の胎土を有し、比較的均整な器形を有する。体部のナデ調整はやや強く、底体部境界付近に軽い稜線ができる。333 は淡褐色の胎土を有するいわゆる白土器系に相当する。体部外面のナデは下半に及ぶ。

瓦質土器擂鉢　335 は内面ナデ調整、外面ユビオサエの後、口縁部をナデ調整する。外面にはピンホール状の剥離が多数見られる。A 型式のものである。

【そのほかの層位出土遺物】

土師器皿　329 は橙褐色の胎土を持ち、胎土内に赤色粒を多く含む。ユビオサエの後、体部上半をナデ調整する。

瓦器椀　334 は広く開く体部を持ち、内面には粗い圏線ミガキ、外面に不規則なミガキを施す。口縁端部には沈線を持ち、イブシは良好である。Ⅲ段階 C 型式のものである。

輸入磁器青磁椀　336 はⅡ類のものである。鎬蓮弁はヘラで成形する。釉は比較的厚い。

SX380 出土遺物（図 74、図版 28）

瓦質土器擂鉢（337・338）　337 は内面ナデ調整、外面口縁部をナデ調整する。体部外面には掌圧痕が多数残る。擂目を口縁部付近まで施す。C 型式のものである。338 は二次焼成のため調整等は不明である。D 型式のものである。

輸入磁器青磁椀　339 は龍泉窯である。外面に細蓮弁、内面に花文をヘラ書きする。外底面が露胎である以外は、高台接地部を含め全面施釉する。

表土出土遺物（図 75）

軒平瓦（340・341）　340 は宝珠文軒平瓦である。瓦当貼り付けによって成形し、瓦当裏面は縦方向のケズリ調整、平瓦部との接合部は横方向にナデ調整する。瓦当裏面下端は面取りを行う。瓦当面には離れ砂を使用する。薬師寺や摂津久安寺に同文瓦が存在する。大和中世Ⅶ期のものである。341 は瓦当貼り付けで成形し、瓦当面に離れ砂を持たない。瓦当面上端は小さく面取りする。

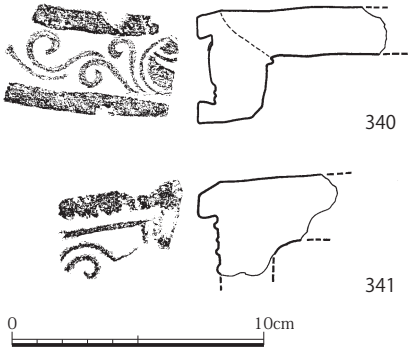


図 75　表土出土遺物実測図（S=1/3）

註

（1）井上主税氏（関西大学）、趙晟元氏（釜慶大学校博物館）のご教示による。

《参考文献》
奈良県立橿原考古学研究所 2003『栗原カタソバ遺跡群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第 65 冊

第 4 章　SD240 埋土底部の微化石分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
田中義文・井上智仁・辻　康男

はじめに

SD240 底部の埋没環境に関する情報を得ることを目的に、珪藻分析、花粉分析、寄生虫卵分析を実施した。以下にその結果を示す。

1. 試料

今回の分析地点は、14 世紀代に形成されたＶ字状をなす SD240 である。本溝は、上端部を SD100 によって再掘削される。SD240 の埋土については、1 層から 10 層の単位に区分される（図 76）。

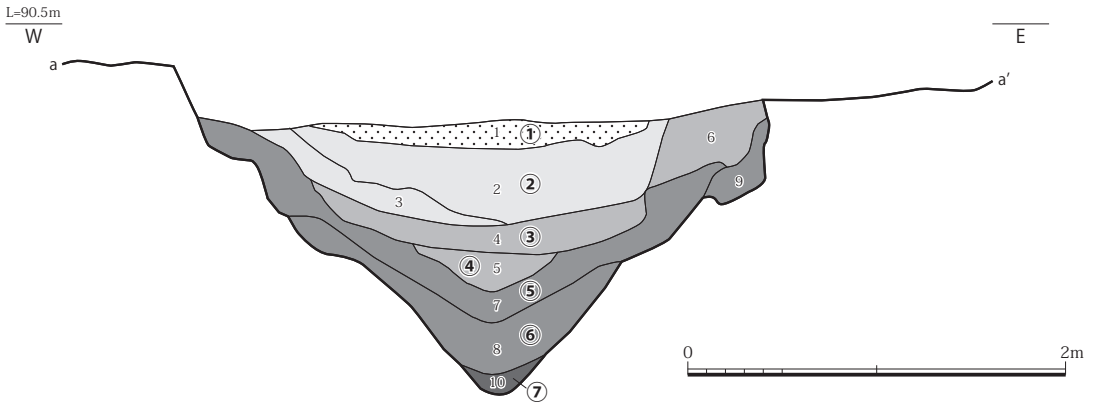


図 76　分析試料採取位置と SD240 の堆積状況

分析試料は、溝の中心部分を埋積する、下位から 10、8、7、5、4、2、1 層の順に採取されている。採取試料は、一部崩れた小塊状をなす不定方位の堆積物試料である。

これらの採取試料は、上位から 1 層（試料番号①）、2 層（試料番号②）、4 層（試料番号③）、5 層（試料番号④）、7 層（試料番号⑤）、8 層（試料番号⑥）、10 層（試料番号⑦）の 1 ～ 7 の分析試料番号が与えられている。このうち、今回分析を行うのは、溝底部の 10 層（試料番号⑦）である。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

湿重約 5g をビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤（ヘキサメタリン酸ナトリウム）を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を 4 ～ 5 回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸 600 倍または 1000 倍で同定、計数する。珪藻化石の同定と種の生態性については、Lange-Bertalot（2000）、Hustedt（1930-1966）、Krammer & Lange-Bertalot（1985 ～ 1991）、Desikachary（1987）などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石を生態性で分類し、表に示す。また、堆積環境を考察するために珪藻化石が 100 個体以上産出した試料について珪藻化石群集作成する。

（2）花粉分析・寄生虫卵分析

花粉分析・寄生虫卵双方の相関をみるため、基本的に同一方法で分析する。概査の結果、寄生虫卵が重液分離を行わないと検出されないほど少ないことが確認できたため、以下の処理を実施する。10cc を秤量し、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mm の篩による篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去を行い、有機物を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下で観察する。

3. 結果

（1）珪藻分析

結果は、表 2、図 78 に示す。分析試料からは、101 個体の珪藻化石が産出した。保存状態は、壊れた殻が多いため、不良である。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。塩分に対する適応性は、貧塩不定性種が優占する。次に pH に対する適応性は、pH 不定性種が優占するが、好酸性種も 30％程度産出する。流水に対する適応性は、流水不定性種が優占する。なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群であるが、本試料では陸生珪藻が 80％以上産出する。産出した種は、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica*、*Pinnularia subcapitata* 等である。

表 2　珪藻分析結果

種　　類	生態性			環境	
	塩分	pH	流水	指標種	⑦
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	22
Luticola mutica (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	16
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	13
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		4
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	3
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	35
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	1
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		5
海水生種					0
海水～汽水生種					0
汽水生種					0
淡水～汽水生種					0
淡水生種					101
珪藻化石総数					101

凡例

塩分・pH・流水に対する適応性

H.R.:塩分濃度に対する適応性
- Euh　:海水生種
- Euh-Meh:海水生種-汽水生種
- Meh　:汽水生種
- Ogh-hil:貧塩好塩性種
- Ogh-ind:貧塩不定性種
- Ogh-hob:貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk:貧塩不明種

pH:水素ｲｵﾝ濃度に対する適応性
- al-bi:真ｱﾙｶﾘ性種
- al-il:好ｱﾙｶﾘ性種
- ind　:pH不定性種
- ac-il:好酸性種
- ac-bi:真酸性種
- unk　:pH不明種

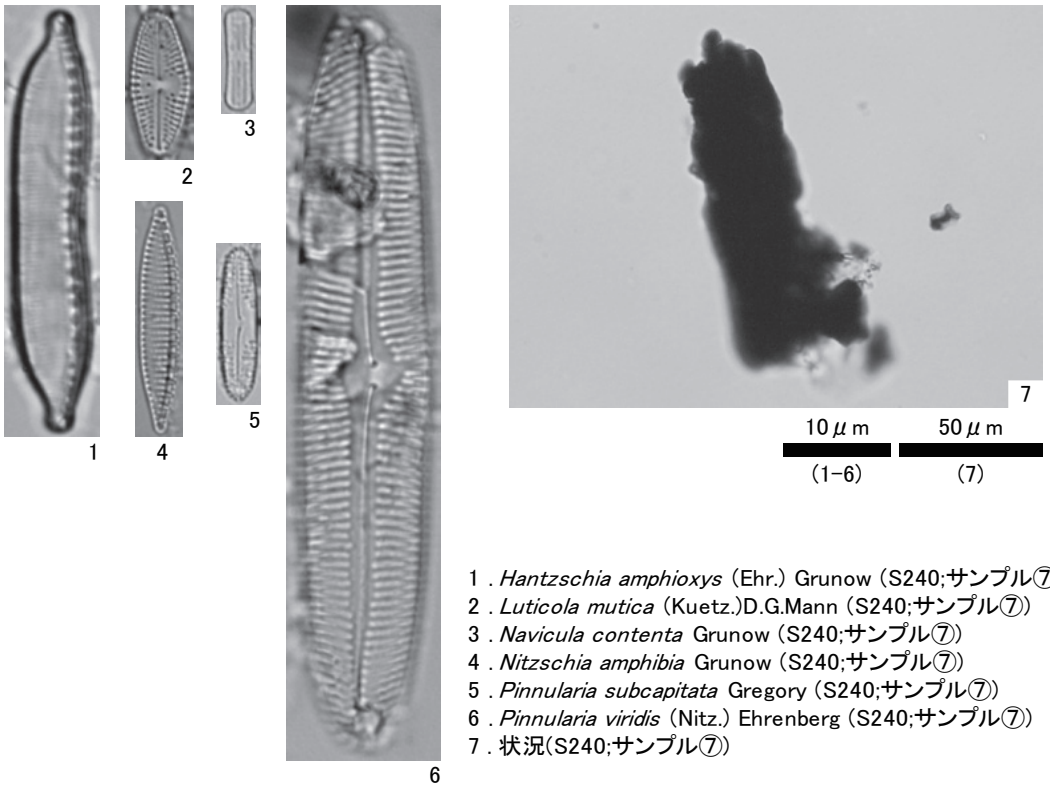
C.R.:流水に対する適応性
- l-bi:真止水性種
- l-ph:好止水性種
- ind :流水不定性種
- r-ph:好流水性種
- r-bi:真流水性種
- unk :流水不明種

環境指標種

O:沼沢湿地付着生種（安藤，1990）
S:好汚濁性種　T:好清水性種　U:広適応性種（以上はAsai,K. & Watanabe,T.1995）
RI:陸生珪藻（RA:A群,RB:B群、伊藤・堀内，1991）

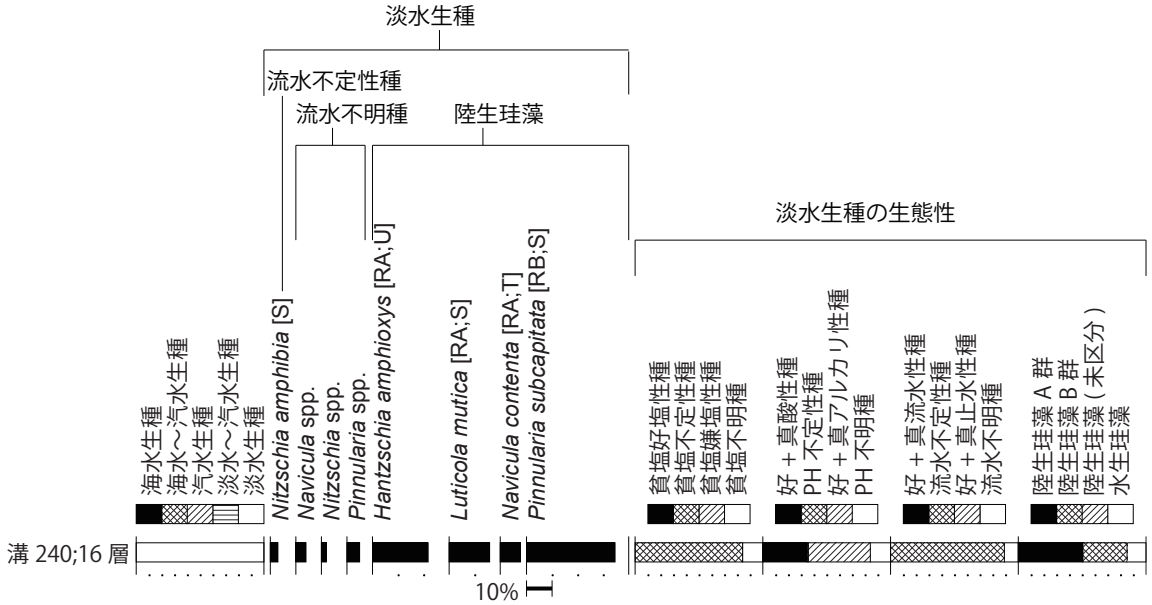
(2) 花粉分析・寄生虫卵分析

分析残渣はほとんど残っておらず、花粉化石、寄生虫卵も認められない。微量存在する分析残渣は、微粒炭を含む黒～黒褐色の植物遺体がわずかに認められる程度である。



1 . *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (S240;サンプル⑦)
2 . *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann (S240;サンプル⑦)
3 . *Navicula contenta* Grunow (S240;サンプル⑦)
4 . *Nitzschia amphibia* Grunow (S240;サンプル⑦)
5 . *Pinnularia subcapitata* Gregory (S240;サンプル⑦)
6 . *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (S240;サンプル⑦)
7 . 状況(S240;サンプル⑦)

図 77　珪藻化石・花粉プレパラート内の状況



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。100個体以上検出された試料について示す。

環境指標種

S:好汚濁性種 T:好清水性種 U:広適応性種(以上はAsai & Watanabe,1995)

RI:陸生珪藻（RA:A群,RB:B群;伊藤・堀内,1991）

図 78　珪藻化石群集

4. 考察

(1) 遺跡の立地

図 79 に、報告者の地形判読結果を示した地形学図を示す。本図および奈良県（1985）の土地分類図における地形分類図によると、石川土城遺跡の遺跡範囲は、丘陵裾部からその前面の台地上に広がることが読みとれる。今回の調査区については、台地部分の平坦面上に存在する。本遺跡周辺の丘陵については、明日香・巨勢丘陵に地形区分される領域に含まれる（奈良県 1985）。丘陵は、本遺跡の東側にかけて広がる。丘陵の基盤は、主として風化が進行した花崗岩類によって構成されるが、場所によってくさり礫を含む風化した層厚数 m 程度の砂礫層も分布するとされる（奈良県 1985）。

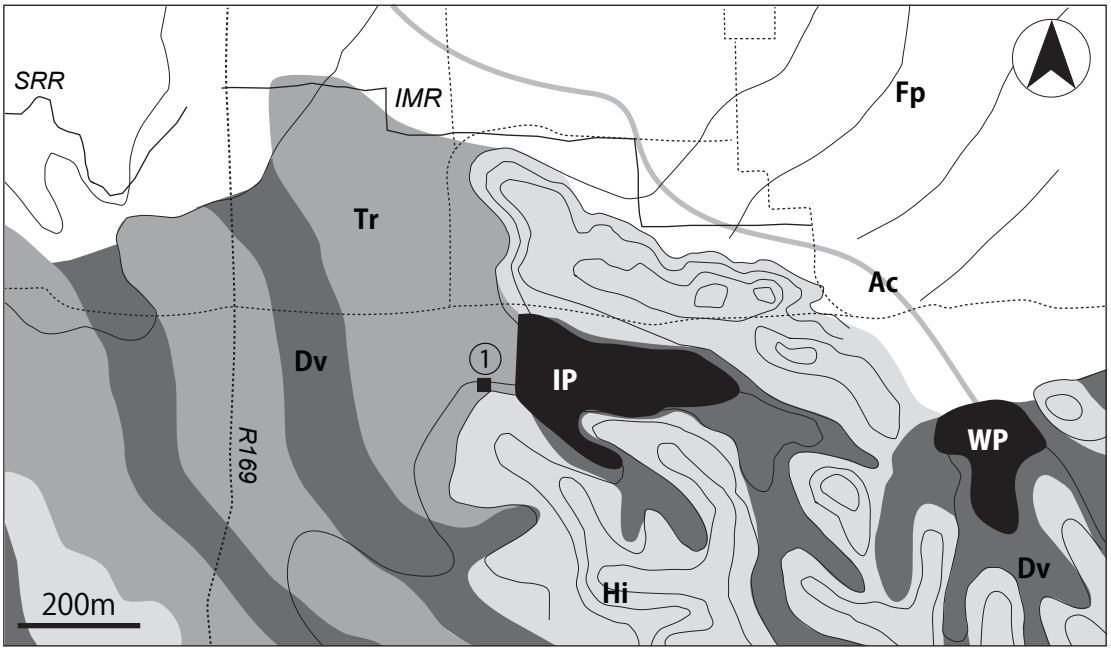
いっぽう、台地については、本遺跡の西側に広がっており、南東から北西方向へ伸びる開析谷が形成されている。台地では、これまでに構成層の記載などが報告されていない。このようなか、2014 年度に実施された奈良県立橿原考古学研究所による台地の裾部付近に位置する藤原京の発掘調査では、台地構成層が風化の著しく進行した礫層からなることが報告されている（鈴木編 2017）。

今回の調査区では、風化した砂礫層の累重が認められず、地表なす基盤が砂質の花崗岩の風化土層で構成される [(1)]。

(2) 分析地点の堆積環境

1）溝埋土の記載

SD240 については、風化が進行した基盤岩を深く掘削して構築されている、この基盤岩については、産業総合研究所の web 上での地質図閲覧サービスの地質図 Navi によると、前 - 後期白亜紀（約 1 億 2000 万～ 9000 万年前）の花崗閃緑岩からなることが確認できる。



・地形　Hi：丘陵 Tr：台地 Dv：開析谷 Fp：氾濫低地 Ac：旧流路 ┈┈ 道路
・流路・池　MR：芋洗川 SRR：桜川　IP：石川池 WP：和田池　・調査地点　①：調査地
・等高線は大正 11 年の地形図をトレース

本図は奈良県立橿原考古学研究所の鈴木編（2017）の報告書所収の図 69 を一部修正・加筆して転載した。

図 79　調査地周辺の地形学図

溝埋土の検出写真[(2)]によると、基盤岩部分は、下方に白色を呈する層準、上方に赤褐色を呈する層準が存在することが予想される。花崗岩類などの風化土層については、土質工学や地形学などにおいて、一時的な風化産物であり明確な岩石組織を残しているサプロライト（一般には「まさ土」と呼ばれる）と、それが極端に風化して土壌化した二次産物であるラテライトの２つ層準に区分することがある（西田 1991、松澤ほか 2015）。松澤ほか（2015）によると、花崗岩類のラテライトは、赤褐色を呈するとともに、泥分が少なく砂質であることが報告されている。このラテライトの表層部には、土壌層位のA 層をなす表土層の有機質土層が載ることも指摘されている。

上記のような研究結果をふまえると、本調査区の花崗閃緑岩最上部の風化土層については、上記の白色をなす下方がサプロライト、赤褐色をなす上方がラテライトに対比される可能性が高い。これらの本調査区の風化土層は砂質であり、かつ降雨後にかなり早く地表が乾燥することが発掘調査によって確認されている[(3)]。このことから、基盤岩の風化土層の透水性は、かなり良いと解釈される。

なお、採取試料の岩質と溝埋土の断面写真[(4)]の観察にもとづくと、試料採取部分の溝埋土については、以下のような記載が示される。

１層：赤褐色を呈する細礫を含む多量のシルト混じりの中粒砂～粗粒砂。
２層：赤褐色を呈する細礫を含む多量のシルト混じりの中粒砂～粗粒砂。
　　偽礫（ブロック土）を多量に含む。
４層：褐色を呈する多量のシルト混じりの細粒砂～中粒砂。
５層：褐色を呈する多量のシルト混じりの細粒砂～中粒砂。
７層：褐色を呈する多量のシルト混じりの細粒砂～粗粒砂。
８層：赤褐色を呈するシルト混じりの中粒砂～極粗粒砂。
10 層：褐色を呈するシルトを僅かに含む細粒砂～極粗粒砂。

溝埋土の断面写真観察では、すべての層準で塊状無層理の層相をなし、流水による堆積を示す葉理などの堆積構造が認められない。このことから、溝埋土の堆積営力としては、大気下での重力性の緩慢な斜面移動である土壌クリープや、雨食等による非常に弱い水流などが想定される。

上記の記載から、溝埋土の土色については、赤褐色系（10、8、3、2、1 層）と褐色系（7、5、4 層）の２つに大別されることがうかがえる。このうち、赤褐色系の埋土については、上述の風化土層の記述にもとづくと、ラテライトに由来する可能性が高いことが示唆される。いっぽうで、褐色系の埋土については、その土色から赤褐色系に比べ腐植を相対的に多く含んでいることが予想される。この腐植については、当時の表土層に由来することが推測される。

また、岩質については、すべての層準が砂質堆積物で構成されることが認識できる。この点については、松澤ほか（2015）で指摘された花崗岩類の風化土層の粒度組成とも調和的である。溝内では、すべての層準で滞水環境や湿地環境を示唆するような泥層や有機物挟在層などが認識できない。このような状況は、調査区の地下水位がかなり低かったことや、溝底の下方への透水性がかなり良かったことが要因の１つと想定される。調査区の地下水位の低さは、本遺跡が台地上に立地することと大きく関係すると考えられる。溝底の下方への透水性の良さは、発掘調査によって確認されている。

2）溝埋土の埋没過程

溝最下部を埋積する 10 層は、赤褐色系の埋土を呈する。層位と土色から、本層については、溝掘削

後の早い段階で溝底へ流入した、ラテライトを主とする再堆積物と推測される。10 層を覆う 8 層は、相対的に赤みの強い土色をなす。本層には、断面写真の観察からは不明瞭ながら偽礫が含まれるように思われる。10 層、8 層は、掘削され長い時間が経過しておらず裸地が多く存在するような溝斜面上部や近傍の地表などに露頭する基盤のラテライト部分が、雨食や土壌クリープなどによって再堆積したものと推測される。

8 層は、褐色系の連続する 7、5、4 層に覆われる。これらの層準については、下位の 7 層から 5 層に向かって相対的に上方にやや細粒化するとともに、褐色の程度も強くなる。これらの記載から、7、5、4 層は、周囲の表土に由来する物質を多く含む堆積物と考えられる。さらに、溝内の埋没環境については、上位に向かって堆積速度が遅くなり、安定化の傾向を示していたことが推定される。また、褐色の程度は、最上部の 4 層で強くなる。このことからは、4 層段階において、溝内でも土壌化が進行していたことが疑われる。

上記をふまえると、7、5、4 層の形成時期は、溝の埋積が進行しつつあったと解釈される。このことから当該期には、遺構の機能期から放棄（放置）段階に移行しつつあったことが想像される。構成層に腐植が含まれるようになることから、7、5、4 層段階には、溝などの遺構掘削時の地表撹乱の影響が相対的に弱まり、調査区とその周辺で草地を中心とした植生が回復してきたことが予想される。特に、4 層の時期には、溝の埋積が進み斜面が緩やかになった側壁斜面、そして周囲の地表が一連の土壌帯となっていたことも想定される。

4 層は、偽礫を多量に含む赤褐色系の 8 層、9 層によって埋積される。この層相から、当該層は、溝に充填された人為的な客土と考えられる。この段階に、溝は人為的に埋め立てられたと考えられる。

（3）微化石分析結果

1）花粉化石・寄生虫卵

10 層では、花粉化石・寄生虫卵が含まれない。堆積物中の微化石の保存は、堆積段階および埋没後の土壌環境が水浸かりの嫌気的（還元的）状態で良く、好気的（酸化的）状態で相対的に不良となる傾向がある（Retallack2001; 松井 2003）。上述のことから、分析層準である溝底部は、好気的土壌環境が維持される状態にあったと考えられ、上述の埋没状況の検討結果とも調和的である。このことから、10 層中の花粉化石・寄生虫卵のうち、花粉化石は、そのほとんどが堆積後に風化・消失したとみなされる。いっぽう、寄生虫卵については、人間の糞便等によって多く供給されるため、溝内へそのような汚染物質の流入がなければ含まれない。今回の分析結果は無化石であるため、16 層段階に寄生虫卵が流入するような状況であったかどうか、さらに埋没後に消失したかどうか、そのいずれについても判断できない。

なお、堆積物中の化石の密集程度は、生物遺骸の供給量と堆積速度との関係によって決定される（近藤 1998）。このうち、化石が密集する層準の形成に関しては、堆積速度の低下が要因となることが現実的には多いとされる（近藤 1998）。10 層については、層位から溝の初期段階の流入土砂である可能性が高く、堆積速度も大きかったことも想定される。従って、本層では、元々堆積物に含まれる花粉化石が少なかった可能性もある。

2）珪藻化石

珪藻化石については、保存がかなり不良ながら、かろうじて統計的に扱えるだけの個数が検出される。珪藻化石も花粉化石と同様に、好気的状態で不良となる傾向にあるが、今回は相対的に珪藻化石の保存が良好であった。これまでの弊社の分析事例からは、花粉、珪藻化石の双方で同調的に保存が不良とな

る事例や、どちらかいっぽうが不良となる事例など様々パターンがあることが確認できる。このうち、どちらかいっぽうが不良となる事例については、その要因を検討に至らない場合が多い。今回の分析結果についても、相対的に珪藻化石の保存が良かった要因は不明である。

10 層から特徴的に産出した珪藻化石の生態性を見てみると、陸生珪藻がほとんどを占める。陸生珪藻は、コケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉 1986）である。特に、本試料から産出した陸生珪藻は、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集である（伊藤・堀内 1989;1991）。また、弊社のこれまでの分析事例などをふまえると、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占（70 ～ 80% 以上）する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であった可能性が高いことを経験的に指摘できる。これらのことから、10 層の堆積時期の溝底部では、定常的に水で堆積物が飽和もしくはそれに近い、滞水域や湿地のような環境ではなかったと考えられる。このような分析結果については、上述の溝の埋没状況や花粉化石の保存状態とも調和的とみなされる。少ないながら珪藻化石が保存されていたことをふまえると、溝底部は、完全に乾燥した状態よりも湿ったジメジメするような地表環境下にあったことが想定される。

註

（1）・（3）調査担当者からのご教示による。（2）・（4）調査担当者に閲覧させていただいた。

≪引用文献≫

安藤一男 ,1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用 . 東北地理 ,42,73-88.

Asai Kazumi & Watanabe Toshiharu,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35-47.

Desikachary T.V.,1987,Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation,328p.

Hustedt F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Hustedt F., 1937-1938, Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ ~ Ⅲ . Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.

Hustedt F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

伊藤良永・堀内誠示 ,1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討 - 陸生珪藻の細分 -. 日本珪藻学会第 10 回大会講演要旨集 ,17.

伊藤良永・堀内誠示 ,1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 . 日本珪藻学誌 ,6,23-44.

小杉正人 ,1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義 - わが国への導入とその展望 . 植生史研究 ,1,9-44.

小杉正人 ,1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用 . 第四紀研究 ,27,（1）,1-20.

近藤康生 ,1998, 化石密集層 . 堆積学辞典 . 堆積学研究会編 , 朝倉書店 ,75-76.

Krammer K. and Lange-Bertalot, H., 1985, Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica, vol. 9, p. 250.

Krammer K. and Lange-Bertalot H., 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2（1）: 876p.

Krammer K. and Lange-Bertalot H., 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（2）: 596p.

Krammer K. and Lange-Bertalot H., 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（3）: 576p.

Krammer K. and Lange-Bertalot H., 1991a, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（4）: 437p.

Lange-Bertalot H., 2000, ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA : Annotated diatom micrographs. Witkowski A.,Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 925p.

松井　章 ,2003, 環境考古学の歴史と実践 . 環境考古学マニュアル , 同成社 ,6-16.

松澤　真・木下篤彦・高原晃宙・石塚忠範 ,2015, 花崗岩地域における土層構造と表層崩壊形状に与える山地の開析程度の影響 . 地形 ,36,23-48.

奈良県 ,1985, 土地分類基本調査　吉野山 .

西田一彦 ,1991, 風化残積土の特性と工学的問題 . 土と基礎 ,39（6）,1-8.

Retallack,G.J., 2001, Soil and Past second edition.Blackwell Science, 404p.

鈴木一議 ,2017, 藤原京右京十一条三坊・四坊 . 奈良県橿原考古学研究所 ,120p.

第５章　自然科学分析へのコメント

本調査ではSD240の堆積環境を知るために珪藻化石と花粉分析を行った。最下層（10層）は､珪藻･花粉ともに残存状況は良好でなかったが、陸生珪藻が80％と優占し、滞水状況にはなかったことが明らかである。土壌の観察からは、最下層は好気的環境で、花粉化石の少なさから短期間に基盤のラテライトが流入して埋没したと考えられる。こうした自然科学分析から見られる最下層の堆積環境は、土層観察から得られた現地での考古学的所見と矛盾しない。

これに対し４・５・７層では土色から有機物含有量の増加が確認され、堆積が緩慢となり放棄されて埋没が進んだ状況、２・３層は偽礫の存在から短期間に埋没した人為的埋土と推定されている。これは微化石の観察ではなく、現地での土層観察と同じ土壌の観察による結果であり、双方の結果が一致するのは自然なことと言える。

さて、こうした結果を出土遺物の年代観から検証してみる。最下層に相当する赤褐土（10層）からはⅣ段階Ａ型式の瓦器椀が出土していることから14世紀前半に位置づけられる。これに対し、下層に位置づけられる暗灰土（７・８・９層）からはⅡ-2類瓦質土器甕、ＣⅢ類瓦質土器釜、中層に位置づけられる灰褐土（４・５層）からは古瀬戸後Ⅱ期などが出土しており、14世紀半ば～15世紀前半の時期が想定できる。最終埋土に相当する暗褐土（１・２・３層）からはＥ・Ｆ型式の瓦質土器擂鉢が出土しており、15世紀後半の埋没が考えられる。これら遺物の年代観によっても、10層と９層以上の間に時間幅があり、中層は150年近い時間幅を持つこと、これに対し上層は15世紀後半のまとまった遺物が出土しており、遺物の年代観から推測される堆積状況も、微化石や土層観察から得られた堆積状況と一致すると言えよう。

第 6 章　調査のまとめ

第 1 節　遺構の変遷について

（1）1 期の遺構（6 ～ 13 世紀）

本格的な遺構の展開は SD220 に代表される古墳時代中期以降である。SD220 は TK47、MT15 の 2 形期に渡り、滑石製臼玉なども混じるが、出土状況はそれらが混在した状況で一括出土している。周辺には調査地南東部石川池（剣池）のほとりに中山塚古墳群や、五条野植山古墳、植山北古墳などが存在

図 80　2 期の遺構（13 世紀末～ 15 世紀初頭）（S=1/400）

しており、古墳群一端が調査地付近まで達していた可能性は十分考えられる。SD220 出土遺物はこうした調査地付近にかつて存在した未知の古墳からの流入・投棄品であった可能性を考えておきたい。

7 世紀には焼土坑 SK020、大型方形土坑 SK030、掘立柱建物 SB130 が設置される。SK030 は被熱した角閃石安山岩板石が出土しており、何らかの工房的要素が強いと思われる。残念ながら SK020・SK030 ともに金属加工を示す遺物は出土していない。

出土遺物が少なく、年代決定には困難が伴うが、7 世紀でも中葉～後半のものではないかと思われる。当地における 7 世紀の遺構については石川精舎伝承との関係が注目されるが、これを積極的に検討できる成果は得られなかった。

（2）2 期の遺構（13 世紀末～ 15 世紀初頭）（図 80）

13 世紀末に遡る遺構はほとんどない。大半は 14 世紀前半以降のものである。調査区南端に大規模な落ち込み SX370（堀？）が存在し南側を画する。また、北側の台地を取り囲む形で SD240 が掘削され、両者の間の空間には多数の袋状土坑が掘られる。これらの土坑は断面形状フラスコ状で、一見する

図 81　3 期の遺構（15 世紀前半～半ば）（S=1/400）

と土り採穴に思えるが、SK332 のように壁面に杭の痕跡が残るものや、SK186 のように内部で火を使用した痕跡のあるものが存在し、土坑自体が何らかの機能を持っていた可能性が高い。工房や貯蔵庫など特殊な用途に使用された可能性を想定しておきたい。これらの土坑群は初期の段階で設置され、その後すぐに人為的に埋め戻される。

土坑群が埋められたのち、SB070・360・480 などの建物群が建てられる。今回は 3 棟の建物を復元したが、遺跡内には膨大な数のピットが存在し、本来は他の時期の建物も含め、複数時期に渡る多数の建物が存在していたと考えられる。ただし、台地上のピット群は大半が近世〜近代のものであり、この部分の建物については不明である。

（3）3 期の遺構（15 世紀前半〜半ば）（図 81）

SD240 は自然に埋没しつつも残存する。南端を区画した SX370 は埋没し、SD438 以南の調査区南端に整地が行われる。また、調査区西端には大溝 SD001 が掘削される。SD438 は調査区内を南北に分ける区画溝と考えられるが、区画内の建物については不明である。

図 82　4 期の遺構（15 世紀後半）（S=1/400）

（4）4 期の遺構（15 世紀後半）（図 82）

遺構数・遺物量ともに最大となる時期である。調査区中央付近、SD210 以南に整地が行われ、巨大な掘方を持つ井戸 SE190 が設置される。SE190 は掘方最上面に敷石（？）を持つ特殊な形状で、規模等から屋敷地全体の共用井戸であった可能性が高い。SD240 は埋没し、代わりに南辺を踏襲して SD260 が掘り直される。これと並行して SD280・210 が設置される。SD280 は非常に丁寧に掘られた溝で、他の溝とは機能が異なる可能性があるが、箱堀状の断面形態や柵・杭などの付帯施設の欠如などから、防御性については肯定しがたい。南半は前段階の SD438 を踏襲して SD330 が掘られる。SD330 は南へ 90 度屈曲し、この段階には南東部屋敷地の北東隅が調査区周辺に存在したものと考えられる。

位置関係から、これらの溝は屋敷地の区画溝の可能性があるが、その場合溝の共有が少なく、また溝形状にも差があるなど、個別屋敷地の独立性が強い点が指摘できる。

図 83　5 期以降の遺構（16 世紀以降）（S=1/400）

（5）5 期以降の遺構（16 世紀以降）（図 83）

遺構・遺物ともに 16 世紀前半までに終息する。SD110 が 16 世紀前半に位置づけられるが、これに伴う土坑などは確認できず、この頃には耕作地となっていた可能性が高い。その後も近世に至るまで多数の溝が掘られるが、いずれも出土遺物は少なく、また溝に伴う他の遺構は確認できないことから、16 世紀以降は一貫して耕地となっていたことが想定できる。

第 2 節　石川土城の構造について

（1）問題の所在

石川土城については先行研究がなく、その構造や性格については全く不明であった。2000 年度発掘調査を担当した米川仁一氏はその報告の中で、「すくなくとも切岸遺構や薬研掘りなど城の防御施設としての機能は揃っているが、逆に環濠集落としての要素も少なからず持っている点が問題となっている」として、その位置づけの難しさを指摘している（奈良県立橿原考古学研究所 2001）。そこで、本節では発掘調査情報と周辺地形、小字情報をもとに石川土城の基本構造とその性格を推定したい。

（2）発掘調査による情報

第 2 章でも述べた通り、この地域では橿原考古学研究所によって二次にわたる調査が行われている（図 2）。2000 年度の調査では今回の調査地の東側で、14 世紀の溝群が見つかっており、調査区北端では大型の溝が西へ向かって伸びていることが判明している。また、南端は極端に遺構が減少することも明らかになっている。2001 年度の調査は、北調査区で 13 世紀の遺物を含む池状の堆積層（石川池（剣池）か）を整地して、北端に大溝を掘る状況が確認されている。大溝からは 14 世紀の遺物が出土している。北調査区は大規模に整地を行うものの、遺構は希薄である。

以上の遺構の状況からは、2000 年度調査区北半が遺構の中心で、2001 年度調査区は遺構が希薄であることがわかる。ただし、2001 年度調査区では大規模な整地が行われており、土地利用そのものは調査区西側で行われていたとみるべきだろう。さらに、2000 年度調査区と 2001 年度調査区の間には大規模な溝が構築される。これら複数の溝はいずれも東西方向で、石川池（剣池）と接続していたと考えられ、池の水利を取り込んだ造成が考えられる。

（3）小字名、地形の観察（図 84）

調査地周辺は開発が著しく、旧地形の復元は困難であるが、昭和 36 年作成 1/1,000 地形図や、『大和国条里復原図』（奈良県立橿原考古学研究所 1981）を見ると、今回の調査地は小字「ツキヤマ」と記され、調査区東に「土城」の小字が見える。また、この土城部分の南東には尾根線が分断された切通の痕跡が見られる。さらに、この切通の対岸は「垣内口」とあることから、この切通が「土城」の境界に当たると考えられる。本明寺付近を含むべきかどうか、判断が難しいが、概ね「土城」「ツキヤマ」「垣内」の含む部分が城館的な空間と考えられる。

こうした城館部分の基本的な範囲が推定できたが、2001 年度調査では調査区全域に中世の整地と、城館部とは大きく離れた北端で 14 世紀の大溝が確認されている。この北端大溝の西側には帯状の低地部が現在も残っており、これは現在の石川集落北東部の段差へと接続する[(1)]。この段差は現在の石川集落西辺に残る幅 10m 内外の帯状小字に連結して、集落南西部の水路へつながる。さらに、2000 年度調査北端で見つかった大溝は現在の道路とほぼ一致する場所に存在しており、これも先にみた集落南

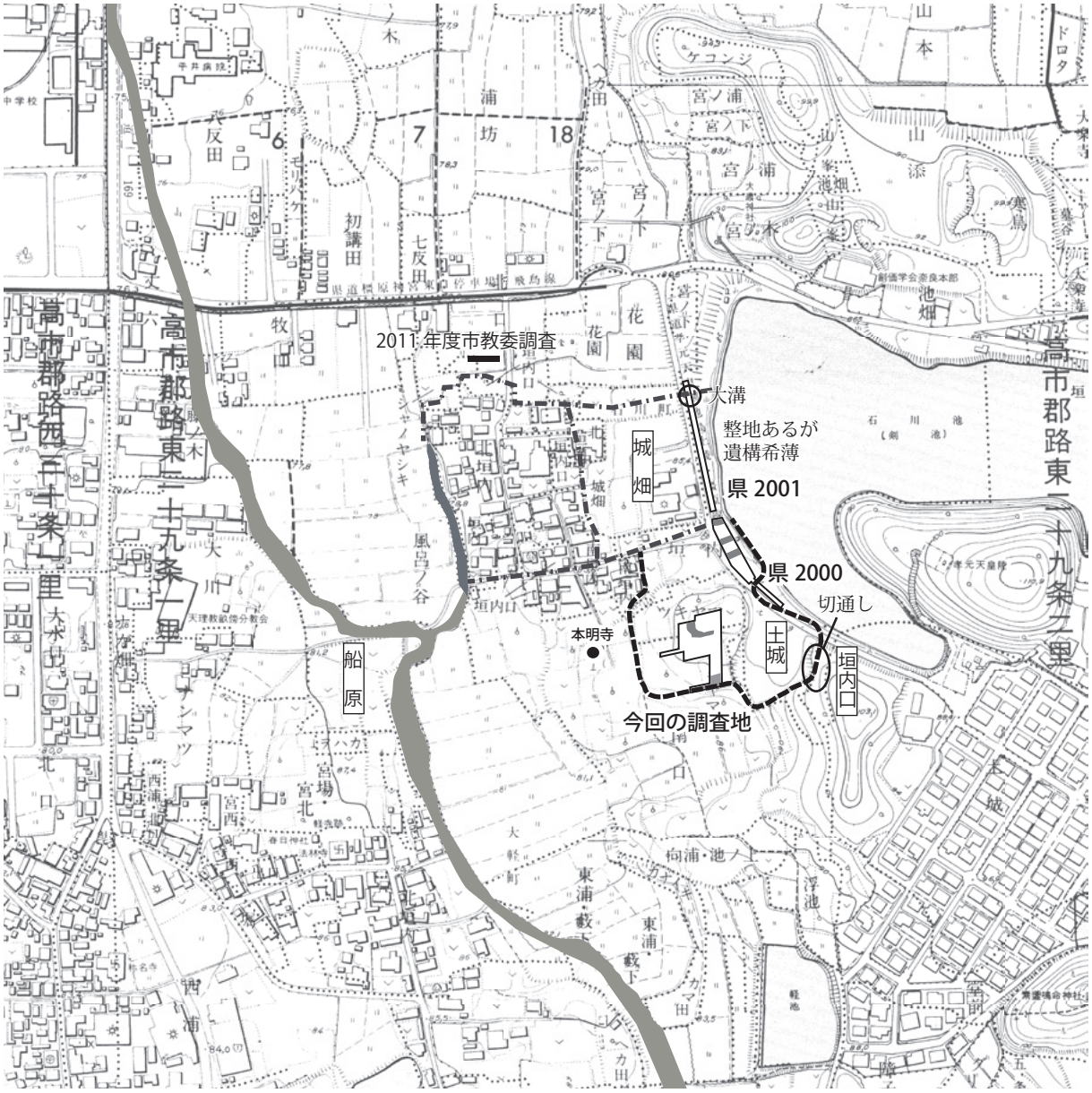


図 84　石川集落と石川土城遺跡の関係概念図（S=1/5,000）

東隅の水路へ接続する。こうした地形と小字、そして検出遺構から考えると、現在の石川集落は 14 世紀段階には方一町ないし二町前後の環濠集落として成立していた可能性が高い [(2)]。そして現在石川集落の西を流れる小河川には集落から流れ込む水路との結節点に「船原」の小字も見られる。

(4) 石川土城と石川集落の基本構造

以上のように石川土城と石川集落は、14 世紀までに集村化した石川集落に隣接して設置される城館部という位置づけを考えた。こうした集落に隣接する丘陵上に城館が営まれる事例は近隣でも複数確認できる形態であるが、なかでも桜井市磐余遺跡群は面的な発掘調査が行われて、歴史的変遷を追うことができる。以下この遺跡について概観する（財団法人桜井市文化財協会 2002）。

磐余遺跡群は石川土城から北東へ 3 キロ離れた地点にある。2000 ～ 2001 年に圃場整備事業に伴い、桜井市文化財協会によって発掘調査が行われている（図 85・86）。現在の池之内集落の南に隣接する丘陵に、大溝に区画された 15 × 20m、10 ～ 35 × 20 ～ 40m、40 × 50m の 3 つの方形（台形）区

図 85　磐余遺跡群の位置（S=1/5,000）

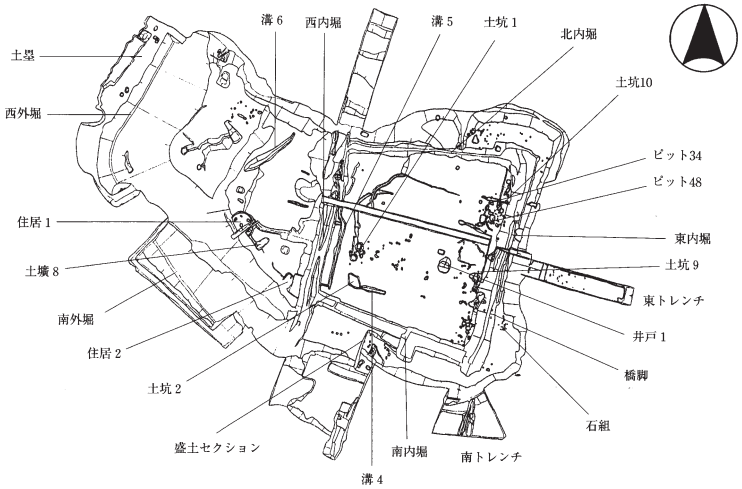


図 86　磐余遺跡群遺構図

画が設定されている。遺構の多くは 16 世紀後半に埋没するものであるが、これらの大溝は先行する大溝を掘り直したもので、掘り直し以前の堆積層からは 14 世紀の遺物が出土していることから、城館部の主要区画はいずれも 14 世紀に設置されたものを、16 世紀後半に再利用したものと考えられている。

これら丘陵部に存在する 14 世紀の複郭式城館については、これが集落と隣接して設置される居館的な存在であり、大和盆地縁辺部において類例が見られるものであることを指摘した。ところで、このような環濠集落と居館がセットになる状況は、田原本町法貴寺遺跡や同町金剛寺遺跡、大和郡山市番条集落など多数確認でき、山川均氏はこうした屋敷地について、集落との関係性の強さを基準として「内在型」と「分離型」に分けている（山川 1999）。石川土城や磐余遺跡群は内在型と分離型の中間的な形態であり、ここでは「隣接型」と仮称しておこう。こうした城館部の独立性が強く、14 世紀前半まで遡るのは高取町越智に所在する越智氏館跡に見られる形状であるが [(3)]、第２章でも指摘した通り、当地の居住者については越智氏一族である賀留氏（軽氏）の可能性が高く、「隣接型居館」は越智氏支配下に特徴的な城館形態であった可能性が考えられる。

第３節　本明寺五輪塔と採集遺物

（1）本明寺について

今回の調査区の西側には本明寺という浄土宗寺院がある。来歴は全く不明であるが、『大和志』では蘇我馬子が建てた石川精舎を考察する中で、石川精舎を当寺に比定している。境内には巨大な五輪塔が存在し、現在も馬子の墓の伝承を残している。この五輪塔については大永 23 年（1523）の久米寺石川の合戦による死者の供養塔との説もあるが、石塔の年代が異なり、詳らかではない。その年代は石川土城遺跡の形成年代に極めて近く、貴重な資料であるため、関連資料として報告しておく。併せて境内で採取した遺物についても報告する。

(2) 本明寺五輪塔（図 87）

台座を含めた総高 236cm を測る８尺塔である。台座は反花座で、高さ 27.5cm、幅 104cm を測る。反花は間弁を持つ複弁蓮華で、彫が深く古式であるが、やや傾斜角度が大きい。台座下部には納骨穴と考えられる抉りを有する。地輪は高さ 53cm、幅 78cm を測る。水輪は最大径がやや上方に位置し、高さ 55.5cm、径 75cm を測る。火輪は棟が緩やかに湾曲し、軒端は比較的強く反りあがる。高さ 45cm、幅 74cm を測る。空風輪は高さ 55cm を測り、空輪はほぼ球形を呈する。

(3) 五輪塔の年代と性格

本塔の年代について清水俊明氏は「やや方張りの水輪、軒反りの強い火輪などの形式に鎌倉時代後期の様式を示す」と評価する（清水 1984）。本塔の反花座は正応５年（1292）銘蔵骨器が出土した唐招提寺西方院証玄五輪塔に明らかに後出し、正中２年（1325）銘を持つ奈良市山添大西極楽寺所在五輪塔に近い形態を持つ。反花座の彫出深度は大西極楽寺に先行する要素にも見えることから、14 世紀第１四半期のものと考えてよいだろう。

重要なのは、台座下に納骨穴を持つ点である。この納骨穴は本来五輪塔の下に大甕を埋設し、納骨穴から火葬骨を落とし込むものであった。先に参照した大西極楽寺所在五輪塔も納骨穴を持ち、地輪には正中２年銘のほかに「大願□一結衆念仏衆敬白」と記され、納骨五輪塔が葬送互助組織である一結衆、念仏講衆によって造立されたことがわかる。一結衆の実態については村落に基盤を持つ領主クラスが想

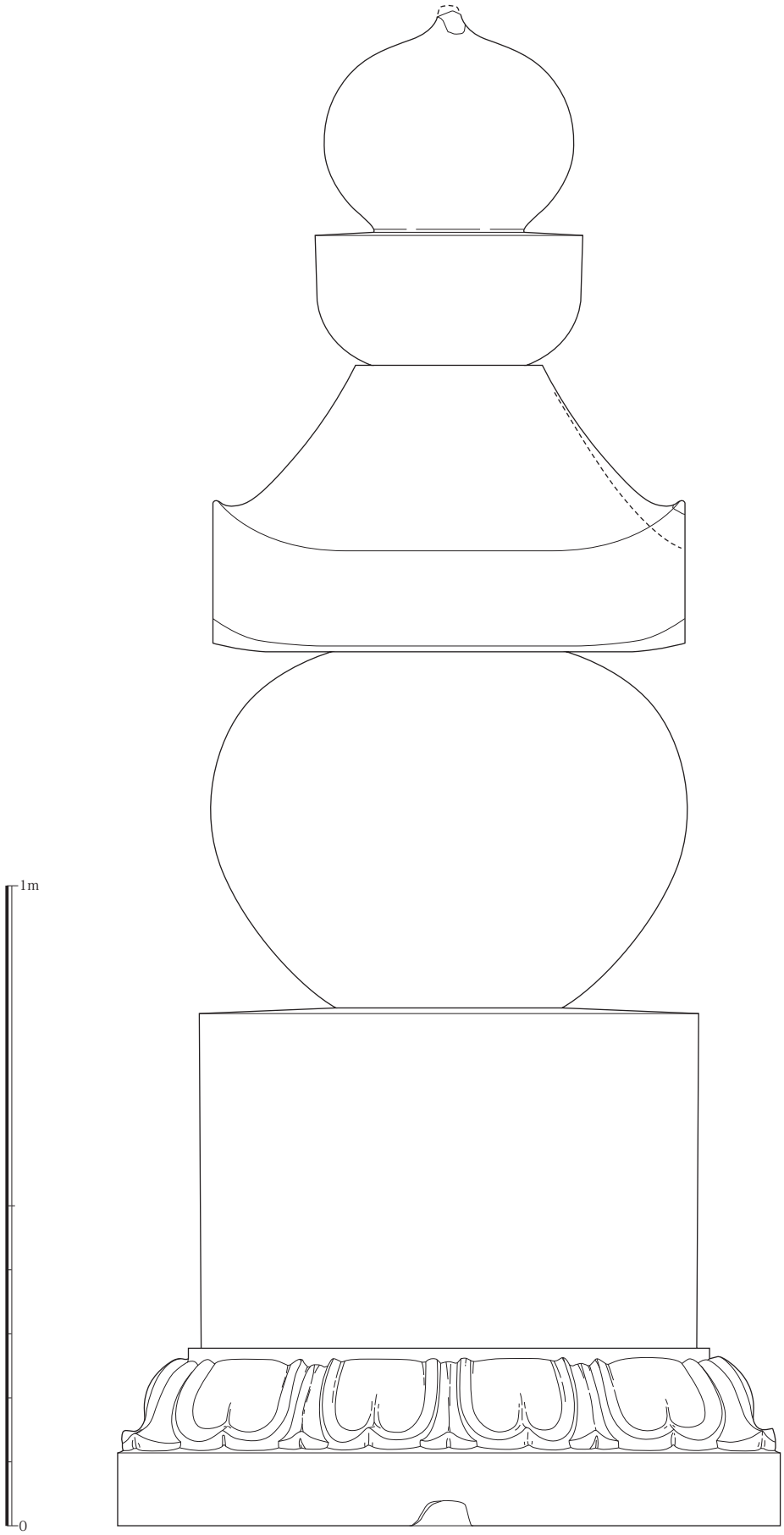


図 87　本明寺五輪塔（S=1/10）

定されており（石田 1963、木下 1969、佐藤 2006）、こうした納骨五輪塔の存在は村落に基盤を持つ武士階層の同族集団の存在が想定できる。この「武士階層の同族集団」は前節において復元した石川集落と関係を持つ石川土城の経営主体の姿と一致する。第 2 章でも述べたが、石川土城の経営主体については遺跡が所在する軽庄の荘官であった賀留氏（軽氏）を想定していた。本五輪塔の存在は賀留氏そのものを証すものではないが、石川土城の形成主体について示唆を与えるものである。

（4）本明寺採取遺物（図 88）

境内五輪塔南側に存在する塚状の盛り土内およびその崩落土から複数の遺物を採取した。いずれも中世の破片資料であったが、そのうちまとまった形のものについてここで報告しておく。

瓦質土器擂鉢　342 は底部のみの破片である。内面板状工具によるナデ調整、外面縦方向のハケ調整を施す。擂目は 6 条一単位である。

輸入磁器青磁椀　343 は龍泉窯細蓮弁文椀である。高台接地部から外底面は露胎である。釉薬は透明度が高く、暗緑色に発色する。15 世紀後半のものである。

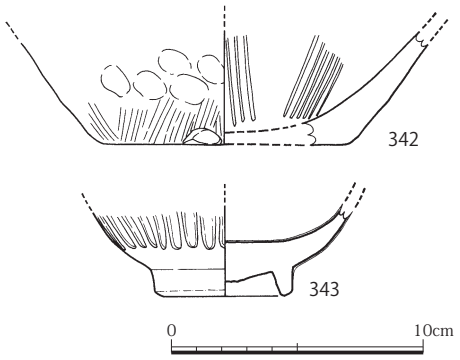


図 88　本明寺出土遺物実測図（S=1/3）

註

（1）この部分の北側隣接地では橿原市教育委員会によって発掘調査が行われており、ここでは中世の遺構は見つかっていない（橿原市教育委員会 2012）。北西部段差までが中世の集落範囲と考えられる。

（2）現在の石川集落はほぼ方一町の規模を持ち、東半分は「城畑」の小字を有する。「城畑」部分は本来集落域ではなく、城館域が 15 世紀後半以降城畑域へ移動した可能性も考えられる。今回の調査区では瓦質土器に多様性が見られず、主郭的な場所から出土することが多い瓦質土器風炉もわずか 1 点に留まる。主郭に相当する中心館が 15 世紀段階には城畑域に移動していた可能性も考えられる。

（3）山川氏は越智氏館については完全に集落から分離していることから、「分離型居館 I 類」と位置づけている。

《参考文献》

石田善人 1963「郷村制の形成」『岩波講座　日本歴史』中世 4　岩波書店

橿原市教育委員会 2012「右京十二条三・四坊の調査（橿教委 2011-2 次）」『藤原京跡 － 右京十一・十二条三坊、右京十二条三・四坊 － 』

木下密運 1969「中世の念仏講衆」『元興寺仏教民族資料研究所年報』1969 年度

財団法人桜井市文化財協会 2002『磐余遺跡群発掘調査概報Ⅱ』

佐藤亜聖 2006「石塔の成立と拡散」『鎌倉時代の考古学』高志書院

清水俊明 1984『奈良県史』7　石造美術　名著出版

奈良県立橿原考古学研究所編 1981『大和国条里復原図』

奈良県立橿原考古学研究所 2001「石川土城遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』2000 年度（第 3 分冊）

山川均 1999「居館の出現とその意義」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 9 集

第 7 章　総括

今回の発掘調査では、以下の点が明らかになった。

1. 古墳時代中期の多量の遺物を含む溝を検出した。これは周辺に存在した古墳に由来するものである可能性がある。
2. 7 世紀の工房的性格を持つ土坑、掘立柱建物を検出した。
3. 13 世紀末～ 14 世紀初頭に特殊な形状の土坑と大溝による区画が出現する。
4. 14 世紀前半に複数の溝区画や建物が展開する。
5. 遺構数、遺物量が最大になるのは 15 世紀後半である。この段階の遺物には瓦質土器の組成が単純で、奢侈品が少ないなど、居館中核の様相は見られない。
6. 16 世紀前半までにほぼ廃絶する。
7. これらの遺構は、方一町の石川集落に隣接する居館群として位置づけられる。

今後の課題としては、消滅古墳も含めた古墳群の範囲確認、14 世紀の特殊土坑の性格確定、居館部分の西側範囲の確定、石川集落内部の考古学的調査などが挙げられる。石川土城は現在ほぼ消滅してしまったが、本明寺を中心とした西半は良好に遺構が残存している可能性がある。今後も付近では開発が続く可能性があり、注意が必要である。

関連資料

図 89　検出遺構配置略図
表 3 ～ 13　報告遺物一覧（1）～（11）
表 14 ～ 22　検出遺構および出土遺物一覧（1）～（9）

図 89 遺構配置略図（S=1/200）

表 3　報告遺物一覧（1）

報告№	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径（cm） 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
図 12-1 図版 15	SD220 取り上げ③	土師器 高杯	（14.8）　-　11.9　-　9.9 90%	やや粗 ～ 2mm 長石・砂粒	良 黄橙 7.5YR7/8	
図 12-2	SD220 取り上げ㉘	土師器 高杯	14.0　-　11.0　-　8.3 80%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫	不良 明赤褐 2.5YR5/8	
図 12-3	SD220 取り上げ㉑	土師器 高杯	（13.0）　-　（6.4）　-　* 30%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫	良 橙 2.5YR6/8	
図 12-4	SD220	土師器 高杯	9.8　-　（5.8）　-　* 脚部片	粗 ～ 3mm 石英・長石	良 橙 5YR6/8	
図 12-5 図版 15	SD220 取り上げ④	土師器 壺	*　-　（10.5）　-　* 体部 100%	粗 ～ 3mm 石英・長石	良 橙 7.5YR6/6	
図 12-6	SD220	土師器 壺	*　-　（11.0）　-　* 体部 80%	粗 ～ 2mm 長石・クサリ礫	不良 橙 2.5YR6/8	
図 12-7	SD220	土師器 壺	*　-　（12.0）　-　* 10%	やや粗 ～ 3mm 長石	良 黄橙 7.5Y7/8	
図 12-8 図版 15	SD220 取り上げ⑥	土師器 壺	10.9　-　12.9　-　* 100%	粗 ～ 5mm 長石・微小砂粒	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 12-9	SD220 取り上げ⑨	土師器 甕	（17.8）　-　（6.5）　-　* 口縁部片	粗 ～ 4mm 石英・長石・黒色粒	良 赤褐 5YR4/8	
図 12-10	SD220 取り上げ⑧	土師器 甕	（15.6）　-　（6.6）　-　* 口縁～体部片	やや粗 ～ 2mm 長石	良 にぶい黄橙 10YR7/4	
図 12-11	SD220 取り上げ㉗	土師器 甕	*　-　（10.4）　-　* 口縁部片	やや粗 ～ 2mm 長石	良 橙 7.5YR6/8	
図 13-12 図版 15	SD220 取り上げ㉔	須恵器 蓋	13.0　-　（4.1）　-　* 70%	密 ～ 2mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
図 13-13	SD220 取り上げ⑫	須恵器 蓋	12.8　-　4.3　-　* 70%	密 ～ 6mm 長石	良 灰 N4/0	
図 13-14	SD220 取り上げ㉗	須恵器 蓋	12.3　-　4.0　-　* 100%	密 ～ 3mm 石英・長石	良 青灰 5PB5/1	
図 13-15 図版 15	SD220 取り上げ①	須恵器 蓋	12.8　-　4.6　-　* 100%	密 ～ 2mm 長石・砂粒	良 灰 N6/0	
図 13-16 図版 15	SD220 取り上げ㉓	須恵器 蓋	13.3　-　4.9　-　* 100%	密 ～ 2mm 長石	良 灰 N6/1	
図 13-17	SD220 南東隅	須恵器 蓋	12.8　-　4.2　-　* 100%	密 ～ 2mm 長石	良 青灰 5PB5/1	
図 13-18	SD220 取り上げ㉙	須恵器 蓋	13.4　-　4.4　-　* 95%	密 ～ 3mm 長石	良 灰 N6/0	
図 13-19	SD220 取り上げ⑳	須恵器 蓋	12.3　-　4.1　-　* 100%	密 ～ 2mm 長石	良 青灰 5PB5/1	
図 13-20	SD220	須恵器 蓋	12.0　-　4.5　-　* 100%	密 ～ 1mm 長石・微小砂粒	良 灰 N5/0	
図 13-21 図版 15	SD220 取り上げ⑳	須恵器 蓋	13.0　-　4.5　-　* 100%	密 ～ 2mm 長石・チャート	良 黄灰 2.5Y6/1	
図 13-22	SD220 取り上げ㉔	須恵器 蓋	13.2　-　4.6　-　* 80%	密 ～ 1mm 石英・長石	良 暗青灰 5PB4/1	
図 13-23	SD220 取り上げ⑳	須恵器 蓋	12.6　-　4.9　-　* 95%	密 ～ 5mm 石英・長石・砂粒	良 灰 N5/0	
図 13-24	SD220 取り上げ㉗	須恵器 蓋	13.2　-　4.2　-　* 90%	密 ～ 2mm 石英・長石	良 灰 N5/0	
図 13-25	SD220 取り上げ⑨	須恵器 蓋	13.4　-　4.7　-　* 100%	密 ～ 2mm 長石	良 灰 N5/0	
図 13-26 図版 15	SD220 取り上げ㉘	須恵器 蓋	13.2　-　3.5　-　* 95%	密 ～ 4mm 長石	良 灰 N6/0	
図 13-27 図版 15	SD220 取り上げ㉗	須恵器 杯	11.1　-　4.7　-　* 100%	密 ～ 3mm 石英・長石	良 灰 N4/0	
図 13-28 図版 15	SD220 取り上げ⑩	須恵器 杯	11.2　-　5.4　-　* 100%	密 ～ 2mm 石英・長石	良 灰 N5/0	
図 13-29	SD220 取り上げ㉕	須恵器 杯	11.6　-　5.2　-　* 100%	密 ～ 1mm 長石	良 明オリーブ灰 2.5GY7/1	
図 13-30	SD220 取り上げ⑳	須恵器 杯	12.0　-　4.9　-　* 95%	密 ～ 3mm 長石・黒色粒・砂粒	良 灰 N5/0	
図 13-31 図版 16	SD220 取り上げ⑳	須恵器 杯	10.7　-　4.7　-　* 100%	密 ～ 2mm 石英・長石	良 褐灰 7.5YR6/1	
図 13-32	SD220 取り上げ⑫	須恵器 杯	11.0　-　4.7　-　* 70%	密 ～ 3mm 長石	不良 青灰 5B6/1	
図 13-33	SD220 取り上げ⑳	須恵器 杯	10.5　-　4.6　-　* 100%	密 ～ 3mm 石英・長石・チャート	良 灰 N6/1	
図 13-34	SD220 取り上げ⑫	須恵器 杯	11.6　-　4.6　-　* 65%	密 ～ 3mm 長石	良 灰 N4/0	

表 4　報告遺物一覧（2）

報告№	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径（cm） 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
図 13-35	SD220	須恵器 杯	11.4 - 5.1 - * 100%	密 ～ 1mm 長石・黒色粒	良 灰 N5/0	
図 13-36 図版 16	SD220 取り上げ㉗	須恵器 杯	10.4 - 4.8 - * 80%	密 ～ 1mm 長石	不良 褐灰 10YR6/1	
図 13-37	SD220 取り上げ㉕	須恵器 杯	11.0 - 4.9 - * 100%	密 ～ 5mm 長石	良 青灰 5B5/1	
図 13-38	SD220 取り上げ㉔	須恵器 杯	11.2 - 4.8 - * 80%	密 ～ 2mm 長石	良 灰 N5/0	
図 13-39	SD220 取り上げ㉔	須恵器 杯	11.0 - 5.3 - * 70%	密 ～ 4mm 石英・長石	良 灰 N4/0	
図 13-40 図版 16	SD220 取り上げ㉗	須恵器 杯	11.1 - 5.7 - * 80%	密 ～ 2mm 長石・黒色粒	良 灰 N5/0	
図 13-41 図版 16	SD220 取り上げ⑳	須恵器 杯	10.6 - 4.6 - * 100%	密 ～ 2mm 長石・砂粒	良 灰 N6/1	
図 14-42 図版 16	SD220 取り上げ㉙	須恵器 高杯	13.4 - 8.4 - （9.2） 80%	密 ～ 7mm 長石	良 灰 N7/0	
図 14-43 図版 16	SD220 取り上げ③	須恵器 高杯	13.4 - 9.4 - 9.5 80%	密 ～ 4mm 長石	良 灰 N6/0	
図 14-44 図版 17	SD220	須恵器 高杯	（19.4） - 12.1 - （11.0） 80%	密 ～ 2mm 長石	良 青灰 5PB5/1	
図 14-45 図版 17	SD220 取り上げ㉕	須恵器 高杯	16.6 - （8.1） - * 50%	密 ～ 2mm 長石・砂粒	良 暗灰 N3/0	
図 14-46	SD220	須恵器 高杯	* - （4.7） - 8.4 脚部	密 ～ 2mm 長石・砂粒	不良 灰白 N7/0	
図 14-47	SD220 取り上げ㉚	須恵器 甕	（18.8） - （8.3） - * 口縁部片	粗 ～ 3mm 石英・長石	不良 浅黄橙 10YR8/4	
図 14-48	SD220 取り上げ⑳	石製品 玉	0.5 - 0.5 - 0.3 - 0.1g 100%	滑石		
図 14-49 図版 17	SD220 取り上げ⑤	須恵器 壺	（9.0） - 15.6 - * 90%	密 ～ 2mm 長石・黒色粒	良 灰 N5/0	
図 14-50 図版 17	SD220 取り上げ⑬	須恵器 壺	9.4 - 14.3 - * 100%	密 ～ 2mm 石英・長石	良 灰白 N7/0	
図 14-51 図版 17	SD220 取り上げ⑯	須恵器 壺	（7.1） - 12.3 - * 90%	密 ～ 4mm 石英・長石	不良 灰白 2.5Y7/1	
図 15-52	SK020	瓦器 椀	* - （3.1） - * 口縁部片	密	良 灰 N6/0	
図 15-53 図版 17	SK020	須恵器 杯	* - （2.8） - * 体部細片	やや粗 ～ 3mm 石英・長石	良 灰白 2.5Y8/1	
図 15-54 図版 17	SK020	須恵器 壺	* - （4.4） - * 口縁部片	やや粗 ～ 1mm 長石・黒色粒	良 灰 N6/0	
図 15-55 図版 17	SK030	須恵器 杯	* - （1.9） - * 体部細片	やや粗 ～ 1mm 長石・黒色粒	良 灰 5Y6/1	
図 15-56 図版 18	SK030	石製品 不明	（16.7） - （12.9） - 4.0 - 143.8g	角閃石安山岩		
図 16-57 図版 18	SX010	須恵器 蓋	（15.4） - （2.2） - * 10%	密 ～ 2mm 長石	良 灰 N5/0	
図 16-58	SX010 土器集中	須恵器 杯	（14.6） - 4.5 - * 25%	やや粗 ～ 1mm 長石	良 灰 N6/0	
図 16-59	SX010	須恵器 鼎	* - （9.3） - 1.2 80%	密 ～ 3mm 長石・雲母	良 灰 N5/0	灰赤 7.5R4/2
図 16-60	SX010	須恵器 鼎	* - （8.0） - * 80%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N5/0	
図 16-61 図版 18	SX010	瓦 平瓦	（13.9） - （12.4） - 3.9	やや粗 ～ 5mm 石英・長石	良 灰 N5/0	
図 16-62	SX470	土師器 甕	* - （6.6） - * 口縁部片	密 ～ 2.5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・金雲母	良 橙 5YR6/6	
図 16-63	SX470	土師器 高杯	* - （7.8） - 8.8 脚部片	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 橙 5YR6/6	
図 16-64	SX470	土師器 高杯	* - （5.6） - 8.3 脚部片	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 橙 5YR7/6	
図 49-65	SA490 d （S-156）	土師器 皿	（8.0） - 1.1 - * 40%	粗 ～ 1mm 長石・クサリ礫	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 49-66 図版 18	SA490 d （S-156）	瓦器 椀	（8.7） - （3.5） - * 20%	密	良 灰 N5/0	
図 49-67	SB360 j （S-185）	土師器 皿	* - （1.2） - * 口縁部片	密 ～ 1mm 金雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 49-68	SB360 j （S-185）	土師器 皿	* - （2.1） - * 口縁部片	密 ～ 1mm 微小砂粒	不良 浅黄橙 10YR8/4	

表 5　報告遺物一覧（3）

報告№	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径（cm） 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
図 49-69 図版 18	SB360 j (S-185)	土師器 鍋	(20.1) - (13.2) - * 20%	密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい黄橙 10YR7/3	
図 49-70	SB360 j (S-185)	土師器 釜	(27.7) - (6.0) - * 25%	密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 灰白 10YR8/2	
図 49-71	SB480 c (S-397)	土師器 皿	(9.4) - 1.8 - * 30%	密 ～ 1mm 長石・金雲母	良 淡黄 2.5Y8/3	
図 49-72	SB480 d (S-371)	瓦質土器 擂鉢	* - (3.8) - * 口縁部片	やや粗 ～ 1mm 長石・金雲母	不良 灰黄 2.5Y7/2	
図 49-73 図版 18	SB480a (S-408)	石製品 火打石	5.2 - 3.6 - 0.9 - 14.5g	サヌカイト		
図 50-74 図版 19	SD001 褐色砂	土師器 釜	* - (2.0) - * 口縁部片	やや粗 ～ 3mm 長石・クサリ礫	良 浅黄橙 7.5YR8/6	
図 50-75 図版 19	SD001 にぶい黄褐砂	土師器 釜	* - (5.6) - * 口縁部片	やや粗 ～ 2mm 長石・クサリ礫	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
図 50-76	SD001 にぶい黄褐砂	瓦質土器 擂鉢	* - (4.4) - * 口縁部片	やや粗 微小砂粒	良 灰白 2.5Y8/1	
図 50-77	SD001 灰黄褐砂	輸入磁器 青磁皿	* - (3.0) - * 口縁部片	密	良 灰白 N8/0	龍泉 (釉) 明緑灰 10GY7/1
図 50-78 図版 19	SD001 灰黄褐砂	瓦質土器 擂鉢	* - (5.5) - * 口縁部片	やや粗 ～ 1mm 長石・雲母	良 灰 N6/0	
図 50-79	SD001 赤褐砂	瓦質土器 擂鉢	* - (4.5) - * 口縁部片	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 灰白 2.5Y7/ 1	
図 50-80 図版 19	SD001 赤褐砂	瓦質土器 擂鉢	(17.4) - (5.0) - * 20%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	
図 50-81	SD001 赤褐砂	瓦質土器 釜	* - (10.0) - * 口縁部片	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 灰白 N7/0	
図 50-82	SD001 赤褐砂	輸入磁器 青磁椀	* - (2.8) - * 口縁部片	密 ～ 1mm 長石・微小黒色粒	良 灰 N6/0	(釉) 明オリーブ灰 5GY7/1
図 51-83 図版 19	SD050	国産施釉陶器 皿	(11.9) - (3.0) - * 20%	やや粗 微小砂粒	良 灰白 2.5Y8/0	古瀬戸 (釉) 浅黄 5Y7/3
図 51-84	SD050	瓦質土器 擂鉢	* - (4.9) - * 口縁部細片	やや粗 微小砂粒	良 灰 N4/0	
図 51-85 図版 19	SD060 褐色土	国産磁器 白磁香炉	* - (4.2) - * 口縁部片	密	良 灰白 N8/0	(釉) 明オリーブ灰 5G7/1
図 52-86	SD110	土師器 皿	* - (1.4) - * 口縁部片	粗 ～ 2mm 長石・クサリ礫	不良 浅黄橙 10YR8/3	
図 52-87	SD110 最上層	土師器 釜	* - (8.0) - * 口縁部細片	やや粗 微小砂粒	不良 浅黄橙 10YR8/3	
図 52-88 図版 19	SD110 最上層	土師器 釜	(20.6) - (16.6) - * 20%	密 微少砂粒	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
図 52-89	SD110	土師器 釜	(23.4) - (11.4) - * 30%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫	不良 浅黄橙 7.5YR8/3	
図 52-90	SD110	瓦質土器 釜	(7.8) - (4.6) - * 25%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	不良 淡赤橙 2.5YR7/4	
図 52-91 図版 20	SD110 最上層	瓦質土器 擂鉢	* - (7.3) - * 口縁部片	やや粗 ～ 4mm 石英・長石	不良 灰 N6/0	
図 52-92 図版 20	SD110	瓦質土器 擂鉢	* - (11.1) - * 20%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫	不良 灰 N6/0	
図 52-93	SD110	国産焼締陶器 甕	* - (7.0) - * 口縁部細片	やや粗 ～ 3mm 長石	良 明赤褐 2.5YR5/6	信楽
図 52-94	SD110	輸入磁器 染付椀	* - (3.1) - * 底部細片	密	良 灰白 7.5Y7/1	(釉) 薄灰色を帯びた透明釉
図 52-95	SD110 最上層	瓦 平瓦	(7.7) - (11.4) - (4.2)	粗 ～ 4mm 石英・長石	不良 灰 N6/0	
図 52-96	SD110	瓦 軒丸瓦	(9.5) - (10.6) - 3.7	粗 ～ 5mm 石英・長石	不良 灰 N5/0	三巴文
図 52-97 図版 20	SD110	石製品 火打石	4.4 - 4.8 - 2.2 - 50.8 g	サヌカイト		
図 53-98 図版 20	SD210	土師器 皿	8.1 - 1.3 - * 95%	密 ～ 1.5mm 石英・長石・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 53-99 図版 20	SD210	土師器 皿	(8.8) - 1.7 - * 30%	密 ～ 1mm 石英・長石・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 53-100	SD210	瓦質土器 擂鉢	* - (4.4) - * 口縁部片	密 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N5/0	
図 53-101 図版 20	SD210	輸入磁器 青磁椀	* - (4.1) - 4.9 60%	密	良 灰白 N8/0	龍泉 (釉) オリーブ灰 10Y6/2
図 54-102	SD240 暗褐土	土師器 釜	(20.2) - (7.8) - * 35%	密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 にぶい橙 7.5YR7/4	

表 6　報告遺物一覧（4）

報告№	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径（cm） 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
図 54-103 図版 20	SD240 暗褐土	古式土師器 甕	(14.7) - (4.6) - * 20%	密 ～ 5mm 石英・長石・チャート	良 にぶい黄橙 10YR7/3	
図 54-104 図版 20	SD240 暗褐土	瓦質土器 擂鉢	* - (7.0) - * 口縁部片	密 ～ 1mm 石英・長石・チャート	良 黄灰 2.5Y5/1	
図 54-105 図版 20	SD240 暗褐土	瓦質土器 擂鉢	* - (5.8) - * 口縁部片	密 ～ 0.5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 (内面) 褐灰 10YR4/1	(外面) にぶい橙 7.5YR7/4
図 54-106	SD240 灰褐土	瓦器 椀	(8.2) - (3.7) - * 40%	密 ～ 1mm 石英・長石	良灰 N6/0	
図 54-107 図版 20	SD240 灰褐土	土師器 皿	9.9 - 1.9 - * 95%	密 ～ 6mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 明赤褐 5YR5/6	
図 54-108 図版 02	SD240 灰褐土	土師器 皿	(9.3) - 1.6 - * 30%	密 ～ 4mm 石英・長石・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 54-109	SD240 灰褐土	土師器 皿	7.0 - 1.7 - * 95%	密 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 54-110	SD240 灰褐土	土師器 皿	7.4 - 1.4 - * 95%	密 ～ 1.5mm 石英・長石・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 54-111 図版 21	SD240 灰褐土	瓦器 椀	6.2 - 2.3 - 3.2 90%	密 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N5/0	
図 54-112 図版 21	SD240 灰褐土	土師器 皿	7.5 - 1.4 - * 90%	密 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 54-113 図版 21	SD240 灰褐土	土師器 皿	7.5 - 1.5 - * 90%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 54-114	SD240 灰褐土	土師器 皿	7.2 - 1.2 - * 100%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 54-115	SD240 灰褐土	土師器 皿	7.5 - 1.3 - * 95%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 54-116	SD240 灰褐土	土師器 皿	7.5 - 1.2 - * 100%	密 ～ 4mm 石英・長石・チャート・雲母	良 にぶい褐 7.5YR6/3	
図 54-117	SD240 灰褐土	土師器 鍋	22.8 - (8.6) - * 口縁～体部片	密 ～ 1.5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR7/4	
図 54-118 図版 21	SD240 灰褐土	土師器 釜	18.9 - (6.8) - * 20%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 54-119	SD240 灰褐土	土師器 釜	17.0 - (8.0) - * 50%	密 ～ 1mm 石英・長石・チャート	良 にぶい橙 7.5YR7/4	
図 54-120	SD240 灰褐土	土師器 釜	16.5 - (6.8) - * 45%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
図 54-121	SD240 灰褐土	土師器 釜	(10.9) - (7.2) - * 45%	密 ～ 2.5mm 石英・長石・チャート	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 54-122 図版 21	SD240 灰褐土	土師器 鉢	(12.4) - 4.9 - (7.5) 20%	密 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 にぶい橙 7.5YR7/4	
図 54-123 図版 21	SD240 灰褐土	土師器 鉢	* - (9.4) - * 40%	密 ～ 5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 にぶい橙 7.5YR7/4	
図 54-124	SD240 灰褐土	土師器 釜	12.8 - (9.1) - * 75%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート・雲母	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 55-125	SD240 灰褐土	瓦質土器 甕	(27.9) - (5.7) - * 15%	密 ～ 3mm 石英・長石・チャート・雲母	良 灰 N6/0	
図 55-126	SD240 灰褐土	瓦質土器 甕	* - (5.1) - * 口縁部片	密 ～ 3mm 石英・長石・チャート・黒色粒	良 灰 N5/0	
図 55-127	SD240 灰褐土	瓦質土器 釜	22.2 - (12.8) - * 50%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	良 黄灰 2.5Y5/1	
図 55-128 図版 21	SD240 灰褐土	瓦質土器 擂鉢	(30.0) - (9.7) - * 60%	密 ～ 5mm 石英・長石・チャート	良 灰 N6/0	
図 55-129 図版 22	SD240 灰褐土	瓦質土器 鍋	27.8 - (12.5) - * 75%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	良 灰 N6/0	
図 55-130	SD240 灰褐土	瓦質土器 擂鉢	(26.6) - (9.4) - * 15%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	良 灰 N5/0	
図 55-131 図版 22	SD240 灰褐土	瓦質土器 燈火器	* - (13.9) - (14.4) 35%	密 ～ 1mm 石英・長石・チャート・雲母	良 黒褐 10YR3/1	
図 55-132	SD240 灰褐土	輸入磁器 青磁椀	* - (4.8) - * 口縁部片	密 黒色粒	良 灰白 N8/0	(釉)オリーブ黄 7.5Y6/3
図 55-133	SD240 灰褐土	輸入磁器 青磁椀	* - (4.2) - 5.8 底部片	密 ～ 1mm 石英・長石・チャート	良 灰白 N7/0	龍泉 (釉)灰オリーブ 7.5Y6/2
図 56-134 図版 22	SD240 灰褐土	国産施釉陶器 卸皿	(14.0) - 3.4 - (8.0) 25%	密 ～ 1mm 長石・黒色粒	良 灰白 10YR7/1	古瀬戸 (釉) 淡黄 2.5Y8/3
図 56-135	SD240 灰褐土	国産焼締陶器 擂鉢	* - (4.0) - * 口縁部片	密 ～ 2mm 長石・チャート・黒色粒	良 灰黄褐 10YR4/2	備前
図 56-136 図版 22	SD240 灰褐土	瓦 鬼瓦	(13.2) - (9.4) - (4.0)	密 ～ 1.5mm 石英・長石・チャート・黒色粒	良 灰 N5/0	

表 7　報告遺物一覧（5）

報告№	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径（cm） 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
図 56-137 図版 22	SD240 灰褐土	瓦 軒平瓦	（17.1）- （12.3）- 7.1	密 ～ 5mm 石英・長石・チャート・黒色粒	良 灰 N5/0	
図 56-138	SD240 灰褐土	石製品 砥石	（5.9）- 3.5 - 1.6 - 41.2 g	凝灰岩		
図 56-139	SD240 灰褐土	石製品 火打石	4.0 - 4.6 - 1.3 - 30.7g	サヌカイト		
図 56-140 図版 22	SD240 暗灰土	土師器 皿	7.8 - 1.6 - * 98%	密 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 56-141 図版 22	SD240 暗灰土	土師器 皿	7.4 - 1.4 - * 100%	密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 56-142	SD240 暗灰土	土師器 皿	7.6 - 1.2 - * 95%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 56-143 図版 23	SD240 暗灰土	土師器 皿	9.4 - 1.9 - * 80%	密 ～ 5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 56-144	SD240 暗灰土	土師器 皿	9.1 - 1.9 - * 95%	密 ～ 5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 橙 7.5YR6/6	
図 56-145	SD240 暗灰土	土師器 皿	8.9 - 1.8 - * 98%	密 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 56-146	SD240 暗灰土	土師器 皿	9.4 - 2.1 - * 95%	密 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 56-147	SD240 暗灰土	土師器 皿	（13.4）- （2.8）- * 20%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 56-148 図版 23	SD240 暗灰土	土師器 釜	（21.3）- （11.2）- * 30%	密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 56-149	SD240 暗灰土	土師器 釜	（19.0）- （9.8）- * 40%	密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
図 56-150	SD240 暗灰土	土師器 釜	（27.8）- （5.8）- * 20%	密 ～ 1mm 石英・長石・チャート	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 57-151	SD240 暗灰土	土師器 鍋	（23.4）- （10.3）- * 30%	密 ～ 1mm 石英・長石・チャート・雲母	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 57-152	SD240 暗灰土	瓦器 椀	（12.0）- 4.2 - （3.9） 40%	密 ～ 0.5mm 石英・長石・チャート・雲母	不良 灰白 10YR8/1	紀伊
図 57-153 図版 23	SD240 暗灰土	瓦器 椀	8.3 - 3.6 - * 50%	密 ～ 1mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
図 57-154 図版 23	SD240 暗灰土	国産施釉陶器 椀	（12.7）- 6.6 - （4.0） 35%	密 ～ 1.5mm 長石	良 灰白 10YR8/2	古瀬戸 （釉）褐 7.5YR4/3
図 57-155	SD240 暗灰土	須恵器 鉢	* - （7.7）- * 	密 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N6/0	東播系
図 57-156	SD240 暗灰土	国産施釉陶器 花瓶	* - （4.9）- 8.0 40%	密 ～ 2mm 長石・チャート	良 灰白 10YR7/1	古瀬戸
図 57-157	SD240 暗灰土	瓦質土器 甕	* - （10.5）- * 口縁～体部片	密 ～ 3mm 石英・長石・チャート・雲母	不良 にぶい黄橙 10YR7/3	
図 57-158 図版 23	SD240 暗灰土	瓦質土器 釜	22.2 - （16.7）- * 70%	密 ～ 3mm 石英・長石・チャート	良 黄灰 2.5YR6/1	
図 57-159	SD240 暗灰土	瓦質土器 釜	（27.4）- （8.7）- * 50%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート・黒色粒	良 灰白 N7/0	
図 57-160 図版 23	SD240 暗灰土	瓦質土器 擂鉢	（29.7）- 13.0 - （12.0） 50%	密 ～ 1mm 石英・長石・チャート	良 灰 N6/0	
図 58-161	SD240 暗灰土	瓦質土器 擂鉢	（31.5）- （14.8）- （9.5） 40%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	良 灰 N5/0	
図 58-162 図版 23	SD240 赤褐土	瓦器 椀	8.1 - 4.0 - * 75%	密 ～ 0.5mm 石英・長石	良 灰 N7/0	
図 59-163	SD260 暗褐砂	土師器 皿	9.3 - 2.2 - * 50%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	良 にぶい橙 7.5YR7/4	
図 59-164	SD260 暗褐砂	土師器 皿	* - （2.1）- * 口縁部片	密 ～ 2mm 石英・長石	良 浅黄橙 7.5YR8/4	
図 59-165	SD260 暗褐砂	土師器 皿	* - （1.5）- * 口縁部片	密 ～ 1mm 石英・長石・チャート	良 浅黄橙 7.5YR8/3	
図 59-166	SD260 暗褐砂	土師器 皿	* - （1.7）- * 口縁部片	密 ～ 1mm 石英・長石	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 59-167	SD260 暗褐砂	土師器 釜	（13.4）- （4.3）- * 20%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート・雲母	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 59-168	SD260 暗褐砂	土師器 釜	16.1 - （5.4）- * 30%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR7/4	
図 59-169 図版 24	SD260 暗褐砂	土師器 釜	（19.4）- （6.9）- * 15%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 59-170 図版 24	SD260 暗褐砂	瓦質土器 擂鉢	（31.5）- （10.8）- * 60%	密 ～ 1.5mm 石英・長石・チャート	良 灰 N5/0	

表 8　報告遺物一覧（6）

報告№	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径（cm） 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
図 59-171	SD260 暗褐砂	瓦質土器 釜	(29.2) - (9.0) - * 20%	密 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	
図 59-172 図版 24	SD260 暗褐砂	国産施釉陶器 折縁鉢	(23.9) - (4.9) - * 15%	密 ～ 5mm 石英・長石・チャート	良 灰白 10YR8/1	古瀬戸 (釉) にぶい黄橙 10YR7/3
図 59-173 図版 24	SD260 暗褐砂	国産焼締陶器 壺	* - (4.4) - * 口縁部片	密 ～ 1mm 石英・長石	良 暗赤褐 5YR3/3	備前
図 60-174	SD260 褐粘	土師器 皿	(9.0) - 1.9 - * 40%	密 ～ 1.5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 60-175	SD260 褐粘	土師器 皿	9.4 - 1.9 - * 80%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 60-176 図版 24	SD260 褐粘	土師器 釜	16.8 - (6.0) - * 20%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	不良 浅黄橙 7.5YR8/3	
図 60-177	SD260 取り上げ①	土師器 釜	18.4 - (10.4) - * 40%	密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 60-178 図版 25	SD260 褐粘	瓦質土器 釜	(19.0) - (16.0) - * 40%	密 ～ 4mm 石英・長石・チャート	良 にぶい黄橙 10YR7/3	
図 60-179	SD260 褐粘	土師器 釜	22.1 - (8.7) - * 80%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 60-180 図版 25	SD260 取り上げ②	瓦質土器 釜	22.8 - (18.1) - * 60%	密 ～ 4mm 石英・長石・チャート	良 灰 N5/0	
図 61-181	SD260 褐粘	土師器 皿	19.2 - (9.3) - * 95%	密 ～ 3mm 石英・長石・チャート	良 灰 N4/0	
図 61-182	SD260 取り上げ③	瓦質土器 釜	(20.9) - (7.7) - * 20%	密 ～ 3mm 石英・長石・チャート	良 黄灰 2.5Y5/1	
図 61-183 図版 25	SD260 褐粘	瓦質土器 釜	20.4 - (14.4) - * 60%	密 ～ 5mm 石英・長石・チャート	良 灰 N5/0	
図 61-184	SD260 褐粘	瓦質土器 釜	(21.8) - (15.4) - * 45%	密 ～ 3mm 石英・長石・チャート	不良 黄灰 2.5Y5/1	
図 61-185	SD260 取り上げ④	瓦質土器 釜	26.1 - (13.0) - * 30%	密 ～ 4mm 石英・長石・チャート	良 灰 N5/0	
図 62-186	SD260 褐粘	瓦質土器 釜	25.7 - (10.2) - * 30%	密 ～ 3mm 石英・長石・チャート	良 灰 N5/0	
図 62-187	SD260 褐粘	瓦質土器 釜	(37.7) - (17.9) - * 10%	密 ～ 3mm 石英・長石・チャート	良 灰 N6/0	
図 62-188 図版 25	SD260 褐粘	瓦質土器 鍋	(25.5) - (6.7) - * 10%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	良 灰 5Y6/1	
図 62-189 図版 25	SD260 褐粘	須恵器 円面硯	(24.7) - (5.2) - * 15%	密 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 10YR7/1	
図 62-190	SD260 褐粘	国産施釉陶器 鉢	* - (4.3) - 13.0 40%	密 ～ 1mm 石英・長石	良 淡黄 2.5Y8/4	古瀬戸 (釉) 浅黄 7.5Y7/3
図 62-191	SD260 褐粘	国産焼締陶器 壺	* - (6.1) - * 口縁部片	密 ～ 2mm 石英・長石	良 暗赤褐 7.5R3/2	備前
図 62-192	SD260 褐粘	輸入磁器 青磁椀	* - (1.7) - * 口縁部片	密	良 灰白 N7/0	(釉) 明オリーブ灰 5GY7/1
図 62-193 図版 25	SD260 褐粘	瓦 平瓦	(15.0) - (10.4) - 6.1	密 ～ 3㎜石英・長石・チャート	良 灰 N7/0	
図 63-194	SD270 東端	瓦質土器 擂鉢	* - (7.9) - * 口縁～体部片	密 ～ 1.5mm 石英・長石・チャート・雲母	良 黄灰 2.5Y4/1	
図 63-195	SD270 東端	国産施釉陶器 鉢	* - (6.7) - (25.8) 10%	密 ～ 1mm 長石	良 灰白 10YR7/1	古瀬戸 (釉)灰オリーブ 7.5Y6/2
図 63-196 図版 25	SD270 東端	石製品 石鍋再加工品	(8.1) - (7.3) - 2.2 - 182.0g	滑石		
図 63-197 図版 25	SD280	土師器 釜	19.5 - (16.0) - * 60%	密 ～ 1.5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 63-198	SD280	瓦質土器 釜	(19.0) - (7.1) - * 15%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート・雲母	良 にぶい黄橙 10YR7/3	
図 63-199	SD280	瓦質土器 擂鉢	* - (8.0) - * 口縁部片	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	不良 にぶい黄橙 10YR7/3	
図 63-200 図版 26	SD280	輸入磁器 青磁椀	* - (4.7) - 5.1 60%	密 ～ 1mm 長石	良 浅黄橙 10YR8/3	龍泉 (釉)灰オリーブ 7.5Y6/2
図 63-201 図版 26	SD280	輸入磁器 青磁皿	(12.4) - 3.0 - (6.2) 45%	密	良 浅黄橙 7.5YR8/4	(釉) 灰白 7.5Y7/1
図 64-202	SD290	土師器 皿	6.7 - 1.0 - * 80%	やや粗 ～ 5mm 石英・長石・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 64-203	SD290	土師器 皿	(6.9) - 0.9 - * 20%	やや粗 ～ 6mm 石英・長石・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 64-204	SD290	土師器 釜	(18.5) - (8.2) - * 25%	密 ～ 1.5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 にぶい黄橙 10YR7/3	

表 9　報告遺物一覧（7）

報告№	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径（cm） 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
図 64-205	SD290	土師器 釜	(19.0) - (7.6) - * 15%	密 ～ 1mm 石英・長石・チャート・雲母	良 にぶい黄橙 10YR7/3	
図 64-206	SD290	瓦質土器 擂鉢	* - (5.8) - * 口縁部片	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	不良 黄灰 2.5YR5/1	
図 64-207	SD290	瓦質土器 釜	(20.8) - (6.7) - * 25%	密 ～ 1.5mm 石英・長石・チャート・雲母	良 灰白 2.5Y7/1	
図 64-208	SD290	瓦質土器 釜	(21.8) - (8.0) - * 20%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	良 にぶい黄橙 7.5YR7/3	
図 65-209	SD290	瓦 平瓦	31.3 - (13.8) - 1.7	密 ～ 6mm 石英・長石・チャート	良 灰白 N7/0	
図 66-210	SD320	瓦質土器 風炉	* - (9.3) - * 底部片	密 ～ 1.5mm 石英・長石・チャート	良明褐灰 7.5YR7/1	
図 66-211	SD320	瓦質土器 擂鉢	* - (4.1) - * 口縁部片	やや粗 ～ 1mm 長石・黒色粒	良 灰 N6/0	
図 66-212	SD330 褐色土	瓦質土器 擂鉢	* - (5.2) - * 口縁部片	やや粗 ～ 1mm 長石	良 暗灰 N3/0	
図 66-213	SD330 褐色土	瓦質土器 釜	(24.0) - (8.9) - * 10%	密 ～ 4mm 石英・長石・チャート	良 褐灰 10YR6/1	
図 66-214	SD330	瓦 丸瓦	(20.6) - (10.0) - 2.0	密 ～ 5mm 石英・長石・チャート・黒色粒	良 灰 N6/0	
図 66-215	SD400	瓦質土器 擂鉢	* - (7.0) - * 口縁部片	密 ～ 3mm 石英・長石・チャート	不良 灰白 7.5Y7/1	
図 66-216	SD400	国産焼締陶器 擂鉢	* - (5.0) - * 体部片	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	良 にぶい赤褐 5YR5/4	備前
図 66-217 図版 26	SD400	輸入磁器 白磁椀	(17.0) - (4.8) - * 10%	やや粗 ～ 1mm 黒色粒	良 灰白 2.5Y8/2	(釉) 明緑灰 7.5GY8/1
図 66-218 図版 26	SD400	瓦質土器 不明	長 8.9 - 幅 15.0 - 高 5.9 80%	密 ～ 3mm 石英・長石・チャート・雲母	良 灰白 N7/0	
図 67-219	SD438	瓦質土器 釜	19.6 - (12.9) - * 口縁～体部片	密 ～ 7mm 石英・長石・チャート	良 にぶい黄橙 10YR7/2	
図 68-220	SE005 抜取	土師器 皿	7.7 - 1.7 - * 98%	やや粗 ～ 1mm 長石・金雲母	不良 にぶい橙 7.5YR7/4	
図 68-221	SE005 抜取	土師器 皿	7.9 - 1.6 - * 100%	粗 ～ 5mm 石英・長石・クサリ礫・金雲母	不良 にぶい褐 7.5YR6/3	
図 68-222	SE005 抜取	土師器 皿	8.0 - 1.7 - * 80%	やや粗 ～ 1mm 長石・クサリ礫・金雲母	良 にぶい橙 7.5YR7/4	
図 68-223	SE005 抜取	土師器 皿	(10.0) - 2.7 - * 40%	やや粗 ～ 1mm 長石・金雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 68-224	SE005 抜取	土師器 皿	(10.8) - 2.4 - * 30%	粗 ～ 1mm 長石・クサリ礫・金雲母	不良 橙 7.5YR7/6	
図 68-225	SE005 抜取	瓦器 椀	(9.0) - (3.4) - * 20%	やや粗 微小砂粒	良 灰白 N6/0	
図 68-226	SE190 枠内暗褐土	土師器 皿	* - (1.8) - * 口縁部片	やや粗 ～ 1mm 石英	良 黄橙 10YR8/6	
図 68-227	SE190 枠内暗褐土	土師器 釜	* - (3.8) - * 口縁部片	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 68-228	SE190 枠内褐灰土	土師器 釜	* - (4.3) - * 口縁部片	密 ～ 1.5mm 石英・長石・チャート	良 にぶい黄橙 10YR7/4	
図 68-229	SE190 枠内暗褐土	土師器 釜	* - (9.3) - * 口縁～体部片	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	不良 灰白 10YR8/2	
図 68-230	SE190 枠内暗褐土	瓦質土器 擂鉢	* - (6.0) - * 口縁部片	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
図 68-231	SE190 枠内暗褐土	瓦質土器 擂鉢	* - (4.3) - * 口縁部片	密 ～ 1.5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 にぶい橙 7.5YR7/3	
図 68-232	SE190 枠内褐灰土	瓦質土器 擂鉢	* - (5.7) - * 口縁部片	密 ～ 1.5mm 石英・長石・チャート	不良 にぶい橙 7.5Y7/3	
図 68-233 図版 26	SE190 枠内暗褐土	瓦質土器 風炉	(22.3) - (4.2) - * 20%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・黒色粒	良 黄灰 2.5Y4/1	
図 68-234 図版 26	SE190 枠内暗褐土	瓦質土器 方形浅鉢	* - (5.4) - * 口縁部片	密 ～ 0.5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 にぶい黄橙 10YR7/4	
図 68-235	SE190 枠内暗褐土	国産焼締陶器 擂鉢	* - (3.8) - * 口縁部片	やや粗 ～ 5mm 石英・長石	良 灰 N6/0	備前
図 68-236	SE190 枠内暗褐土	国産施釉陶器 皿	* - (1.5) - (5.0) 底部片	密 ～ 1mm 長石・黒色粒	良 灰白 7.5Y7/1	古瀬戸 (釉)灰オリーブ 7.5Y5/3
図 68-237	SE190 枠内暗褐土	石製品 火打石	3.5 - 3.3 - 1.2 - 9.7g	サヌカイト		
図 68-238 図版 26	SE190 掘方	土師器 釜	(17.7) - (11.9) - * 15%	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	良 浅黄橙 7.5YR8/3	

表 10　報告遺物一覧（8）

報告№	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径（cm） 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
図 68-239	SE190 掘方	瓦質土器 擂鉢	＊ - （5.5） - ＊ 口縁部片	密 ～ 1.5mm 石英・長石・チャート	不良 橙 5YR7/6	
図 69-240	SK100	土師器 皿	8.8 - 1.4 - ＊ 98%	やや粗 微少砂粒	不良 にぶい黄橙 10YR7/3	
図 69-241	SK100	瓦質土器 擂鉢	＊ - （6.1） - ＊ 口縁部細片	粗 ～ 1mm 石英・長石	不良 灰 N4/0	
図 69-242	SK100	瓦質土器 擂鉢	＊ - （4.3） - ＊ 口縁部細片	粗 ～ 3mm 石英・長石	不良 浅黄橙 10YR8/4	
図 69-243	SK100	瓦質土器 釜	（19.7） - （4.6） - ＊ 20%	粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 5YR7/6	
図 69-244	SK100	瓦質土器 釜	（26.0） - （11.3） - ＊ 30%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫	良 浅黄橙 7.5YR8/4	
図 69-245	SK100	瓦 軒平瓦	（9.6） - （9.7） - （5.5）	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫	良 灰白 5Y7/1	
図 70-246	SK120	土師器 皿	（8.5） - 1.1 - ＊ 40%	粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫	良 浅黄橙 7.5YR8/4	
図 70-247	SK120	土師器 皿	（8.6） - 1.1 - ＊ 30%	粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 にぶい橙 7.5YR7/4	
図 70-248 図版 27	SK120	土師器 皿	（9.2） - 2.1 - ＊ 20%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・金雲母	良 にぶい橙 7.5YR7/4	
図 70-249	SK120	土師器 皿	（12.2） - 2.3 - ＊ 25%	やや粗 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫・金雲母	良 橙 7.5YR7/6	
図 70-250	SK120	土師器 皿	（10.1） - 2.0 - ＊ 30%	粗 ～ 5mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 5YR7/6	
図 70-251	SK120	土師器 皿	（10.4） - 2.0 - ＊ 20%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	良 にぶい橙 7.5YR7/3	
図 70-252	SK120	瓦器 椀	＊ - （3.3） - ＊ 20%	密	良 灰 N5/0	
図 70-253	SK120	瓦器 椀	（8.2） - 3.1 - ＊ 20%	密	良 灰 N6/0	
図 70-254	SK120	瓦器 椀	（7.8） - 3.3 - ＊ 20%	密	良 灰 N7/0	
図 70-255 図版 27	SK120	瓦器 椀	（8.3） - 3.8 - ＊ 20%	密	良 灰 N5/0	
図 70-256 図版 27	SK120	瓦器 椀	8.2 - 4.1 - ＊ 95%	密	良 灰 N5/0	
図 70-257	SK120	国産焼締陶器 甕	＊ - （9.7） - ＊ 口縁部細片	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 にぶい赤褐 5YR4/4	常滑
図 70-258 図版 27	SK120	石製品 碁石（白）	1.8 - 1.5 - 12.0 - 4.6g	石英		
図 71-259	SK170	土師器 皿	（8.8） - 1.3 - ＊ 25%	密 ～ 2mm 長石・クサリ礫・雲母	良 橙 5YR6/6	
図 71-260	SK170	土師器 皿	（7.8） - 1.2 - ＊ 45%	密 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 にぶい橙 7.5YR7/4	
図 71-261	SK170	土師器 皿	8.4 - 1.2 - ＊ 95%	密 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 にぶい橙 7.5YR7/4	
図 71-262	SK170	土師器 皿	8.0 - 1.6 - ＊ 70%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 にぶい橙 7.5YR7/4	
図 71-263	SK170	土師器 皿	8.5 - 1.2 - ＊ 98%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 にぶい橙 7.5YR7/3	
図 71-264	SK170	土師器 皿	8.2 - 1.2 - ＊ 98%	密 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 にぶい黄橙 10YR7/3	
図 71-265	SK170	土師器 皿	10.3 - 2.1 - ＊ 95%	密 ～ 5mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 7.5YR7/6	
図 71-266	SK170	土師器 皿	11.0 - 2.2 - ＊ 98%	密 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 7.5YR7/6	
図 71-267	SK170	土師器 皿	10.8 - 2.3 - ＊ 98%	密 ～ 5mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 7.5YR7/6	
図 71-268	SK170	土師器 皿	11.4 - 2.4 - ＊ 95%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 にぶい黄橙 10YR7/4	
図 71-269	SK170	土師器 釜	＊ - （2.8） - ＊ 口縁部片	密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫	良 浅黄橙 10YR8/4	
図 71-270	SK170	瓦器 椀	（9.2） - （3.8） - ＊ 30%	密 ～ 1mm 長石・雲母	良 灰白 10YR7/1	
図 71-271	SK170	瓦器 椀	10.6 - 3.4 - ＊ 30%	密 ～ 3mm 石英・長石・チャート	良 灰白 10YR8/1	
図 71-272	SK170	瓦器 椀	（8.6） - （4.1） - ＊ 40%	密 ～ 1mm 長石・黒色粒	良 灰白 10YR7/1	

表 11　報告遺物一覧（9）

報告№	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径（cm） 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
図 71-273	SK170	瓦器 椀	(8.2) - 4.3 - * 30%	密 ～ 1mm 長石	良 灰白 2.5Y7/1	
図 71-274	SK186	土師器 皿	(7.6) - 1.3 - * 30%	やや粗 ～ 1mm 長石・クサリ礫	良 浅黄橙 7.5YR8/4	
図 71-275	SK186	土師器 皿	(8.4) - (1.1) - * 40%	やや粗 ～ 1mm 長石・金雲母	良 にぶい黄橙 10YR7/4	
図 71-276	SK186	土師器 皿	9.9 - 2.3 - * 80%	密 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい黄橙 10YR7/4	
図 71-277	SK186	土師器 皿	(10.7) - 2.0 - * 20%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 橙 5YR6/6	
図 71-278	SK186	土師器 皿	(11.0) - (1.8) - * 30%	やや粗 ～ 2mm 長石	良 橙 5YR7/6	
図 71-279	SK186	土師器 皿	(11.5) - 2.0 - * 10%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい黄橙 10YR7/4	
図 71-280	SK186	土師器 皿	11.5 - 2.4 - * 60%	密 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 橙 5YR6/6	
図 71-281	SK186	土師器 皿	* - (2.2) - * 口縁部片	密 ～ 0.5mm 石英・長石	良 灰白 10YR8/2	
図 71-282 図版 27	SK186	瓦器 椀	8.6 - 4.2 - * 80%	密 0.5mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
図 71-283	SK186	瓦器 椀	(7.2) - (3.9) - * 10%	密 ～ 0.5㎜石英・長石・微少雲母	良 灰 N5/0	
図 71-284 図版 27	SK186	瓦器 椀	(10.2) - 3.1 - * 45%	密 ～ 1mm 長石	良 灰白 10YR8/1	
図 71-285	SK186	瓦器 椀	(8.7) - (3.9) - * 10%	密 ～ 1㎜石英・長石・微少雲母	良 灰 N5/0	
図 71-286	SK186	瓦器 椀	(10.5) - (2.5) - * 10%	密 ～ 0.5㎜微少砂粒	良 灰 N5/0	
図 71-287 図版 27	SK186 床面	瓦質土器 円形浅鉢	(25.9) - (13.5) - * 35%	密 ～ 1mm 石英・長石・チャート	良 灰 N6/0	
図 71-288 図版 27	SK186 床面	国産焼締陶器 甕	* - (6.0) - * 体部片	密 ～ 1mm 石英・長石・チャート	良 灰 5Y6/1	渥美 (釉)灰オリーブ 7.5Y7/5
図 71-289	SK186 床面	須恵器 鉢	* - (4.7) - * 口縁部片	密 ～ 2mm 長石	良 青灰 5PB5/1	東播系
図 71-290	SK186 床面	輸入磁器 青磁椀	* - (1.7) - 5.0 底部片	密 ～ 1mm 長石	良 灰 N6/0	龍泉 (釉) オリーブ灰 10YR6/2
図 72-291	SK222	土師器 皿	9.3 - 1.9 - * 75%	密 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 にぶい橙 7.5YR7/4	
図 72-292	SK222	瓦器 椀	8.5 - 4.1 - * 50%	密 ～ 1mm 石英・長石	良 灰 N5/0	
図 72-293	SK223	土師器 釜	* - (3.4) - * 口縁部片	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 10YR8/4	
図 72-294	SK223	土師器 釜	(22. 6) - (6.3) - * 20%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 灰白 10YR8/2	
図 72-295	SK223	金属製品 銭	* - 2.45 - 0.14 - 1.97g 85%	銅		皇宋通寶
図 72-296	SK223	金属製品 銭	2.85 - 2.85 - 0.15 - 2.36g 100%	銅		熙寧元寶
図 72-297	SK227	土師器 皿	(7.2) - 1.2 - * 20%	やや粗 ～ 2mm 長石・雲母	良 橙 5YR6/8	
図 72-298	SK227	土師器 皿	(7.4) - 1.2 - * 30%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・金雲母	良 橙 7.5YR6/6	
図 72-299	SK227	土師器 皿	(7.4) - 1.4 - * 20%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・金雲母	良 橙 7.5YR7/6	
図 72-300	SK227	土師器 皿	(10.3) - 1.9 - * 20%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 72-301	SK227	土師器 皿	(11.2) - 2.4 - * 30%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・金雲母	良 明赤褐 5YR5/8	
図 72-302 図版 27	SK227	瓦器 椀	6.4 - 3.0 - 2.9 60%	密 ～ 1mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
図 72-303 図版 28	SK227	瓦器 椀	(8.4) - 3.8 - (3.9) 25%	密 ～ 0.5mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
図 72-304	SK227	国産施釉陶器 椀	* - (2.7) - * 口縁部片	やや粗 黒色粒	良 浅黄橙 10YR8/4	古瀬戸 (釉) 灰白 7.5Y8/2
図 72-305	SK254	土師器 皿	(7.4) - 1.2 - * 15%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 72-306	SK254	土師器 皿	(11.5) - 1.8 - * 25%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 にぶい橙 7.5YR6/4	

表 12　報告遺物一覧（10）

報告№	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径（cm） 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
図 72-307 図版 28	SK254	瓦器 椀	10.3 - 3.9 - 3.5 80%	密 ～ 0.5mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
図 72-308 図版 28	SK254	瓦器 椀	10.3 - 3.8 - 3.6 80%	密 ～ 0.5mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
図 72-309	SK254	瓦器 椀	10.0 - 3.9 - 3.7 95%	密 ～ 0.5mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
図 72-310 図版 28	SK331	瓦質土器 擂鉢	* - （5.1） - * 口縁部片	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	良 灰 N6/0	
図 72-311	SK332	土師器 皿	（8.0） - 1.2 - * 30%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・金雲母・クサリ礫	良 灰黄褐 10YR6/2	
図 72-312	SK332	土師器 皿	（8.2） - 1.5 - * 30%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・雲母・クサリ礫	良 橙 5YR7/8	
図 72-313	SK332	土師器 皿	（4.5） - 1.1 - * 30%	粗 ～ 2㎜石英・長石・雲母・クサリ礫	良 明赤褐 5YR5/8	
図 72-314	SK332	土師器 皿	（10.7） - 1.7 - * 20%	密 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 72-315	SK332	土師器 釜	* - （3.2） - * 口縁部片	密 ～ 1mm 長石・雲母	良 浅黄橙 10YR8/4	
図 72-316 図版 28	SK332	土師器 てづくね土器	5.1 - 2.3 - *90%	密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい黄橙 10YR7/3	
図 72-317	SK332	瓦質土器 円形浅鉢	* - （4.0） - * 口縁部片	やや粗 ～ 1mm 長石・雲母	良 灰白 N5/0	
図 72-318 図版 28	SK332	瓦器 椀	8.9 - 3.9 - * 50%	密 0.5mm 石英・長石	良 灰 N5/0	
図 72-319	SK332	瓦器 椀	（9.5） - 3.8 - （3.4） 20%	密 0.5mm 石英・長石	良 灰 N5/0	
図 72-320	SK332	須恵器 鉢	* - （5.0） - * 口縁部片	やや粗 ～ 1mm 石英・雲母	良 灰 N6/0	東播系
図 72-321	SK332	瓦質土器 甕	* - （5.6） - * 口縁部片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
図 72-322	SK332	金属製品 銭	2.45 - 2.45 - 0.13 - 2.30g 100%	銅		開元通寶
図 73-323	SK450	土師器 皿	7.0 - 1.3 - * 50%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 73-324	SK450	土師器 皿	7.1 - 1.3 - * 90%	密 ～ 1.5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 73-325	SK450	土師器 皿	7.2 - 1.4 - *55%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 73-326	SK450	土師器 皿	7.2 - 1.5 - *95%	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・雲母	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 73-327	SK450	土師器 釜	（23.4） - （6.7） - * 15%	密 ～ 1.5mm 石英・長石・チャート	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 73-328	SK450	輸入磁器 青磁皿	* - （1.7） - * 口縁部片	密 ～ 0.5mm 長石	良 灰白 N8/0	龍泉 （釉）灰オリーブ 7.5Y5/3
図 74-329	SX370	土師器 皿	8.0 - 1.4 - * 70%	密 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良 にぶい橙 7.5YR6/4	
図 74-330	SX370 最上層	土師器 皿	9.8 - 1.3 - * 25%	密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・金雲母	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 74-331	SX370 最上層	土師器 皿	9.6 - （1.3） - * 25%	密 ～ 2mm 石英・クサリ礫・金雲母	良 橙 5YR6/6	
図 74-332 図版 28	SX370 最上層	土師器 皿	9.8 - （1.3） - * 25%	密 ～ 1mm 長石・クサリ礫・金雲母	良 橙 7.5YR7/6	
図 74-333	SX370 最上層	土師器 皿	* - （1.6） - * 口縁部片	密 ～ 1㎜石英・長石	良 浅黄橙 10YR8/3	
図 74-334 図版 28	SX370	瓦器 椀	* - （2.7） - * 口縁部片	密 ～ 1 mm 石英	良 灰 7.5Y5/1	
図 74-335 図版 28	SX370 最上層	瓦質土器 擂鉢	* - （6.5） - * 口縁部片	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	良 灰 N5/0	
図 74-336	SX370	輸入磁器 青磁椀	* - （2.2） - * 口縁部片	密 ～ 1 mm 黒色粒	良 灰白 5Y8/2	龍泉 （釉）オリーブ灰 10Y5/2
図 74-337 図版 28	SX380 整地土	瓦質土器 擂鉢	* - （4.1） - * 口縁部片	密 ～ 0.5mm 石英・長石・チャート	良 灰 N6/0	
図 74-338 図版 28	SX380 整地土	瓦質土器 擂鉢	* - （6.1） - * 口縁部片	密 ～ 2mm 石英・長石・チャート	不良 にぶい黄橙 10YR7/2	
図 74-339 図版 28	SX380 整地土	輸入磁器 青磁椀	（12.7） - 7.0 - （5.0） 15%	密 ～ 0.5mm 長石	良 灰白 2.5Y8/1	（釉）灰オリーブ 7.5Y6/2
図 75-340	B 区 表土	瓦 軒平瓦	（7.9） - （7.5） - 4.3	密 ～ 5mm 石英・長石・チャート	良 灰白 2.5Y7/1	

表 13　報告遺物一覧（11）

報告№	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径（cm） 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
図 75-341	B 区 表土	瓦 軒平瓦	（6.2）　-　（5.3）　-　（3.3）	密 ～ 8mm 石英・長石・チャート・黒色粒	良 灰 5Y6/1	
図 88-342	本明寺境内	瓦質土器 擂鉢	＊　-　（4.6）　-　（9.8） 底部片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 灰オリーブ 5Y5/2	
図 88-343	本明寺境内	輸入磁器 青磁椀	＊　-　（3.6）　-　4.8 底部片	密	良 灰黄 2.5Y6/2	(釉)オリーブ灰 2.5GY5/1

表 14　検出遺構および出土遺物一覧（1）

S 番号	層位	遺構番号	遺構面	種別	所見	出土遺物	地区
1	褐色砂	SD001	1	溝		土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古墳) 杯、瓦器椀、瓦質土器不明、輸入染付椀、国産陶器甕、平瓦	A・B 10・11
	にぶい黄褐砂					瓦質土器浅鉢・釜、国産陶器擂鉢、雁振瓦	
	灰黄褐砂					土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古代) 杯、瓦器椀 (12 ｃ)、瓦質土器擂鉢・釜、国産陶器甕、丸瓦・平瓦	
	褐灰砂					土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古代) 壺・平瓶、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、輸入青磁椀、国産陶器鉢 (古瀬戸)	
	赤褐砂					土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・釜、輸入青磁椀、丸瓦、焼土	
2			1	溝		土師器 (古代) 細片、瓦質土器鉢	B・C 11
3			1	土坑		土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古代) 甕、瓦器椀、瓦質土器鉢、輸入青磁椀、平瓦、焼土	C・D 10・11
4			1	土坑		土師器 (中世～) 細片	D 10
5	掘方	SE005	1	井戸		土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古代) 杯・高杯・甕、瓦器椀、瓦質土器浅鉢、国産陶器甕、平瓦、焼土	B 11
	抜取					土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古代) 杯・壺・甕、瓦器椀、瓦質土器鉢・擂鉢、輸入青磁椀、輸入白磁椀、国産陶器甕、不明石材、丸瓦・平瓦、焼土、炭化物	
	枠内					土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、丸瓦・平瓦 (桶巻)	
6			1	土坑		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器鉢・風炉	D 10
7			1	溝		瓦器椀、瓦質土器擂鉢、焼土	C 10
8			1	ピット		土師器 (中世～) 細片、瓦器椀	D 10
9			1	落込	包含層の残り	土師器 (古代) 高杯・甕、土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古代) 杯・提瓶・器台、瓦器椀	J・K 2～5
10		SX010	1	落込		古式土師器壺・甕・甑・竈、土師器 (古墳) 椀・高杯・壺・甕・鉢、須恵器 (古墳) 杯・蓋・壺・甕・はそう、磨石、石材 (榛原石)、棒状土製品、平瓦、炉壁	J～M 2～5
	灰層					須恵器 (古墳) 甕	
11			1	素掘溝		土師器 (古墳) 細片、須恵器 (古墳) 杯	K・L 4
12			1	素掘溝		土師器 (古墳) 細片	K・L 3・4
13			1	素掘溝		土師器 (古墳) 高杯・細片	L 3・4
14			1	素掘溝		土師器 (古墳) 細片	L 3
15			1	土坑		土師器 (古墳) 壺・甕、須恵器 (古墳) 杯	M 4・5
16			1	攪乱		須恵器 (古墳) 壺・甕、瓦器椀、	M 4
17			1	素掘溝		土師器 (古墳) 甕、須恵器 (古墳) 杯、須恵器 (古代) 杯	M 3～5
18			1	素掘溝		土師器 (古墳) 細片、須恵器 (古墳) 細片	M 3
19			1	ピット	近世以降	国産染付椀	N 4
20		SK020	1	土坑	焼土坑　S-10 → 20	土師器 (古墳) 高杯・甕・細片、須恵器 (古代) 蓋・壺、瓦器椀	K 3
21			1	ピット	近世以降	国産染付椀	N 4
22			1	ピット		須恵器 (古墳) 細片	O 4・5
23			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	P 1
24			1	ピット		須恵器 (古墳) 細片	P 1
25			1	ピット	近世以降	国産染付皿	P 1・2
26			1	ピット		瓦器椀	O 2
27			1	溝	攪乱	土師器 (中世～) 細片、炭化物	P 2
28			1	ピット		土師器 (古墳) 皿、須恵器 (古墳) 細片	P 3
29			1	ピット		土師器 (古墳) 細片	P 3
30		SK030	1	土坑	方形竪穴	土師器 (古墳) 高杯・甑・竈、土師器 (古代) 甕、須恵器 (古墳) 杯・壺・甕、須恵器 (古代) 蓋、石材 (榛原石)、丸瓦・平瓦	L・M 2～4
31			1	ピット		土師器 (古墳) 細片	O P 3
32			1	ピット		土師器 (古墳) 細片	P 3
33			1	土坑	深さ 10cm	土師器 (中世～) 釜、須恵器 (古墳) 甕、瓦器椀	O 5
34			1	ピット		土師器 (中世～) 釜	P 5
35			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	P 5・6
36			1	ピット		丸瓦	P 5
37			1	自然地形	近世	土師器 (古墳) 細片、須恵器 (古墳) 甕、瓦器椀、国産染付椀	L・M 2～4
38			1	ピット		—	M 2
39			1	ピット		—	N 2
40			1	土坑	焼土坑	瓦器椀	G 7
41			1	ピット		—	M 2
42			1	ピット		—	O 2
43			1	ピット		—	N 3
44			1	ピット		—	N 2
45			1	ピット		—	N 3
46			1	ピット		—	N 4
47			1	ピット		—	N 4
48			1	ピット		—	O 4
49			1	ピット		—	O 4
50		SD050	1	溝		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器鉢・擂鉢、輸入青磁椀、国産陶器皿、平瓦	G・H 4・5
51			1	ピット		—	O・P 4
52			1	ピット		—	P 5
53			1	ピット		—	O 5
54			1	ピット		土師器 (中世～) 皿・釜、焼土	F 5

表 15　検出遺構および出土遺物一覧（2）

S 番号	層位	遺構番号	遺構面	種別	所見	出土遺物	地区
55			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、輸入青磁椀、焼土	F 5
56			1	ピット	14 c 半ば　SA490a	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	F 7
57			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	F 4
58			1	ピット	14 c	須恵器 (古墳) 甕、瓦器椀、瓦質土器鉢	F 5
59			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	F 5
60		SD060	1	溝	区画溝	土師器 (中世～) 皿・細片、須恵器 (古墳) 甕、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・風炉、輸入白磁壺、国産染付椀、国産陶器椀、平瓦	F～J 5・6
	灰褐土					土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古墳) 杯、須恵器 (古代) 甕、瓦器椀、焼土	
	褐色土					土師器 (中世～) 皿・釜・細片、須恵器 (古墳) 杯・甕、瓦質土器鉢・擂鉢、輸入青磁香炉、丸瓦・平瓦	
61			1	溝		土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (中世～) 甕 (東播)、瓦器椀、瓦質土器擂鉢	F・G 4
62			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	G 4
63			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	G 5
64			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 甕、瓦器椀	G 5
65			1	ピット	14 c 前半	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	G 5
66			1	ピット		土師器 (中世～) 細片	G 5
67			1	土坑		焼土	H 5
68			1	ピット		瓦器椀 (12 c)	F 5
69			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	F 6
70		SB070	1	建物	S-79・82・83・98・99・108	—	F・G 4・5
71			1	ピット		瓦器椀	F 6
72			1	ピット		瓦器椀	G 5
73			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器釜	F 6
74			1	ピット	14 c	土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀	G 6
75			1	ピット	14 c	土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀	F 6
76			1	ピット	14 c 前半	土師器 (中世～) 皿・細片、瓦器椀	F 7
77			1	ピット		土師器 (中世～) 細片	F 7
78			1	ピット	12 c ?	土師器 (中世～) 皿・釜・細片、瓦器椀	G 5
79			1	ピット	SB070e	土師器 (中世～) 釜・細片	G 4
80			1	建物		—	F・G 4・5
81			1	ピット		瓦器椀	G 5
82			1	ピット	SB070a	瓦器椀 (12 c)	G 5
83			1	ピット	SB070c	土師器 (中世～) 皿	F 5
84			1	ピット		瓦器椀	G 5
85			1	ピット		土師器 (中世～) 細片、瓦質土器釜	F 5
86			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	F 6
87			1	土坑		平瓦	H 4・5
88			1	土坑		須恵器 (古代) 甕、瓦質土器鉢、平瓦	I・J 5
89			1	ピット		須恵器 (古墳) 細片	I 5
90	欠番						
91			1	ピット		瓦質土器細片、平瓦	G 5
92			1	土坑	焼土坑	土師器 (中世～) 皿・細片、須恵器 (古墳) 杯、瓦器椀・椀 (14 c 前半)、焼土	G 7
93			1	ピット		須恵器 (古墳) 器台・不明、瓦器椀	G 7
94			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀 (13 c 後半)	G 7
95			1	素掘溝		土師器 (中世～) 細片	K 3・4
96			1	溝	区画溝	土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古代) 甕、瓦器椀 (13 c)、輸入青磁椀、丸瓦・平瓦	J 4・5
97			1	ピット		焼石	F・G 5
98			1	ピット	SB070b	平瓦	G 5
99			1	ピット	SB070f	瓦質土器鉢	G 5
100		SK100	1	土坑		土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 杯、瓦器椀、瓦質土器浅鉢・深鉢・擂鉢・釜、国産陶器甕 (常滑)・擂鉢 (備前)、軒平瓦・丸瓦・平瓦	H～J 4
101			1	ピット		土師器 (中世～) 台付皿	G 4
102			1	ピット		土師器 (中世～) 細片、須恵器 (古墳) 壺	K 3
103			1	ピット		土師器 (中世～) 細片、須恵器 (古墳) 細片	K 3・4
104			2	ピット		土師器 (中世～) 細片	K 4
105			2	ピット		土師器 (古墳) 細片	K 4
106			2	ピット		土師器 (古墳) 細片	K 4
107			2	ピット		土師器 (古墳) 甕、須恵器 (古墳) 杯・甕	K 5
108			1	ピット	SB70d	土師器 (中世～) 皿	F 5
109			1	土坑	15 c 後半 S109 → 160	土師器 (中世～) 釜、瓦質土器擂鉢	F 8
110		SD110	1	溝	区画溝 S110 → 60 古代と中世の瓦が混じる	土師器 (古墳) 甑、土師器 (古代) 甕、土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古墳) 高杯、須恵器 (古代) 杯、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)、瓦器椀、瓦質土器浅鉢・深鉢・擂鉢・釜・小型釜・風炉、輸入青磁椀、輸入白磁椀、輸入染付椀、国産陶器甕・鉢 (古瀬戸)、火打石、軒丸瓦・丸瓦・平瓦、銅銭、焼土	G～J 6～12
111			1	土坑	14 c　S112 → 111	瓦器椀	F 5
112			1	ピット		土師器 (古代) 細片	F 5
113			1	土坑		土師器 (古代) 細片、瓦器椀	F 5
114			1	ピット	15 c 後半	土師器 (中世～) 皿	G 5

表 16　検出遺構および出土遺物一覧（3）

S 番号	層位	遺構番号	遺構面	種別	所見	出土遺物	地区
115			1	土坑	S110 → 115	土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、国産陶器壺 (古瀬戸)、平瓦、鉄滓 (椀形)	J・K 6
116			1	素掘溝		土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古代) 甕、瓦器椀	J 7
117			1	ピット		須恵器 (古墳) 壺、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、輸入青磁椀	J 7
118			1	ピット		須恵器 (古墳) 壺、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、平瓦	J 7
119			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	J 7
120		SK120	1	土坑		土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古墳) 杯、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)、瓦器椀・皿、瓦質土器深鉢、国産陶器甕 (常滑・渥美)、碁石、平瓦、焼土	G・H 5・6
121			1	土坑	14 c 半ば～後半	土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古代) 獣脚、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・火鉢、焼土 (多数)	I・J 7
122			1	土坑		土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、輸入青磁椀、国産陶器甕、平瓦 (古代・中世)	I・J 7
123			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	I 7
124			1	ピット	14 c	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、平瓦 (古代)	I 7
125			1	ピット	14 c	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	I 7
126			1	ピット	14 c	土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古代) 細片、瓦器椀	H 7
127		SD127	1	溝	14 c 前半	土師器 (中世～) 皿、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)、瓦器椀	H～J 6・7
128			1	溝		土師器 (中世～) 皿	H 7
129			1	ピット	14 c	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 7
130		SB130	1	建物	S-146・147・148	—	
131			2	ピット		土師器 (中世～) 皿	H 8
132			1	ピット	14 c	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 7
133			1	ピット	14 c	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 7
134			1	ピット		瓦器椀	G 7
135			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	G 8
136			1	ピット		瓦器椀、瓦質土器擂鉢	G 7
137			1	ピット		土師器 (古墳) 細片	F 6
138			1	ピット	SA490b	瓦器椀	G 7
139			1	ピット	SB360g	土師器 (中世～) 皿	G 8
140			1	溝	S-60 の下	—	G・K 5・6
141			1	溝	15 c　S110 → 141	土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、平瓦	G 8
142			1	土坑		土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀、瓦質土器深鉢、丸瓦 (古代)	G 8
143			1	ピット	14 c 前半 S143 → 142	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	G 8
144			1	溝	14 c	土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古代) 壺、瓦器椀、焼土	G 8
145			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦質土器擂鉢、焼土	G・H 7
146			2	ピット	SB130a	—	K 3
147			2	ピット	SB130b	土師器 (古代) 皿・細片	K 3
148			2	ピット	SB130c	土師器 (古代) 壺・細片、須恵器 (古代) 甕	K 3
149			1	ピット		瓦器椀	H 6
150			1	溝	区画溝　S160 → 150 上層から近世の土器出土	土師器 (中世～) 皿 (中世・近世)・釜、須恵器 (古墳) 蓋、瓦器椀、輸入青磁椀、国産染付椀、国産陶器椀・擂鉢、土製円板、丸瓦 (近世)・平瓦	F・G 6～12
	最下層					土師器 (中世～) 皿・釜、国産染付椀、焼土	
151			1	ピット		土師器 (中世～) 細片、瓦器椀	H 7
152			1	ピット	14 c　SA490e	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	I 6
153			1	ピット	14 c　SB360l	—	I 7
154			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	I 7
155			1	土坑	14 c 半ば　深さ 3 cm	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 6
156			1	ピット	14 c 半ば　SA490d	土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 壺、瓦器椀	H 6
157			1	土坑	深さ 2 cm	須恵器 (古代) 杯、瓦器椀	H 6・7
158			1	ピット		土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀	H 7
159			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 8
160			1	溝	区画溝　S-150 の下から検出 埋土は S-140 に類似	国産陶器壺 (常滑)	F 6～9
161			1	ピット	SB360u	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 8
162			1	ピット	SA490c	須恵器 (古代) 壺、瓦器椀	H 7
163			1	溝	15 c	土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀、輸入青磁椀、焼土	H 7
164			1	土坑	深さ 5 cm	土師器 (中世～) 細片	G 7
165			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古代) 杯、瓦器椀、砥石	G 7
166			1	土坑	深さ 5 cm	瓦器椀、瓦質土器細片、焼土	H 7・8
167			1	ピット		土師器 (古墳) 高杯、瓦器椀	H 7
168			1	ピット	14 c　SB360v	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 8
169			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	H 8
170		SK170	1	土坑		土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古墳) 高杯・甕、瓦器椀、丸瓦、鉄滓	H I 7
171			1	土坑	S171 → 142 → 141	土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 甕、須恵器 (古代) 杯、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、輸入青磁椀、銅滓	G 8
172			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、平瓦	G 8
173			1	ピット	SB465	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器擂鉢	G 8
174			1	ピット		瓦器椀、平瓦	G 8
175			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	G 7
176			1	土坑	深さ 5 cm	土師器 (中世～) 皿、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)、瓦質土器擂鉢	G 7

表 17　検出遺構および出土遺物一覧（4）

S 番号	層位	遺構番号	遺構面	種別	所見	出土遺物	地区
177			1	溝		土師器 (中世～) Ⅲ、須恵器 (古墳) 壺・甕、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)、瓦器椀、瓦質土器浅鉢・擂鉢、坩堝、焼土	F・G 7
178			1	ピット	SB360h	土師器 (中世～) Ⅲ、瓦器椀	G 7
179			1	ピット		瓦器椀	F 7
180			1	土坑	15 c 前半 下層掘削せず	土師器 (中世～) Ⅲ・釜、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、炭化物	I 9
181			1	ピット		—	F 7
182			1	ピット		瓦器椀	G 6
183			1	ピット		瓦器椀	G 6
184			1	ピット		土師器 (中世～) Ⅲ	G 6
185			1	ピット	SB360j	土師器 (中世～) Ⅲ・釜、瓦器椀	H 7
186		SK186	1	土坑	ⅢEとⅥAⅣB 共伴	土師器 (古墳) 甕、土師器 (中世～) Ⅲ・釜、須恵器 (古墳) 杯、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)、瓦器椀、瓦質土器鉢・擂鉢、輸入青磁椀、国産陶器甕 (渥美)、丸瓦・平瓦、鉄滓、焼土、焼石	G・H 8・9
187			1	土坑		土師器 (古代) 蓋・甕、土師器 (中世～) Ⅲ・釜、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、国産陶器甕 (渥美)、平瓦、鉄滓、焼土	G 8
188			1	ピット		瓦器椀	H 8
189			1	ピット		土師器 (中世～) Ⅲ	H 7
190	掘方	SE190	1	井戸	下層掘削せず	土師器 (中世～) Ⅲ・釜、須恵器 (古代) 杯、瓦器椀、瓦質土器鉢・深鉢・擂鉢・釜、輸入白磁椀、国産陶器甕、軒丸瓦・丸瓦・平瓦、焼土	I・J 11・12
	枠内暗褐土					土師器 (中世～) Ⅲ・釜、瓦質土器擂鉢・風炉、輸入青磁椀、国産陶器椀 (古瀬戸)・擂鉢 (備前)・甕、火打石、丸瓦・平瓦	
	枠内褐灰土					土師器 (中世～) 釜、須恵器 (古墳) 杯、瓦器椀、瓦質土器深鉢・擂鉢・風炉、輸入青白磁椀、国産陶器甕、平瓦	
191			1	ピット		土師器 (中世～) Ⅲ、瓦器椀	H 7
192			1	ピット		土師器 (中世～) Ⅲ、瓦器椀	H 7
193			1	ピット		瓦器椀、焼土	G 6
194			1	ピット	14 c	土師器 (中世～) Ⅲ、瓦器椀	I 8
195			1	ピット	14 c	土師器 (中世～) Ⅲ、瓦器椀	I 8
196			1	ピット		土師器 (中世～) Ⅲ、瓦器椀	I 8
197			1	ピット		瓦質土器細片	I 8
198			1	ピット		土師器 (中世～) Ⅲ、瓦器椀	I 8
199			1	ピット		土師器 (中世～) Ⅲ、瓦器椀、瓦質土器鉢	I 8
200		SD200	1	溝	区画溝 S-141 と同一か	古式土師器高杯、土師器 (中世～) Ⅲ・釜、須恵器 (古代) 壺、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)、瓦質土器釜・擂鉢、硯？、丸瓦・平瓦、焼土	G 8～11
201			1	ピット		土師器 (中世～) Ⅲ	J 8
202			1	ピット	壁面著しくオーバーハング	土師器 (中世～) Ⅲ・釜、瓦質土器釜	J 8
203			1	ピット		土師器 (中世～) Ⅲ	J 8
204			1	ピット		土師器 (中世～) Ⅲ	J 8
205			1	土坑		土師器 (中世～) 釜、瓦質土器深鉢、平瓦	J 8
206			1	ピット		土師器 (中世～) Ⅲ、瓦器椀	J 9
207			1	素掘溝		土師器 (中世～) Ⅲ	J 9
208			1	素掘溝		土師器 (中世～) Ⅲ、輸入染付椀	J 8
209			1	ピット		瓦器椀	J 8
210		SD210	1	溝	13 c 後半頃の瓦器混じる 区画溝	土師器 (中世～) Ⅲ・釜、須恵器 (古墳) 杯・壺・甕、須恵器 (古代) 蓋、瓦器椀・Ⅲ、瓦質土器擂鉢・釜、輸入青磁椀、国産陶器甕、砥石、丸瓦・平瓦、鉄釘、焼土	I～K 10・11
211			1	ピット	15 c 前半	瓦器椀、瓦質土器擂鉢、砥石、丸瓦	J 9
212			1	土坑		土師器 (中世～) Ⅲ、須恵器 (古代) 甕、瓦器椀、平瓦	I 10
213			1	ピット		土師器 (中世～) Ⅲ	I 9
214			1	ピット		土師器 (中世～) Ⅲ、瓦器椀、瓦質土器鉢、焼土	I 9
215			1	ピット	焼けている	土師器 (中世～) Ⅲ、瓦器椀	J 9
216			1	土坑	S-227 出土平瓦と接合	土師器 (中世～) Ⅲ、平瓦	I・J 6・7
217			1	土坑	15 c	土師器 (中世～) Ⅲ・釜、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)、瓦器椀、焼土	J 9
218			1	土坑		土師器 (中世～) Ⅲ、須恵器 (古墳) 高杯・器台、瓦器椀、瓦質土器鉢・擂鉢、輸入青磁椀、不明銅製品、焼土	J 10
219			1	土坑	15 c 半ば	土師器 (中世～) Ⅲ・釜、瓦質土器擂鉢	F 10・11
220			2	溝		土師器 (古墳) 高杯・壺・甕・甑、須恵器 (古墳) 杯・高杯・蓋・壺・甕、磨滅した石、玉 (滑石)	K～M 2～4
221			1	土坑		瓦器椀、瓦質土器鉢、平瓦	F 8・9
222		SK222	1	土坑	土採穴？	土師器 (中世～) Ⅲ、須恵器 (古墳) 杯、須恵器 (古代) 蓋、瓦器椀、土製円板、焼土	F 9・10
223		SK223	1	土坑	土採穴？	土師器 (古墳) 高杯、土師器 (中世～) Ⅲ・釜、須恵器 (古墳) 高杯・壺、瓦質土器鉢・釜、銅銭、鉄滓、焼土	F 9・10
224			1	ピット		土師器 (中世～) Ⅲ、瓦器椀	G 8
225			1	ピット	SB360f	土師器 (中世～) Ⅲ、瓦器椀、焼土	G 8
226			1	落込み	15 c	土師器 (中世～) 釜、須恵器 (古墳) 杯、瓦器椀、瓦質土器鉢、国産陶器Ⅲ (古瀬戸)・甕、平瓦、焼土	F 10・11
	明褐土				15 c 後半	土師器 (中世～) Ⅲ、瓦質土器擂鉢、輸入青磁椀	
	褐色土					土師器 (中世～) Ⅲ・釜、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、国産陶器甕、焼土	

表 18　検出遺構および出土遺物一覧（5）

S 番号	層位	遺構番号	遺構面	種別	所見	出土遺物	地区
227		SK227	1	土坑	S-216 出土平瓦と接合	土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀・椀 (小型)、瓦質土器鉢、輸入青磁椀、輸入白磁椀、国産陶器椀 (古瀬戸)・甕、平瓦、鉄滓、焼土 (多量)、焼石	G・H 9～11
228		SK228	1	土坑	14 c 前半　土採穴	土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 鉢、瓦質土器擂鉢、平瓦、鉄滓	G 9
229			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器鉢	H 8
230			1	溝	区画溝	土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、平瓦、焼土	K 9・10
231			1	土坑	15 c 半ば	土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古代) 杯、瓦質土器擂鉢	H 8
232			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 8
233			1	ピット		瓦質土器鉢、輸入青磁椀	H 8
234			1	土坑		土師器 (中世～) 皿、瓦器釜	I 8
235			1	ピット		土師器 (中世～) 皿・釜、瓦質土器鉢	H 9
236			1	ピット		瓦器椀	H 8
237			1	ピット		土師器 (中世～) 釜	H 9
238			1	ピット	深さ 2 cm	瓦器椀	H 9
239			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 9
240	暗褐土	SD240	1	溝	大溝	土師器 (古代) 甕 (東海系)、土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古墳) 杯・高杯・蓋、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)、瓦器椀、瓦質土器鉢・擂鉢・釜、輸入青磁椀 (雷文体)、国産陶器甕、丸瓦・平瓦	H～K 4～7
	灰褐土					土師器 (古墳) 高杯、土師器 (中世～) 皿・杯・椀・釜、須恵器 (古墳) 高杯・甕・はそう、須恵器 (古代) 杯、瓦器椀、瓦質土器浅鉢・深鉢・擂鉢・甕・風炉、輸入青磁椀、輸入白磁椀・壺、国産陶器丸椀 (瀬戸美濃)・卸皿 (古瀬戸)・擂鉢 (備前)、砥石・火打石・加工石材、石材 (榛原石)、鬼瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、不明鉄製品、鉄滓、炭化物、焼土	
	暗灰土					土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古墳) 杯・甕、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)・甕 (東播)、瓦器椀・椀 (紀伊)、瓦質土器蓋・浅鉢・深鉢・擂鉢・鍋・釜、輸入青磁椀、国産陶器椀・甕・花瓶 (古瀬戸)、丸瓦・平瓦、鉄滓、焼土	
	赤褐土					土師器 (中世～) 細片、瓦器椀	
241			1	ピット	14 c 前半	土師器 (中世～) 皿、瓦器	H 9
242			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器	H 9
243			1	ピット	14 c 後半	土師器 (中世～) 皿・釜、瓦質土器擂鉢	G 9
244			1	ピット	13 c 末	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	G 8
245			1	落込	14 c 前半	土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀	G・H 9
246			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	G 9
247			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	G 9
248			1	ピット		土師器 (中世～) 釜、瓦器椀	G 9
249			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	G 9
250			1	溝	近世 区画溝　S-46 と同一	土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 壺、瓦器椀、瓦質土器細片、丸瓦 (コビキ B)・平瓦	K～P 5・6
251			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	F 10
252			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 細片、瓦器椀	H 9
253			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 9
254		SK254	1	土坑		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器深鉢、平瓦	H・I 10
255			1	溝		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	I 9・10
256			1	土坑	15 c 前半	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器浅鉢・擂鉢、焼土 (壁土)	H 11
257			1	ピット		瓦質土器深鉢	I 11
258			1	ピット		国産染付椀	J 10
259			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	J 11
260	暗褐砂	SD260	1	溝	SD240 と連続	土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古墳) 高杯・甕、瓦器椀、瓦質土器浅鉢・深鉢・擂鉢・火鉢 (輪花)・釜、輸入青磁椀、国産陶器鉢 (古瀬戸)・甕 (備前)、砥石、丸瓦・平瓦、鉄釘、焼土	J～P 7
	褐粘					土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古代) 円面硯・甕、瓦器椀、瓦質土器浅鉢・擂鉢・風炉・鍋・釜、国産陶器鉢 (古瀬戸)・甕・甕 (備前)、砥石、丸瓦・平瓦、土製円板、炭化物、焼土	
261			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦質土器細片	K 12
262			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、平瓦	J 12
263			1	土坑		瓦器椀、国産陶器甕、平瓦	J 11
264			1	土坑	土採穴	土師器 (古墳) 高杯・甕、土師器 (中世～) 皿、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)、瓦器椀、瓦質土器浅鉢、平瓦、鉄滓、焼土	G 9
265			1	ピット		瓦器椀	G 9
266			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	G 9
267			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	I 9
268			1	ピット		土師器 (古墳) 細片、土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、焼土	I 9
269			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、緑色片岩	I 9
270		SD270	1	溝	中世後期 区画溝	土師器 (古墳) 高杯、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・細片、国産陶器鉢 (瀬戸)、石鍋 (再加工品)、石材 (榛原石)、平瓦	L～P 6・7
271			1	土坑	深さ 5cm	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、国産陶器甕	I 9
272			1	ピット		瓦器椀	I 10
273			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	I 11
274			1	ピット		瓦質土器細片	I 11
275			1	ピット		国産陶器甕	I 11
276			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 蓋、瓦器椀、瓦質土器細片	I 11
277			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 杯	F 9
278			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、焼土	G 9
279			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器擂鉢	H 9

表 19　検出遺構および出土遺物一覧（6）

S 番号	層位	遺構番号	遺構面	種別	所見	出土遺物	地区
280		SD280	1	溝		土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古墳) 蓋、瓦器椀、瓦質土器浅鉢・深鉢・擂鉢、輸入青磁椀・皿、国産陶器壺 (古瀬戸)・甕、丸瓦・平瓦	L ～ P 8・9
281			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	G 9
282			1	ピット		平瓦	G 10
283			1	ピット		瓦器椀	G 10
284			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	G 10
285			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	G 10
286			1	ピット		土師器 (中世～) 皿・釜	H 10
287			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 11
288			1	ピット	SB360e	土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀	G 10
289			1	ピット	土師器皿出土	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、焼土	H 11
290		SD290	1	溝	U 字形に屈曲する	土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古代) 杯、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)、瓦器椀、瓦質土器浅鉢・擂鉢・釜・細片、石材 (榛原石・流紋岩)、平瓦	J・K 8・9
291			1	ピット		—	J 9
292			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	I 9
293			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	I 10
294			1	土坑	深さ 5㎝	瓦器椀	H・I 10
295			1	土坑		土師器 (古代) 蓋、土師器 (中世～) 皿、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)、瓦器椀、輸入白磁椀	H 10
296			1	ピット		瓦器椀	H 10
297			1	ピット	SB360c	瓦質土器細片	H 10
298			1	ピット	SB360t	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 10
299			1	ピット		—	J 10
300			1	土坑	15 c 半ば　土師器皿出土	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器擂鉢	P 12・13
301			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 甕、瓦器椀、焼土	J 10
302			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、焼土	J 8・9
303			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	J 9
304			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	J 10
305			1	ピット	15 c SB360s	土師器 (中世～) 皿・釜、平瓦	J 10
306	欠番						
307	欠番						
308	欠番						
309	欠番						
310	欠番						
311			1	ピット		土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (中世～) 甕 (東播)、瓦器椀、平瓦、焼土	J 10
312			1	ピット	15 c 前半 SB360b	土師器 (中世～) 皿・釜、瓦質土器擂鉢、焼土	J 10
313			1	ピット	SB360p	土師器 (中世～) 釜、瓦質土器細片	J 11
314			1	溝	近代以降 撹乱	土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古墳) 蓋・甕、須恵器 (古代) 杯、瓦器椀、瓦質土器蓋・浅鉢・深鉢・擂鉢・釜、輸入青磁椀、輸入白磁皿、国産染付椀、国産陶器擂鉢 (備前)・壺 (信楽)・甕、軒平瓦・丸瓦・平瓦	K ～ N 12
315			1	土坑	土採穴？調査時 -316 と分離できず遺物に混じりあり	土師器 (中世～) 釜、須恵器 (古墳) 甕、瓦質土器深鉢・風炉、国産陶器壺 (備前)	I 10
316			1	溝	調査時 S-315 と分離できず遺物に混じりあり	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器釜、国産陶器甕、銅銭・鉄製刀子、焼土	I 10
317			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	G 10
318			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	G 10
319			1	溝	深さ 2㎝	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	G・H 12
320		SD320	1	溝	焼土・炭を 大量に含む	土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古代) 甕、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・風炉、輸入青磁椀、国産陶器擂鉢、平瓦、焼土	O・P 14 ～ 17
321			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	H 12
322			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	J・K 10
323			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	J・K 10
324			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	J 10
325			1	ピット	SB360r	土師器 (中世～) 皿	K 10
326			1	ピット		瓦器椀	K 9
327			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	J 9・10
328			1	ピット	SB360q	瓦器椀、焼土	K 9
329			1	ピット		土師器 (中世～) 釜	J 9・10
330	褐色土	SD330	1	溝		土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古墳) 高杯、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・釜、国産陶器甕、砥石、丸瓦・平瓦、焼土	N・O 12 ～ 16
	灰色土					土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀、平瓦、焼土	
331		SK331	1	土坑	土採穴	土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 高杯、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、国産陶器甕、丸瓦	F 9
332		SK332	1	土坑	土採穴	土師器 (古墳) 高杯、土師器 (中世～) 椀・皿・釜、須恵器 (古墳) 杯・壺・甕、須恵器 (古代) 壺、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)・甕 (東播)、瓦器椀、瓦質土器浅鉢、輸入青磁椀、平瓦、銅銭、焼土	G 9
333			1	土坑		土師器 (中世～) 釜、瓦質土器擂鉢、丸瓦・平瓦	K 7
334			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 9
335			1	ピット	14 c 初頭	瓦器椀	H 10

表 20　検出遺構および出土遺物一覧（7）

S 番号	層位	遺構番号	遺構面	種別	所見	出土遺物	地区
336			1	ピット	14 c 初頭	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 10
337			1	土坑		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器鉢	H 12
338			1	ピット		土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀	H 12
339			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 11
340			1	土坑		土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 甕、瓦質土器擂鉢、国産陶器甕、平瓦、鉄滓	O・P 14・15
341			1	ピット	15 c 前半	瓦質土器擂鉢・釜	J 10
342			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器鉢	J 10
343			1	ピット		土師器 (中世～) 釜、瓦器椀	J 10
344			1	土坑	14 c 前半	土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀	J・K 10
345			1	素掘溝		土師器 (中世～) 皿、瓦質土器浅鉢	J・K 7
346			1	土坑	S-240 最上層に切られる	土師器 (中世～) 釜	H 5・6
347			1	溝	S-240 最上層に切られる	瓦質土器浅鉢・釜、丸瓦	I 5・6
348			1	ピット		土師器 (古墳) 甕	L 7
349			1	土坑	深さ 5cm	瓦質土器釜	L 7
350			1	ピット	14 c 前半	土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 杯・甕、瓦器椀、輸入青磁椀、国産陶器甕、平瓦、焼土	C 13・14
351			1	ピット	15 c	瓦質土器擂鉢、焼土	L 8
352			1	ピット		土師器 (中世～) 皿・釜	L・M 8
353			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	L 7
354			1	土坑	15 c	土師器 (中世～) 皿・釜、瓦質土器擂鉢、平瓦	M 7
355			1	土坑	深さ 5cm	土師器 (中世～) 釜	M 6
356			1	ピット		瓦器椀、焼土	L 7
357			1	土坑	15 c　深さ 10cm	土師器 (中世～) 皿、瓦質土器釜、国産陶器甕 (備前)	O・P 7
358			1	土坑	15 c 後半 S -332 内のピット	土師器 (中世～) 釜 (I2 型 I-2)	M・N 8
359			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	G 9
360		SB360		建物	S-153・139・161・168・178・185・225・288・297・298・305・・312・313・325・328・453・459・461	—	I～K 9・10
361			1	ピット	S -332 内のピット	土師器 (中世～) 皿	G 9
362			1	ピット		焼土	L 8
363			1	ピット	遺構ではない	瓦器皿	O 9
364			1	ピット	遺構ではない	土師器 (中世～) 皿	O 9
365			1	ピット	遺構ではない	土師器 (中世～) 釜	O 9
366			1	ピット	遺構ではない	土師器 (中世～) 釜、焼土	O 9
367			1	ピット	遺構ではない	土師器 (中世～) 釜	N 9
368			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	N 9
369			1	ピット		瓦質土器浅鉢	M 9
370		SX370	1	落込	一部確認掘りのみ	土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 杯、瓦器椀・皿、輸入青磁椀、国産陶器甕	M～P 16～20
	最上層					土師器 (中世～) 皿、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、丸瓦	
371			1	ピット	SB480d	土師器 (中世～) 皿、瓦質土器擂鉢	M 9
372			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、焼土	M 9
373			1	ピット		須恵器 (古墳) 甕、瓦質土器釜	L 9
374			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	K 9
375			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器細片	K 10
376			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	K 10
377			1	ピット		土師器 (中世～) 皿・釜	J・K 9
378			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 11
379			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦質土器細片	H 11
380	整地土	SX380	1	整地土		土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)・甕 (東播)、瓦器椀、瓦質土器鉢・擂鉢、輸入青磁椀、砥石、丸瓦・平瓦、不明土製品	L～P 11・12
381			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	G 11
382			1	ピット		—	L 9
383			1	ピット		瓦器椀、瓦質土器細片	N 10
384			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、焼土	N 10
385			1	ピット	SB480g	平瓦	N 10
386			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	M 10
387			1	攪乱		瓦器椀	N 10
388			1	攪乱		土師器 (中世～) 釜、須恵器 (古墳) 細片	N 10
389			1	攪乱		瓦器椀	N 10
390			1	土坑		—	M・N 12
391			1	ピット	攪乱	土師器 (中世～) 皿、瓦質土器細片	O 10
392			1	土坑	木の根	土師器 (中世～) 皿、国産陶器甕、鉄滓	O 9
393			1	ピット		瓦器椀	I 12
394			1	ピット		瓦器椀	I 12
395			1	ピット		瓦器椀、焼土	I 12

表 21　検出遺構および出土遺物一覧（8）

S 番号	層位	遺構番号	遺構面	種別	所見	出土遺物	地区
396			1	土坑	溝に接続	土師器 (中世～) 釜、須恵器 (古代) 杯、瓦質土器釜、国産陶器壺 (瀬戸美濃)・甕、サヌカイト剥片	L 10
397		SK397	1	土坑	焼土坑	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、流紋岩片、焼土	M 10
398			1	ピット		瓦器椀	K 9
399			1	溝		古式土師器甑、土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 高杯、須恵器 (古代) 壺・甕、瓦器椀、瓦質土器擂鉢・釜・細片、国産陶器甕、砥石、丸瓦・平瓦	J ～L 10 ～ 12
400		SD400	1	溝		土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古墳) 高杯、瓦器椀、瓦質土器浅鉢・深鉢・擂鉢・釜・不明、輸入青磁椀・皿、国産陶器擂鉢 (備前)、鬼瓦・道具瓦・丸瓦・平瓦、焼土	K ～N 11・12
401			1	土坑		—	P 8
402			1	溝		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器鉢・擂鉢	O 8
403			1	ピット	SB480f	土師器 (中世～) 皿、平瓦	M・O 9
404			1	攪乱		土師器 (中世～) 皿、国産陶器椀・鉢	O・P 10・11
405			1	ピット	SB480e	土師器 (中世～) 釜、瓦質土器擂鉢	M 9
406			1	ピット		土師器 (中世～) 釜、瓦器椀、国産陶器甕	M 9
407			1	ピット		土師器 (中世～) 釜	N 10
408			1	ピット	SB480a	サヌカイト剥片、石英片、焼土	N 11
409			1	ピット		瓦質土器細片	N 11
410			1	土坑	14 c 後半 ～ 15 c 初頭	土師器 (中世～) 皿、瓦質土器深鉢・擂鉢・釜、国産陶器甕、丸瓦・平瓦	K 11・12
411			1	ピット		瓦質土器擂鉢、輸入青磁椀	M 10
412			1	ピット		土師器 (中世～) 釜	M 10
413			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	O 13
414			1	ピット		瓦器椀、平瓦	P 12
415			1	土坑	近世	瓦質土器釜、国産陶器擂鉢	P 13
416			1	ピット		焼土	P 14
417			1	ピット		土師器 (中世～) 釜	L 12
418			1	土坑	深さ 10㎝	瓦質土器釜	N・O 12
419			1	土坑	深さ 10㎝	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	O 12・13
420			1	土坑	15 c 後半	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀・釜、瓦質土器擂鉢、丸瓦・平瓦、焼土	J・K 12
421			1	ピット		土師器 (中世～) 釜	L 10
422			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	M 10
423			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、焼土	M 11
424			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、焼土	M 11
425			1	土坑		瓦質土器釜	P 13
426			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	O 11
427			1	土坑		土師器 (中世～) 釜、丸瓦	O 11
428			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	I 11
429			1	ピット		土師器 (中世～) 釜	M 11
430			1	整地土		土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (中世～) 甕 (東播)、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、国産陶器甕、軒平瓦・丸瓦・平瓦	N・O 10・11
431			1	ピット		瓦質土器細片	N 11
432			1	ピット		瓦質土器釜	J 11
433			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器鉢	J 12
434			1	ピット	14 c 前半	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、焼土	J 12
435			2	ピット		—	N 12
436			2	ピット		瓦器椀	N・O 13
437			2	ピット		—	O 13
438		SD438	2	溝		土師器 (中世～) 皿・釜、瓦器椀、瓦質土器釜、平瓦	N・O 11
439			2	ピット		瓦器椀	N 13
440			1	整地土	14 c 前半	土師器 (中世～) 皿、須恵器 (古墳) 壺、須恵器 (古代) 杯、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、国産陶器甕	N～O 15・16
441			2	ピット		土師器 (中世～) 釜、須恵器 (古代) 壺	M 11
442			2	ピット		瓦器椀	K 11
443			2	ピット		瓦器椀、国産陶器鉢、平瓦	K 11
444			2	ピット		瓦器椀	L 11
445			2	土坑		瓦器椀、国産陶器甕	L 11
446			2	土坑		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器鉢	J・K 12
447			2	土坑		土師器 (中世～) 釜	K 12
448			2	ピット		瓦器椀、平瓦	J 12
449			2	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦質土器鉢	J・K 12
450		SK450	2	土坑		土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古代) 壺、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)、瓦器椀、瓦質土器鉢・擂鉢、輸入青磁鉢、焼土	M・N 11
451			2	溝		土師器 (古墳) 壺	L・M 5・6
452			2	ピット		土師器 (古墳) 細片	L 5
453			1	ピット	14 c　SB360m	土師器 (中世～) 釜、瓦器椀	I 8
454			1	ピット		土師器 (中世～) 皿	H・I 6
455			1	ピット	14 c	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	H 7
456			1	ピット		平瓦	L 7
457			1	ピット		土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	J 9・10
458			2	ピット		瓦質土器細片	P 5
459			1	ピット	SB360o	須恵器 (古墳) 甕	I 9
460			2	土坑	15 c	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀、瓦質土器擂鉢、国産陶器甕、丸瓦	J ～L 12・13
461			1	ピット	SB360n	土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	I 8
462			1	ピット		—	I 10

表 22　検出遺構および出土遺物一覧（9）

S 番号	層位	遺構番号	遺構面	種別	所見	出土遺物	地区
470		SX470	2	落込		土師器 (古墳) 高杯・甕、須恵器 (古墳) 細片	K・L３・４
480		SB480		建物	S-371・385・403・405・408	—	K～M８～10
490		SA490		柱列	S-56・138・152・156・162	—	F～H５
	表土					土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古墳) 杯・高杯・壺・甕、須恵器 (古代) 杯・壺、須恵器 (中世～) 鉢 (東播)・甕 (東播)、瓦器椀、瓦質土器鉢・擂鉢・釜・風炉、輸入青磁椀、輸入染付椀、国産染付椀・皿・蓋、国産陶器椀・鉢 (古瀬戸)・香炉・甕・甕 (備前)、サヌカイト剥片、砥石・緑色片岩・石材 (榛原石)、軒平瓦・丸瓦・平瓦、不明木製品、鉄釘、鉄滓、焼土	
	カクラン					土師器 (中世～) 皿・釜、須恵器 (古墳) 甕、瓦器椀・皿、瓦質土器鉢・擂鉢・釜、輸入白磁皿、国産染付椀、国産陶器擂鉢・甕、丸瓦・平瓦、ガラス片、焼土	
	壁面					土師器 (中世～) 皿、瓦器椀	

写真図版

調査区全景 1（南から）

調査区全景 2（南西から）

調査区全景 3（東から）

図版 2

調査区全景 4（西から）

SB130 全景（南から）

SD220 遺物出土状況 1（東から）

SD220 遺物出土状況 2（北から）

SD220 遺物出土状況 3（北から）

SD220 遺物出土状況 4（北から）

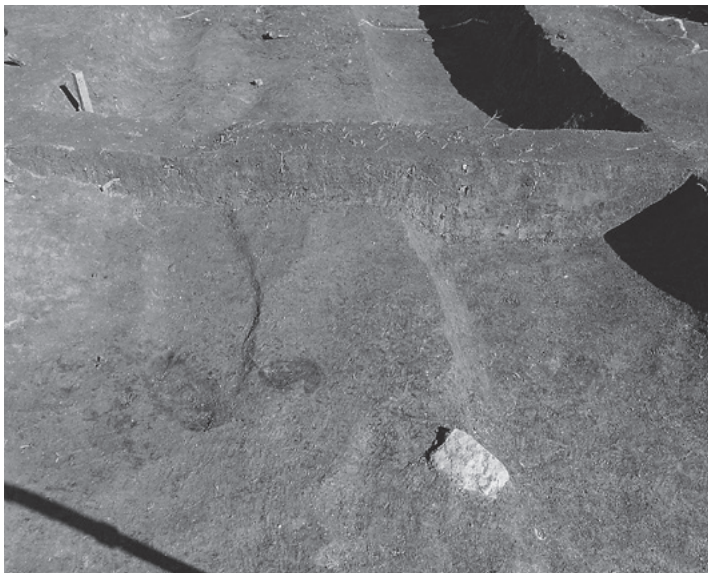
図版 4

SK020 土層断面（北西から）

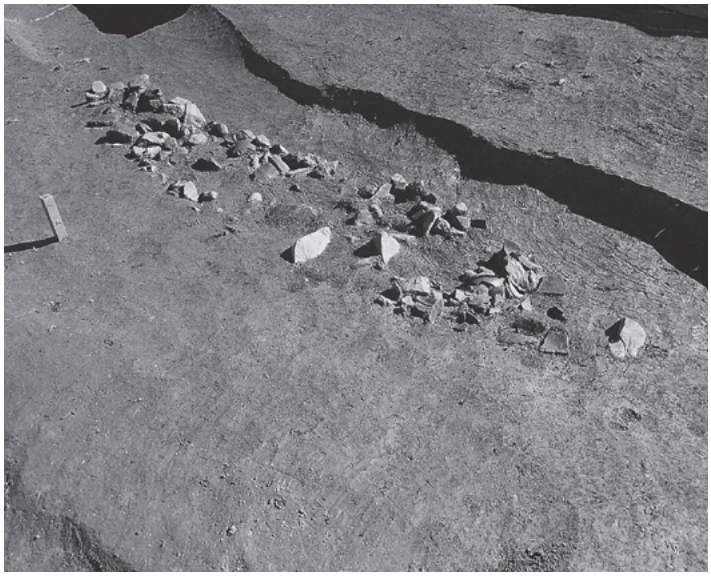
SK020 完掘（東から）

SK030 完掘（南から）

SD001 完掘（南西から）



SD060・110 土層断面（西から）



SD110 遺物出土状況（北から）

図版 6

SD240 全景（北から）

SD240 土層断面（西から）

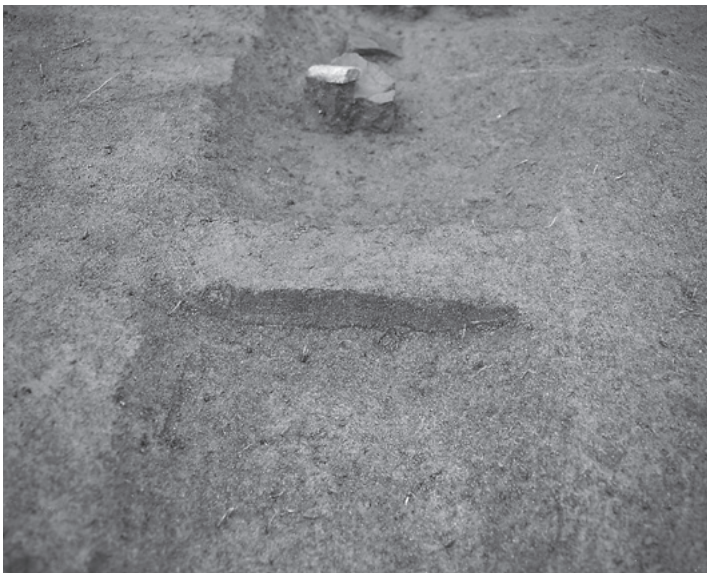
SD260 土層断面（西から）

SD260 土師器釜出土状況（北から）

SD280 土層断面（西から）

SD280 完掘（東から）

図版 8



SD290 土層断面（南から）

調査区南半整地土上面遺構（北から）

SD320・330 土層断面（南から）

SD400 土層断面（東から）

SE005 土層断面（北から）

SE190 土層断面（南から）

図版 10

SK100 遺物出土状況（南から）

SK120 土層断面（西から）

SK170 土層断面（東から）

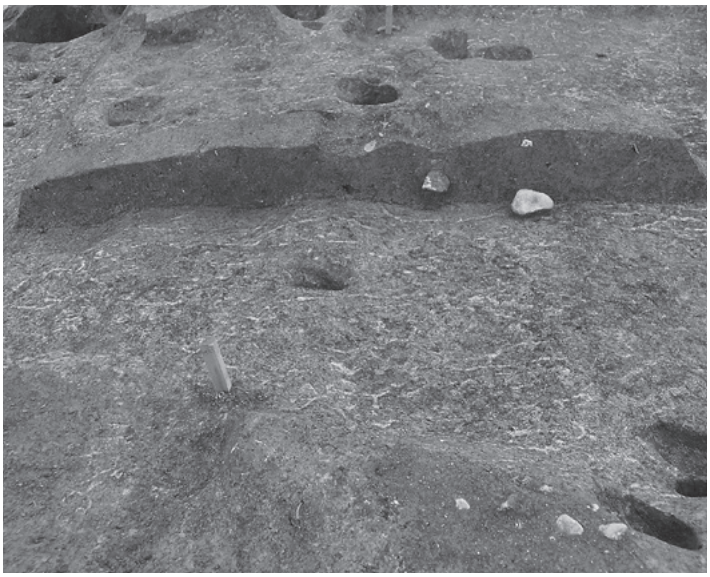
SK186 土層断面（北から）

SK186 遺物出土状況（北から）

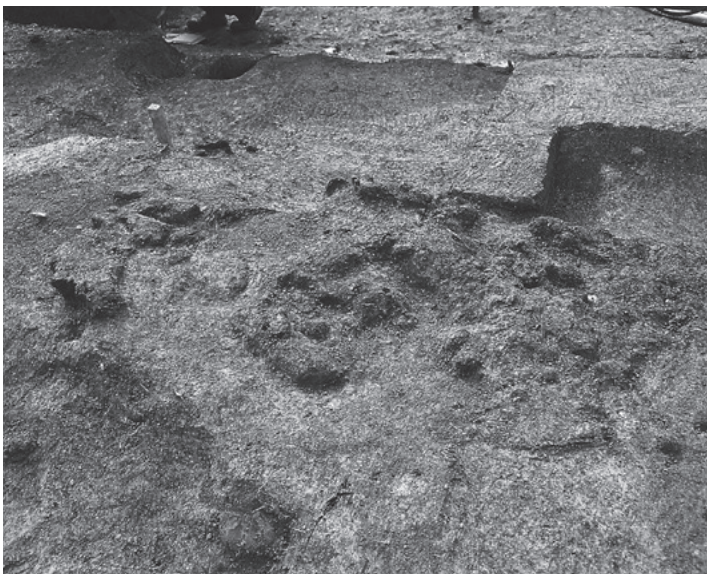
SK186 完掘（北から）

図版 12

SK223 土層断面（西から）



SK227 土層断面（南から）



SK227 焼土出土状況（東から）

SK228 土層断面（東から）

SK332 土層断面（西から）

SK332 完掘（西から）

図版 14

SK332 内部（北から）

SK450 土層断面（西から）

SX370 断割（東から）

SD220（1・5・8・12・15・16・21・26～28）

1

16

5

21

8

26

12

27

15

28

図版 16

SD220（31・36・40・41～43）

SD220（44・45・49～51）

SK020（53・54）

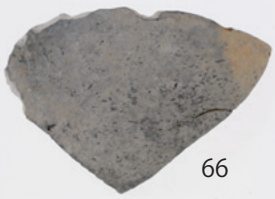
SK030（55）

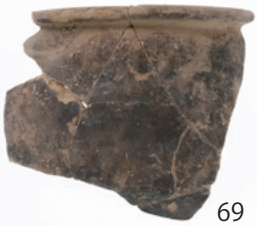
図版 18

SK030（56）

SX010（57・61）

SA490d（66・69）



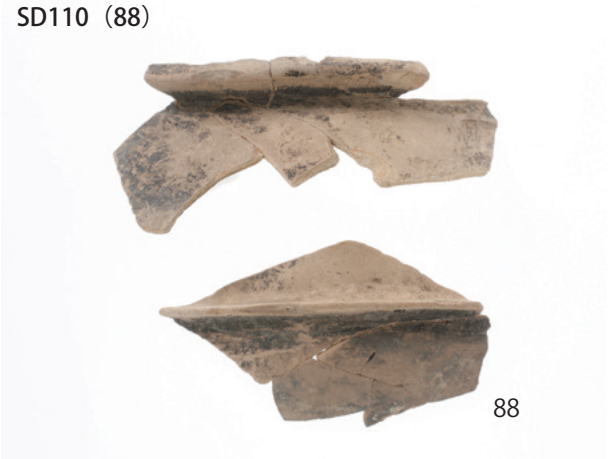


SB480a（73）

SD001（74・75・78・80）

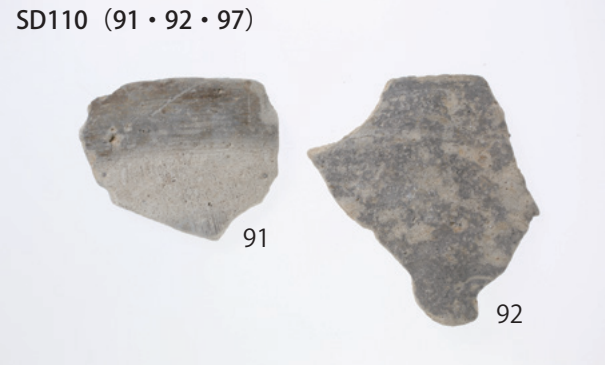
SD050（83）・SD060（85）

SD110（88）



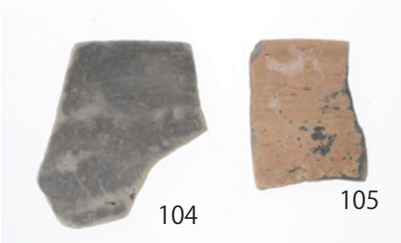
図版 20

SD110（91・92・97）



SD210（98・99・101）

SD240（103～105・107・108）



SD240（111 ～ 113・118・122・123・128）

SD240（129・131・134・136・137・140・141）

SD240（143・144・148・153・154・158・160・162）

143

144

148

153

154

158

162

160

SD260（169・170・172・173・176）

169

170

172

173

176

SD260（178・180・183・188・189・193）

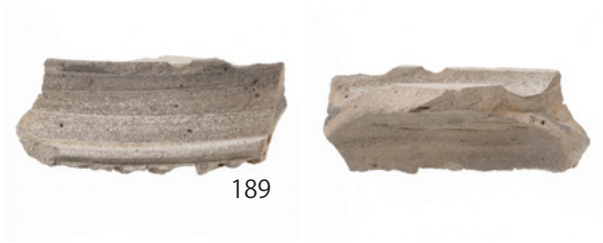
178

180

183

188

193


189

SD270（196）

196

SD280（197）

197

SD280（200・201）

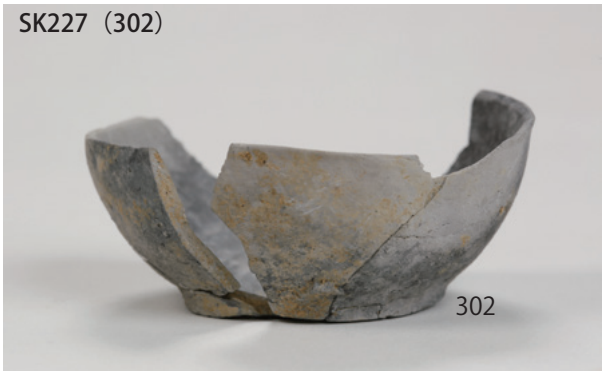
SD400（217・218）

SE190（233・237・238）

SK120（248・255・256・258）

SK186（282・284・287・288）

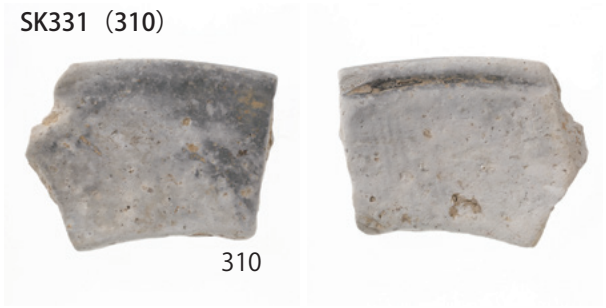
SK227（302）



図版 28

SK227（303）
303

SK254（307・308）
307

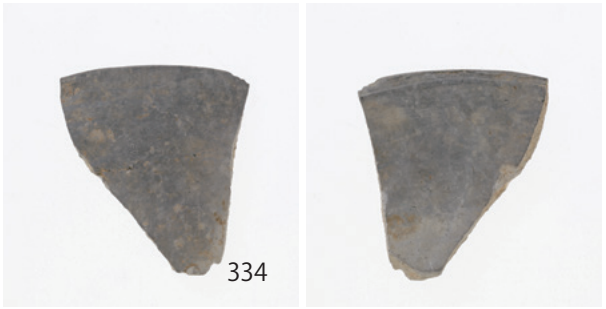

SK331（310）
310

308

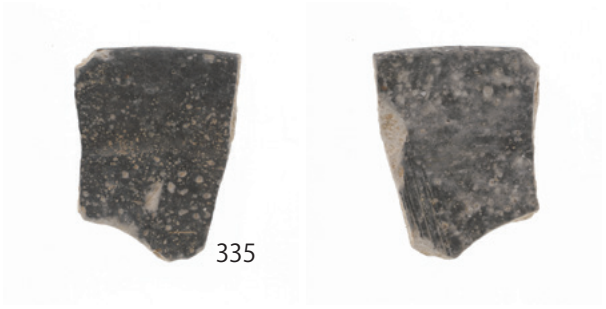
SK332（316・318）
316

318

SX370（332・334・335）
332


334

SX380（337～339）
337
338


335

339

報告書抄録

ふりがな	いしかわどじろいせき	
書名	石川土城遺跡	
副書名	平成 28 年度発掘調査報告書	
巻次		
シリーズ名		
シリーズ番号		
編著者名	佐藤亜聖、株式会社パリノサーヴェイ	
編集機関	公益財団法人 元興寺文化財研究所	
所在地	奈良市中院町 11	Tel 0742-23-1376
発行年月日	西暦　2018 年 3 月 31 日	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
石川土城遺跡（いしかわどじろいせき）	奈良県橿原市石川町（ならけんかしはらしいしかわちょう）536、540、543、544、545	29205		34° 28′ 52″	135° 48′ 02″	20161012 ～ 20161226	1,234㎡	宅地造成

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城館	古墳時代～室町時代	土坑 溝 井戸 ピット ほか	土器 陶磁器 輸入陶磁器 石製品 銭貨	

要約	古墳時代中期の溝、7 世紀の掘立柱建物、大型土坑、13 世紀末から 14 世紀の土坑、大溝などを検出した。中世城館は 13 世紀末に出現し、15 世紀に拡張、15 世紀後半ごろには使用されなくなることが判明した。居住者などは判然としないが、周辺を本貫とした賀留氏（軽氏）との関係が想定される。

石川土城遺跡

—平成 28 年度発掘調査報告書—

2018.3.31

（発行・編集）公益財団法人　元興寺文化財研究所

（印刷）共同精版印刷株式会社